明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

明治四十二年七月一日發行
（毎月一回一日發行）

女學世界



第九巻
第九號

美顔水

美顔料として世界に名高き美顔水

品質精良にして色を白くしきめをこまかにつやを出す効力は天下類なし

又おしろいのとき水として化粧に用ゆれば巧妙なる作用にておしろい濃く淡く心の儘にのび常に用ゆれば花の顔ばせ雪の肌となる眞に美顔料として重寶なる發明品なり

定價＝拾五錢 廿五錢、特別製五拾錢なり

○本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ

▲東京市内は勿論日本全國各地到る所の有名なる化粧品小間物店にて販賣す



淑女令孃方は常に美顔水を愛用す



女學世界第九巻





第九號目次



美顔水

美顔料として世界に名高き美顔水

品質精良にして色を白くしきめをこまかに
つやを出す効力は天下類なし
又おしろいのとき
水として化粧
に用ゆれば
巧妙なる
作用にて
おしろい濃く
淡く心の儘にのび
常に用ゆれば花の顔
ばせ雪の肌となる眞に
美顔料として重寶なる
發明品なり

定價＝拾五錢　廿五錢、特別製五拾錢なり

○本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ
▲東京市内は勿論日本全國各地
到る所の有名なる化粧品小間物店にて販賣す



淑女令孃方は常に美顔水を愛用す

中元と三越

呉服物――白絽縮緬、白絽、夏帶、絽御召、絽明石、友禪絽、明石、透綾、上布類

木綿物――瓦斯縮、瓦斯上布、中形眞岡、新御召、絞木綿、吾妻セル、紺絣類

洋服――夏洋服地一切、禮服、旅行服、極暑服、小供服、夏コート、夏外套類

中元 暑中 御贈答用品陳列

雜貨類――帽子、洋傘、香水、石鹸、手巾、玩具、文房具、履物、旅行用品類

美術品――繪畫、陶器、磁器、七寶、銀器、銅器、漆器、團扇、扇子、提灯類

商品切手――理想的御進物――當店販賣の何品にも通用す――本支店共通

日本橋駿河町

三越呉服店



女學世界第九卷





第九號目次

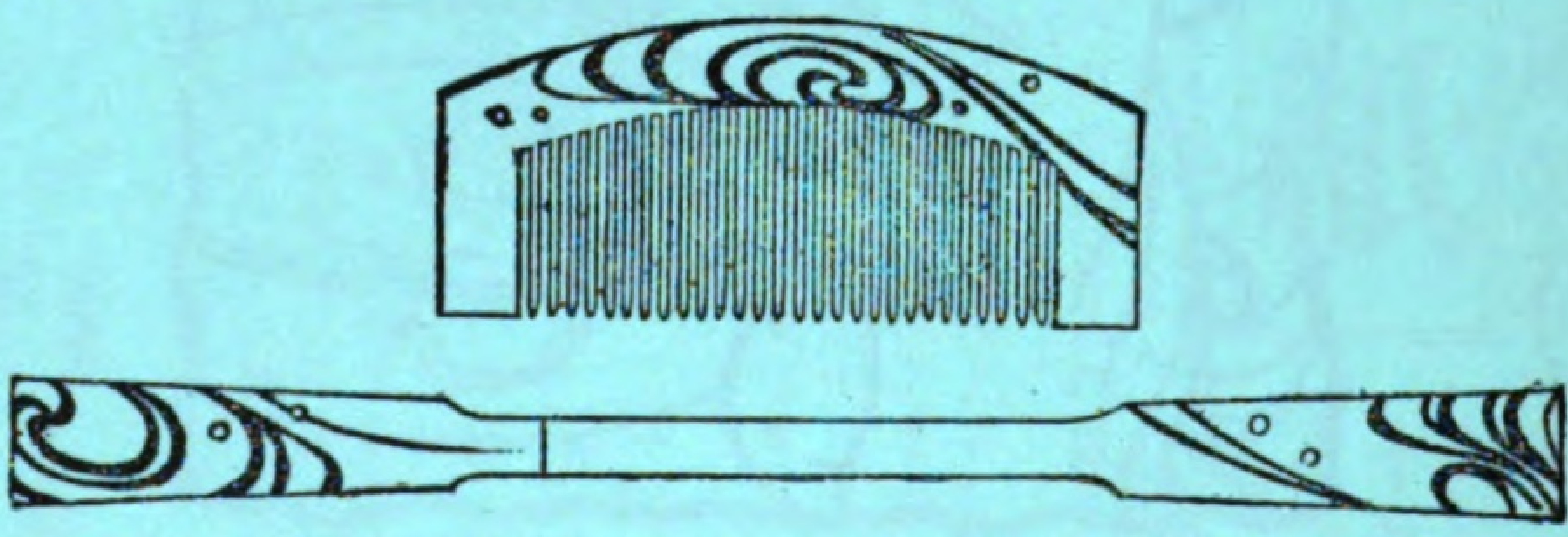




東京橋南傳馬町

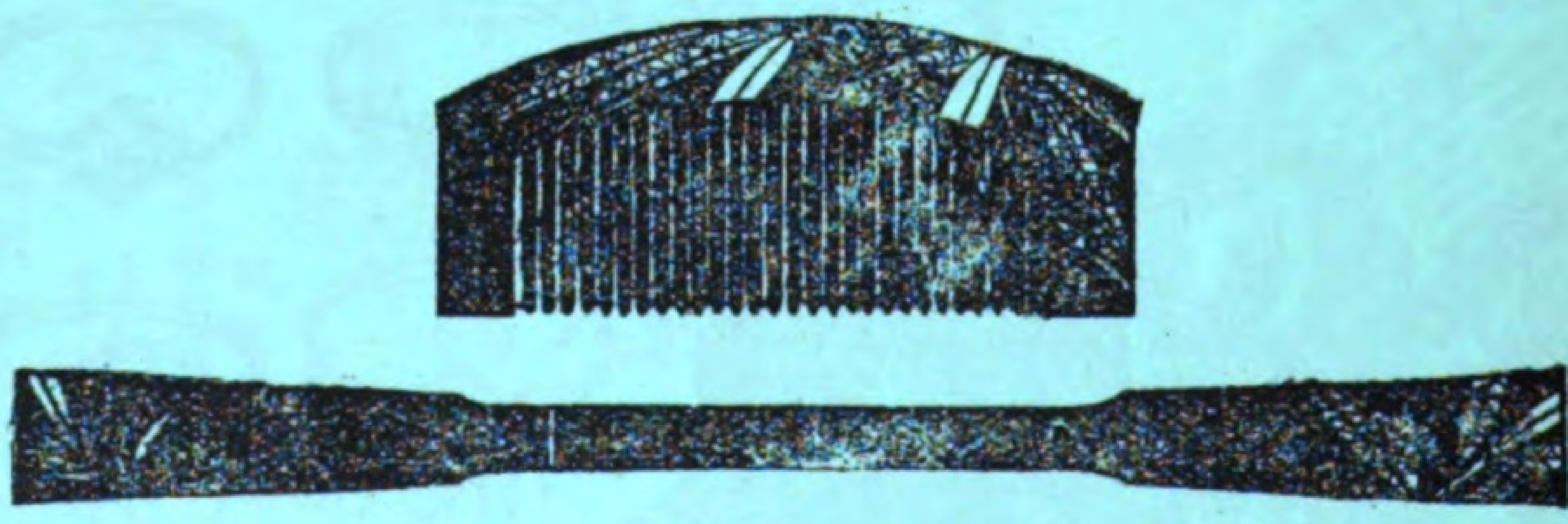
電話本局三十番三千三番 ◉ 振替口座九二九三番

夏の御櫛笄　大西白牡丹



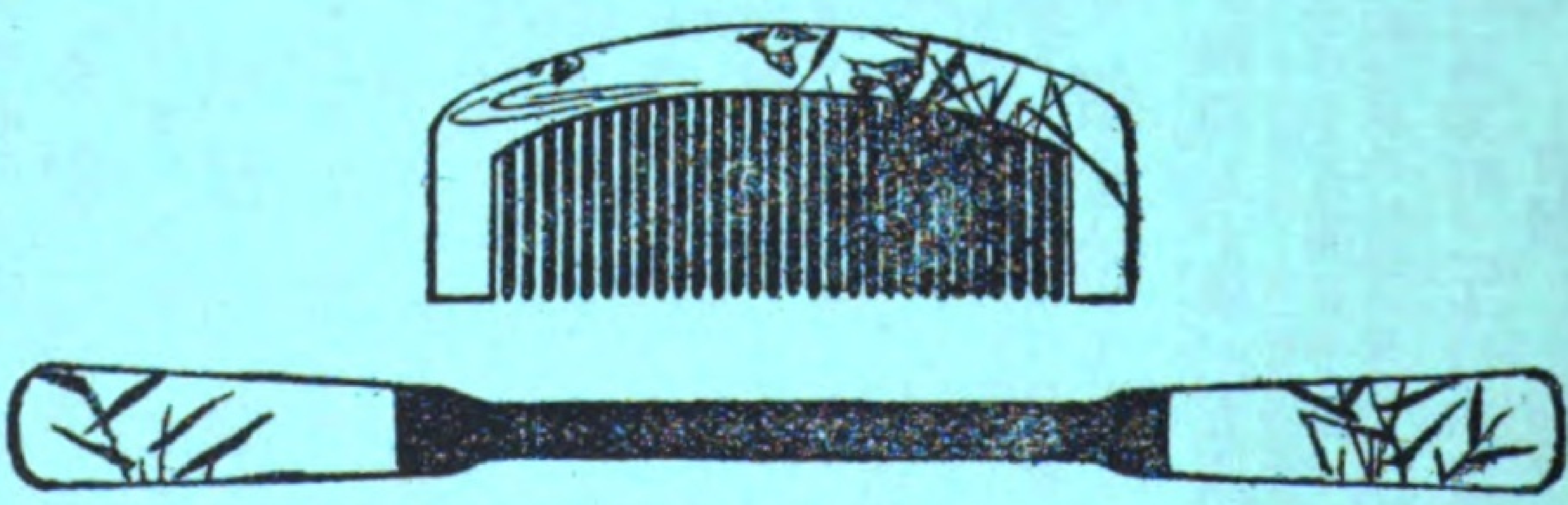
四方張無地鼈甲へうるし画の巻水

一組金五圓五拾錢



黑甲臺へ純金ゞ割貝にて竹の模樣

一組金十六圓



純銀臺へ象嵌片切彫にて千鳥玉川

一組金十二圓

(い〇一)

（いの三）


口中香錠
懷中良藥
THE ゼム GEM
女學世界を繙き給ふ時、ゼム一二三粒を含み給はゞ、胸清しく、頭腦明かに、清新の心、健全の氣、愈讀みゆき書の趣味を增し給ふべし。
主効
▲氣分を爽にし
▲音聲を美くす
▲消化を好くす
▲疫病を豫防す
▲記憶力を增す
○頭痛 ○眩暈
○氣欝 ○胸痞
○口熱 ○口臭
○水傷 ○食傷
○時候傷 ○渇
○舟車醉 ○宿醉
ゼム定價 小包 十錢 小箱 五十錢 大包 二十錢 大箱 一圓 容器入 廿錢
東京馬喰町 本店
本舗 山崎愛國堂
大阪平野町 擴張部

女(いの四)

可憐



田中製版所三色版

●婦人の涙（其原因は男子の罪なり）

近來癪に苦み常に不妊を嘆つ病婦の到る處に見るが其最も多き病狀は下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顏色蒼白にて從前の病歷を聞に始め必ず「せうかち」に罹たりと云ふ其病名が子宮病血の道などに云程でも皆痳毒の爲なれば現に永引て治らぬが第一の證據である曩に痳病の病原發見後婦人病の大部分は痳性疾患が其原因と成る事が學者の研究に依て證明されて其治療上に一大革新を與へたれば最初「せうかち」の時に十分の手當最も肝要なり凡そ痳病梅毒を根治するには必ず唯一丸に限る唯一丸は現世唯一の驅毒藥を以て最も親切に調劑したれば實に面白き程効力ありて拭ふが如く根治すべし故に多毒質の人は是非服用の必要がある

根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢
●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（內地遞送無料）
●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上
藥劑師 **中西莊吉**
（振替貯金東京口座千五百番）



女（ろの一）

婦人畫報

毎月一回一日發行 七月の巻 七月一日發行 定價一冊二十五錢 郵稅二錢 六冊前金郵稅共一圓五十錢 十二冊二圓八十八錢

畫報

▼夏の朝（井川洗厓筆極彩色石版美人畫）
▼伏見若宮妃殿下
▼當世婦人風俗閑散と繁忙
▼慈惠館に御臺臨
▼婦人佳技の競技
▼御馳走の準備
▼赤十字總會の雜評
▼束髪美人
▼皇后陛下御親筆御短冊
▼貴婦人と賤の女
▼北白川武子擴子兩女王殿下
▼閨秀書家と書會
▼兩内親王殿下の御手本
▼大隈伯と諸令孃
▼諸名家の如花令孃
▼海外の風俗
▼其他滿載

讀物

◉三輪田女史の日常生活……記者
◉烈婦山口蕗子……遠山稻子
◉臺所拜見
◉育兒の手引
◉難產より恐るべきもの……榊博士
◉二十圓の資本で成功せしリボン問屋の女主人公
◉避暑する婦人は幸福か……文學博士　三宅雄次郎
◉似て非なる貴婦人……文學博士高楠順次郎
◉關西より……大町桂月
◉實用的婦人……江原素六
◉華を去り實に就け……中島德藏
◉女は斷崖に沿うて歩む……高島平三郎
◉細君とハンケチ
◉嫁と姑
◉ヅボン下と寢冷知らず……秦利舞子
◉婦人の職業としての箏曲……鈴木鼓村
◉小說訪問日記、美顏法其他記事豐富

麴町區飯田町四の四 東京社 電話番町二三三九

女（ろの二）

信用ある安藤井筒堂の製品

カバン形 新案特許



正價貳拾五錢

口中香水 **カオール** 價{箱入壹圓五拾錢廿錢◎袋入拾錢五錢五錢

本品の特効は
●口中の悪臭を去り、口熱を起すとなく
●咽喉を能く霑ほし、音響を最も美くす
●飲食の中毒を除き、容易く禁烟し得る
を以て交際場裡に出入する紳士淑女は必ず携帯を怠り給ふな又空氣中に浮遊して居る黴菌を殺す力を有つて居りますから學校、集會、運動會等常に多人數集會の場所に於て呼吸より感染する肺病、ペスト、赤痢其他恐るべき悪疫を豫防するには口中香水カオールを一二粒口中に含んで居るに限ります。

高等香油 **ビューテー** 價{大罎四十五錢 小罎二十五錢 送料八錢

椿油中に毛髪の營養となるべき多くの性分を含有するとは嘗て村井弦齋氏が説明せられたるがビューテーオイルは即ち椿油中より毛髪の營養となるべき主成分を採り之に適當の香料と油の通有性を去るべき藥劑を配合したる最も進歩せる煉香油なり

◎御注文の節は必ず本誌愛讀者たることを御申添を乞ふ……………

香水原料 **オリヂナルパーヒユーム** 價壹圓貳拾錢

本品はハンカチーフ用として優等無比なるは勿論、御婦人方は花簪、リボン、まげ入等に其一雫を、紳士方は帽子、チクタイ等に又は男女襟裏、扇子等に四時絶へず其一滴を濕ほし給はゞ能く一週の永き間本品獨特の優美高尚なる芳香は坐臥常住馥郁として恰も花園の中に居給ふ如くならん。

本品は一瓶の量は二百八十滴を充せる故一日に一滴宛を消費するも二百八十日如何に裕に使用するも一瓶にて優に半年以上の使用に堪ゆべし。

かほり
み袖

大拾五錢小拾錢送料貳錢

『梅の花たが袖ふれし匂ひぞと春やむかしの月にとはゞや』

との昔の名歌に因みて造りたる、いとも高雅の**匂袋**なり

本品の一度世に出づるや東京、大阪、京都、神戸の名ある呉服店より多大の御注文に接し且つ取次販賣を快諾せられたり。本品は優等なる芳香原料の外に最も有効なる殺菌、防腐、及、防蟲等の藥劑を配合せる故に寄席、劇場、汽車、汽船などの旅行、簞笥の抽斗、長持、書函、骨董等の間に用ゐて大なる効あり

發賣元 東京市日本橋區蠣殻町水天宮前桑印齒磨本舗 **安藤井筒堂**
長電話浪花二一九四九番
振替貯金口座二一九五〇番

▲賣捌は全國至る處の賣藥化粧品店にあり

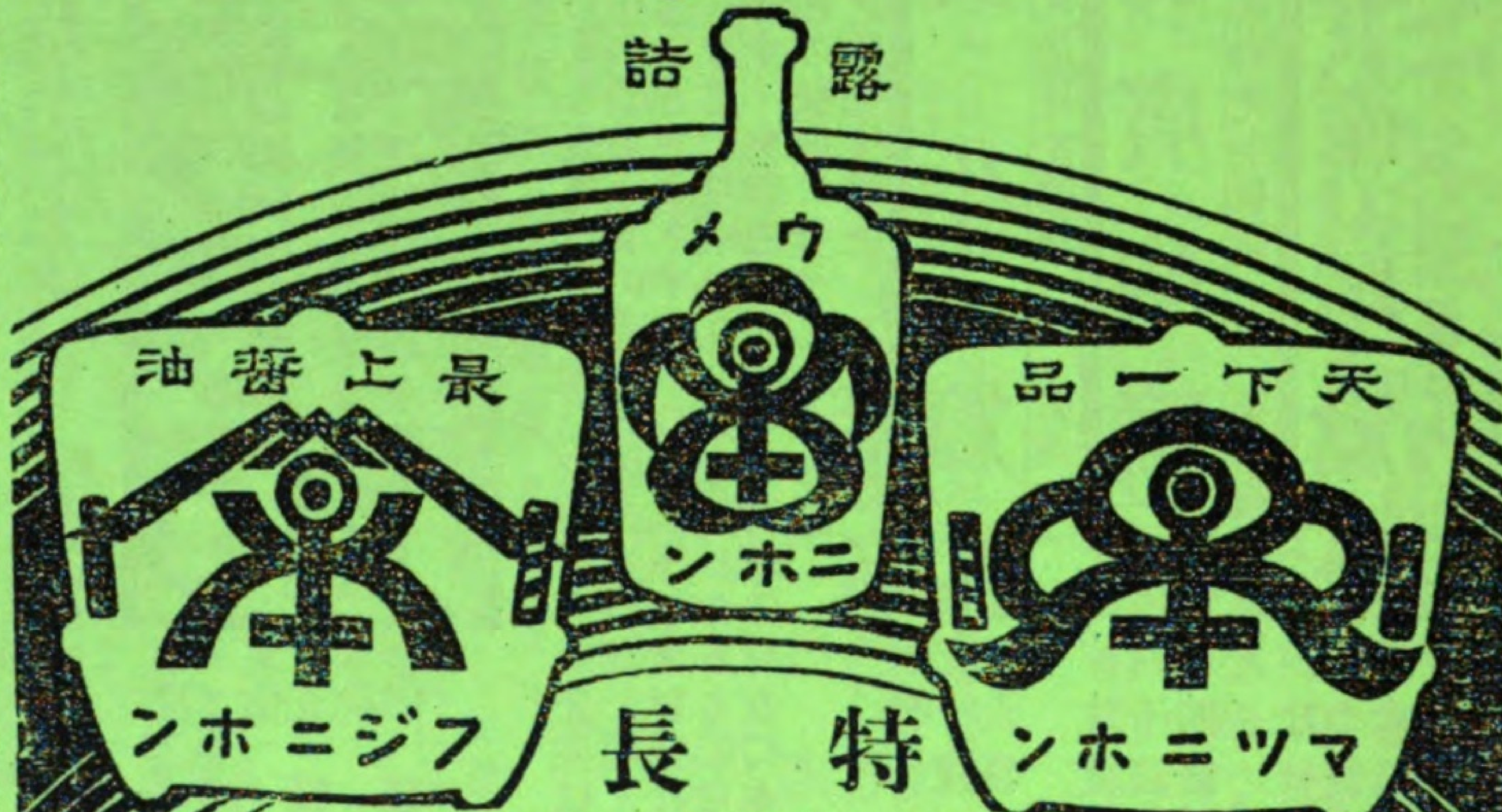
(ろ〇四)

ひさ志れず



宮崎與平筆

日本醤油



色澤香味共に純良最も調理に適す

●ウメニホン印甘露醤油は弊社獨特の再製品にして品質濃厚、香味佳絶**生醤油**として使用するに適し又「ソース」代用として極めて妙也

●マツニホン印は品質優秀香味佳良にして滋養分に富み普通一般の最上醤油に一頭地を拔き極めて優等の品なり

●フジニホン印は品質最良比較的價格低廉にして割の利く頗る德用向の品なり

日本醤油醸造株式會社

京橋區本八丁堀櫻橋際
東京出張所
電話新橋長三一一四、四六八、二三三五

大阪市南區新町橋東詰
大阪販賣所
電話東一三四五

女(はの一)

青柳有美先生著　最新刊

女學生生理

金緣クロース美本
定價金五十錢
郵稅金四錢

▲附月經誌並圖書入▼

▼本書は神聖にして侵すべからず…▼著者有美先生は世間に戀愛博士の名あり其の女學生の爲に生理を說くや毫も憚る處無きを見よ…▼本書は女は子を產む爲に世にあるものなりとの見地より著述せられたるものなれば內容は言はず…▼著者は有らゆる青春の男女に本書を推選し人類の發展に貢せんとする也

醫學士布施現之助先生監修
實用問答 養生篇（第四版）
總振假名付
正價五十錢
郵送料六錢

醫學士田中友治先生監修
實用問答 皮膚病篇（第四版）圖書入
ふりがな付
正價四十錢
郵送料四錢

醫學士大瀨貴明先生監修
實用問答 姙產婦篇
ふりがな付
正價五十錢
郵送料六錢

發兌 東京日ノ橋浴屋町拾四番地 衞生新報社（振貯竹澤章口座）五八九二番

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚…藥力最稱實…効能確保…有効無害…

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止り月經滯り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人は二劑又每月月經困難は三日分にて通經す



博士賞贊良藥

改良 女月丸

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

●肥滿病新藥（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は美顏艶白となり誓て美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音

美人となる



やせる藥

藥價 一劑一圓五十錢　二劑二圓九十錢　三劑四圓卅錢　四劑五圓半　送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七七番 小宮愛生堂

女（はの二）

見ヨ！　見ヨ!!　見ヨ!!!

發行日
第一編　六月下旬
第二編　七月上旬
第三編　續刊

本書の樂譜は本譜及略譜の二通りにて書き表わし且つピアノ、オルガン、ヴアイオリン、手風琴、何れの樂器にても容易に邦樂を演奏し得る樣其調子をも書き添へたれば誰人と雖も之れを以て這般の趣味を擅にするを得べき斬新なる音樂書なり

北村季晴先生閲

邦樂全集

長唄　常磐津　清元　義太夫　箏曲　其他

共益商社樂器店編

第一編
長唄七福神
同　浦島
清元　山姥

第二編
常磐津小寶三番
長　唄　猿　舞
義太夫　寺小屋

第三編
長唄　安宅
清元　梅の春

定價
壹册金四拾錢
郵税金八錢

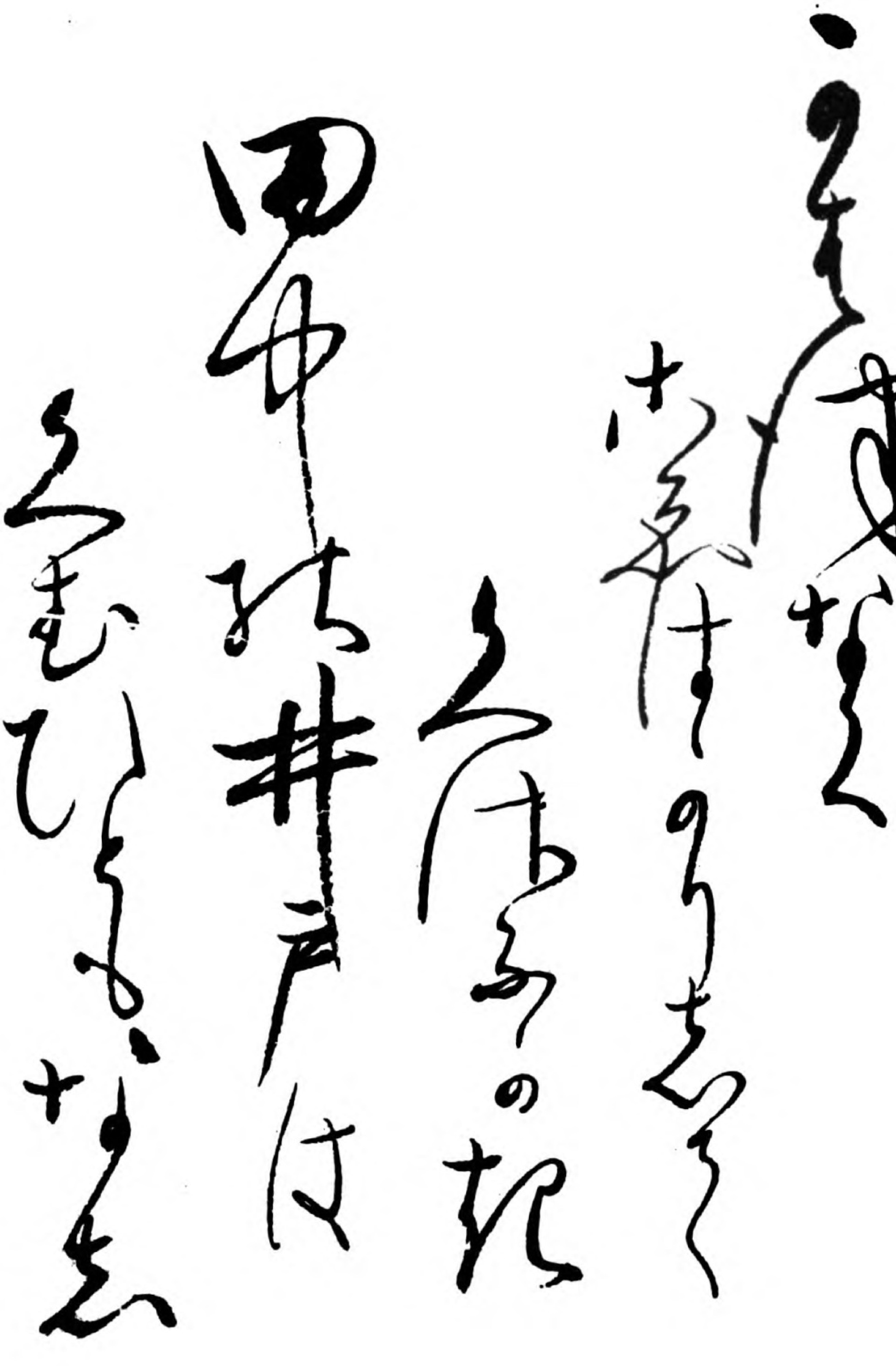
（はの四）

山葉風琴、山葉洋琴、鈴木ヴァイオリン
西洋樂器大販賣所
東京市京橋區竹川町十三番地
合資會社 共益商社樂器店
電話新橋五二九番 ◎同特長四八八〇番 ◎振替口座一五八〇番

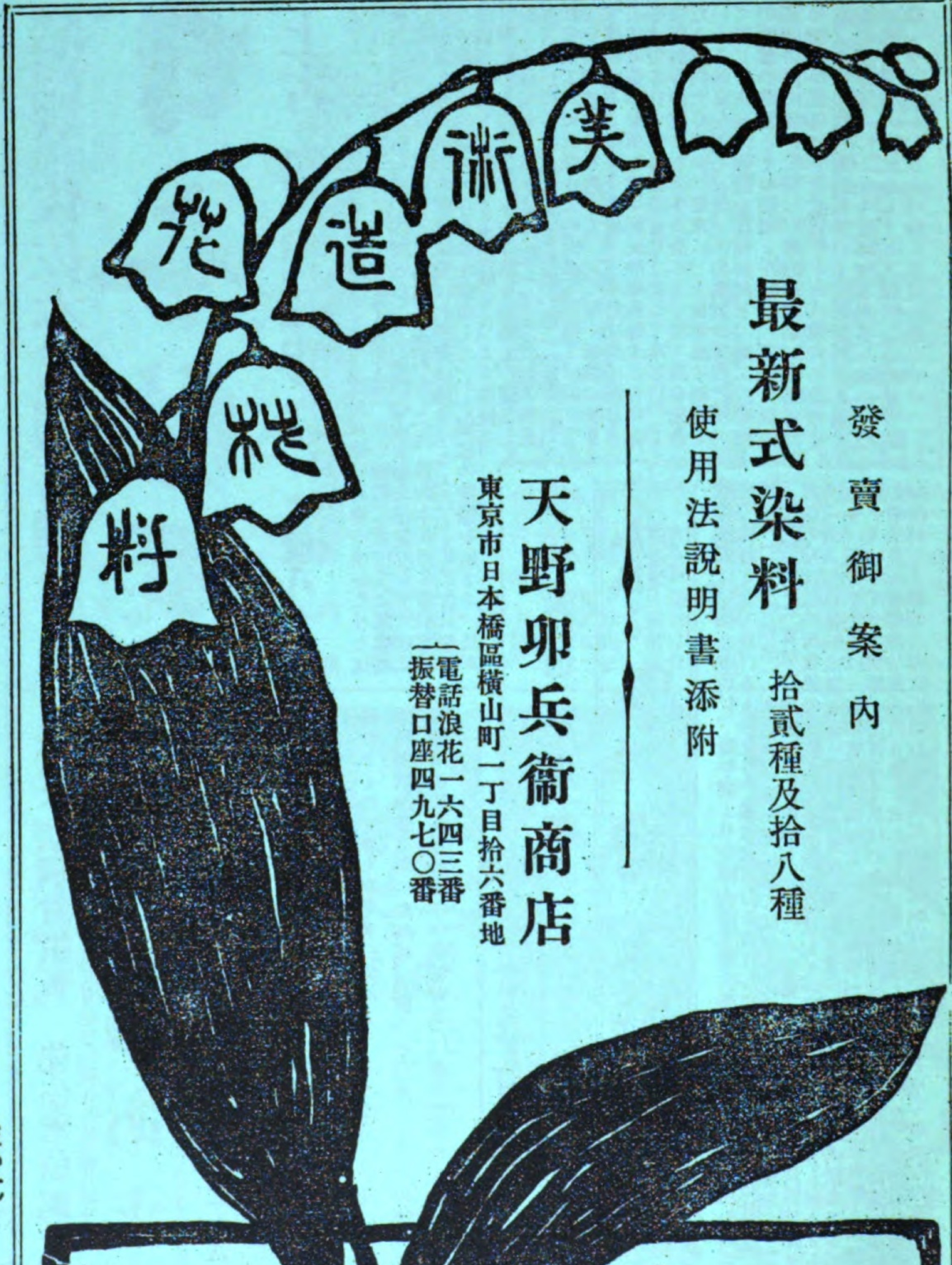
午後三時



竹久夢二筆



石原琴子筆


美術造花材料
發賣御案內
最新式染料
拾貳種及拾八種
使用法說明書添附
天野卯兵衛商店
東京市日本橋區横山町一丁目拾六番地
電話浪花一六四三番
振替口座四九七〇番
營業案內は郵送料四錢封入
御申込あれ

東京帝國大學
文科大學講師 佐佐木信綱君撰

日本歌選

上古の卷

洋裝四六判總クロース 上製紙數約三百餘頁 正價八十錢 郵稅六錢

上下二千載、我が國文學の精髓として、國民が趣味好尚の中心たりし和歌は、その載籍の傳はれるもの凡そ幾千卷。その歌數に至つては無慮幾萬首。爲にこれを悉く渉獵せむこと、專門の士と雖も容易ならず。研究に志ある士をして、むなしく望洋の嘆あらしむ。佐佐木氏乃ち日本歌選の計畫あり。古來の選集家集はた諸書に散見するものゝうちより、各時代各作家を代表すべき作品を選出して、わが國歌の精髓を示さる。氏が該博の學識と、嚴密なる批評眼とは、よく傳統あり歴史ある我が二千年の和歌を縮撮し、選出し得て餘蘊なかるべし。茲に第一卷上古の卷。稿成りて刊行せらる。即ち上世歌史の第一期第二期、紀元前より天武帝までの歌謠を輯錄す。而してこの兩期の作は其數少く、かつ普く諸書に渉りて採輯せるものなきを以て、本卷は特に例外として、撰擇を用ゐず、紀記を始め風土記その他の古書よりすべて輯錄せり。從つて本書は、上古歌謠を研究せむとする士にとりて最も完全なる資料たり。かつ卷末に、上世歌謠の概觀といへる論文を附し、第一に出處製作時代に就いて論じ、古來の假託の作を辨別し、第二に兩期の歌謠の性質とその變遷とを論じ、第三に祝詞壽詞語詞に就いて論じ、第四に兩期の歌謠研究の歴史を記述せり。又附錄として、研究の參考書目、及び時代句數歌體等によりて分類せる表、時代と作者とによりて分類せる表等を添ふ。わが國文學を研究せんとする人和歌に志あり、歌學を學ばむとする人の爲に必須の書なり。

佐佐木弘綱翁遺著 佐佐木信綱君校訂

和歌 世々のあと

全一冊

洋裝四六判美本 紙數百四十六頁 正價二十八錢 郵稅四錢

和歌世々の跡は明治の歌壇に多大の功勞ありし佐佐木弘綱翁の遺著にして國初より近世に至る凡ての歌人の代表的短歌を、時代を追うて採錄せるもの。專ら初學者の爲にとて、その選出に、或は戀歌を省き或は難解の歌を避けられたれば、和歌の小歷史として、作歌の模範として、獨習用に又高等女學校の教科書等に、最も適當なる書なり。

佐佐木信綱君著

歌學論叢

全一冊

洋裝四六判總布製 美本紙數五八〇頁 正價金壹圓 郵稅八錢

歌學論叢は、佐々木氏が、數年前より帝國大學文科大學に於て、和歌の歴史を講ぜらる、其研究の餘材として成れるものなり。或は燃犀なる眼孔を以て「和歌と時勢」「和歌の將來」「歌學の根本」「上世の和歌」「歌格の研究」等に就て論究し、或は卓拔なる見識を以て、「人麿と赤人」「貫之」「西行」「實朝」「景樹」等を論評し、或は、「仙覺以前の萬葉研究」「戸田茂睡」等精細なる考證あり。或は「萬葉集の女歌人」「建禮門院右京太夫」等趣味津々汲めども盡きざるものあり。又「六人部是香」「大隈言道」「野村望東尼」等未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國分學史上に一新事實を提供せるもの。其他「萬葉集私見」「近世歌人雜話」「家集のいろ〳〵」等すべて廿篇、五百八十頁にわたり、該博なる學識と清新なる文藻と相俟ちて、我國の歌學界に新生命を與へたる書と云ふべく、又上代より新世にいたる側面の日本歌學史と云ふを得べし。苟くも和歌に志あり。國文に興味を有する人々にとりて必讀の好著なり。

東京本町 博文館

（にの二）

女(にの三)


玉滴なす發汗は貴
婦人女學生方の事業と
勉學とを妨たげんとす
此時は大學白粉
が最もその特効を表は
し化粧界の女王たる稱
賛を得るの時なり

英國皇帝エドワード七世陛下と皇后アレキサンドラ陛下





名家の令嬢



團琢磨氏（三井理事）令嬢ゆき子



桂侯爵（首相）令嬢輝子



金子子爵（樞密顧問官）令嬢きよ子

毛髪を黒く長くふさくくする
椿油にて精製したる

女學世界愛讀者に限り本店は一割引

ランラン香油

毛髪の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衞生大家及び毛髪を大切にせらるゝ御婦人方の實驗證明せらる處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランラン香油は最も純良なる椿油に毛髪の營養に必要なる藥劑を加へローズバイオレツトの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髪の助育を專一としたる香油也

發賣元 大阪西區新町通三丁目 福田源次郎商店 電話西千六百壹番 振替口座六〇八六番

東京販賣所
日本橋區通鹽町 佐野大和屋
日本橋區横山町 森本支店
日本橋區横山町 脇田盛眞堂
神田區橋本町 松井號支店



色を白く肌を艶麗ならしむる
レモン牛乳にて製せる

兩種共一瓶定價各廿五錢送料八錢づゝ

ランラン化粧水

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆様の御承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の效あること發見せられましたランラン化粧水は牛乳とレモン液とを調配したる最新最良の美顏劑を加へて色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日燒け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり

女(ほの一)

第壹回 コンビネシヨンセール

七月一日より七日迄左の價に
應じ毎日嶄新ある品物を數品づゝ組み
合せ特別破格の安價にて賣出し
同時に右に就き組み合せ品に限り景品
相添へ不申候

組合種類

三円組	五円組	七円組	十円組
十五円組	二十円組	三十円組	五十円組

日本橋通旅籠町
（電車なれば油町又ハ小傳馬町）

大丸呉服店

（其の二）

理想的▼KS式アイスクリーム製造器
兼用ビールひやし

（新案特許）



壹箇代 貳圓五十錢
市内送達 無料
市外小包 廿五錢
販賣所は到處の食料品商店雜貨店等にあり升

本器はこれまでのものとまるで趣をかい御婦人方御兒さんにも極手輕に力もいらず最も早くおいしいアイスクリームができますそのあとでビール葡萄酒牛乳などを冷たくするには最も妙です

◉中元暑中の御進物には高尚でハイカラで此上なし

御便利の爲め商品切手調進仕候

東京市銀座通り尾張町
十一屋商店
電話新橋二二二三振替九〇九二

於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醤油

HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN

宮内省御用達

千葉縣 田中玄蕃釀造 銚子港

ヒゲタ印醤油

女（ほの四）

名家の令嬢



九條公爵令嬢紋子

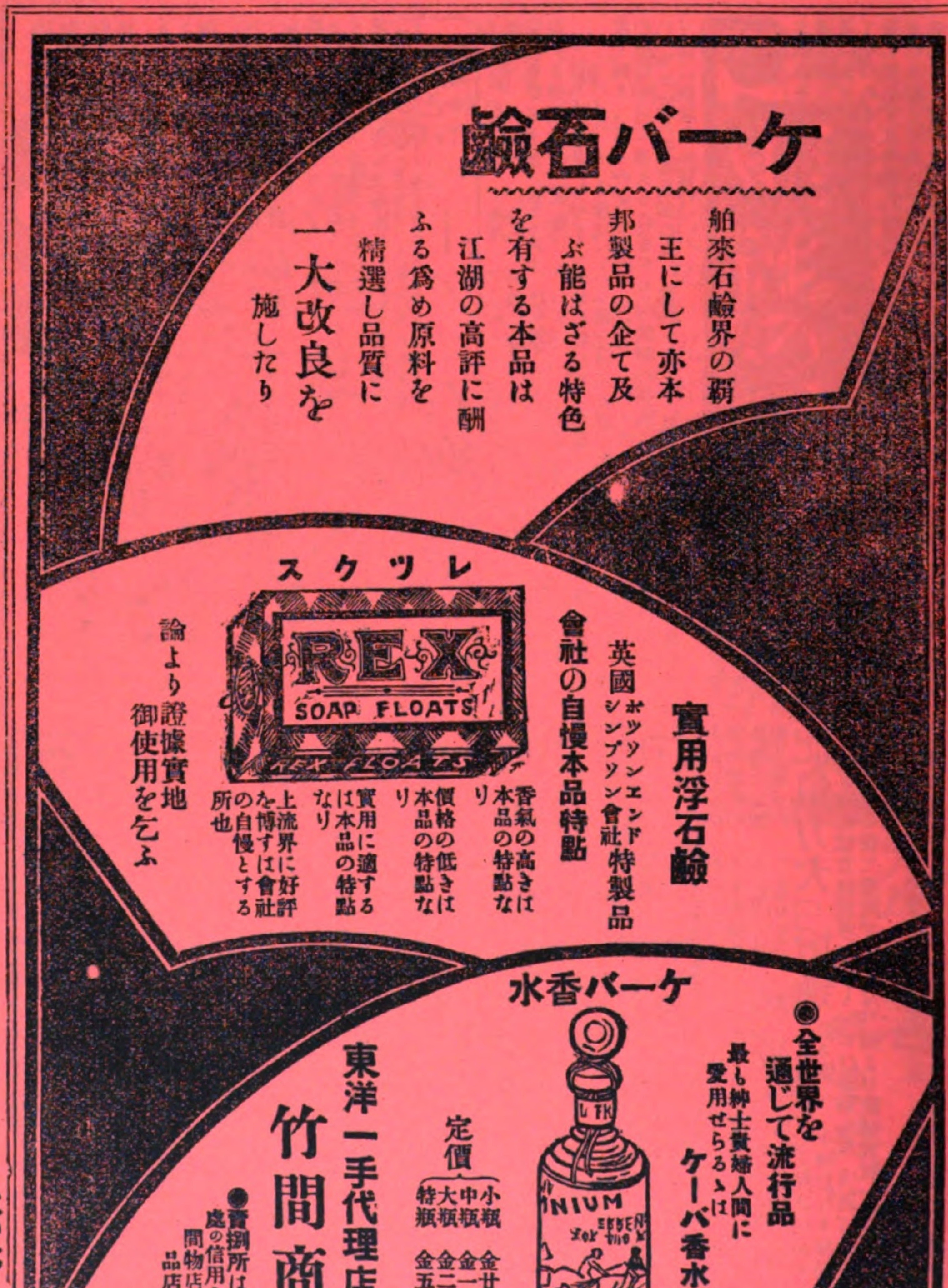


松平侯爵(康莊氏)令妹敬子

鶴の巣ごもり



これは近頃名高い但馬國出石郡室埴村官林の松樹に懸けた鶴の巣であります、親鶴六羽居て子鶴四羽を育み居るといふ又左方の松の下枝にある巣は青鷺の巣ださうです鶴と鷺と同じ所に巣をかけるとは何と珍らしい事ではありませんか。


ケーバー石鹼
舶來石鹼界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり
レツクス
REX
SOAP FLOATS
REX FLOATS
實用浮石鹼
英國ポツソンエンドシンプソン會社特製品
會社の自慢本品特點
香氣の高きは本品の特點なり
價格の低きは本品の特點なり
實用に適するは本品の特點なり
上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也
論より證據實地御使用を乞ふ
ケーバー香水
●全世界を通じて流行品
最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバ香水
NIUM
定價
小瓶 金廿五錢
中瓶 金一圓
大瓶 金二圓
特瓶 金五圓
東洋一手代理店
竹間商店
●賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物店及び化粧品店に有り升

（への二）

世界無比……最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日

目に必ず美麗に除去すること 痕跡を殘さず

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて美質を完うせよ天然の美質は山の如き來館者へ全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまず、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻小包郵送す

●色白特効 ペーアス石鹼

此石鹼は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん 皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹼獨特の靈効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し蘇るは賴主の實驗保證する所なり乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御註文を望む）

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

●毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、其他に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮着々と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

●奏効確證美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。あぶらぶとり。酒ぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等にて肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

●美(うつく)き聲(こゑ)の出(で)る新藥(しんやく)

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり ▲聲麗しくして…男子に威嚴あり ▲聲は人格を高尙ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。」

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記憶力を增進する靈劑

滋腎記憶增進丸

本劑は獨逸大醫スクリーボツト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記憶力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記憶力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記憶力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

（藥價）七週分參圓五拾錢五週分貳圓六拾錢參週分壹圓六拾錢壹週分六拾錢（送料）各拾錢宛

以上六種 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

小笠原流作法家元 松岡止波子
大日本禮節學會長 石井泰次郎先生共著

◉新刊◉

明治の禮式作法

和裝頗美裝全一册
正價金六十錢
郵稅金八錢

本書は紳士淑女か現社會に處して日常に心得べき禮式作法を細大漏さず解説と共に圖解を加へて叮嚀に縷述し殊に一作法に就ても上、中、下に分ち各其等を越ゆることなく又其品位を貶すことなからしめたるは從來の類書に於て決して求むる能はざる處實に本書の特色たり速に一部を座右に備へて朝夕の栞とせられんことを

發行所 東京市日本橋區檜物町廿六 弘學館
賣捌 日本橋區通一 大倉書店
目黒○東京堂○林平
北隆館○至誠堂○淺見

農產林產種子類
果樹用材苗木類
庭園樹木盆栽類
草花種子球根類
禽畜農具農書類
資本金七拾萬圓

明治四十二年秋の部（一册七十六ページ）

營業案內

（コレハ繪入解説代價表ナリ）

ハガキにて御申込次第 無代進呈

東京內藤新宿電車終點際（電話番町一八一六番）

日本種苗株式會社

女（への三）

夏季休暇を利用して練習なさい

習字繪画通信夏季講習

○本會獨特の特許速成法にて練習すれば短日にて上達すること全く機械的なり

壹ケ月卒業

○習字講習の部書者及講師

女子部書者 小野鵞堂先生外講師大家數名

男子部書者 文部省習字検定試験委員 稲川雲谿先生及玉木愛石先生

○繪畫講習の部執筆者及講師

川端玉章先生 河合玉堂先生 寺崎廣業先生

鈴木華邨先生 梶田半古先生 田代古崖先生

●注意 習字又は繪畫と講習希望の方を何れかを明記して申込みなさい。

見本 詳細會則 無代進呈 東京本郷森川町帝國習字會内 電話下谷三千〇十一番 習字繪畫通信夏季講習會

(への四)

名家の令嬢



黒田綱彦氏令嬢譽子



魚住完治氏令嬢ます子



藤岡工學博士令嬢米子



享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省
御用達
D.K.
卸小賣
營業品
概目
時計附屬品、指環、簪、
帶留、ブローチ、手釦、
紀念品一式
最新の流行品目錄郵券
六錢封入御申越次第進呈す
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(ヌン)コハ
振替口座七八〇七
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價
金銀

(その一)

東京市京橋區竹川町十二番地
理容館本部
電話新橋三八〇四番

衞生美顔術
（一回施術料金五拾錢）

美顔術實驗有効

御化粧水 ライラック水（一瓶五十錢 送料八錢）

にきび知らず 理容水（大五十錢 小三十錢 送料八錢）

芳香無鉛 理容白粉（一瓶五十錢 送料八錢）

根治確証 わきが 新治療藥 ラビヨニ

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ
丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を清潔驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる Hair ... 原名ヘグネス 毛髪生養液

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にて毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髪増生す◎頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品 紡ハンドコロン溶液 色の白くなる

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料拾五錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

最良 月ざらえ メソルピン

メソルピン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ケ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る、月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓卅錢送料拾貳錢●電下谷二五三五

專賣 東京神田區小川町東明館前 オリエンタル藥舗

女（その三）

世に持囃されつゝある
梶山先生と女子技藝叢書

女子手藝教育會主事　田中晋先生著◎◎最新版◎◎

女子造花 花たば新書

◎色刷版仕上げ圖及雛形圖數多挿入　菊版　金五十錢　送料八錢◎圖と數多の雛形圖を附す

近來造花術は盛に行はれつゝあれども其の最も必要なる花たばの製作法を完全に指南するものなし。本書の内容は材料器具の撰擇及染色艶出し混色の方法製作法より成る製作實習法には花の意味實物の形態鍰當組合せ等叮嚀に記述せらる且つ色刷版仕上げ

（その四）

刺繡術新書

雛形圖按百三十餘個挿入　菊版一冊
大和綴美本　金五十錢　送料八錢

摘み製作新書

雛形切圖百三十四個挿入　菊版二冊
大和綴優美高尚　金五十錢送料八錢

袋物製作新書

雛形圖按大版八十餘面挿入　大和綴
菊版全一冊美本　金五十錢送料八錢

編物新書

本書は梶山先生が幾多の苦心と勞力とに成れる百數十の編方と從來から行はれて居る編方の高尚なる物百餘とによりて完全なる編物の出來得る樣百數十の雛形圖を添へられたれば在來の編物書とは趣きを異にせる者なり。

大和綴美本
金五十錢
送料金八錢

造花術新書

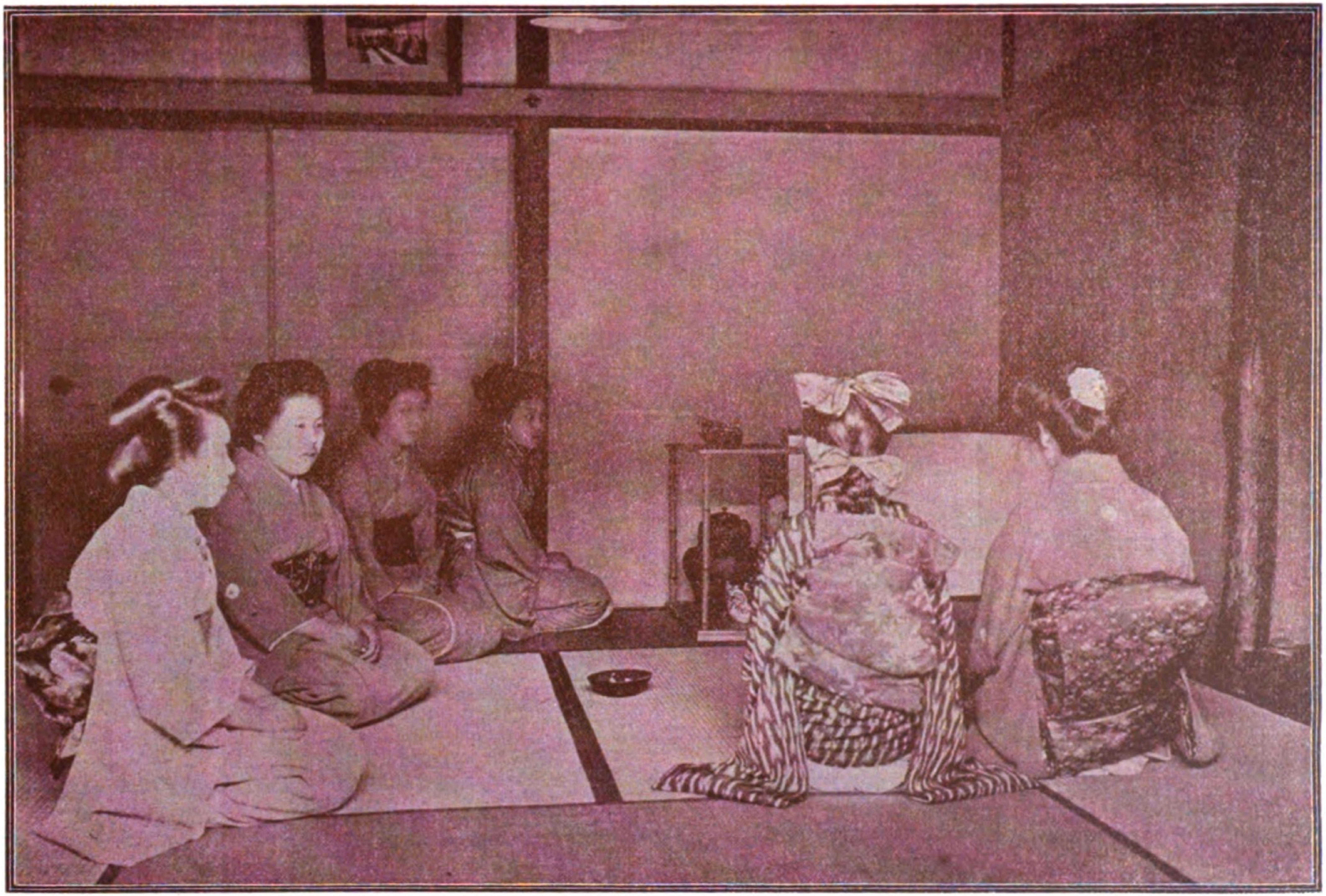
造花摘みの如きは近來實に流行の勢烈しく刺繡袋物等の優美なる技藝も進歩せしめんとす。然れ共未だ其美の絕頂に至らず只だ粗惡に流れ高雅たるものなし本書は先生が多年教授の傍ら學理と實際とにより自然の儘に造らるゝ樣記述せらる

雛形圖百五十
金五十錢
送料金八錢

發行所　東京市京橋區南槇町十八番地　振替貯金口座第四六八四番　廣文堂書店

（此廣告切拔二冊以上御註文は郵稅不要）

松濤庵茶會




實際的趣味と
經濟的効用に富む
家庭ミシン
裁縫書進呈
月賦販賣
京、濱、阪、神
無料出教授
橫濱市山下町
東京市銀座
名古屋玉屋町
札幌南一條
神戸市明石町
大阪市心齋橋
長崎船大工町
廣島猿屋町
シンガーミシン會社
(明細書 御申越次第無代送呈す)

化粧界の新福音

軽便白粉



大瓶 卅五錢
小瓶 二十錢

本品は米國に於て最新發明にして化粧界に未た見ざる處の學理を應用して調製したる無色透明にして有益無害の軽便美顔劑なり其特効は第一顔面其の他皮膚一切の汚脂を除ると同時に忽にして皮膚の艶を美麗且つ滑になし第二は使用者の手加減に依り濃くも薄くも自由自在に一種云ふ可らざる高尚優美なる化粧をなし得る頗る至便の良劑なれば貴婦人令孃方を始め一般婦人界には片時も缺くべからざる眞の理想的新化粧水なれば速に御實驗の上御高評あらんことを乞

第三百五十八號衛生試驗所の無害の報告あり

芝區愛宕町二、二 **美賞堂**

衛生改良酢發賣

貳合入壜詰一本 金二十錢
送料十二錢



本品二合は普通品の二升六合に當る

在來の食酢は腐敗し易く貯藏法に至難なるも本品は防腐性を有する醋酸を資料とせし者なるを以て有害なる黴菌を生ずる憂なく永久不變なり而かも之れを菜肉に使用して風味云ふべからず是れ本品の特點にして殊に**衛生酢**と命名せる所以なり家庭に於て御試用の上御高評を希上候

東京日本橋區本町三丁目
合資會社 **博愛堂**
藥種貿易商

電話本局長二八六番
振替口座東京八八一三番

女(ちの二)

若き婦人の離すことの出來ぬ雜誌

女子文壇

七月一日發行（毎月一回）五卷第九號 一冊十五錢 郵税壹錢五厘 半年（八冊）壹圓參拾四錢

▲本號主なる記事

口繪 原色版。着色石版 寫眞版光澤紙刷十枚鮮麗

◉最近に見たる八丈島の女……松原海雨

◉巧妙なる男子の手段を看破したる事實 原の女

◉青草の歌（英文）……河井道子

◉敬遠すべき美人……福光東衣

◉大阪の町娘と女學生の風俗……

◉美文の作法……西村醉夢

◉花言葉……水野葉舟

◉誰にでも出來る好きな學問の仕方……羽仁もと子

◉佛蘭西小説梗概 モニカ……馬場孤蝶

◉都會に出た時の第一印象……北原白秋 前田夕暮 川路柳虹 三木露風

◉小情集……若山牧水

◉教育を普及する外に途はない……元良博士

◉男女間の不文の制裁……海老名彈正

●青春の女子が熱血を注げる文章 詩歌無慮數百篇雜誌界唯一盛觀

▲投稿自由懸賞確實

▲衛生問答 醫學士北島孝夫擔任

（ちの三）

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社（振替口座壹七貳九番▲電話本局六〇七番）

賣捌所全國到處にあり


清き空氣の
呼吸と
クラブ洗粉の常用は
如何に皮膚の健康を增すか
未だ其の効果を試みざる淑女ありや

師範生徒の修學旅行



島根縣女子師範學校生徒三十八名修學旅行として上京し博文館印刷所參觀の際撮影したるものなり。

農學博士稲垣乙丙君閲

工藤齋君著

新編 家庭の科學

抑も婦人の本務たる日常家事に於ける百般の事項は悉く科學の理に支配せられざるはなし然るに本邦婦人は概してその智識に乏しきが爲め往々妄説を信じ鑑別を過り識らず知らずの間に不經濟、不衛生の動作をなすことあるは痛歎に堪へざる所なり著者工藤齋君は高等女學校に教鞭を執るの傍ら理科と家事科とに連絡を付し兩者共通の資料を採て本邦の主婦たる人にその智識を授け以て婦人の本務を完全圓滿に盡さしめんことを欲したるもの即ち本書なり

全一冊洋裝菊判

美本紙數四百四十二頁

正價金八十五錢

郵税十錢

東京本町 博文館

登録商標

室內及物品消毒用一壜金廿五錢

防臭消毒兼用一壜金二十錢

▲この消毒液を室内にふりまけばいろ〳〵の病毒をうちけし升

▲この消毒液を便所その他わるき臭氣のある處へふりまけばすぐに惡臭がなくなります



●內務省東京衛生試驗所及び東京市衛生試驗所の殺菌消毒力の試驗證明報告あり

●醫學博士藥學博士及び專門諸大家の證明と賞讃を得たり

使用法は本劑に詳細なる説明書添付しあり請ふ一瓶を試み給へ



製劑發賣所（稲野式電話消毒器貸付及販賣元）

鈴木商會

東京淺草區松葉町八十八番地

電話下谷(一五六)振替口座(一六一二五)

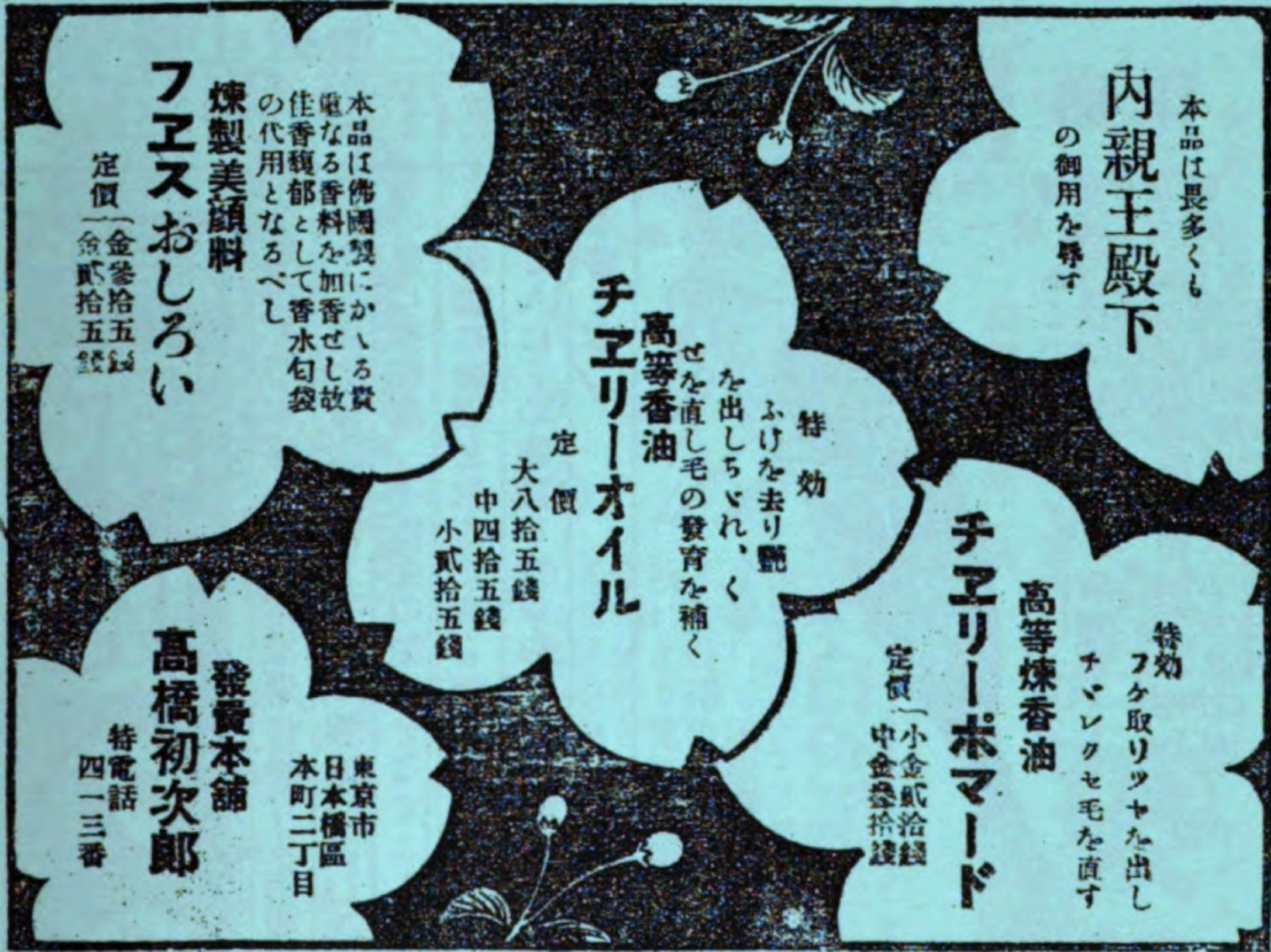
發賣元藥種問屋

里村三治

東京日本橋區本町三ノ十一

電話長本局(四四七)振替口座(二五六五)

女(ソの三)


本品は長多くも
内親王殿下
の御用を辱す
特効
フケ取りツヤを出し
チヽレクセ毛を直す
高等煉香油
チヱリーポマード
定價｛小金貳拾錢 中金參拾錢
特効
ふけを去り艶を出しちゞれ、くせを直し毛の發育を補く
高等香油
チヱリーオイル
定價 大八拾五錢 中四拾五錢 小貳拾五錢
本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
煉製美顔料
フヱスおしろい
定價｛一金參拾五錢 一金貳拾五錢
東京市日本橋區本町二丁目
發賣本舗
高橋初次郎
特電話四一三番


ウツラ石鹸
発賣元
東京
ヨコヤマ町
天野
夏の夕に

女（りの四）

支那の女醫學生



鷲山女史の醫學校に在學せる支那婦人

警視廳認可ト共ニ確實ナル證明アル白毛赤毛染ハ

千代ぬれ羽アルノミ尚本品ハ永久保存スルモ効力



不變ニシテ多大ノ信用アレバ賣買最モ安全ナリ請

フ本品ヲ備ヘテ顧客ノ信用ヲ得ラレヨ………………

新輸入 美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體內の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり（注意）從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗ろ迅速確實なり（今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候）色白新劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏効頗ろ迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓廿錢也

らい病根治新劑

癩病患者の新福音——最新發見藥——（レプロイス）

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

血塊流下 通經劑

本舖は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衞生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本舖及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絕せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割增しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

（ゐの二）

女(その三)



燃ゆる緑

燃ゆる緑の木のかげに、
初めて己れの大なるを覺え、
棄されしこゝろの清しさを思ふ。
宜、みどり。
木の芽の出でんとして此の色あり、
燃えてあたらしきに此のいろあり。
眸を閉づれば、赫灼として昇らんとする旭の眞紅を見
胸をいだけば、青春の血のあふれんとする響きを聞く
雨ふる日も、風吹く日も
はた落葉小窓を打たん日も、
絶えず、吾れ等が胸に
燃ゆる緑の印象を抱かしめよ。
今や世はあを葉
青嵐に郭公もかへりぬ

君子

女子の學問と健康の定まる時期

女子大學々監　麻生正藏

▲英米に於ける實際の有樣

婦人の身體の健不健は、單に婦人自身の幸不幸のみにとゞまらず、實に家族子孫及び、ひいては國家國民の幸福健康にまでも影響を及ぼすもので、これは更めて申すまでもないことである。處が近來婦人は學問をすると此の大切な健康を害するといふ說が處々に行はれて、女子の高等教育と健康といふ事は、東西識者の間にも問題となつて居る。けれども私は必ずしも高等教育が婦人の身體を損ふものではないと思ふ。之れを英米に於ける調査の結果に徵して見るも、學問をする婦人の健康は普通の婦人の健康にまさつて居るといふ譯にはゆかぬけれど、さればとて學問をしない婦人よりも不健康だとはいはれないからである。

▲女の學問と產兒の健康

即ち統計の示す處によれば、一般婦人の百中の三十といふものは不健康體を有するものであつて、この不健康者の體力は結婚とか出產とかいふ嚴しい試驗に堪えられないものであるが、それが高等教育を受けたものになると、同じ不健康者であつても、却つて比較的その試驗に應じ得られるといふ傾きがある。次に產次數に就いて試して見るに、一般婦人の平均二回に對し、高等教育を受けたものゝ產次數は二回稍强といふ割合を示して居るのである、更にまた子供の早死夭折といふやうな事に就いて見るも、高等教育を受けたものゝ兒童に其

不幸を見ることが少いやうである。尤も子供の早死といふやうな事は、必ずしも母體の健康如何にのみよるものではあるまいけれども、尙多少の關係はあるものといはれるだらうと思ふ。

要するに高等敎育を受けし婦人は、然らざる婦人に比して健康が劣つて居るとはいへない。寧ろまさつて居るとこそいはれる位である。

▲米國の女子敎育非難說

これに依つて見るも、高等敎育そのものが婦人の健康不健康に大なる關係をもつて居るものでないといふ事は明かである、米國などには近頃國民の體力をして次第に薄弱ならしむるものは女子の高等敎育であるといふやうな事を唱へる人もあるけれども、之れは全くいはれなき說である。何故となれば、米國で大學敎育を受くるものは、男子でさへ全國民のほんの一小部分に過ぎない。まして婦人に於てはいかに高等敎育を受くるものが多いからといつても、是れを全體の上から見る時は、極めて少數の者であらう、然らばこの少數婦人の健康が直ちに亞米利加國民の體力を薄弱ならしめるなどいふことは、到底誇張の言たるを免かれぬ。

元來醫學上から言ふと人の病氣といふものは、それが知れた時に初めて起るといふ譯のものではない、女子が子供を產むに當り、其苦痛に堪えられる丈けの抵抗力のないと云ふのも實は身體の完成期に於ける不注意に基くものであるといふ事であるが、婦人が高等敎育を受けて、健康を損ふに至ると云ふのも實はそれに原因する事が甚だ多いだらうと思ふ。故に其の身體の完成期に於て、十分健康の基礎を固めて置くといふ事は、單に女子が高等敎育を受くる準備としてのみならず、一般婦人の健康を保つ上に於て、最も必要な事といはねばならぬ。

▲生涯の健康の定まる時期

身體の完成期といふのは何時であらうといふに、通例十歳から十五六歳迄の間を云ふので、此間に人體の諸機關は完成し、以て一生涯に於ける健康の基礎が定まるのである。乃ち小學校の終り頃から女學校の終り頃までは、婦人一生の健不健の分るゝ分水線ともいふべき時代であるから、最も衛生に注意しなければならない。適當の滋養物を供給し、運動を奬勵して、血液の缺乏不足を補ひ、老廢物の排泄を十分ならしめるといふやうな事は、いふまでもなく大切な事であるが、教育上に於ても非常な注意を要すべき時である。これに就いては醫者の方面からは古來注意を與へるものが隨分多いのであるけれども、教育界に於ては未だ適當の方法を講じて實行するに至らない、目下有力なる醫者及び、教育家の説によれば、この身體の完成期時代に於て、二年間少くとも一ヶ月に二日つゝ學校を休ませて、心身を安穩にせしむるならば、必ず婦人の身體に好影響を與へるだらうといふことであるが、果して然らば學校では是非實行したいものである、一ヶ月に二日とすれば、一年に積つて見て僅に廿日間であるが、これがために他の病氣で缺席することがなくなるならば、實に益する處が損する處を償ふて餘りある譯である、これは學校に於ける注意であるけれども、家庭に於ても之れと相俟つて心を用ふべきは勿論である。

巳に完成期に於て十分の注意をなし、强固なる健康の基礎をつくつて置くならば、後來いかに高等の教育を受けやうとも、いかに專門の學問をしやうとも、必ず差支ない事と思ふ。

▲恐るべき健康破壞者

それにしても男子の花柳病が、非常に婦人の健康を害して居るといふ事は、大に注意すべき問題であるといはねばならぬ。いかに婦人が衛生に注意しても、一方に於て男子が不攝生であつては、到底婦人の健康を保つことが不可能である。亞米利加などでは、この花

柳病は淫賣婦等よりも、却つて家庭に於ける婦人に廣く傳播して居るといふ。これは結婚後夫より傳染せらるゝものであること勿論であるが、統計の示す處によると、婦人の生殖器病に關して外科治療を受けたるものの百中の七十五といふものは、實に花柳病に原因して居るものである、そしてこの病氣にかゝつた結果は、單に婦人の健康を害し、家庭の不和を來すのみならず、生殖力を減ずること夥しい。否、この花柳病を受けた婦人の百分の五十は、全く生殖力を失ふに至るとの事である。然らざるものは僅に一人の子供を設くる位で二人以上を生むものは、甚だ稀であるが、而かも其生れた子供は身體極めて薄弱であつて、百中の六十乃至八十は死兒若くは早死兒であるとの事なれば、生きのこるものは三四人中僅に一人位の割合である。

これは英米に於ける統計であるけれども、以て我國の狀態をも察すべきである。兎に角之れを以て考ふれば、男子の花柳病は、婦人の健康並に子孫に重大なる關係を有するものであつて、國家の盛衰如何にも影響を及ぼすべきものであるから、決して等閑に附すべき事ではない。

▲害毒を防ぐ方法

然らば如何にしてそれを防ぐべきかといふ事は問題であるが、まづ社會道德を嚴重にすることが最も必要な事である。元來男女に關する社會道德は、古今東西を問はず二重道德である。即ち男女によりて道德の標準が違ふのである。そして男子に得にして婦人に損なのが一般であるが、ことに日本に於ては男子は女子に比して、非常に自由を與へられて居る。從つて品行上に於ける男子の我儘も亦甚しい譯であるが、婦人の健康を保つには是非とも男子の社會道德を高めなければならない、ことに古來男子が子供のないのを以て婦人の健康に歸し、社會もまたそれを怪まない樣な風習は速かに廢止しなければならぬ。西洋などでは結婚前に男子の身體を檢查し、もし病毒を認むるに於ては、斷然結婚を禁ずるといふ法律を設けたらよからうといふ說が一派の學者間に唱へられて居るが、然しそれ丈けでは結婚後に於て不道德を行うかも知らぬ、故に男女間の二重の社會道德を撤回して、それと一致せしむるか、或はそれが出來ないまでも大に之れを嚴重にするといふ事は最も良法であると思ふ。

母親の感化が子供の生涯を定むる實例

江原素六

明治三十七八年の日露戰役は、わが日本帝國の運命に係る大事件でありました。幸ひ戰ひ半ばにして止み、勝利を博し面目を施こしたのは誠に喜ぶべき事でありますが、併しこれが爲めにわが國は幾萬といふ兵を失ひ、其の上になほ莫大なる借金を背負ふ事となりました。此の損害を取り返すのは却々容易な事ではありません。明治四十二年の日本帝國は、實に二十二億五千七百三十四萬八千六百二十七圓といふ借金がある。これを一人前に割り當てゝ見ると、皆さんは四十三圓宛の借金を背負ふてゐられるわけになる。それ故戰後は無論租税が增してゐるし、我々は又刻苦勉勵して政府に之を納めてゐる。これ程多くの借金を背負ひ、苦しい戰後の經營を全ふするには、政治家や實業家の手腕を要するは云ふまでもないが、それよりも必要なのは家庭の改良であります。皆さんは婦人だからと云つて、政治家や實業家に任せてばかりゐては決して此の苦境を救ふ事は能きません。何うかして家庭を改良し、其處から賢明なる士女を出して、國運の發展、戰後の經營に與からせると云ふ事に力めなければなりません。

△學者は學校より出で人物は家庭より出づ

彼の一千八百七十年の普佛戰爭には、佛國は戰ひに負けて、四十七萬餘の兵を失ひ、五十億八千萬の借金が出來ました。然るに、戰ひが止んで幾程もなく佛蘭西は此の借金を殘らず返して仕舞ひ、其上になほ三百億圓

といふ大金を各國に貸し與へる樣になりました。それは誰の力かと云へば、他なし、愛國心に富んだ佛蘭西婦人が、汲々として稼ぎ、又儉約した結果に外ならぬ。日本の婦人も亦これを模範として働き儉約して二十二億餘萬の借金を返す事にしなければならぬは云ふまでもないが、併し借金を返へす事に力めるばかりでそれで諸君の任務を盡してゐるものとは言はれない。猶は進んで偉大なる人物を養成して、それをして國の爲に盡さしめると云ふ事に力めなければなりません。現今日本の社界は實にこの偉い人物に缺けてゐるのです。

何時ぞやの帝國議會で、或る人が文部大臣に向ひ、「帝國大學創立以來數千の大學卒業生を出したが、未だ一人の確實なる人物の出ないのは何故であるか」と質問した。すると文部大臣は答へて、「大學は學問の蘊奧を極める處で、人物を養成する處ではない」と云はれた事があるが、全くその通りである。昔から今日に至るまで大人物と云はれる者は學校から出でずして皆家庭から出てゐるのですから、これは諸君の力を振ふべき所である。

△母親から小言ばかり言はれて居た子供

それには諸君は先づ自らを改良しなければなりません。母親の善惡は子供の生涯に取つて實に非常な關係を有つてゐるのです。

私の知合の家に、お母さんがヒステリーにかゝつて幼い子供に小言ばかり言ふてゐるのがありました。その子とお母さんとは奈良に、お父さんは大阪にゐた。その子供が學校に行くやうになつてから、夕方勉強しやうと思つて机の上に洋燈を置くと、母はまぶしいと云つて直ぐ吹き消してしまふとか、何彼につけて六ケ敷い小言ばかり言つて居た。その結果學校の成績は惡くなつて子供は遂に落第して了つた。するとお母さんは怒つて

學校へは遣らぬといふ。それでは困るからといふので、お父さんが大阪へ引き取つて學校に入れやうとしたけれども、どうしても承知しない。誰が何と云つても「私は一切人の云ふ事は聞かぬ」といつた風。その强情な事は實にお話にならない婦人でした。「そんな强情を云ふものぢやない」となだめれば「いゝえ私は今後もつと强情になる積りだ」と答へるなど、實に手もつけられぬ程ひねくれてしまつてゐた。其の爲に子供は勿論思はしく行つて居らない。恁う云ふ人はまさか諸君の中にはあるまいが、もしあるとすれば十分反省を願ひたいものである。

△私の孫が三歳の時に襷をかけて踊つた理由

子供が五歳位になる迄は特に注意しなければなりません。私の家に今年五歳になる孫があるが、その子が一昨年の春　三歳の年に、一人で襷を掛けて踊を踊つたのに驚きました。誰も敎へはしないのに、ハテ不思議な事だと思つていろ／＼聞いて見ると、その前年大阪に居つた頃、下女が無敎育な者であつたから、何の考へもなく、子供を喜ばせる爲めに、臺處で踊を踊つて見せたり、三味線の眞似をして聞せたりしたのだと分りました。聞かされたその時には手も口も利かないから分らぬやうであつても、子供の記憶性はちやんとそれを忘れずにゐて、自分の身體が利くやうになるとその眞似をやつて見る。實に恐ろしいもので此の時期が一番大切です。某博士の所に一人の婦人が六歳ばかりになる子供を連れて「此の子の敎育法はいかにしたら宜しからう」と相談に來た時に、博士は熟とその子を見て「惜しい事には此の子の敎育期はもう過ぎてしまつた。これまでが一番大切な時であつたのに」と嘆息されたといふ事を聞いてゐるが、全くさうである。育兒法がどうの、家庭敎育がどうのと小六ケ敷く云つて見た處で、五歳までの母親の感化が惡かつたならばその成長後いかに力を盡しても到底直るものではありません。これに反して五歳頃まで賢良なる母親の手に

育てられた子は、假令成長後周圍の事情によつて一時墮落する事があつても、一度母親の名を聞かせれば、憤然として過ちを悔ひ、屹度行ひを改めるものである。

△亡き母の善行を聞き泣いて發奮したる青年

ずつと以前の事、私が駿河の大湊で聖書の講義をして居た事がある。その時、雨が降つても風が吹いても一日も休まないで、赤兒を脊中に脊負つて熱心に聞きに來る貧乏人の女房らしいのがありました。私は一體何處の人だらうと思つて、或日二三人の青年を連れて行つて見ました處、その青年達でさへ途中でうんざりする程嶮阻な峠を越した向ふの田舍から毎日通つて來るのだと分りました。感心な女だとは思つたが、その時はそれ限り歸つてしまつた。――その後十年位經つて私が又その地へ行つた折に其の婦人の事を尋ねて見るとその女はもう死んでしまつて、十年前脊中に負はれてゐた兒が十四になつてゐる。誰か學問させて呉れる人があればお世話を願ひたいといふ話なので、それでは私が世話して見やうといつて東京へ連れて歸りました。處が何分にも田舍育ちの一向教育もして無かつた子供であるから、實に惡くて始末にゆかぬ。私も持て餘して或る人に話すと、さうした母親の子ならば直らぬ事もあるまいと云つて、「お前のお母さんはこれこれの人だつた」とその子に話して聞かせました。すると、忽ちはら〳〵と落涙して、自分の行爲の惡かつた事を悔ひ改め、それより眞面目に勉強して、高等工業學校の入學試驗にも一度で及第し、上成績で學校を卒業して、今は京都の某會社に勤めて居ります。

△聖壇に立てる名牧師の煩悶

子供の時に教育の大切な事に就て例を擧ぐれば幾らもある。或る有名な宣教師が死んだ後に、その日記を讀んで見ると、「神聖な演壇に立つて説教をしてゐる時でも、ふと幼い時分に聞いた記憶が浮んで來るが、我ながら誠に嘆かはしい。誰かもし昔の學校友達から聞

いた此の時分の記憶を忘れさせて呉れる人があつたら、我が財産を殘らず與へやう」と書いてあつたと云ふ事ですが、全く幼い時分の記憶といふものは、善い事は忘れ易いけれども、惡い事は假令それを話した人が死しての後も、聞いた處が變つても、何日までも忘られぬものである。

昔は百姓や貧乏人の子女は、家に居て絲を取り、機を織り、それを母親が賣りに行つたものであるが、當今は紡績工場といふ風な處に百人五百人千人といふ多勢が集まつて仕事をするので、誰に遠慮會釋もなく男の話や忌はしい話をしてゐる。又男子の方では、生涯の運命の定まるべき大切な時に兵營にゆかねばなりません。其處では只規則的な教育を受けて戰さをする道具になるばかりで、精神的の修養といふものは少しも出來ぬ。この男と女とが夫婦となつて社會を造る。どうして健全なる社會が出來ませう。

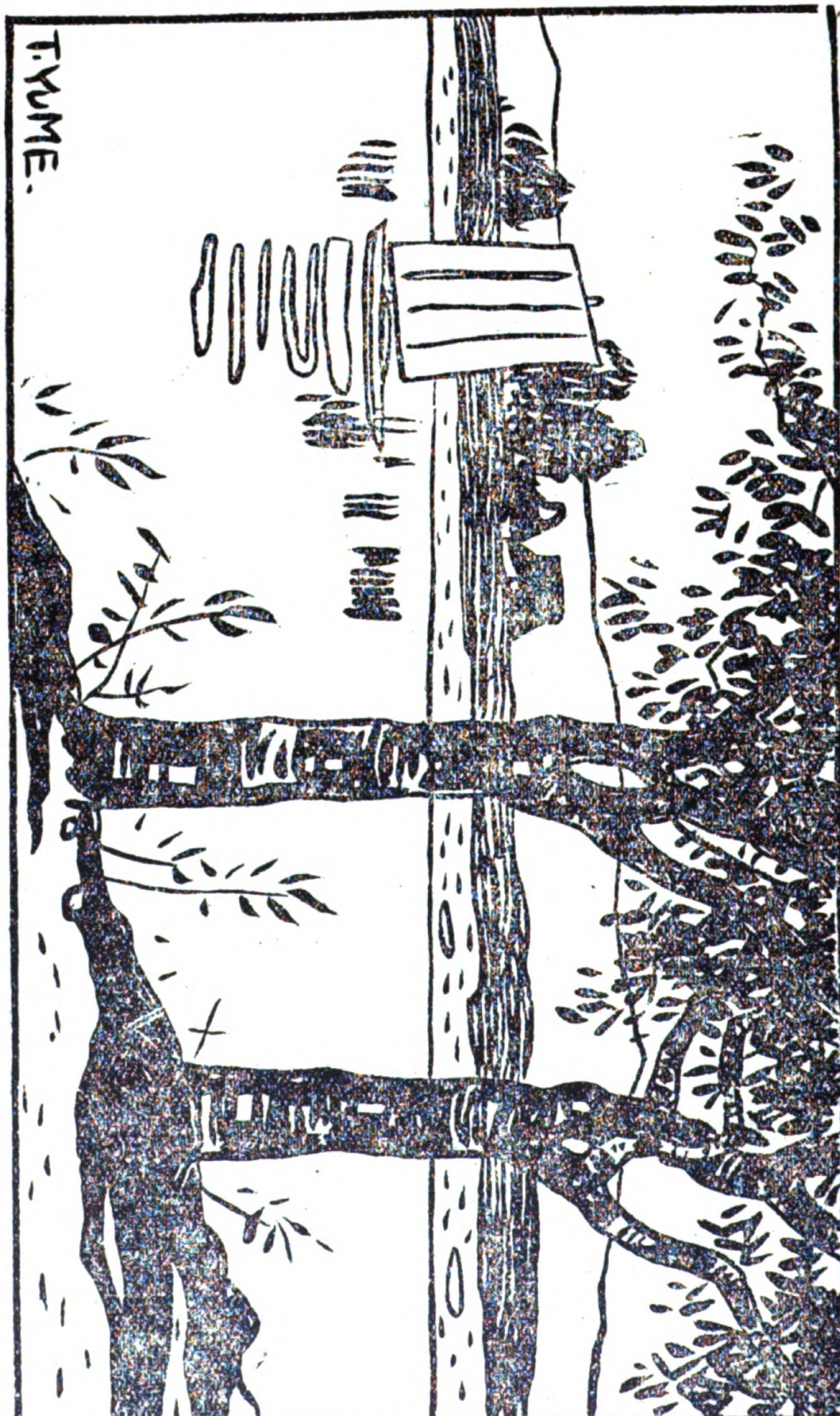
此の社會を健全に改良するには、汚れた風潮に接しても決して墮落し得ない完全なる人物を養成する外はない。それには家庭の教育、別けて母親の感化が最も大いなる力である事は繰り返して云ふまでもありません。何うか前申した實例に鑑みて皆さんは各自家庭の改良に力を盡されん事を望みます。

（母の會聯合大會にて）

長壽者の特色

人は生れながらにして長壽又は短命の骨相を備へて居るといふことは生理學上認められては居ない、けれども精神が定まつて心に餘裕があり、常に快活に生活するものは、それが何となく外觀に現はるゝもので長壽者を見ると大抵左の如き特色を顔面に現はしてゐる。

△物事に神經的ならずして樂天的なる容貌
△どことなく落ち着きて居て萬事にあせらぬ態度あるもの
△信ずる所堅くして容易に動かぬ色ある事
△正直らしき相貌ある事
△快活にして愉快らしく見ゆる事



土手の櫻

模範になりたいと望みし私の結婚

小崎千代子

▲少女時代の理想

私が洗禮を受けましたのは、十四歳の時で御座いました。誰樣でもですが、洗禮を受けた當時は、信念の煥なもので、私なぞも一身を神に獻げて斯道の爲に働く決心を致し、早晩嫁ぐべき配偶は、必ず同じ目的の人でなければならぬと決心致しました。私の父親は酒も飮まず溫良の人でしたけれども、矢張り從來の遺風で母親を壓制する傾向がありました。それで自分の配偶は最少し婦人を敬愛する人を……との理想を有つて居たのです。此節十四五の女學生は未だホンのお孃樣で、心配と云へば試驗の成績か御召物位に止まり、結婚問題なぞは遠方の火事程にも思はれない樣ですが、それに較べて見ますと、私共の少女時代はマセた考を有つて居つたものと存じます。畢竟昔は一般に早婚でありましたから、此節少女方のやうに暢氣で居られなかつたのです。尤も此節の少女方は、或點に於て昔者が驚くほど理想が發達して居るやうですが、但それが華美やかな動き易い空想で、深い決心といふ事は、昔の少女ほど無いやうに思はれます。

▲係累は厭ひません

私が十七歳の春、二軒から緣談を申し込まれました。其頃十七と申せば既う早い方でもありませず、且父親も歿しましたので、何時までも學生で家に居る譯にも參りませんから、どちらかに定める事になりましたが

一方は可なりの財產ある敎師で、舅姑も小姑もない氣樂な家、一方は牧師で、餘裕のある生活でもなく、且つ姑と二人の小舅のある家でした。世間並を考へますと、金にも困らず、係累もない敎師へ嫁く方が安全なのですけれど、私は前に申し上げた通り、信仰の一致した人が望みでしたから、貧乏でも姑小舅があつても、牧師へ嫁ぎたいと決心しました。併し暫く交際して互に性質を知り合ひたいと存じ、雙方の親の許可を得まして半年ばかり往來致したので御座います。

▲親兄弟とも交際

私が先方へ參つても親兄弟と一緒の處で話し、先方から來ても私の母と共に話しました。其話も宗敎上の話しが主で御座いまして、將來これが爲めに働く目的や方法なぞを眞面目に相談致したのですが、半年ばかり斯う遣つて居る内に御互に善く解つて參りました。御互の性情を了解する爲めの交際だからと申して、親兄弟の制裁もなく、何の用心もなく、うか〳〵と親しみますと、知らず〳〵熱情に驅られて理性の判斷を失ひ、相手の人と爲りを見誤らぬとも限りません、毎度申す事ですが、男女交際の盛な西洋でも、親兄弟の監督が却々嚴重なので、靑年男女が勝手次第に往來したり手紙を遣り取りしたりする事を許さないのです。第一若い婦人が確乎として居りまして、冷靜に男子の性行を觀察致し、結婚を申込んだ男子に關する身元調べなぞ實に行屆いたもので御座います。而して丁度我封建時代の武士の家に育つた婦人のやうに無禮な男子を近けないと云ふ極强い點が御座いますから、自然間違が少いのです。私共も窮屈な手堅い交際の間に、相互を解し合ひましたから、精神上幸福な家庭を作り得たので御座います。

▲傳道が新婚旅行

新婚當時は、自分相應に樂みを感ずるもので御座いまして、私共も矢張り同じ事では御座いましたが、蜜月だの新婚旅行だのと申して著しく睦み合ふたと申す譯でもなく、暫く經つてから上州の方へ傳道に出掛けましたのが、私共の新婚旅行とでも申すのでせう。近頃は夫婦間の愛情を遺憾なく流露すると云ふ傾向がありますので、舅姑と同居するのを厭はるゝ方もあるやうですが、新婚當時の夫婦が極端の滿足を得やうとすると、禮を失つて我儘に流れ易く、往々これが爲めに破境の禍因を作る事がありますが、舅姑がありますと自然に程合を得られますから夫婦間の禮儀が立派に行はれます。禮儀ある新夫婦は一寸冷かな樣にも見えませうが、結婚前に相互の性情を解し合つた夫婦であれば禮儀の正しい方が却つて永遠の愛を保ち得らるゝ事と存じます。

▲極度の愛が冷却した夫妻

女教師をして居つた立派な婦人がありまして、さる學士と結婚致しましたが、其當時は實にスヰートホームの標本と云ふ風で、蜜のやうな夫妻の樣子を羨まぬ者は無かつた位でした。それが僅か三年程經つか經たぬに其愛が冷却し始め・唯今では表面上夫婦と申す名義ばかりで、細君は元の通り女教師をして獨住居を致し良人は任地で他の者を妻同樣にして居るので御座います。是等の實例を見ましても、初めに餘り濃厚なのは宜しくないかと存じます。

▲逆境の十五年間

私は結婚後十五年間、良人と共に隨分辛酸を甞めました、良人は最初から外國人の資給を受けないで獨立の教會を設立しやうと云ふ決心で御座いましたが、其頃は信者も少し、又信者から供給して頂く事も出來ませんでしたから、何處からも一文の收入があるでは無

く、大分持つて居た公債も悉皆賣り盡し、私も持參の衣類を殘らず無くして了つた位で御座いますし。其中國元から、良人の祖母が孫娘二人を引連れて參り、私共と同居する事になりましたので隨分此人達に對する心配も加はり、生活の方も益々困難になつて、子供に着物一つ着せる餘裕も無いのでした。併し姑が却々氣の付く人で、私の爲めに算段して羽織を拵へて呉れた事が御座いますし、偶に母校へ參ると、教師が私の境遇に同情して呉たりなぞしましたが、私は當初から覺悟の上でしたから、辛いとも何とも思ませんでした。

▲嫁す時の短刀と鹽花

私が此家へ嫁ります時に、私の母は舊例に從つて生て歸るなと申す戒に短刀を私の袂へ入れ、鹽花を撒いて呉れたり致しましたので、私しが『御母樣其樣御心配には及びません、嫁ぐ家は死所と固く決心して居ますから』と申して笑つたのでした。三十年後の今日は大分社會の事情も違つて參つたとは申すものゝ、離婚が手輕に行はれる事は苦々しい次第だと存じます。近頃『私の所へ離婚の相談に來られる婦人方が可なり御座いますが、御話を伺ふと、良人の冷遇に耐え兼るとか、無理な條件を持ち出して出て行けがしにされるとか云ふのが多いので、一應は御尤もだとは存じます。併しそれは最初に人物を見ることを等閑にした爲めに、眞實の愛が弱く、何樣に苦勞しても生きて此家から出まいと云ふ覺悟が乏しいのでは無いかと考へます。尤も此人ならばと見定められた男子でも、不圖した事から心情が變つて妻に憂目を見せないとも限りませんが、一旦自分が心に許した男子ならば、飽くまで忍耐する勇氣が必要だと存じます。獨立の力もない婦人が、一旦の腹立紛れに離婚を言ひ出し、善後策に就て奔走苦勞するなぞは、珍らしからぬ例で御座いますが、同じ苦勞をするなら、良人の家に踏み止つて居らるゝ方が本當であらうと存じます。

▲日本雇人に婚を求めし米國令孃

先頃新聞で一寸見ましたが、米國の或豪商の令孃が其家に雇ふてあつた日本靑年の人物を見込み、是非結婚したいと母親に頼みました處、母親はこれを許しましたけれども、父親は不釣合の結婚だと言つて之を許しませず、其上此靑年を解雇しました。令孃は何樣しても斷念する事が出來ませんで、母親と相談の上靑年

の後を追ふて一家を持ち共に勞働して身代を作りつゝあると云ふ記事がありましたが、自分の見込んだ男子と飽くまで辛酸を共にしやうと云ふ意氣は實に見上げたもので、夢のやうな淡い戀に憧憬れて居る少女とは雲泥の相違で御座います。

▲男子の身體檢査が必要

大事の娘御を御嫁に遣りなさる親御達、自ら配偶を擇ばるゝ婦人方に特に御注意申し上げたいのは、男子の體質を善く査べらるゝ事で御座います。男子の地位を見込んで嫁した或婦人が、直に良人から惡疾を傳染させられて入院されたのですが、私なぞが見舞に參りますと、病質を恥ぢて隱して居られる樣子が誠に御氣の毒でありました。無垢の婦人が結婚の爲めに忌むべき病毒を受けるなどは實に／＼悲慘極まる事です。私は、斯樣な事を見聞致す毎に、萬が一にも自分の娘が斯樣な運命に陷つたら如何しやうかと戰慄致します。近頃は御嫁さんの體質調査が隨分嚴しいのですが、私は、却て男子の身體を嚴重に檢査しなければならぬと存じます。地位とか財產とかの虛榮にばかり眼を着けて、肝腎な身體檢査を忽にしましたならば、一生涯不具な婦人とならぬとも限りません。娘御を有つて居らつしやる親御さん方に充分御注意を願ひたいものと存じます。

▲新婚當時は勞苦の好時期

新婚當時は愛情が濃かで身體も強いのですから、貧乏も勞力も苦になりませんですから、此時期に十二分の働きをせねばなりません。自分を例に出しますのも嗚呼がましいですが、私は貧乏も係累のあるのも苦に致しませず、結婚してから十五年間は着物一枚帶一筋も求めずに働きました。若し新婚當時にお洒落をして遊んでばかり居ましたならば、今頃何樣に後悔致すか知れません。私のやうな物が大きな後悔も致さずに居りますのは、新婚當時に貧乏と苦勞に耐えて働いたからだと存じて、深く感謝致して居るので御座います。

常識に缺けた女の實例

現代の最大急務＝婦人の常識教育

高島平三郎

▲手紙が滿足に書けぬ

今の女學生の長所と缺點ですか。何樣も私にやア餘り長所が見つかりませんナ。私は女子大學へも他の學校へも出て居ますが、單だ私の專門に研究して居る兒童心理に關する考だけを話すと云ふ迄で、今の女子教育などは力にも及ばないのです。今の女學校に手紙を滿足に書き得る生徒がないのは、何樣いふ理由でせうナ。幾ら眞情流露が手紙の目的だと云つても、親や先生に上げる手紙に「いけないわ」などの文句を平氣で列べられては閉口するぢや有りませんか。樣といふ字も先方の位地に應じて五通りの書方があるなぞ云ふ事は昔の風で今の時代には無用かも知れないが、禮儀だけは今少し心得て書いて貰いたいと思ふのです。斯樣な事は生徒が無頓着であるばかりでは無い。畢竟教師が無頓着なのです。否無頓着と云ふより現時代に當嵌る書方に迷ふて居るのでせう。從前の日本風俗は西洋に較べると總てが階級的で窮屈のやうに思ふて居る者もあるが、手紙の書方などは却て西洋の方が嚴しいのです。深く日本固有の長所を知りもしないで、西洋の長所ばかりを列べ立て改良々々と狼狽る爲めに往々可笑な事がある。過般も或る改良家が「日本料理は食品を一度に客の前へ列べる

から、獻酬の間に汁物が冷えて了つて風味を失ふと云ふ缺點がある、一品づゝ食べ盡すと云ふ西洋料理でなけりや、盛んな宴會に不都合である」と主張し、頻りに日本料理を否定したが、此手合はちよつと其邊の小料理屋の日本料理を標準としたので本當の茶席の料理を知らないのだと思ひます。高尚な茶の會席料理となると、手都合に毫も脫漏のないもので、日進の今日に應用して更に不便を感ずる事はありません。彼の長を取り我の短を補ふのは、固より必要であるけれども、我の長を確と見定めて之を發揮させると云ふ事を考へないと、本當に彼の長を理解する事が出來ないでせう女學生を敎ゆるには此邊の注意が大切だと思ひます。

▲虛榮心から難解を貴ぶ

井上圓了博士は御承知の通り深遠な理窟を極通俗的に演說する人で、誰にでも善く解るやうに話すのが博士の長所でありますが、日外廣島で博士を招待して演說を頼んだ時、招待係の主なる一人が「當地で今度先生を招待申上げたのは、一般縣民に難有味を感じさせたいと云ふ考でありますから、甚だ恐れ入るが、分り難い御演說を願ひたい、餘り分り易いと、難有味を感じませんから」と賴んださうです。此話は實に現代の虛榮熱を代表して居るぢやありませんか、學校の講義なんぞも、カントが何と言つたとか、ヘーゲルが何と言つたとか大學者の話を擔ぎ出すと、ちよつと立派には聞えるが、生徒に解り難い事が多い。敎師自身が確乎とした考を持つて居て、其引例にするのなら可いが自身が碌に分つて居ない理窟を立派に聽かせやうとして、小むづかしい話をするから、往々間違つたり生徒に解らなかつたりするのです。私は自分の實力以上の事は話さぬと云ふ主義ですから、何處の學校へ講義に往くにもノートも何も持たず、唯だブラリと出掛けて行つて考へた事や實驗した事を話して歸るのです。女學生などは特に虛榮心が強いから、小むづかしい解り難い理窟を深遠高妙だとか大學者の創見卓識だとか言つて嬉しがつて居る者が多い。敎師が能く〲注意し

なければならぬのです。

▲不愛嬌は女の屑

米國の女學生は——尼寺のやうな組織の寄宿舍に居る者は格別——却却常識があつて、遠來の日本男子なぞを待遇する工合が却々行き屆いたものですが、それでも米國の社會では、女學生が追々乾燥になるから戀愛學校でも起さなければならぬと言つて居るさうです。戀愛學校と云ふと可笑しく聞えるが、凡ての人に對する愛嬌を發達させたい要求は女學生に對すると必ず起つて來るのでせう



日本の寄宿舍生活をして居る女學生を御覽なさい、實に不愛嬌なもので、自分の學校ばかりを天地間唯一の聖壇と心得て天狗になつて居る。而して彼等が敬慕し親愛する者は舍監か學友だけで、暢氣な交際をして居るから、複雜した交際の氣

樂苦勞を知らない。學友だつて自分と氣の合つた者だけと非常に親んで、氣の合はぬ者には背を向けて居る。至つて氣儘千萬で、勉めると云ふ交際を少しも心掛けて居ない、學校以外の人に對しては不愛嬌極まるものです。併しこれは女學生の惡いばかりでは無い、寄宿舍の空氣が惡いのです、愛嬌も何もない乾燥な老孃方が多いから、自然斯樣な現象を呈するのだと思ひます。

△舍監の一言

私が敎へて居た某女學生が、卒業後或學校の敎員となつて居たのです。それが私の處へ來なければならぬ要件があつて品川まで汽車で來た時丁度私が停車場で逢つたものだから、此處「大崎村」まで同道した。スルト母校の舍監たる某老孃と途中で出逢つたのです。處が後に此女學校否女敎員が母校を訪ふた時、舍監が「貴女は先達て高島先生と御一緒でしたチ、貴女シツカリして下さいよ」と言つた。元來內氣な婦人だつたから舍監の一言にヒステリーを起したのです。不見不知の青年とでも一緒に歩いて居たのなら叱らるゝのも當然ですが、舍監自身も以前私を師と賴んで性行を熟知し居り、私に妻子のある事も熟知し居る上に、舍監は又私の處へ來た女學生を自分が手掛けて性行を熟知し居りながら、尙ほ私と女學生とを疑つたなどは實に滑稽な次第で、私は或新聞記者に此事を話して抱腹しました。婦人の舍監でも良人や子供を有つた人は、餘程世態人情が解つて居るやうですが、オールドミスとなると常識の缺けて居るのが多い。而して男女間に於ける嫉妬が心裡に潛伏して居るから、猜疑の眼を光らして往々調子外れな監督を遣る。ちよつと女生徒が男敎師の家へ何か問合に往つても、可笑しな探りを入れて氣を揉むと云ふ風です。其樣に心配なら男敎師を賴まぬ方が氣が利いてるぢやありませんか、寄宿舍生活が女子を沒常識にして了ふのは無理もない事だと思ひます。

△女學生は家庭に置くが最上

私は出來得る限り女學生を家庭で監督したいものと考へます。家庭に居ると親戚知己に對する夫相應の交際法を不知不識の間に習ひ得る事が出來ます。友達同志と氣樂に打明話するのと違つて、嫌な客にも愛想よく應接する經驗が出來ます第一、長上に本當の溫情があるのですから、感化力が強いのです。地方から東京へ娘を遊學させる親達は成るべく親戚の家へ託されるのが宜いと思ひます。縱令寄宿舍のやうに規律が正しく無くとも、複雜した世間に觸れるから、結婚後實際の役に立つのです。



▲良人の事業を理解する力

高等女學校程度の敎育は必要であるし場合によつては夫以上の高等敎育も結構でありますが其高等敎育は男子の高等學校のやうな普通學が女子には必要なので專門學に踏み込む必要は無いと思ひます。尤も特別の資質の婦人が特別の希望で專門學を究め社會に貢獻すると云ふことは別問題であるが、一般の婦人は良人の

事業を了解する力が必要であるから、普通學に渉つて常識を養つて貰ひたいのです。

▲晩婚婦人の婿擇み

婦人が專門學を究めやうとすると、勢ひ婚期を逸して了ふ。婚期を逸した婦人は婿擇みが八釜しく、男子の缺點ばかり見えるので、理想が何樣の、趣味が何樣の、係累が何樣の、地位財產が何樣のと種々雜多の註文が殖えて來る、年を取つて少々賣口の惡くなつた處へ、擇り好みをするので、益々緣遠くなつて了ふのです。世間に然うシックリ自分の理想に適つた處がある理由もなく、縱令あつたにした處で嫁してから如何なる變化が起らないとも限らぬ。兎角年を取と氣を揉み過ぎる傾向があるやうです。それで遂に獨身生活と諦めて了ふ連中が多い。追々獨身生活の婦人が殖えて來るのは、虛榮に伴ふ生活困難から男子が結婚を急がぬと云ふのも一原因でせうが、婦人の方も專門の職業に就く方が、貧乏世帶で子の世話をするより光榮であると考へる者が多いからです。御承知の通り佛蘭西では結婚者が追々減つて來るのみならず、縱令結婚しても避姙法を講じて二人以上子を設けない。近頃はこれが嵩じて一人だけで止める者が多いさうですが、萬一我國に於て佛國風を眞似する者が多くなつたら、實に國家の爲めに憂ふべき事です。

▲襁褓を嫌ふ女

高等教育を受けた婦人の中には、襁褓を嫌ふ者が隨分多いやうです。私は或女學校の生徒に心の秘密を匿名で書かせて見た事がありますが、其中に『私は斯麽に高等な教育を受けつゝある境遇を感謝して居ります。私が若し何子さんのやうに早く結婚して了つたならば、今頃は赤子を負つたり、襁褓を洗つたり、何子さんと同じに墮落して居るでせう』云々と書いたのがありました。虛榮に憧れて居る女には、斯麽な連中が實際澤山あるのです。『私は子供の世話なんぞ面倒で……』と得意氣に澄して居る老孃をよく見受けます。

それでも獨身で立派に通せるなら可いが、斯麽な心得の婦人が貞潔を保ち得ないで往々墮落するのです。婦人が子供を育てると云ふ貴い天職を侮蔑して他に何等の天職がありますか。彼女等天狗連が墮落と命名する貧乏世帶の細君達が手一つで多勢の幼兒を育て、襷掛で赤子に乳房を含ませて居る姿の方が、遙に貴く床しく私共の眼に映ずるのです。

▲生育が婦人の大事業

私は世の中に子供ほど好きなものは無い。何樣な子供でも頭の先から足の先まで氣に入つて居るので、子供のする事は終日見て居ても見飽きないのです。私は子供に就てのあらゆる研究を事業として居るのですから、學校へ出勤しても兒童研究の結果を講話するのですが、生徒が追々家庭的頭腦になつて、子供の貴い事を感じ始めたやうですから、深く喜んで居るのです。善く考へて見ますと、人間の總ての事業は子供の爲めであると解釋しても可い位です。動物の中に親の養育を受けずに成長するものがあつて、其親は子を生んで直ぐに死んで了ふ。私はこれを見る毎に人間も若し親に養育されずに成長する事が出來るならば、親が長命する必要はなからうと思ふのです。總の物は皆子を生育する爲めに生存して居るのだから、我々が何の事業を遣つても、唯だ自己の爲ばかりでは無意味のものである、子供や後進の爲めに貢献しなければならない。

單だ性慾の本能を滿足させるばかりで無く、生育と云ふ事があるから男女の結合が神聖な意味を有つて來るのです。この道理から考へても子供の大切である事は明かに解る。それゆゑ社會學者も倫理學者も協心戮力して生育の敵を征服せねばならぬ。生育の敵とは何である、結婚難や育兒難を唱ふる虛榮根性の連中である。女子の高等教育は詮ずる所、完全無缺の育兒法を實行する爲めに起つたものであるのに、目的とは反對の方向に走つて、結婚を厭ひ育兒を厭ひ、良妻賢母何物ぞと嘯くやうな女が多く學校から出るやうでは、女學校亡國論を招かないとも言へない。大に注意すべき事

です。

▲婦人の眞價を發揮する三時期

婦人の美しい點は、年齡に應じてそれ〴〵發揮されるものです。處女時代、花嫁時代、世話女房兼母親時代、祖母時代と云ふ風に變化して行く間に生活趣味の滿足を得られる感情が圓滿になつて、優美な婦德を有ち得るのであります。然るに獨身生活の婦人になると非凡な女傑の外は、此滿足を得られない爲めに感情が著しく尖つて來る。幾ら勉めて常識に近かうとしても結婚した婦人に較べると偏つた點が出來る。又結婚した婦人でも可なりな年になつて子のない者は、獨身婦人ほどでは無いが、何樣も美しい情が乏しい。それで私は獨身生活の婦人、結婚せる婦人、子を持てる婦人の三種に區別して、婦人の眞價を定める事が出來ると思ひます。子を持てる婦人は、實に光榮を雙肩に擔つて居るのですから、何樣な辛酸を嘗めても、甘んじて保育しなければなりません。

美貌の根元

血色の美なるは健康體の徴候にして又美貌の最大要素なり、顏色の勝れざるは何れか不健康徴なればこれを治するには化粧法以外化粧即ち根本的美容法に因らざるべからず、其方法左のごとし。

○毎日二回適度の運動をなすべき事にて運動は精神の旺盛を來すものなれば朝夕共食後二時間を經たる頃行ふをよしとす。

○朝食前に冷水摩擦を行ふべし、但し虛弱なる人は微溫湯摩擦にてよろし。

○便通をゆるやかにする爲め適度の野菜を食する事。

○睡眠前に間食せざる事及び早臥早起の習慣をつくる事。

○床中にありては雜念に耽らず點燈は必らず消して寢る事。

○毎日一定の時間を定めて日光浴をなす事、日光浴は空氣の淸爽なる所に於てするを最もよしとす、但し酷暑の候は例外なり。

○屢々新鮮なる衣服に着換へる事及び永く一所に坐するは脚部を壓迫して血液の循環を妨ぐるが故に不可なり。



滑稽小話　鹽加減

萩香

五日土曜日

十日程以前先生から御招待のお手紙頂いた、秀秋さんのお誕生日は今日である。裁縫退つてもう二月、餘り御無沙汰して居るから丁度お手傳ひがてら早めに參上らうと、朝飯後髮をなほして直ぐ家を出た。

花茨こぼるゝ牛里の畑道、地藏堂の前で思掛なくお京さんと出逢たが顔見合すや、まア貴女も……オホ出し抜かれちやつたわ。アラ何方が？　と直ぐ脊を打ち合つて笑ふ。薄化粧の襟元匂やかに、前髮の幅廣なやゝ下髮の粋な銀杏返し、結立の光澤美しくチルの單衣を裾長に着て、桔梗色の洋傘かついだ様は流石村一美人の顔ひ附き度い様な好い恰好。まだ袷を着て居る私なんかの意氣地なさつたらない。ア、せめて帯だけでも縮緬の方締めて來ればよかつたつけ……、まアよくお早くねえと先生は大變お喜びに成つた。今日はお客と云つても貴女方つきりなのですよ、久し振だしゆつくり遊んで行つて頂かうと思ひましてね。土曜日ですから秀秋も早く歸ります、まアお晝飯には何にもありませんけれど御一緒に赤の御飯を……など　下へも置かずして下さるので、是非お手傳ひもさせて頂戴と、用意の白前掛甲斐〴〵しく面白半分に二人共臺所へ立出た。すると先生笑ひ乍ら、ぢやこれを剥いて黄味と白味を別々に分けて下さい、と水に入れてあつたゆで玉子を十四五取り出される。相當なお役目だ、きそひ合つてむき初めると丁度魚屋が御注文の鯛を持つて來た。目の下一尺ばかり、今朝曳上げた高網で此様のが七十枚もとれたと云ふ。一寸鉢巻ねじつて直ぐ料理に取り掛つたが、颯と洗つて俎板にのせたと見るやたち

まち霜を吹く出戸にふれて、その銀鱗はパラ〳〵パラ時知らぬ落花と打散る。

私等はしばらく手をやめて見て居たら、先生はやがて光る銀貨と共にお皿を差出して切身を受取り乍ら、うしほと鹽燒にするやうに、と鹽をふらせて「こんなのねエ、お刺身にするといゝんですけれど秀秋が鯛のお刺身をあまり好かないんですよ。その代りお兩人に今日は大變な物を御馳走しますよ、豚のおさしみ……」

お京さんは吃驚して、アラ嘘ばつかり。

それから玉子に味を附けられる、白味には鹽を利かせ黃味には砂糖を利かせるのださうで、お京さん早速手帳を取り出し書止める。そして美濃紙を味醂でぬらして蒸し箱の底から四方へ敷き、その中へ前の玉子を白身からさきへ裏漉で漉しながら入れるので、これはお京さんが引受けると云ふものだから、私には餡この煮かたを仰せつけられた。まあ先生いつの間に餡など漉してお置きに成つたのだらう、秀秋さんもほんとに可笑しいわ、男子の癖にお汁粉が大好だなんて。併し食べつくらなら私も負けない、などゝ意地のきたない事考へ乍ら一生懸命にかき廻して居ると、初めの中はよかつたがだん〳〵熱くなつて來て少しでも手を休めるとピチ〳〵はねてやけどする。やう〳〵ズネ〳〵煮え立つてかたまり掛けた時分には此方の腕が拔けさうになつた。が我慢してなほ手を休めず、もうよう御座いませうか、と伺ふと、あゝいゝでせう、甘御座んすかと聞かれたには困つた。まさか我家でやるやうに指の先で一寸お加減見る事も出來やしまいし。

お京さんの係りの方も黃味もすつかり漉せたので、味醂を箸のさきへつけて平らにならし、今度は蒸籠に入れて十五分間程蒸す。これで二色玉子が出來上つたので少し冷してから箱から拔き、程よい厚に切られたが眼のさめるやうに美しい。

それを見て居てふと思出し「先生、私の從姉に本郷で下宿屋してるのがあるんですよ、そして玉子……搔き玉子のお汁ね、三ツあれば二十人前出來るつて謂しますの、眞實でせうか。」

「え、三ッで二十人前ですつて。まア何うして？　美江さん嘘でせう。先生」
「左樣ですねえ、私にも五ッゐれば出來ますから……なれた方は三ッでも出來るかも知れませんね」
「まア德用だわねエ、何うしてこしらへるの、美江さん云つて頂戴よお願ひだから。さ」
　まあ何でもよくきゝ度がる人だつたら。
「お京さんそれはね、鰹節の煮汁をね、味醂とお醬油で味をつけてそれが煮立た時葛を水で溶いて入れるの、そしてよく／＼といといた玉子をその煮立つた中へぐる／＼廻しながら入れて直ぐ火から卸すんです。けれど普通玉子は一人前半分ぐらゐの割がいゝんですとさ、ねえ先生」



「えゝ左樣ですよ」私が餘り早口で云つたので先生は笑つて被居る。
　豚のお刺身つて何うするのかと思つたらもう、醬油漬にしてあるのを小口から刺身庖丁で薄く切つて並べられるお手ぎはなもの。
　まづ豚肉の極く良いところを一斤でも二斤でも三斤でも大切のまゝ深い鍋に入れて、肉をおほふ程水を注ぎ火にかけて杉箸の樂に通るくらゐにゆで、熱いところを生醬油の中につけて一晩置くと、翌日はもう食べられる。これを醬

油豚と云ふのださうだ。この通りお刺身にしてもよし、薄く切つてざつと燒いたのもよし、野菜と煮てもお豆腐と煮てもどんなにか美味くつて、またお辨當にはパンへ挾むと立派なサンドウイッチが出來るし、第一使ひ殘りの肉そのまゝ醬油に漬けてさへおけば、四五日はもつし、私實は雜誌で見たんですけれど此頃ちや絕やさずこしらへて置きます、貴女方もためして御覽なさいよと先生はしきりにすゝめられる。成る程重寶で美味さうだが我家では母樣が肉類をお嫌ひだから、まして豚なんときいたら身顫ひをなさるであらう。

あらまし調つた午近く。私等まで何となくホッとしてるとお隣りの奧樣が見えて一寸と先生を呼び出し、門口で立話しをして居られたと思ふと「みなさん、私は鳥渡お隣へ行つて來ますからね、何直き歸りますがもう秀秋がもどりますから……濟みませんけれど跡をよろしくお任せしますよ、何うぞお兩人で。ほゝ御飯を焦げつかさぬ樣に。と云捨てられたまゝ一緖に出て行かれた。

後ではまた二人がゆづり合てゝさわぎ、互に比較的責任の薄い御飯炊きにならうとてゝある。とう〳〵私が云ひ負けて了つて餘り口惜しいから、意地張でわざとお吸物の方引受けた。こんな間にいつか十二時も打つたのだと見え、制服姿の秀秋さん汗をふき〳〵お歸宅になつた。ふいと臺所に入つて來て私達の居るのにひどく面喰つた樣子、吹竹片手に一生懸命お釜の下を炊きつけて居たお京さんは一たまりもなく吹き出して了つたが、私はあまり氣の毒になつたので、「お歸り…遊ばせ。あの先生は若山さんへ被行いました。？　何ですの、お雜巾ですか」何時までか突立つて居られる氣が知れぬから催促すると「いや」と初めて身を引いてつか〳〵と座敷の方へ行かれるや本包をパッタリ投げ出す音がした。ほんとに妙な方、若い女は惡魔の化身だとでも思つて居られるのかしらん。三年越毎日顏を見合せて居た私等とさへ口を利かれた事はまだかぞへる程しきやないんだもの、いまに一高へ入學んだつてそしたら此上何んなバンカラが出來上るだらう、そ

れでなか〳〵の文學通でよく〇〇や文章世界に小說を投書たり、滔々と自然主義やら象徵主義論など筆にされるのだから、思へば可笑しいより馬鹿々々しくなる。

潮はまづ鹽にしてあるあらをざつと水で洗つて沸騰湯の中へ投じ、生醬油を少し注して一寸お加減見ると何とも云へぬいゝ味だ。が不安心なのでお京さんに、何うでせう、と云ふとそれが貴女のかゝりぢやありませんか、私にやわかりませんよとひどく跳ねつけられた。仕方がないからお小皿に少し取つて机の傍に持つて行き、秀秋さんお加減を見て下さいなと、頼む。と變な顏して振りかへり乍ら、でも吸つて見て、鹽辛いなと云はれる。

鹽辛いつて、ぢやもつとお湯を注していゝんですか、と念を押すと、何だか知らんがお母さんは此樣しほ辛い物食べさした事アない？、私はホウ〳〵の體で引退つて來た。お京さんは人の心も知らないで竈の前にくすくす笑つて居る憎らしさ。とにかく仰の通りもつとお湯をさし、火から下して蒸らして置くと、美しい小豆の御飯をおひつにうつし乍ら、「ほゝ美江さん、貴女うしほはあたゝめ返すと味が損じるつてぢやありませんか。其樣に早くからこさへたつて先生は何時お歸りになるか知れないに。冷めつちもうわ」と云はれてると折よく先生が歸つていらした。まア丁度よいとこでしたね、何うもおそくなつて濟みませんでした。さぞお腹がお空きでせうから直ぐ、と大急でお膳立が始まる。御馳走は

豚のお刺身（溶きガラシをそへる）
お茶碗（鯛うしほ、茗荷たけ）
お口取（二色玉子、乾杏の砂糖煮、鹽松茸）
鯛鹽燒（付合せ蠶豆の青煮）
甘煮（ふきと摺り肉）

右のうち摺り肉は鰯の骨を拔き摺り鉢にてよく摺り、メリケン粉と味醂と鹽を少々加へなほ摺り、それから油あげを二ツにはなして前の摺り肉を二分ぐらゐの厚さにのべ、小口より卷きて一寸所はじを切落しざつとゆでゝ後味をつける）

と云ふお獻立、やがて風通しのいゝ中の間に四人が一ツ食卓をかこんだ。私は秀秋さんの隣席で飛んだ所へ坐つたものだと思ふ。いつも無言の會釋のみですましてる間柄が斯う肩をふれ合ふばかりでは、折角の御馳走も氣がつまつて美味く頂けやしない。

お目出度う御座います、と云つてみんなが箸をあげたが、私はまづお吸物を一口吸つて見て我乍ら驚いた顏したと見え、先生がふつと失笑されて、大分よいお加減ですねと仰有る、ほんとにまるでお湯の中に鯛の切身が泳いで居るやう、だから私は變だと思つたに秀秋さんがあんな事云ふんだもの、と恨めしく秀秋さんを見ると、お京さんが皮肉な笑を含んであの話しをする。先生はいよ〳〵お笑ひなすつて、秀さん、ぢやその前に何か食べましたね。えゝ僕茶だんすにあつた羊羹を食べました、けれど……けれどぢやありません、甘味の殘つてる口でおあんばいされちや堪りませんがね、美江さんも美江さんぢやありませんか、若樣とお姫樣とが差向ひの新世帶でもお持遊ばしはしまいし……何心ない串談にお冷かしなすつたのだけれど、私は思はず紅くなると秀秋さんも俯いて苦笑された。併しこれから親睦の糸口が開けてめづらしくも私等といろ〳〵言葉を交し、學校のお話しにお京さんとませつ返して散々笑つて了つた。食後ピンポンやカルタなども先生が出して來て下すつたがふとお京さんの發案で、百人一首中の歌の價値の批判が始まつた。

先生は「久方の」と「風そよぐ」と「あはぢ島」が好いと仰有るしお京さんは「淋しさに」と「花誘ふ」と「ちぎりおきし」私は「今はたゞ」「逢見ての」「來ぬ人を」だと云つたら、はアセンチメンタルな人は矢張情の痛切なのばかり選むつて、隨分な方。おや御自分はとせめると「僕ア吹くからだ」なんて憎らしくて仕方がないわ。

其中いつか文學談にうつる。初めの中こそ新聞小説などの話しであつたが、秀秋さんも好きな道とて私が少し語るに足ると見るやお居間から帝國文學など持つて來て見せて下さる。で、だん〳〵圖にのつて生意氣

な口を出し、とう〳〵作家論で散々やりこめられた。もウ議論ぢやとてもかなはぬから透を見ていきなりその久米留飛白の肩を、ぴつしやり一ッ參らせようとすると、早くも身を躱しながら私のマガレットに掛けたリボンを引張るを、此方は飛び退つたのでスルリととけて仕舞た。ほつと色を變へ『や、失敬々々』とお氣の毒な程詫びらるゝ。私もまア調子づいて餘りな失禮、平常が平常の方なのに……もう些とつゝしんで居れや宜かつたと思ふと、居たゝまれぬ程きまりが惡くなつた。おまけに先生もお京さんもお臺所の方で聲がする。ア丶何うしたら……ところへ襖を開けて笑ひ乍らお兩人がお汁粉の鍋を運び入れられた。そしてお京さんが面白さうに無理强する、流石のお好物も胸につかへたやうで、折角頂いても苦しみな程であつた。

秀秋さんはお箸を置くより例の帝國文學を膝の上にのせて讀み初められる、モウ取りつく島もなく袂の先をなぶり乍らぢつと坐つて居る心苦しさ、先生とも何をお話したのだか、たゞ顔が熱くて〳〵氣が遠くなりさうに思はれた。いろ〳〵御馳走のお土產頂戴しておいとましたのは五時過ぎ、御門を出ると夕陽に輝く麥畑、はてもない中から『お絹十八、さてよい縹緻―』鎌の音と共に穗末の浪を渡つて散つて來る、お京さんは洋傘の先をツッツッと輪にふり乍ら『白の手拭風ゆゑなびく、手綱ゆるめて聲はり上げて』小聲に鄙歌のあとをつけてはらり後れ毛かき上げる。私も氣が附いて帶の間へはさんでおいた先刻のリボンを取り出し髮へ加へると、スーと乙鳥が袖をかすめて飛んで行つた。（千代子）



諷刺文

下婢の日記

水草

起きたのは五時頃――であつたらうと思はれる。時計が二時で止つてゐるので、よくは分らない。暫くしたらお種さんがモゾ〳〵と起きて來た。私に起されるより先に……自分獨りで……全く驚いてしまつた。烏の啼かない日はあつても、お種さんが私に起されずに起きて來た日は嘗て無かつたが、今日は一體なんだらう、此間手紙が來てゐたから、親の命日ではないにきまつてゐる。何か一つ皮肉を言つてやらうかと考へてみたが、馬鹿げてゐるのでやめた。

食後、久しぶりで美代樣を幼稚園まで送つて行く。暫く唱歌やら遊戲やら見てゐたが、ふと思ひ出して、安藤坂下の吉見へ先日の寫眞をとりに行つた。もうすつかり田舍風が脫けてゐて……我ながら驚く位だ。それでも正直なもので、いくら氣取つてゐても澄しこんでゐても、全體の恰好がお三どん式に出來てゐるのだから、是非もない次第だ。別にこれをお孃樣と見てはしい、奧樣と見てほしい、そんな野心は露程もないがどうもお三どんちやあ少々氣が引ける。せめてどこかのお小間使ぐらゐには……など道々考へる。まるで氣狂だ。

大洗濯をやる。お種さんに『そちらの御用が濟んだら手傳つて頂戴』と言つて賴んであるのに、ねつから來てくれない。何をしてるんだらうと思つて見ると、横ッちよに坐つて新聞を讀んでゐる。ムカ〳〵としたが、まあ〳〵こらへてだまつてゐた。何か一寸した事を賴んでも、すぐに、人を召使のやうに思つてるとか、あなたの御世話にはならないとか、何とか彼とか小言をいふ。こちらも喧嘩は賣りたくないから、もうい〻、斷然これからは何も賴まないぞ、と思つて、大抵の事は辛抱してるんだが、すると好い氣になつて、此頃はそ

れこそ掃除一つしない。

ジヤブ〳〵やり乍らお隣を見るともなしに見ると、女中は二人共、チヤンと坐つて裁縫してゐる。あゝ羨しい……自分も半日でもいゝから、あゝした風に、あんな心持で針を持つてみたい。まるで泥棒が簞笥の抽斗でもかき探してゐるやうに、碌に尻も落付かずに裁縫してゐて、何が面白い……。

洗濯物を干してゐると、お庭の方で何だか大きな音がした。見るとお稀さんがブランコからおつこちたのだ。「妙な病があるのね。両親のあるうちに直しときなさいよ』と言つてやつた。『アヲ、鎖が切れたんだわ』つて澄してゐる。人の頼を聞かない罰はテキメンと來た。好い氣味だ。自分の傍へ來て頻りに喜代樣の棚おろしを始める。やれ此頃は生意氣になつたとか、人を馬鹿にするとか、無理を言つていけないとか、さんざんやつた揚句、暫くしたら、うまく喜代樣をタラシ込んで三越へ行くやうにして、ニコ〳〵もので出て行つた。出て行つたのはいゝが、衣服や何か脫ぎ散らしてゐる。



知らん顔してゐたら「筆！跡を綺麗に片附けなさい！」鶴の一聲――あゝ私は……ボロ〳〵と思はず瞼から溢れ落ちた。

それから例によつてテク〳〵お使に出た。美濃屋の娘は大のハイカラだが、ニコリともしない、立つたまゝお客に對してゐる。自分の買物もしたいと思つて、歸りは神樂坂へ廻つたけれど、どうせまた遲くなるだらうと思つて、勸工場へもはいらずに歸つた。

間もなく旦那樣奥樣お二人とも本郷の方へゐらした。例によつて着物はあれ出せこれ出せ、つまりは後足で砂的に出て行つてしまふ。洋服なんかこんな事さられてはたまつたものでない。どれから手を下さうかと思つて五分間位は立つて眺めてゐた。

やつと片付けて、掃除をしてしまつた所へ、森下樣が御夫婦でゐらした。留守と聞いて大落膽でお歸り、奥樣は今日は珍しくヤゲだつた。何だかとつてつけたやうだ。矢張り見馴れた方がいゝやうだ。

さつきお種さんの衣服を袖だゝみにした時、何だかパラリと落ちた紙片を拾つて置いたのを思ひ出して、袂から出して皺を伸ばして見ると、手紙の裂いたのだ。正しくお種さんの筆蹟で、何だか私の惡口を書いたものらしい。「――じぶんがおさんどんのくせにまいにちえらさうにおくさまにしかられわたしが――」人を馬鹿にしてゐる。ゆうべ私の卷紙を凡そ四五尺も遣ひ、封筒も二三枚破つた。人の紙を遣つて、其人の惡口を書くなどは面白い、お種さんの特色を遺憾なく發揮したものだと思ふとをかしくなつた。

そこへ喜多村路子樣がゐらした。大分お顔色がよくなつた。これもお留守なので間もなくお歸り。巧にちつとも角を立てず、ボンヤリとした言ひ廻で奥樣の缺點を揚げてゐらしたのに敬服した。とても我々には出來ない藝當だ。

暫くして喜代樣とお種さんとのお歸り、俥を横付にした。オヤ〳〵さつき行く時、小さな聲で電車賃を借りに來たくせに、これはまた御大層な勢ひだと思つて呆れ返つてゐると耳許で「お繁さん、俥屋に二十五錢拂

つて頂戴！」？？？驚かざるを得ぬ。人間もこの位あつかましくなればもう思ひ置く事はなからう。餘程の修養を積まなければこの境に達する事は難い。私は馱目だ。御二人共おかへり。お晝前、一寸とした事からお種さんと言ひ合つた。さつきの事もあるし、平生目に餘つた事をドン〳〵突込んで言つてやつたので、とうと一句も上らず、あとから頻りにおまいすしてゐる。私の顔に「もうどんな事があつても電車賃も何も貸してやらないぞ！」とでも書いてあつたものと見える。

午後、河島さんが來た。相變らず盛に使はれてゐる世間には奇特な人もあるものだ。來たら使はれるにきまつてゐるのに、よくチヨコ〳〵やつてくる。眞更使はれに出張する譯でもあるまいが——我々にはかういふ人の氣が知れない。

三浦樣へ御使に行く。けふ始めて奥樣を見た。イヤにツンケンしてゐる。それにまた女中が變つてゐる。こゝはよく女中のかはる家だ。私が知つてから、これで四度目位だらう。歸りに書生のやうな奴に尾行かれて弱つた。

家へ歸ると、お種さんの姉さんが來てゐた。何のかの言つてるものゝ、自分には肉身といふものを來て貰ふ事は出來ないのだ。これを思ふ時だけは、つく〴〵お種さんが羨しい。

一時頃から、奥樣、美代樣、お種さん私の四人で麹町の富士見町教會の家族會といふのに行く。行つたらもう始まつてゐた。女の子の唱歌が濟んで、モルトン女史のピアノ、林さだ子女史の獨唱それから、上田敏さんの「思想劇」といふ西洋の劇のお話、それから久留島武彦さんの戰爭のお話とお伽話、この輕い、面白いお話振に滿堂を笑はせた。それから三宅花圃女史の家庭と和歌のお話、散會したのは四時半頃であつた。

歸つてすぐお使に出た。お種さんにお鍋を立てるやうに頼んで置いたのに、何の事もない、もう泣きたくなつた、口答は人一倍達者だが何の間にも合はない。

食後何か生意氣な事を言つて叱られてゐる。この頃猫かぶりがはげて來たとみえて、チヨイ〳〵手ひどく

叱られる。あとはもの言つても返事もしない。よく〳〵腹が立つて、そのとばッちりを私に持ちこむつもりなのか、待てども〳〵お湯から上つて來ない。とうと辛抱しかねて見に行つたら、いつの間にか上つてゐて、而も蓋を取りつ放しにしてゐるので湯がさめてゐる。

家庭顧問

△お安い焚付

馬鈴薯の皮を貯へて置ひて一寸煎鍋へかけて乾かして置きますと便利な焚付が出來ます、普通のより火のつきが早くて中々重寶なものです。芥箱の中へ捨てるのは勿體ないです。

△白地の洗濯

シャツでも着物でもすべて白地のものを洗濯した時によくゆすぎ出してから一番おしまいの水へ硼砂の粉になつたを小匙に半分程入れて御覽なさい、驚く程白くなります。

△火の起りの悪るい時

炭火などのよく起らない時には少量の鹽を入れてご覽なさい。直ぐ眞赤になります。

△銅製の器具の研方

フランネルの布片をお湯でぬらしよく石鹸を擦りつけ、その上に粉にした硼砂を澤山につけ、これで何でも銅製の器を研きますと驚くほど美しくなります。

△火傷の藥

少し位火傷をした時には饂飩粉を水で捏れてぬりつけますと、直きに痛みが止まります。そして時々ぬり更へる方が宜しいです。

△本の破れた時

書物の中が破れました時には白ひ薄紙の[illegible]紙を上から貼り附けるが一

胸がググ〳〵と鳴る程腹が立つた。

あゝ自分はどうしてもこんな屈辱に甘んじなければならないかと。唯譯もなく口惜しい。お種さんが憎いのではない。遂には我と我身が不憫になつて、さめた湯に身體をつけたまゝ聲を忍んで泣いた。

宜しい様です紙の下から字がよく寫つて見えます。

△パンを硬くしない法

平たい鍋様のものに一寸程水を入れ別に丁度その鍋に合ふ位の板をこしらへ所々穴を開けて鍋の底から二寸程の所へ渡します。その上にパンを並べて上から蓋をして置きますと大抵の場合柔かなパンが頂けます。

△ミルクの焦げた時

ミルクはどうかすると火にかけ過ぎて嫌な臭ひのするものですが、こんな時には下の方の焦けた所と上の方とが一しよにならないやうによく氣をつけて極めて靜に火から下ろします。そして別に大きな器へ水を入れその中へ前のミルクの鍋を入れ底の方が十分冷めたと思ふ頃そつと外の器にあけます。かうして用ひば少しもいやな臭味がしなくなります

△瀬戸物を煮る法

普通の瀬戸物でも硝子製の器でも新たに買ふた儘用ゆると破損し易いと申て一旦お湯に入れて煮るやうですが次の方法によりますと尚一層効力があるやうです。最初鍋釜の中へ水を入れその中へ二握りほども糠を入れて煮るべき器具を順々に入れてこれを火にかけるのですがはじめはとろ火にして次第に沸立たせます。沸立ちて五分程して下ろし全く冷え切る迄其儘にして置きます。

△葱の臭味を止める法

玉葱でも長葱でも料理の折には臭味がうつツて困るものです。このやうな時には少量の酢を火の中へ垂らしますとすつかりと臭味がとれてしまいます。

△使へない鍋

汚なくなつて迚も使ふ事の出來ぬフライ鍋でも五分間程アンモンニア水の中へ浸しておきますと丸で新しいものになつて仕舞ひます。

△牛乳と靴

一週間に一回づゝ牛乳でしめした柔かい布で靴を拭きますと大變保ちが宜しい樣です。

△コーヒーの汚れ

珈琲やクリームが白いものにつきますと一寸洗つても中々おちないものです。こんな場合には純粋なグリスリンを塗りつけて揉ますとわけなくおちます。而して最初微温湯でゆすぎ、次に冷水で洗ひます。略ゝ生乾きになりし頃汚點のついた方から熨斗をかけますと元の通りになります。どんなに地質の柔かな絹でも又毛織物でも少しも地をいためる憂がございません。一體グリスリンは油氣や其他の汚點をぬくものです。

若き娘の胸中の秘密

かげろう



△清き尊き犠牲

呱々の聲を擧げて始めて人間の仲間入をした赤坊を、一人前の男なり女なりに仕上げるのは、中々容易な事ではありません。どうか風邪をも引かせまい、蚤一疋もたからせまいと優しい母親が朝夕の苦心は、誠に子を持つて知る親の恩とやら、實際その衝に當らなければ到底量り知ることが出來ません。母親の娘に對する此の苦心、これよりも尊き、これよりも清き犠牲がまたと何處かにありませうか。永い間には子供は屢屢危險な病氣にも罹かります。其の都度母は身を切らるゝやうな思ひをして、ならば自分が代つてもと心の底から其の子の快癒を祈るのです。先づ齒の生えることからが心配で、どうか事無かれかしと母は寸時も氣をゆるめる事がありません。而かも赤坊に取つては之れは中々の大役で、爲に熱などが出て機嫌の取り憎いこと實に夥しいのです。その時を無事に通り越すと母親はほつと氣息をつくけれ共、又百日咳とか、痲疹とか、さてはヂフテリアとか云ふ油斷のならぬ病氣があるので、それからそれへと母親はちよつとも氣の安まる時はありません。

△ほつと氣息つくと又心配

やがて七八歲にもなりますと、又一つ心配が出來て來る、と申すのは、丁度この頃になりますと心臟の發育が他の諸機關と步調を揃えないと云ふ生理上の現象

が起る。從つて貧血症に侵される憂があります。これ丈ならばまだしもですが、續いて神經が非常に過敏になつて、やたらに暗い處を怖がり、一體に物に愕え易くなります。夢を見て泣き出したりするのは重にこの頃に多いやうです。この時機も別に變つた事もなく鹽梅よく過ぎ去れば先づ一安心出來ると申しても宜しいでせうが、然し所謂娘盛と名の付く所まで漕ぎ着けるには未だ中々澤山な難關があります。幸ひこれ等も一つ〳〵漕ぎぬけて漸と十四五にもなれば女子ならば生理上にも精神上にも判然と女性の特徴が表はれて來る。この時分になると母親も最早格別險吞な事はあるまいと大抵は油斷をするやうですが、處が油斷大敵で、其の後二三年も經ちますと大分當が外づれます。



△ふと學問が嫌になる

今迄健康の上から見ても、學問性行の上から見ても、先づ好い工合に發達して來たと思ふて居たその娘が、案外に樣子が變つて來るのです。女はさうでもありませんが、男の子などはそれはそれは亂暴になつて、ほと〳〵双親を困らせ切る樣な事をやりだします。ストライキを起して學校の先生を困らせるのもこの時だし、ふいと學問が嫌になつて脇道へ外れるのもこの時で、誠に心配の多い時です、女は流石にさほど亂暴にはなりませんが、それにしても精神上には大分變化が起つて參ります。先づ十七、十八、十九、この邊が一番楫の取り工合のむづかしい時で、又體に一大危機であるのです。肉體の病氣は直樣外に

表はれる爲に誰しも心配して醫者よ藥よとそれ〴〵手當を施しますが、此の際に於ける心の痛みは、外部に知れない丈に、あまり人の注意も惹かず、肝腎の母親さへも一向知らずに過す事があります。

△嬉しくて〳〵仕様がない

鬼も十八と申す通り、女はこの頃になりますと最も完全な發育を遂げて、背丈も伸び、全體の形もよく整ひ、髮でも顔でも何處となく香と艶とにてら〳〵して參ります。これと同時に心も單調な無邪氣な少女の時とは餘程變つて來て、萬物に對する愛心が深くなり、從つて心にいつも嬉しさが滿々して居るやうになります。木の葉の落つるのさへも可笑しいと云ふのは即ち此の時です。實にくだらない事が嬉しいもので、「お母さん、今日ネ、學校で先生が私に唱歌を歌つて見よと仰しやつたの、きまりが惡るかつたけど、ほらあの唱歌ネ、私のいつもよく歌ふ、あれを歌つたら、先生はそりや感心して入らしつたの、私本當にどうしたらいゝかと思ひましたわ、」と云つてころ〳〵と笑つて居る。聞かされる母親は、「おや、さうかえ、よかつたね、」と眞面目臭つて返事をして居るが、娘になると中々よかつたね位の事では滿足が出來ない。もそつと何とか云ふて貰ひたい。もう〳〵嬉しくて嬉しくて仕様が無いのです。又

△何が嬉しいか、何が可笑しいか

「一寸、花子さん、今日それは〳〵可笑しい事があつてよ、ほら吉村先生ネ、あの先生は少し額が禿げてるでせう、あすこへ蠅が一疋とまつて動かないのもうもう可笑しくつて、可笑しくつて、本當に仕様が無かつたのよ、そしたら丁度絹子さんと顔を合はしちまつたの、私どうしてもこらえ切れなくなつてゝ吹出して仕舞つたのよ、本當に苦かつたわ」、と云つては如何にも、可笑しかり相に笑ふ様な事もある、大人から見れば、何が嬉しいのか、何が可笑しいのか、さつぱり解ら

ないのです。此年頃の娘と始終一緒に居る人は、馴れて仕舞ふて別に不思議でもないでせうが、珍らしいと思へば全く珍らしいものです。兎に角此頃の女の子は喜の種子と嬉しさの種子が豊富で、ちよつと頰をつッついてもうお腹を抱えて笑ふと云ふ風です。

△俄に悲哀の捕虜となる

處が種子はこれ計ではなくて、もう一つ不思議な種子を持つて居ります。見るもの聞くもの皆歡樂の響を傳へて、身は恰も天女のやう、心は洋々たる春の氣に滿たされてゆるやかな空想の夢路を辿る筈の乙女が、不思議にも暫時すると宛で別人の觀を呈するやうなことがあります。歡樂の化身であつた乙女は、俄に悲哀の捕虜になつて仕舞ひます。



別に何が悲しい、何が哀れなと云ふ理由もなく、唯むしやうに悲しく、いやに涙つぽくなるのです。美しく月の冴えた晩などに、よく人なき庭へ下りて、木陰などにつくねんと立つて居ることがあります。戀に惱むでか、母親に叱られてか。いえ〳〵其麼ではありません。その樣な時にさつと側へ行つて「どうかしましたか、」と聞いて御覽なさい。乙女は

必ず首を撫つて「いゝえ別に何もしません。だけれど私本當にどうしたんでせうね、此頃そりや妙なの、こんなにして何時迄も一人ぼつちで居たいわ、而して何だか知らないけれど、直きに悲しくなつて來るの、」と云ふて、憫みを乞ふやうに密と涙を拭くでせう。これは隠して居るのでも何でもなく、全く有の儘を話して居るのです。然しこれは自分では知らなくとも戀愛若しくは人生の或る物に觸れて居るのです。

△人生問題の導火線

文學めいた物を奇態に好くやうになり、それも樂天的のものでは面白くなくて、悲哀を歌つたもの、惡るく云へば泣文學を好んで讀む様な傾向のあるのは此の時代です。小說は此頃の乙女の最も好んで讀むものですが、それも喜劇には興味を有たずして先づ一般に悲劇の方を歡迎します。そして時には自分をその小說の主人公に擬して泣いたり、笑つたりして居るのを往々見受けます。この時代は未だ深く人生問題に立ち入つて煩悶するの、どうのと云ふのではなくして唯何となく悲哀を感ずるのでせう。人に依つては此の時期はほんの僅の間でぢきに快活な前の乙女にかへるのもありますが、惡るくするとこれが導火線となつて本當の人生問題に入り込み、淺薄な女の頭に解釋をつける事も出來ず、つひには神經衰弱に惱まされて、あたら青春の時期を空しく過す様なこともあります。

△戀愛の甘き泉

世の中に何が不思議だと云つても、凡そこの戀愛の情程不思議なものはありません。又これ程激烈にこれ程無慘に若き人の心を擾亂するものはありません。幸か不幸か、一度戀の甘き泉に口づけすれば、殆んど身も魂もなえて仕舞つて、全く其の捕虜となり了るのです四十の坂を既に越えて、胸も躍らず血も冷えて、平凡な浮世の小道を極めて平凡にこつり／＼と歩いて居る人達の頭には、到底想像する事も出來ないでせう。こんな人達から見れば殆んど狂氣の沙汰かも知れません

彼の沙翁の傑作ロメオとジユリエツト、これは誠に青年男女の激烈なる戀を遺憾なく表はしたもので、何時の代、何處の國でも、世界の續く限り、人類の盡きない限りは之れは絶えず新しい人の頭に繰り返されて行くのでせう。彼等は唯一度相見たそれ丈で悲慘な運命を作つて仕舞つたのです。而して遂げ難き戀に惱みつゝも尚遂げんとして遂に世にも恐ろしい悲劇の主人公となり了つたのです。

△ならば飽く迄も夢の中に

戀は思案の外とやら、愈々人を戀する時には、その人の地位とか名望とか或は性格とかを一々吟味してゐる暇はありません。戀するから戀するので、他の人から見れば一文半錢の價値の無い意氣地なしでも、見る目から見れば實に吾が生命よりもいとしく、否全世界よりも尊いのです。若い夫婦が打ち連れて行くのを見て、何だらう、あんな腐つた様な女を連れて、胸が悪くなるなどゝ、道行く人は嘲つても、其の本人は一向平氣なもの、得々として相擁して行くのです。戀愛或は夢かも知れない。覺めての後、彼れ等は其の夢の果敢なく空虚なりしを悔むかも知れません。然し彼れ等若き人は、夢と知りつゝも尚其の夢から脱することが出來ず、ならば飽く迄もその夢の甘く、飽く迄も永からん事を祈つて居るのです。人間と生れてこの年頃に達した人は、誰しも一度は心に理想の人を描きます。唯その度の猛烈なると割合に穏健なのとの差がある丈で、全く無いと云ふのは、極めて非凡な人か、或はちとコンマ以下の人かどちらかです。

△靜々として樂まず

こゝは若い娘を持つ母親の最も注意すべきところで子に甘い親の目には、つい此の頃肩上をとつたばかしのほんのねんねと見えやうけれども、娘は中々さうではなく、やはり普通の人間並に人生の階段を一つづゝ絶えず昇つて行く。戀の矢は何時の間にか柔かい胸にさし入つて、終生癒えない痛をこしらへて居るのです。

しかし娘の身になつて見ると、いくら自分がさう思ふて居るからと言つて、恥多き身のまさかに兩親に意中を打開ける事は出來ない。たゞ鬱々として樂ます、半ば未來の希望に活き、半ば現在の悶えに死んで居るので、思へば實に可愛相なものです。その樣な擧動に氣を注けて時に娘の心を察してやると云ふのも母親たるものゝ務めと言つていゝでせう。親の持ち出す縁談を兎角言ひ草つけて度々斷ると云ふ樣な時には、餘程氣を注けねばなりません。よくその邊の消息を心得て居て、其場合〳〵に適當な處置を採つて導いてやらない爲に、折角苦勞に苦勞を重ねて育て上げた大切な娘の生涯を過ると云ふ事はよくある例ではありませんか。けれども餘り嚴格に過ぎても可かず、と云つて寛大に失するのは尚更惡るい。そこをよい程々に梶を取つて前途の水前案内をして行くのが母親の苦心を要する處です。

妙齡と精神病

▲此頃は新聞紙上でも情死や自殺者が多いやうに見受ける。一般に春になれば普通の人でも何となく氣が浮き立つてそわそわするものだが、殊に精神病の氣味ある人は一層其病勢を增す傾がある。

▲精神病といへば單に狂暴者や瘋癲白痴等に限ると思ふ人もあるけれども、苟くも精神に異狀ある者例へば神經衰弱の如き、ヒステリーの如き、又人よりも早く疲れ易い者、怒り易い者、或は不良少年、低能兒、慢性酒精中毒者等は皆精神病學の範圍に屬するものである。

▲凡て精神病は多く遺傳に依つて發し、特發のものは極めて少ない。精神病其者は遺傳しないけれども、親が大酒家であつたり、結核や梅毒等の素因ある者であると、不良な細胞を遺傳するから、從つて其子孫に精神病者が出來るのである。

▲故に自分の親若くは、重先に大酒家でもあるならば、餘程用心して之に罹らぬやうにしなければならぬ、殊に女子は破瓜期に於て最も多く精神病を發する。これ破瓜期は身體上に大異變を來たす時であるから、最も用心すべき時である破瓜期とは同じく月經閉止期即ち四十五歳前後の婦人も同樣の注意を要する。男子は年頃になつても、女子ほど著しく身體に異變を來たさない。其變化は寧ろ徐々である。

（醫學博士三宅鑛一氏）



東京を控へたる熱海温泉の繁榮

櫻子

△熱海の位置

皆様はとつくに御存じの金持とか紳士とか、肩書の付く方の、外見にも行くと云ふ、有名な温泉場、朝の八時何分に新橋を出て、國府津で下車し、小田原迄電車、暫時休息の後更に輕便鐵道で三時間ばかり搖られ〳〵て、茲伊豆の熱海に着するのであります。丁度小田原で新鮮な、自慢の鮪に、炊き立ての御晝飯に、御腹を拵へて一車輛恰も一間戸棚の如き名物の汽車に乘るわけですが、船のお好きな方々は靈岸島から東京灣の汽船で太平洋の一部を航して此港に參りますが、更に伊東下田等にも寄港します、大概の客人は荷物は國府津から汽船で差廻すさうです、價も安く其日に着荷する便利があります。

△熱海人の生業

旅館一、物產商二、次に醫師、遊藝師匠といつたようなもの、狹い町を歩いて見るに何にもあれ店を出して居ぬ家は皆無、それも當然此地の人は、湯治客を目的に生活して居るのですもの。

△有名な旅館

先第一に相模屋、樋口、露木、鈴木、少し下つて小林、古屋、などは一等旅館の內に數へられる。

樋口の建物は却々立派な洋風のハイカツタ廣い構へ、高貴な方は多く茲を御宿とせらるゝさうで、今春は東伏見宮兩殿下にはしばらくの御滯在、御機嫌美はしく日々御供も少なく御微行で賤しい漁夫や海女共の往

東宮が海岸を御散策遊ばすのを屢々御見受申ました。

相模屋はずゐ分古い家で前主人の時には客人も多く設備の點にも注意行届いて、薩摩樣や九條樣は毎年寒さを此地に過されます。

一代の豪奢を極めた活き佛、東本願寺の前法主猊下は、其御奥方樣始め數名の妾と數十名の從者を召具して、滯在された時にはずゐ分珍な話の多々ある中でも、或日法主の御慰みとあつて、魚見岬から海岸に小屋掛を設け、一帶に幔幕引き廻はして、大袈裟な地引網の催しがあつた、其時如何なる因緣か鮹の非常に漁れた事があつた、どうも面白いとの仰せで、一番大きいのを五六疋大きな桶に浮かせて、御居間の中庭に置かせたところ、其夜明けの頃大鮹が法主樣の寢所の壁に這ひ上つて居る、やい／＼騒いで居ると何と思つたか其鮹先生大眼玉むき出して鹽を吹いた、とは實に振つて居るではありませんか。

鈴木旅館などは、別莊建てゝ以て一家族引連れの專用の便に備へて居る、露木は、女將がなか／＼の客思ひで甘い鹽を出すさうです。

△熱海の名所

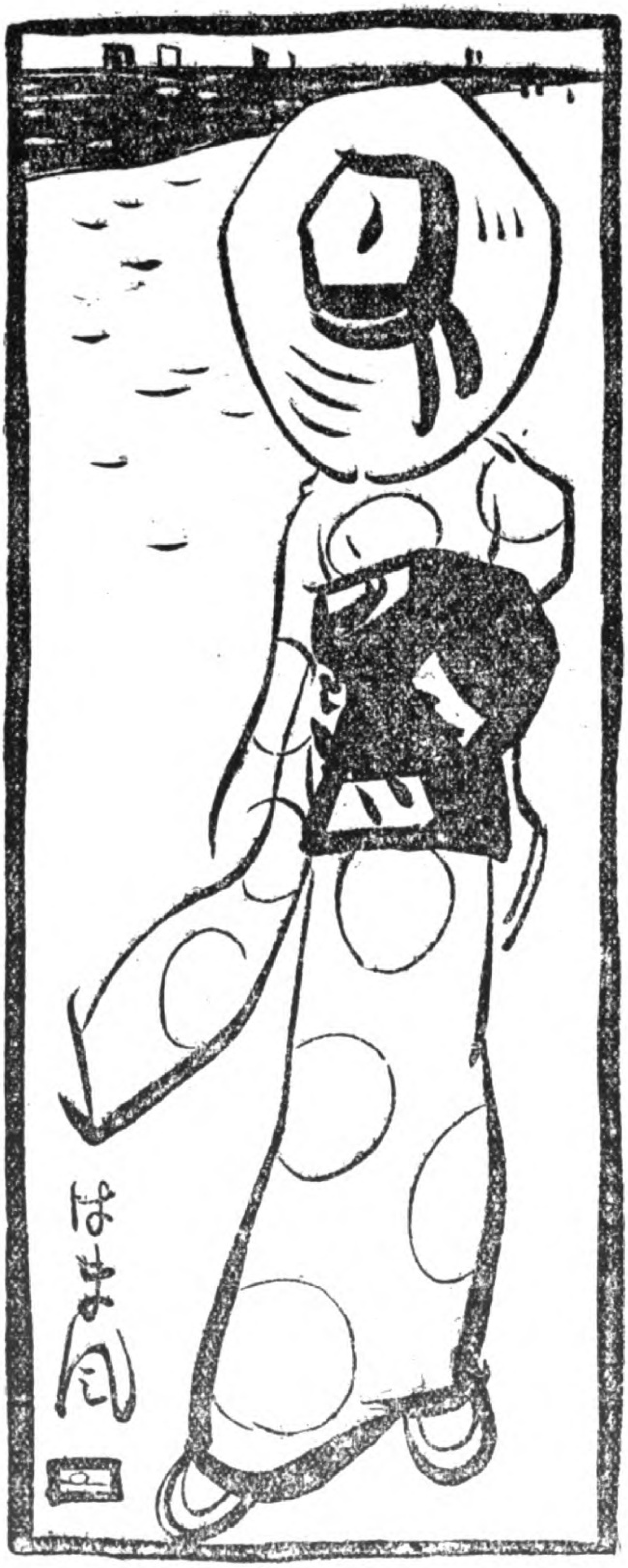
熱海御用邸は極々閑靜な、海岸に近い所に設けられてあります、が之は岩崎男が獻上に及んだものださうで當春は華頂宮樣が御滯在、銃を肩に輕裝の從者數名を召具遊ばした、活潑な御英姿を屢々拜みまゐらせました。

溫泉寺境内に藤房卿の墓所、僅八丁餘りを山の方に進むと有名な熱海の梅園で、金色夜叉を讀んだ人は誰も知る、佳人お宮が富山と心に染まぬ見合をした場所で、東京近在ではとても見る事は出來ぬ、全國の梅樹大約三萬本、と見たは誤りかも知れません、砂を被つて向島や上野の仇な櫻を見るよりも、來つて淸風掬すべき探梅と出かけた方が、遙かに增しであると思ひます、其外一寸神社の名を忘れましたが、其境内の後方に樟の大木齡千有餘年古色蒼然たるものです、此一帶は暖氣である故、樟樹が餘程に多い樣で名物木地細

工の家に、樟木細工云々の看板があります。

△熱海名物

は何かと當所の人に聞くと、嬶天下に西の風、と申ますが女のよく働くところで、それは世帯を持て居ても、洗濯や走り使ひ自炊客の臺所等に雇はれて行く風



習西の風は地勢の然らしむる所、眞の名物は大島絣に正眞椿油、雁皮紙、雁皮織、梅羊羹、などで大島絣を一名眞綿織とも申まして價も安く一寸見られます、雁皮織もなか〱精巧で帯地半衿四季袋銀貨入煙草入座蒲團地等で拔き染自由で、割合に妙だとて大方の客は求めないで歸るは稀だとか。

△温泉の事共

此湯は、間歇温泉の鹽泉でありますが、湧出するのは日に四五回白烟高く立昇りて壯快な景を呈しますのが大湯、今一つは小澤の湯、と云ふのですが、是等は樋を以て各旅館に配分されてあります、大湯は荒いとか、小澤の湯はよろしい伊豆山の湯は逆上せぬ、などと湯の批評も私共には分りませんでした、當節では濫掘の結果湯の噴出が少なくなつたとかで、町内一混雜の末米倉、樋口等の湯口を埋立てた騷ぎもありました、尙海岸に近接したところに河原湯と申のがあります、專ら田舍人を常華客として居る、そして此熱海の温泉其ものでは、石鹼の使用が出來ぬ、尤も大抵の旅館では鐵管で眞湯を自由に配置してあります、がクラブ洗粉も鹽泉では恰も、おからの樣で美人術の策も無くなります。

△當所に集ふ御客筋　其一

年末年始、一二月頃迄は華族樣やら紳士紳商連で、二月の半ば頃からは京濱間の大店の主人番人、夏向近くには米新夜具迄脊に負で來る、山越のお客さん九十などは死を待つ肺病人ばかり年中で一番さびれる時だとか。

餘りに皮肉くつた事は拔きにしますが、温泉場は一種特別なもので、密かに第二號妻君携帶や婦人の方でもずゐ分思ひ切つた遊びを試みらるゝとの噂さ、旅館の奥深く夜、弄花の遊びに旅の徒然を慰める人も貴婦人といはるゝ人に多いとは、これ必ず噓でせう、然し外見を張るは事實で廣くない町故毎日散歩に出て合ふ奥樣お神さんの衣服携帶品の美しさ、百圓以上五百圓位の附屬品の無い人は稀れ、出る度毎の御召換へとは、代議士が、お砂糖で失敗するの時勢ですもの當然かもしれません。

丈形の仇にすらりとした、紫縮緬の被布長く袂にこぼれ梅の赤い振り、高祖頭巾の人はこれ昔鳴らした柳橋の米八、今の千年米波、と云ふ女優一寸御對遊ば

產科婦人科專門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

しもの病 自宅療法

女の一番つらい病は。しもの諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である⦿著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳説せり⦿病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

●當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

無代進呈（但送料貳錢を要す）

目次

婦人病の總論⦿血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法⦿神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法⦿しらちながちの病理及其根治法⦿月經時の手當月經諸病の療法⦿姙娠の原理、受胎すべき場合姙婦の攝生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三六〇一番）笹岡省三

造花原料

東京九段坂 吉住商店

電話番町二〇五六番
振替口座六六七九番

●營業目錄ハ=御入用ノ方ハ二錢切手封入東京九段坂=吉住商店宛申込マルベシ直ニ進呈可仕候

（その一）

此

御申込の節は本誌廣告に依る旨御記入を乞ふ

特賣

大日本現代史

國府種徳先生著

▼装釘……菊判總クロース函入美本總紙數約二千頁

本書は他に比類なき人文の發展史にして、又異彩ある國家の飛躍史たり。露國の釁を北海に傳へてより、日露戰役後の所謂戰後經綸戰後經營の最近時代に至る迄、其由來、其沿革、其連鎖、其脈絡を知るの好指針たるや固より言を須ゐず。捧げて以て帝國の盛運を頌すべく、頒ちて以て國民の英氣を振ふに足らん。帝國興隆の眞相それ躍如として此册子に現前せん。本館は乃ち茲に此新史卷を大方に推薦す。

上下二冊

上卷（正價貳圓五拾錢 小包料拾六錢 同臺樺、清、韓、四十錢）

下卷（正價貳圓 小包料拾貳錢 同臺樺、清、韓、卅五錢）

特價

一時拂 二冊 金三圓五拾錢（外要送料）

▼七月卅一日限拂込着金順送本▼

二回拂 二冊 金三圓八拾錢（外要送料）

●第一回 金貳圓貳拾錢 着金次第（上卷）送本

●第二回 金壹圓六拾錢 着金次第下卷送本

▼一、二回共七月卅一日迄拂込事▲

春汀全集

故鳥谷部春汀先生著

▼装釘……菊判總クロース極美本總紙數約二千頁

全三冊

一冊（正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢 同臺樺清韓三十五錢）

全部（正價四圓五拾錢 小包料三十六錢 同臺樺清韓一圓五錢）

一時拂 三冊 金三圓五拾錢（外全部要送料）

着金順第一卷送本二

故鳥谷部春汀君の文品は世既に定評あり殊に其人物月旦の技に至りては殆むど天下の絕品

女（ゐの二）

機

發兌元

東京日本橋 振替口座


落語講談
避暑の友
文藝倶樂部 第十五卷第十號 增刊
洋製菊判紙數三百二十頁
口繪寫眞版……豐富
正價卅五錢郵税(本號限り)八錢
七月十五日發行
東京日本橋本町三丁目
博文館
振替口座東京二四〇番

(その四)

博文館編輯局編纂

明治四十二年



各女學校 高等小學校 生徒夏季休業中必需書

各高等女學校等に於て、生徒に夏期休暇日誌を記載せしむることは、近來殆その軌を一にせり、然るに之に恰當せる書冊あらざるため、亂雜なる書き方に流れ易く、教師は之を閲覽訂正するに苦しみ、生徒はこれが保存にその興味を缺く弊多し　これ等の弊を矯むる目的を以て、本書を發行し來りしこと數年幸に江湖の好評を博して、殆んど全國各女學校及小學校女子部に採用せられたり。因て本年もその內容を全く改めて既に發行せり。今や夏期休業は近きにあり女學生方は豫め一本を購求あらんことを希ふ。…………

裝釘……全一冊洋裝菊判石版表紙美裝
紙數五拾頁石版口繪挿入

正價　金拾貳錢
郵稅　金四錢

正價送料……割引

割引
▼五十冊以上……一冊送料共 金拾一錢五厘
▼百冊以上……一冊送料共 金拾錢五厘
▼二百冊以上……一冊送料共 金九錢五厘

注意
一、臺樺淸韓送分は一冊に付三厘增の事
二、內地代金引換小包送分に同三厘增の事
但臺樺淸韓行、代金引換小包送りは注文者の負擔を減ずる爲め前記三厘增の外割增を爲さゞる事

發兌元　東京本町　振替口座東京二四〇　博文館

女(ろの七)

女ろの八

せ、彼が羽左衛門です、と指さゝれる向ふを通るは、お召の着物に絞り羽二重の長襦袢ちらつかせて私共には餘り面白くもない俳優、今お歸りになるのが藝州樣の大殿樣、となる程、後ろの方に頑丈作りの三太夫が控へて居る。

△お客筋　其二

海岸河原湯に集るは前者と雲泥の差、とうもろこしの樣な、歯むき出して、大きな部屋に幾人でも構はず各各飯だけ宿で炊かせて、飯櫃を床の上に並べて底をなでる迄、冷たくたつても平氣なものお菜は干物梅干大根の煮付、を無上の珍味と心得暇さへあれば十何回といふ風呂入り、二月の半ばからもう單衣、利かした積りでとうてんの衿の掛つた半てん着に、勿體なさゝうに御新調の麻裏を、黒い素足に引つる樣子はどこ迄も東京の御客樣に反抗の態度、お土産は木地物のがらもの、びい〳〵、の玩具やおしやぶり位な物、彼等は旅館の徒然に何を爲すかと云ふと、隣村の太助は芋作りの名人、わしが家では米が上作だとか、肥臭い無邪氣なもの、お酉婆さんの御詠歌は此客連の呼びもの、聲がよいとか何とかで當人頗る御自慢の下田節。下田の浦に菊植ゑて、根も菊葉も菊枝も菊、折にやたよりもきくわいな、と浮かれてくる。

うちから來た端書、番頭樣に見て貰ひますべいと、萬事此式ですもの、これが眞の湯治でせう。

△當地の遊び場所

一度や二度は梅園に杖も曳くが、根が左樣に風流に出來上つて居ぬ都人士は、如何なる所に遊ぶであらう、此地には公然藝妓が許されぬ、それ故振れ込みは遊藝師匠昔し取つた杵柄の、五十路の坂越した老妓ではないお師匠さんが、東京くんだりから御出になつて、安宿に陣取つてお姫樣奥樣方に、踊りはよい御運動義太夫は肺のお藥などゝ、飛んだ廣告で金儲け、若い美しい師匠などは目の廻る全盛に、あられも無い貴族の若殿樣捕へて、清元や長唄の御けいこ、何れも旅行先

の心安さ、天狗連の若樣や大店の旦那連粋な奥樣果ては滯在の藝人迄華族も士族も盜賊も一緒になつて、溫習會開催の運びに至るといつた有樣。

當地の所謂お師匠連は夏は伊香保に、出稼ぎして一年間後とは寢ても暮しの出來る樣にと、大車輪の働きをするのださうです。

今一つは球突屋で、大きな旅館には備へ付もあるが營業はこゝ一軒、朝から晩迄の大繁盛無階級の無禮講奥樣方迄運步を運び給ふとか、新婚旅行などで當地に滯在でもしようものなら冷評羨望半分の耳つこすり、する分檢玉に上げられます、とは某夫人の御話し。

△熱海の物價と人氣

どうせ場所柄とて魚は多くても安くない、野菜も不自由、鰺の干物位が比較的に手に入るに易い位です、から家族連れで長く滯在するならば、一家借家をして自炊生活を試みる方が面白いでせう、野菜も百姓家から直買にする、地引がありさうなら皿持つて海岸に出かけるといふ樣に、立廻らねばなりません、人氣も嵩くだけが野暮で、何しろ金さへ出せばお客樣、鍋島や前田、毛利、島津などの大名方に出入する雇はれ婆で月に八圓乃至十五圓、それに土產の反物も貰ふといつた有樣慾の深さ度り知る可からず、女中達だつて大旅館では五圓位の祝儀は餘り有難くないとやら一年二年の奉公で皆嫁入仕度を拵らへるのですもの、その風習は母も祖母も皆其道をたどつたのですから萬事を知る事が出來ます。

黄白を望んで渴仰の的とする彼等に近つかず、與に湯治の効を思ふ人は、心す可きであります、然しさすがに大洋の洪大に、近く初島三宅島、よく晴れた時は伊豆の大島噴煙を眺むる海岸の景色は寄せ來る波の音と共に名高いものでありませう。

白い消毒着を被た男女按摩は、丁度神田本鄕の學生ほど、居ますのはまた一の名物であります。（地方風俗の内――甲賓）

最新東京市の人口調べ

（市勢調査局の實地調査表による）

讀者諸君は記憶せらるゝであらう、昨年秋東京市で人口調べをやつた事がある、丁度十月一日の眞夜中午前一時を期して全市十五區の現在人口を調べあげた其の結果が今度公表されたからそれに基ゐて大體を一寸披露して見る。

◎各區の人口と戸數

東京市の人口　百六十二萬六千百〇三

同世帶數（戸數）　三十七萬七千四百九十三

參考＝△大阪市九十九萬五千餘△京都市三十八萬五千餘△横濱市三十二萬六千餘△名古屋二十八萬八千餘△神戸市二十八萬五千餘（以上は概數）

1 淺草區　十八萬五千六百人（四二、一）（戸數千位）
2 本所區（約長崎市）　十六萬三千九百人（三六、四）
3 芝　區　十三萬六千二百人（三一、三）
4 神田區　十二萬八千五百人（二七、四）
5 下谷區　十二萬五千三百人（二八、四）
6 京橋區（約廣島市）　十二萬四千四百人（二九、七）
7 深川區　十一萬九千〇人（二六、四）
8 日本橋區　十一萬〇七百人（二〇、七）
9 本郷區（約仙臺市）　九萬四千八百人（二〇、五）
10 小石川區（約金澤市）　九萬四千四百人（二三、二）
11 牛込區　八萬九千二百人（一九、七）
12 麻布區（約徳島市）　六萬五千八百人（一四、八）
13 麹町區（約新潟市）　五萬九千九百人（一〇、九）
14 赤坂區（約福井市）　五萬五千三百人（一〇、一）
15 四谷區（約前橋市）　四萬五千五百人（九、六）
16 水上生活　三萬七千九百人（一五、九）

備考＝淺草と芝は面積も廣く人家稠密の區であるから多數なるべきは勿論であるが場末の本所區が第二等にあらうとは聊か意外であつた、面積最も廣くして人口の割合に少いのは麹町であるこれは宮城並に官省の所在地であるからの事、これに反して神田の多數なるは人家稠密の好適例である。

又こゝに水上生活とあるのは隅田川の本流を上下す

る運送船を始めとして日本橋、深川、神田の各河川に浮べる船中の人口を調べたもので二六時中船を家として生活する人數だけが實に三萬七千九百人、世帶數一萬五千九百餘に上るとは何と驚ろくべきものではないか、東京市中には船を家として生活するものが地方の優勢なる一都會、豐前の門司、伊豫の松山乃至は信州長野、若しくは高崎市水戶市などよりも多いのである
猶一寸東京市現在人口百六十二萬六千百三人の中男女の數を差別すると

男　八十七萬三千百〇一人
女　七十五萬三千〇〇二人

即ち女の少きこと十二萬人(約一割四分)である。

▲各區內の特別なる現象

東京は實に奇態なところで、町の名があつても定住人のないところが數ヶ所ある。麴町區の內祝田町、寶田町、日本橋區の內駿河町などは其一例である、前者は內閣、宮城の外郭になつて居る所ろであるから勿論世帶人は居ない筈、後者は三井銀行を始め各種の大會社大銀行で占領して居るから竈といふものがないのである。右の例で內幸町二丁目は世帶數僅かに五箇、人口三十五人、富士見町三丁目が同二箇で人口十五などいふのがある。さうかと思へば朝顏の名所で名高い下谷區の入谷町は世帶數三千六百、人口一萬三千七百餘人を包容する。同じく龍泉寺町の人口が九千〇八十とある。又淺草の千束町これは吉原の裏に當る所で一丁目から三丁目までを總計すると勿驚世帶數に於て五千五百五十四、人口二萬千〇五十、實に一町內で地方の市以上の數を包容する、是等がまづ東京市中で一番大きな町といつてよいが事實あまり誇るべき場所ではないのである。
猶一ッ妙な現象がある。麴町區の代官町は世帶數が僅か七箇で人口が三千六百二十人とある代官町には民家が一軒もない筈であるのにどういふ譯かと考へるまでもない、これは兵隊さんの營所であるから矢張世帶人と一緒に計算したのである。本世帶五つとあるは五

個大隊の炊事を意味したものであらう。同じ例で本郷元富士町が六十六の世帶で千三百三十一人とあるのは大學病院内の患者が含まれてゐるからである。猶一つといふては恐れ多い事であるが、宮城内には四十の世帶があつて三百六十一人の人口が記されてあるいづれ高貴に仕へまつる女官の方々の召使などの世帶を見たのであらう。勿論高貴の御方は統計以外である。

猶一世帶に於ける人口の割合は全市を平均して四人三分强であるが、これが町に依つて大分相違がある例へば日本橋區の内で堀留町一丁目、田所町、富澤町、新大阪町、小舟町一丁目などは一世帶に十人以上となつてゐる。これ等はいづれも大問屋向の家が多くて一軒の内に數十人の雇人を包容するのがあるからである。

又世帶に比べて人口の最も少いのは水上生活で二人半弱である而かもその水面生活は男三萬〇八百九十七に對する女七千〇八十三は漸く二割に過ぎない。

又男女の比較の著るしい差は前記堀留町一丁目である即ち男七十六人に對する女僅かに七人、新大阪町が男三百三十人に對して女八十一人是等は勿論番頭丁稚の多いせいであらうが京橋區日吉町の女四百二十八に對する男百八十六は何かの現象であらう。





社會百生活　三

斜に見たる洋妾生活

黑柳吉子

寳冠章六等の洋妾を有する神戸市は、兎に角小さな誇りの一とつでは有るまいか。

彼等の生活狀態は、恰度プリズム、レンズの樣で正面から見ては、何等の射影を認めないが、少しく斜に眼を移して見ると、頗る異彩を放つてゐる。

△高く圍まれたる邸宅

山手附近場所柄で、眺望の好い閑雅な所には、屹然塀高く圍まれた宏壯な邸宅がある。門構へは立派なれど、標札の主は甚だ曖昧で、片假名か羅馬字で姓のみを表してゐる。門扉は何時も固く閉され、三大佳節の日すら開放されぬ。家人や商人の出入は右手の小門で便じ、それも一々電鈴を鳴らし、邸内よりの誰何を待つて、初めて入門を許さるゝ、土地に住馴れて、少し眼の肥えた人は、直ぐそれ者の住宅と首肯くが、ポッと出の田舎者には、此世で榮耀榮華を盡してゐる高位高官か、俄分限者の別莊位に見るであらう。

役所に行つて臺帳を調べて見ると、土地も家屋も持主は女名前で、古いのになると、明治元年何月何日何の何左衞門より讓受く、などゝ登錄したのもある。是等は治外法權時代の遺物である。

女尊男卑の國柄だけに、妻帶の外人には、洋妾を圍ふて居るものは尠いが、正妻はあつても本國に殘して居る者か、若しくば未婚者になると、必ず何處かに圍ふて居る。いくら生活程度の低い日本でも、夫婦に子供の二三人もあらうものなら、一家の生計は却々端金

ですまない、が洋妾を抱へる日には、活計の標準を日本人に取るから、比較的チーフにすむ。

△洋妾を抱へる手蔓

洋妾を抱へる手蔓を言ふと、多くは外人の住宅に御出入する、氣心の知れて、氣轉の利く婆さんに、竊と耳打して周旋を頼む、何途お錢になる仕事、婆さん御世辭を振撒いて、言はぬ事まで合點し承知する。それから婆さん口入屋の紺暖簾をくゞり廻はつて、善い玉を尋ね歩く。又一方には、這麼ことを内職に身分の賤しからぬ人から依頼を受けてゐる女もあるから、それ等にも渡しをかける。丁度頃合の玉を見付け出すと、旦那に通ずる。この場合に、玉の撮影せる寫眞を持出したとて、外人却々承知しない、「私一度拜見アリマス」と來る。

奈何せ洋妾にでもならうかと云ふ女、衣裳杯の十分あらう筈がない。そこは婆さん百も合點、貸物屋へ一と走り、自腹を切つて絹物を貸借し、頭の先から足元まで何くれと指揮する。扨て身仕度が出來上ると、お目見得と云ふて外人の住所に同伴する。此時に於ける外人の態度は頗る鄭重なもので、珍客の禮を以て優遇する、お茶お菓子は愚か、葡萄酒、ベルモツトも饗せられ、隔意なく世間話を持ちかけて、却々如才がないが實は所謂試驗待遇で、其瞬間に女の容貌態度性質までを看破する。よし自分の氣に入らなくとも、決して粗末には爲ない。十分の好意を表し、滿足さして歸へらせる。多くの場合婆さんの眼鏡は外れない。「アノ女ヨロシ世話タノミマス」と一度ですむ。けれどもし旦那の御氣に召さずば、幾人でも新らしい女を御目にかける。

愈々あの女と極ると、双方から抱へ入れの條件を持出す。月極めのお金が幾何、同居するか別宅に置くか、杯の話が纒ると、外人は女の仕度金として、少きは五六十圓、多きは三四百圓を婆さんに渡し、妾たるべき女の身仕度をさせる。が實際女の身に着くは其七分で三分は言はずと知れた報酬となつて、婆さんの財嚢を

ふくらすのである。

△どんな女が洋妾となるか

其麼女が洋妾となる？……。三四十年前には、毛唐の妾となることは宛然猛獸にでも、身を委かすかの樣に考へられてゐたから、遊女上りの莫連者か、よくよくの女ならでは應ずるものがなかつた。處が其成行きと結果を見るに、一旦抱へられたものは、終身安樂な生活を得て、決して和妾の如く、何時マズになるか知れない樣な憂がない。もし旦那を喪つても、路頭に迷はないだけの用意が平素から整然と爲てある。萬一死跡相續人がなければ、遺産の全部は當然洋妾のものとなる。であるから、洋妾には存外成功者(？)が多い。今では屋敷奉公と云ふ美名の下に、身分の賤しからぬ敎育も相當にある式部上りのもの迄が、此の好餌を搜してゐる。又外人も、黑人より寧ろ敎育あるヴージンを望むでゐる。

其選擇標準は流石に文明的だ。容貌は美ならずとも愛嬌ありて陰險の相なき者、體格壯健肉締りのむつちりと肥えたる者が第一の要件である。東洋的美人は全然不向だ。元より社交的の人でないから、學問の有無交際振りの如何などには、あまり重きを置かない。去りとて皆無垢黥なし猿の愚蒙では、子供の敎育にも困るから少しは敎育ある女を所望する樣になるし從つて媒介役の婆さんも、此邊には如才なく眼をつける樣になつて來た。

△混血兒が出來ると最う大丈夫

洋妾の住宅は、どれもこれも宏壯な邸宅を控へる譯でない、會社、銀行、商館抔の雇人で、定額の俸給に生活してゐるものは、借家に住はせて一戸を構へさせる。其内御互の氣心も解り馴染んで來ると、外人は今迄の宿所を拂つて、洋妾と同居する、混血兒の一人でも擧げようものなら、最う大丈夫、夫婦氣取りで暮してゐる。女尊國の男子だけに、頗る婦人に甘く、且つ親切である。金力の強みと、情の親切とを以て操縱す

るのであるから、如何な悍婦でも情はあるもの、强みと親切にはほだされて、終に安心立命の城に入る。異人は怖ろしい、嫌らしいと思ふてゐた心は、何時か消滅して、生中お金のない日本人に身を任せて、終身浮ぶ瀬のない苦勞艱難しようよりは、遙か氣樂であると云ふ心が起ると共に、相互の愛情は倍々濃艶になつて外人も何時か母國を忘れ、終に歸化と云ふ最後の手段に出づるものがある。



△私の校友にも二三人はある知名の紳士紳商になると、流石に世間への手前もあるから、住宅と妾宅とは全く別にして居る。條約改正以前は、洋妾の名義で萬金を惜まず閑靜な土地を買入れ、態々開拓までして頗る宏壯な邸宅を建築したものだ。這麼邸宅に圍はるゝ洋妾は、眞逆に婆さんの手はくゝらない。多く

は敎育ある女子が、何かの縁で馴染めて、終に妾となつたのだ。甚だお恥もじ樣ながら私の校友にも二三人この事を行つたものがある。兎に角一校のグラヂユートアーであるから、英語だけはフリーに話すし、音樂園藝の趣味もあるし、且つ努めて婦人社會と交際し、あらゆる婦人團體に關係を有して、內には其牛耳を取つて居るものもある。這麼洋妾になると、却々巾の利いたものだ。彼等の邸宅は暇と金とに飽かして、思ふ存分の設備を爲て居る。侮蔑を招くか知らんが、私は平素交際し、且つ其邸宅に出入する某氏洋妾某が家庭の一般を擧げよう。

△贅を盡せる一家庭

住宅の所在を記すは、德義上出來ないが、山手にあつて此地でも有名な邸だ。二百餘坪もある庭園の芝生に白條のラインを長方形に流した、三ケ所のテニスグラウンドは、雨天でない限り何時も園丁の手にてチツトが張られる、北方の塀に接し、三十餘坪の溫室が南面して設けられてある。溫室には絕えず時ならぬ草花が美香を放つて、心淋しき主人に無限の慰藉を與へてある。

西洋では花言葉と謂ふことがあつて、花の種類に由つて、いろ〳〵の意味を象徵にして居るが、いつも此の溫室で私の目に映りし花と、其意味とを揭げて見ると頗る面白いコントラストがある。

コンスード(正直)　なすずゐせん(安寧)
金蓮花(戀の炎)　かみれ草(勤勞)
水仙花(予は幸福なり)　矢車菊(爛熳)
ラベンダー(緘默)　ヘリオトロップ(永劫の愛)
ベルニク(予の心を汝に捧ぐ)　白百合(尊嚴)
黃ローズ(夫婦の愛情)　菫(貞廉)

殊に一段異樣な感に打たれたのは。迷迭香(汝との會見は予をして蘇生せしむ)ヤブサンザン(汝は予をして幸福ならしむ)抔であつた。

溫室の隣りに、漆喰で固められた小池の上に、吾妻屋形に建てられた金網小屋があつて、和洋兩種の小禽

數十羽放飼してある、池中には鴛鴦の一對も居る。犬小屋がある。日本のそれの樣に、優しい狆はゐない代り、獰惡な面相をしてゐる數多の獵犬が飼はれてゐる。美食のせいでもあらうが却却元氣だ。主人には好く馴れ温順であるが、一見識の人には今にも嚙付き相な姿勢を取る、男氣の少ない邸内に、泥棒の番を兼ねてゐるので、獵期外は閑な洋婆に其飼養を任かせてある。



△驚くばかりの設備

家屋は和洋折衷で、日本造りの方には洋婆の居間、化粧部屋、寢室抔があり、洋風の階上には、應接室、食堂、音樂堂圖書室抔がある、別に離れし一棟には、小間使部屋、女中部屋、コック部屋などもあつて、其設備の行屆きしこと驚くばかりである。

六　日

はれ。○艦（良人の乘艦）乘組將校の上陸として士官連中の御愉快筋とか云ふ物が出てゐる。妾だつて船のりの妻だもの、無暗な嫉妬なんかはしない。しはしないけれど――。午後に今まで一度もいらつした事のない田鶴樣の阿母樣がいらしつた。あんまり不意なので私まご〳〵。二里の道をよくこそと見晴のよいはなれへ通ていたゞいて、さて來意を伺ふとこれが又思がけもないお話で妾は吃驚して仕舞つた。淸一（田鶴子樣の兄樣）の嫁に實家の妹をくれと有仰るのだもの

「マア伯母樣はいそをお見知り下さいまして。」とお訊ねすると。

「いゝへ。實は淸一から昨日手紙がまゐりましてね。彼からあなた。こちら樣へまで御所望を申してくれと私に申て參りました次第で御ざいます。どうかあなた樣の御ちからで、お國許の御兩親樣が御承知下さる樣御骨折は願はれますまいか。」とのだん〳〵の御話。

妾は少も異存はない。ないではない大贊成だ。いづれ旦那樣が歸ていらしつたら御意見を聞いて一度高崎へも行てこやうと思ふ。

お客樣には小鳥料理の御馳走をして、今度は妾の大役にかゝる。どうしようかと思たが思切て云出て見る。

七　日

ゆふべ出ておいた手紙で、今日は乾度久米樣がくる筈。今日も御馳走は小鳥料理にしておきませう。ふくを使に出して部屋の掃除を仕舞たところへもう靴の音。座蒲團を上げて、

「實は昨日御承知の田鶴樣の阿母樣が宅へ見えましてね。」これ丈け云たら久米樣のつよい視線は忽ち妾の口許に落ちてきた。

「妹の事でいらつしたのですがね。いゝ折だと思つて妾は田鶴子樣をね。久米樣のお妹樣にいたゞきたいと申て見ましたの。いゝでせうねえあなた――。」

流石の久米樣も、もぢ〳〵してゐる。暫くして極り惡相に頭へ手を上て、

「どうも恐縮ですな。エヽ結構です。誠にどうも。」

『ぢや御承知下さるのですねえゝよう御座います。』話はこれで片付た。おひるにすると久米樣が骨を咽喉へ立てた。玉子を飲せてとつて上げる。

久米樣は良人の書齋から小說本を見付て來て二階でよみ初めた。妾は下へ下りてお裁縫でもしやうとお座敷の障子をすつかり明放すとまぶしい樣な秋の日が流れてはいる。仕切の垣根ごしに向ふを見てゐると堤に華美な洋傘が見える。

『オヤ田鶴樣だ。いゝ被布を着てゐらつしやる。オヤ妾が見ゑるのかしら。こちを見て笑つてるね。ハチナー。フツと氣がついて、盜足で二階を伺ふと久米樣が緣側に出て、夢中になつて手をふつてゐる。何の信號だらうと可笑しかつた。

『しかとは分りませんが、少佐（良人）は又大學の方へ逆戻りなさるも知れませんよ。』と久米樣が云つ歸つた。

八日

朝起きると夫から手紙が着てゐる。栗林清一君が高崎のいそ樣を望むでゐる。至極の良緣と思ふ故、盡力してくれと書いていらしつた。フランチルのシヤツを仕上る。

高崎へも一度手紙を出す。

九日

くもり、信州へ行た弟からはがきに一通。おとなしく毎日工場へ出て働いて居る樣子だ。マアよかつた。これで四五年辛抱してくれたらと思ふ。信吉はかけがへのない實家の相續人なんだから、何でもかたまつてもらはなければならないのだ。

夕ぐれ。猫を抱いて堤に立つて、くれゆく秋を案山子の數にかぞへてゐると、電報が一通。夫からだ。

『アスゴゴカヘル。』

妾はもう落ついて居られない。猫を臺所へ投り出して部屋に歸てラムプをつけて、

筆をもつた。翌日の支度の手廻しに買物を調べて書付ておく。

おもへば永きひとりねの、枕さびしきねざめの床に夜寒を詫るも今宵かぎり。あすの夜からは戀しい夫の傍で、心づよいまどかなゆめをば結ばうよ。

から、其遣方が極めて華美で豪氣である。時には善からぬ醜聞の種子を播かんでもないが、多くは番人たる人に依て揉消されてゐる。

△洋妾本位の交際界

上流の紳士紳商に抱へらるゝ洋妾の、一般婦人交際場裡に其頭角を露はせしは、實に日清戰役の動機に始まり、日露の役に其旺盛を極めたのである。其以前に於ける彼等が位置は、全然社會より侮蔑せられた日陰者であつたが、戰役當時に於ける彼等は、外人の獎勵と自からの發奮とにより、惜氣なく黄金を抛出し、花花しい活動を爲たので、頗る世の目を惹いた。以來金の入る事業には、先づ彼等を擔ぎ上げる樣にするから、陰然勢力を扶殖し、あらゆる婦人團體に加盟してゐる就中世人に感興を與へたのは、日露の役に獨力恤兵事業に私財を投じ、飽かずに出征兵士を歡送し、後送勇士を慰藉したことである。神戸のお婆さんと云へば、一度神戸の地を通過した軍人に知らんものはなかつた其婆さんは、行賞の當時勳六等寶冠章を頂戴した洋妾の某女史である。

華族と云ふ一階級を缺く神戸市婦人社交界は、官公吏、紳士、紳商の細君及び洋妾を以て組織せられてゐるが、何等の名義を問はず、苟も婦人の集會であつたら、其場裡に奥樣とも見えず、令孃ともつかぬ一種の婦人が綺羅錦繡を身に纏ひ、黄金貴石のまばゆき光線を引いて、如才なく應接するを見るであらう。言はずと知れた洋妾である。斯る集會場裡に出席するは、彼等に取つて非常な快樂である。彼等の扮裝は中流のそれの如く純日本式で、時の流行に後れぬ樣何事も魁するので、他の婦人連は自然彼等を眞似る樣になる。神戸は言はゞ洋妾本位である。

△私の知れる感心な洋妾

甚だ稀有の例ではあるが、私の別懇にしてゐる洋妾に、頗る讀書好きな人がある。相當な敎育も受けた人であるから、却々讀書眼も高いが、母校はクリスト主

義であつたから、主に洋書を讀んでゐたが、或時伊勢物語を見てから急に日本の古文學に趣味をもつて、あらゆる和文學の書籍を買集めだした。鳥渡和歌も作るし、隨筆物など書くし、英詩はなかなか御得意の方である。今では一室を圖書類で飾り立てゝ、優に一小文庫が出來てゐる。世の姫達にありがちのブック、ウオームではない。閑暇さへあれば書見に日を暮してゐる



尤も衣裳競べに浮身を窶したり。一日讀書に耽ける抔は若い時代のこと。子供の二三人も出來やうものなら、斯う這麼暢氣な眞似はできない。其時分には召使も增加るし、乳母や㜻婢を抱へるから、家族も大勢になるし、其上子供の教育にも注意する。慿うなると世間の世話女房と少しも異りはない。

彼等の多くは其の住宅及び土地を、己れの名義に登記してゐる。其他尠からぬ借家の持主となつてゐるものがある。生計は旦那より受くる月給と、借家を有するものは其收入とに依つて維持する。其月給額は家族の多少、旦那の身分に依つて一定

しないが、少きは五六十圓多きは二百圓位のものもある。衣裳や不時の入費は全く別途に出る。

△混血兒のは入る學校

混血兒と云へばひどく世間より輕蔑されてゐるが、其兩親に取つてはそれだけ不憫に且つ可愛いものであるさうな。兒等の敎育は日本の普通敎育制度に從ひ、六歳に至れば小學校へ入學せしめ、傍ら外國語の修業もさせる。が多くは中途に退學して、八ケ年繼續するものは少い。關西學院、乾行義塾は彼等に特種の敎育を與へる機關校である。女子には神戸女學院、松蔭女學校抔がある。

彼等の實家が貧困で、生活上補助を仰ぐ場合には旦那の許諾を得て月々若干金の仕送りをしてゐる。時には弟妹を引取つて、相當の敎育を授ける、遣麼心懸の者になると、活計は非常に節儉を守つてゐる。

△電燈眩ゆき青葉蔭

旦那を慰むるは洋妾の役目である、世の奮闘より疲れて、一夜の慰安を得べく訪れ來れる旦那を出迎へたら、やがて芝生ベンチの夕涼みに、扨は爐邊の團欒に於て、手づからスピリツトを薦め、何くれとなく面白さうな談話を試むる、惡い側の話は措いて善事をのみ耳に入れ、成るべく旦那の趣味に感興を與へるやうに仕向ける、其慰安が新らたに來る明日の活動に向つて更に幾倍の勇氣を振起すのである。

旦那が御越しになる定日は、大概月水金の夕刻一週三度の樣である。別段おしのびと云ふ譯でないから、俥を走らす人もあれば馬車を驅る紳士もある。

間もなく二階の廣間に、電燈や瓦斯が輝き、コック部屋の煙突から盛に黑煙を吐出す。

ナイフとフオークがデッシユーに打當かる音のする間より、ピアノやヴキオリンの音も漏れる。それも十時頃には止むで、後は門前の瓦斯燈が、終夜寂しく輝いてゐる。



娘さんの氣病と奥樣の氣病

狩野病院長　狩野謙吾

素人の方は氣病と云へば苦だ癪だと何んでも氣から來るものゝやうに考へてゐます。アレは子供で心配したからだ、夫で苦勞したからだ、商賣の損が元だと、內部の原因の穴探しばかりして居るから、兎角看護にも治療にもその方ばかりに重きを置いて、往々間違の種となります。又醫者の方では自然自分の專門とする局所丈けに注意を拂ふ結果、これは鼻から來た、子宮から來たなどゝ外部の原因ばかりにコヂ付ける譏が全くないでもない。何れにしても一方に偏したやり方で完全な方とは申されません。

△氣病はどうして起るものか

そこで先づ氣病の起る經過を掻い摘んで云ひますと元來が氣弱な天性の所へ持て來て、どこか身體に故障が起り、ソレニ伴れて苦勞が續き、心配が重なると云ふ風に、俗に云ふ弱り目に祟り目で、內外の原因が表裏兩面から責め立てゝ來る爲めに、茲に始めて據處なく表れるのが百中九十九までであります。これからは雨期にはいると共にボヤ〳〵暑苦しいから、ジト〳〵濕つて黴が生える樣になりますが、假令氣候が暑くとも濕氣が少くてカラッとしてゐるとか、濕氣があつても冷えてゐるとか云ふ風ならば至つて樂な入梅で、黴もそんなに激しくはないと同樣に、人の身體も、心に心配があつても、苦勞があつても、肉體が丈夫だとか、又肉體は弱くとも精神に滿足する所があれば、氣病と云ふ樣なものは先づ起らない、よし起つたにしても、

重くならずに濟むのが當り前であります。それと云ふのは身體に心配とか苦勞とか云ふ潜んでゐる曇りがあると、乾度食事が進まない、美味くない、夜はよく眠られない、睡つても夢ばかり見てゐると云ふ鹽梅で、自然と身體が弱つて來る。ソコで今迄はなかつた身體の故障も、その弱點にツケ込んでやつて來て、セッセとお手傳を始めて何時かツイ氣病を拵へる事になるのです、又それと反對に最初は何の氣苦勞もなく、至つて元氣であつたものが、胃が惡いとか、腸が惡いとか或は子宮が惡いとか云ふと、先づ食べ物が進まなくなり、外に出てもハキハキされないと云ふ處から、何事も物憂くなつて、自然不活潑になり、閉じ込んでばかり居る始末。それが長引くと平生は氣にも留めない僅計りの事が苦になり、一寸した事が悲しくなつて、陽氣に面白く暮せば直によくなる胃病や子宮病も、割合永くなると云ふ風に、お互に手傳つたり手傳はれたりして病氣を漸々重くすると云ふ事もある、斯うなると自分は素より其の道の醫者でさへも身體の故障から來た氣苦勞やら、氣苦勞から來た身體の故障やら、容易く分らなくなります。それ故病氣が元で胃を惡くした患者に、胃病の療治をして却つて惡くなつたのを私の方で氣病の療治を施して忽ち治るなど云ふ例が隨分あります。

△氣病者に見る徴候

氣病と云ふと先づ神經衰弱、ヒステリー、煩悶病などがそれで、その重なる徴候は、神經感應が異常に過敏となるのです。天性が神經質で物事に感じ易く出來て居る婦人に氣病の多いのは云ふまでもありません。處が從來の歷史で見ると日本の婦人は比較的氣病に罹らないばかりか、佛國邊の婦人にみる劇しいヒステリーなどの例は極めて少ないので、誠に幸福な事と思つて居ります、しかし日本の婦人は氣病の少いと云ふのは歐米に比較して餘程少いといふ丈けで、隨分澤山ゐるのです。

△結婚難と婦人の氣病

一體婦人にとつて最も重大な問題は何かといへば、申すまでもなく、それは結婚といふ事である。尤も日本の婦人はそれ相當に結婚を遂げられる事になつて居るから、これは寧ろ普通の事件であつて、それ程重大な問題と考へられて居らぬ傾きがありますが、歐米では經濟其他の事情から餘程困難になつて居る。困難になつて居る丈け西洋では婦人の結婚といふ事が、特別に悦ばしい



事また淋しい事になつて居るのです。從つて獨身の婦人に氣の毒なといふ分子の含まれて居る事は事實で、その獨身婦人がそれ〳〵職業を求めて、生存競爭の巷に立ち働くといふ事は、婦人の氣病を多からしむる第一の原因であります追々日本でも結婚が難澁になつて來て、現在相應の年輩で結婚し兼ねて居る婦人が多いやうでありますが、やがては歐米の樣に五十位でまだお孃さんでゐると云ふ人が澤山出來はせぬかと思はれ

ますが、さうなると益々氣病が增えるでせう。統計の上からお話することは出來ないけれども日本の婦人に年々ヒステリーや神經衰弱の患者が增加して來ることは事實であります。

△ヒステリーと神經衰弱

このヒステリーと神經衰弱といふ病氣は、昔は同じ病氣として區別してなかつたものです、尤も兩方とも其型が甚だ似寄つて居るので一寸わからないけれどもよく研究して見ると明かに其區別があるのであります。そして世間では神經衰弱は男子の病氣で、ヒステリーは婦人の病氣だといふ風に思つて居るやうであるけれども、これは男子にも女子にも共通の病氣で、ただ神經衰弱が男子に多く、ヒステリーが婦人の方に多いといふ丈けであります。

△私が見た不思議な女

一體男女の性は如何なる處で區別するかと云ふに、肉體の上からはもとより立派に區別は立つけれども、精神上から之れを區別することは甚だ難しい事であるのみならず、實際其區別は確然として居らないものかも知れません、或時私の許に十九歲程の男子が診察を求めて來ました、其男子といふのは、中學の四年生で成績が最もよく、級の總代をもつとめる位で、ことに活潑でした、其の男が青春期に及んで、始めて身體の異狀に氣が着いて田舍から遙々來たのでありました。處が私は體格を一見して直ちにそれを普通の男子でないと知つたのです。凡ての擧動が男子以上でありましたから、學校がそれを男子として取り扱つて居つたのは決して無理はない。當人も亦男子たることに於いていさゝか疑をもつて居らなかつたのでありますが、よく診察して見ると表面は男子然と見えても其實立派に女性であつたのです。それは世間でよくいふ女男といふやうなものではなく、外面男性の如くで實際は女性なのでありました、其の兩親も男性と心得て居つたので、子供の時分から男の子と遊び、男子の敎育を受

けて中學校に至つたのでありますが。つまり自分は男子であると云ふ自然の暗示が彼れをして立派に男子的能力の發達をなさしめたのであります。

△精神上には男女の區別は認められず

斯ういふ例は今日に至るまで二つ程ありましたが、之れを以て見ると精神上男女の區別は明かでない。男女の區別は單に自然の暗示といふやうな事によつて分るのではなからうかといふ事がいへやうと思ふのでありますさすれば、婦人でも全然習慣を改め覺悟を變へて



かゝるに於いては、隨分男子同等の仕事が出來やうといふことになりますが、それは兎も角、日本婦人が歐米婦人の如く活潑ならむとする位の事は、もとより心の持方一つで容易な事なのであります。

△食物に依つて救はるべき日本婦人の缺點

然しながら日本の婦人をして活潑ならしめるには第一食物を改良しなければなりません、肉食に乏しく、食量少く、且つ運動の不足といふ事が相互に關係して、日本の婦人に不活潑優柔不斷といふやうな

弱點をつくるのであります。動物でも虎や鷹の如く肉食をするものは烈しい氣象をもつて居るが、之に反して兎とか羊の如きものは甚だ温順しいのであります。之れによつて見るも食物といふものが性質の上に、如何に影響を及ぼすものであるかといふ事がわかります歐米人の顏色がよくて、元氣が盛んであるのは全く肉食のお蔭であります。新しい肉に含まれて居る處の肉汁は神經細胞を興奮せしめる効力の大なるもので、肉汁を用ゐぬ時は元氣が衰へるといふ事は醫學上の試驗に依て證明する事ができるのであります。

△文運の進歩に伴ふ婦人の氣病

話は少し横道に入りましたが、結婚問題に次いで婦人の氣病を多くするものは、學問であります。一體からいへば學問を修めれば攝生にも注意するから、從つて氣病も少くなる譯であります、けれど事實は之れに反對で、文明の進歩に伴ふて、此種の病氣が多くなつて居ります。亞米利加などでも、野蠻時代にはなかつた一種の病氣が、南北戰爭後流行し初めた、それは初め亞米利加病と名づけて居りしが、だん／＼研究して見ると、地方病ではないので、ノエラステニーといふ名をつくるに至つたやうな事がある、佛蘭西の如きはヒステリーが名物といはれる程でありますが、これも英佛戰爭前はあまりなかつたもので、戰爭後文運の進歩につれて、急かに増加したものであります。日本の今日に於て婦人のヒステリー、神經衰弱にかゝるものの多いのは、この數年以來盛んになつた女子教育の當然なる産物といつてよいのであります。何故學問をする人にこの病氣が多いかといふに、それは腦を急激につかふといふ事が原因なので、競爭といふ教育法によつて、取り扱はれて居る學生には到底免かれないことであります。尤も單獨に家庭にあつて勉强するのならば、同じ學問をしてもさまで腦を損ふ事はありません要するに腦細胞の疲勞といふ事が神經衰弱を起す原因であるから、教育に從事する人は最もこゝに注意して、急激の勉强や、競爭的の學問を避けしむることが必要

であります。その他虚榮心より煩悶を生じて、精神を疲らす事も、婦人の氣病を起す原因であり、ほかにも種々ありますが、要するに結婚問題から起る諸種の事情と精神の違ひ方が多くなつて來たといふ事が婦人の氣病を起す主なる原因であります。



△既婚婦人の氣病の原因

以上述べました處は、普通一般の婦人に就いてゞありますが、然らば既婚者の氣病は何によつて起るかと申しますにそれは男子の不攝生といふ事が最大の原因をなして居るのであります。家庭を持つた婦人に起る氣病は、夫が麻病梅毒を持込むのに原因するもの、實に百中七十といふ割合になつて居る位で、普通世間の人の考へて居るが如き家庭の不和といふやうな事ではありません、このやうな事はもとより醫者が妄りに言外すべき事ではないし。社會でもまた秘密にして置きますから、世人はそれほどに思つて居りませんけれども、婦人の氣病の大部分が

男子に原因して居る事は事實です。その婦人に子宮内膜炎を患ふものゝ多いのも男子の痳病が原因となるのであります。健康なる婦人が結婚するや、忽ちにして婦人病にかゝり、ヒステリーを起して、甚しきは癲狂院に入り、自殺をするまでに至るが如き、其罪は多く男子にあるのであるから、實をいふと婦人方は鼓を鳴らして、男子を攻撃しなければならないのであります

△恐るべきは男子の酒癖

さて氣病の原因として前には男子の持込む花柳病を述べましたが、より以上に恐るべきもので、殆んど總ての原因即ち原因の原因ともみるべきものは男の酒飲みであります。世間では往々姑嫁の折合が惡いとか、或は生活の困難であるとか、色々家庭の不調和となる原因を數へますが一番の原因となるものは男の癖であります。癖といつても種々ありますが、まづ男子の酒癖が婦人の氣病の原因をなす事は餘程大きいものであります。酒飲みの家庭の亂れて來るのは當然でありますから、夫婦家族の間も圓滿にゆくべき筈がない。アルコール中毒も發狂でもするやうになると、隨分恐ろしいものだといふ事が何人にもわかるのでありますが毎日々々三合四合の酒を相手にする普通の慢性中毒ならば、人の目に立たない丈けそれ丈け却つて害毒を及ぼすことが大きいのであります、嫉妬の如きはアルコール中毒のつきものでありますが、また妻子に對する愛情の薄くなるといふやうな事も酒に原因するものであります。社會上からいへば、酒、梅毒、痳病は大大的惡魔であつて、この三つを取り退けたならば、家庭に風波の起ることは絶えてなからうと思はれる程でありますが、而かも梅毒痳病といふやうな病氣に侵されるのは、そも〳〵酒を飲むより初まることが多いのであります。殊に恐るべきは、アルコール中毒にかゝつた人の子孫には、必ず親の不健全分子が傳はるのは事實でありますから、良子孫を得んとするには、須らく酒を嚴禁しなければなりません。

とにかく婦人が結婚するに當り、まづ其夫なるべき人の酒を飲むや否やを調べることは、最も必要な事でありますが、もし不幸にして酒のみの男子に嫁した婦人は何うかして夫の酒を止めさせる工夫をしなければなりませぬ。



兄嫁の書いた小姑の日記

くれがし

△

もと〳〵接近すればよい事のある筈のない女同士まして昔からお定りの嫁小姑の中、姑様となると老ひては子に從へ、手足の動かぬやうにもならば萬事は世話にならねばならぬ嫁と思召して下さるし、又私にしても姑樣から受けるお小言は左程にも思はねども、只もう自分の兄樣をぬすまれたやうに思ひつめた妹の、箸のあげおろしのいひ草、始め一月二月はあなたこなたと、たとへ表面斗りも美くしく人目にもどちらが嫁やら娘やらと褒れたものながら、根が氣の小さき女心のつい長い年月には、面白い事斗りはなく、お互によいことは棚にあげ、わるい事といへば針小棒大の稍惡感情の生じかゝりて、一時別居せし姑樣、小姑の、今度はしなくも舅樣のおなくなられて餘に同居する事となつた、何だか心配で〳〵

「どう遊ばして、いつもの快活に似ず沈み切つてゐらつしやる。」

と心易き人々のあやしまるゝ位、姑樣は時々ギシ〳〵とひどいこと仰有るけれども、私さへ誠意を以てむかへ、善き方に解してさへ行けばまづは仕へよきお姑樣なれど、小姑はいづこも同じ末子の我まゝ一つぱい、よく以前泣くにも泣かれぬ嫁の身の便所の中で心ゆくまで泣いた事など思ひ出して、食事も二三日は味がないやうだ。

またこんな事してといはれまいとて、朝から流し下

や座敷のお掃除に目のまふ程のせはしさ、お料理も仕出し屋からとつてはふけいざいとお叱りを受けるに決まつて居れば、お氣に入るや知らねど手料理の二品三品も作り置く、下女も使ては子供もなきにと何かに面倒なれば、前以て暇を出して置いた、やがてガラ〳〵車のひゞきに今更のやうに胸とゞろかせながら、急ぎお玄關に迎ふ、例によりてにこりともなさらぬお姑樣ツンと反身になつてすました小姑、私は何と申てよいやら年甲斐もなく恐しいやうで、御あいさつの言葉さへ出ぬ。

さすがに其日は久々ぶりのまどゐに、何のお小言もなく至つて無事に終り、ホット胸なで下す、只御飯の出來少々わるかつたゝめお二人顏見合せ眉ひそめて居られた。

△

松村さんの奥樣はほんとうの奥樣だと褒れたは昨日まで、今日は朝から御飯ごしらへやらお汁の仕度、昨日のやうな御飯が出來てはならぬと心配一ト通りでない、便所のお掃除は生れて始めてだ、里に居た頃は雑巾はきたないとて持つた事もなかつたが、學校で組長であつた某さん大家の姫君の御身を以て、當番の時眞先に雑巾がけあそばしたのに恥しくなり、自分の部屋だけふくやうに成つたとて、母樣からほめられた位、どうして私はかうもきたながりなのだらう、簞笥や長持の下のごみもうたまつたらう〳〵と氣になつてたまらぬ、今朝は死んだ氣になつて鼻をおさへ、呼吸をつまへてやつて終ふと、小姑は入いつて見て。

「まだすみにごみがありますよ」

といふ食後お洗濯して置いたら小姑が

「こんな事干してある、杉田のお姑樣だつたらそれこそ大變なんだけれども」

ハット思つて行つて見ると成程昔から縁起のわるいといふ北向きに干さつて居た、私の不注意であつた。

昨日のおみやげのお餡もじお皿にもりて出すと、小姑がクス〳〵笑ひながら。

お醬油もそへずに出すといふ事はない。

私は只もう口惜しくて涙がこぼれた私の國ではしないことゝて今まで知らなかつた風俗習慣のちがふ他國に嫁入ると人一倍の苦勢をしなければならぬ。



夜はさすがに姑樣は早くお休みになるけれども、小姑は九時頃までうたゝねして、私の寢やうと思ふ時分からお裁縫、私はねむくて〳〵十時過ぎまでのおつき合ひのつらさ、そのかはり朝は風引いたとて八時頃夫の御出勤後起きて來て、ヤレお汁のつめたいことのからいことのとサンザンの小言、それがすむと火鉢のそばで雜誌をよむ、たま〳〵姑樣がチト

お手傳ひなさいと仰有ると
「いやだわ肩がこるんだもの」
といふ三度の食事夫よりもむつかしく姑様の
「東京人はこんなもの斗りたべて居られぬと仰有ると
小姑が
「ほんとうだわ」
と相槌打つ一日お肴がなくとも
「今日はお肴なし………
といはれる此前私の嫁入り當時には、無論姑様のお會計、其時分にはそんな事もいはなかつたやうだ、姑様は二タ言目には私はお姑様にかうもしたアヽもしたと仰有るけれども、その舅様の勅任時代の盛な時のこと、今は夫は稍う〳〵賣出しの、中々ぬけ目なく、經ざいに心がけねばやりきれぬ、然しこれは俗にいふ氣のひがみといふもの、私も故あつて義兄さんの家に厄介になる事半年、小人數で自分の家に居た時よりもズツト御馳走があつたのに、何だかコウやせる様な氣がして、ビスケツトやチヨコレートなど絶えず机の引出しに貯へ置いては、人しれず噛つた、ア、其時姉は肉身の兄サンに氣がねして、お肴を下にお野菜を上にしておかずを盛つて下さるので、私は情なくもあり、氣の毒にもあり、早々辭して他人の家に下宿した事もある、思へば無理もない今までは何一つ間食遊ばした事のないお姑様さへ、お箸置くと何か上りたい御様子、まして小姑をや、さりとてパンのためとはいひながら終日面白からぬことをも忍んで得らるゝ夫の俸給の不足は訴へられぬ、此上は會計その他一さいのことを姑様にゆづる。

△

翌日からは手のひら返したやうに、炭薪の儉約から鹽砂糖まで無駄にならぬやうとて昨日までは。われるやうであつた炬燵も火鉢もたどんとなり、火の氣なくては淋しいとかゝつて炭ついで居た小姑もおとなしいこと、お汁にまでお砂糖いれ、一體あまり口の私にも我慢の出來なかつたのが、今日からはアツサリとなり過

ぎる位、それでも平氣で召し上る、人間は勝手なものである、私は重荷を下したやうでうれしい、お留守中に私がキントンをこしらへて置いたら姑様は。

『私は田舎そだちこんな甘いものでは御飯がたべられぬ』

と鹽引を焼かせて召しあがる、只氣の毒なのは夫である、私は會計のゆるす限りは夫に御馳走をと心がけて居た、一番困るのは餘所から御土産に、御菓子など頂くと皆で召し上りながら二三日たつてから。

『モウなくなつて居る、私たちは少し斗りしかたべないのに』

といつも小姑がお定まりである

誠に金錢と食物、これ程感情を害するものはない、これによりて姑様のなされかたとも覺えぬとつく〴〵思つたことも幾度かた、、、ま〳〵腹に据ゑかねしこともつもり〳〵ての鬱憤を、親兄弟に告げれば心配かけるやうなもの、夫にいへばそれこそ家庭の平和をやぶらなければならぬ、さすれば夫は終日の疲勞をどうして忘られるであらう、つまりは何事も小さき胸にた〻むべき宿世ある嫁の身、只親兄弟ある夫は温和である、差引同じかもしれぬ。

▲子供は正直者

母親が靜ちやんに寢衣を着せ乍ら、「靜ちやんや、お前おば様の入らしつた時丈でもおとなであんなに話ししなきやよかつたのに」。「あたい何も云やしないわ、たけどたつた一つ」。「たつた一つて何？」。「をばさんが靜ちやん、まつとお菓子をあげましようつて仰しやつた時、靜ちやんもう澤山と云つたの、母様さうお云ひつて敎へたでせう」。

▲母ちやんの足

父が外科醫に診て貰つたら一週間に三度も足の療治をして、三度共足を切つたと云ふ事を母に話してゐるのを側で梅ちやんは さも面白相に聞いて居たが、四五日してお母さんが梅ちやんと藏で探がし物をして居ると、つゞらの中から寫眞が一枚出て來た。八ツ位の女の子で、片方の足が着物の裾にかくれて見えない。梅ちやん「母ちやんこれ 誰の寫眞？」。「これは母ちやんの小さい時なの、お前よか未だ小さかつたでせうよ」。「ぢや母ちやん子供の時からお父様知つてたの」。梅ちやんは父は一本餘計足を切つたから母のを一本貰つたものと思つたので。

机の塵

夏草女



貴女のお目からも氣樂に見えまして？　成程醫者の書生、藥劑師と申しますと氣樂さうに聞えますわねえけれど末子樣、私の樣な不心得な者はつい小言の一つも云ひたくなるんですよ、氣が多い落付かぬと皆樣から云はれて居ますのも、よく承知して居ますが私は實に情ないと思ひます、二年か三年の間に走馬燈の樣に身體が變つて行きますの初め銀行の簿記係だつたでせう、それから書かきの書生、小學校の先生樣、今度は醫者の藥盛り、皆辛事情が潜んで居るんですよ。醫は道によつて賢し、私等の柄に無い事を致しますと失敗のもとです、「女は使ひ道が多いから便利だ、」末子樣何と云ふ人を無視した言葉でせう犬か猫の樣に思はれて居ますのねえ私も書生に成るより女中に成れば好かつたと思ひますよ世は春だと浮れて下げたお重も重さうに風呂敷の四隅の角から破れる程お辨持つて一宮樣の櫻見とシャレル人を、ロードフォルムやヨヂムの高い香りに胸をむかつかせて硝子窓から見やる時の心憎さ泣きたい時も有りますよ、甘い菜種の香りを聞く代りに藥棚をあけて交つかへしますの。

今日はいそがしい日で何時もに無い藥取りが引切なしに來ます、使が待つて居るので、大急ぎに散藥と水藥と六人分渡してホッと一息つきますと母屋の方からお手が鳴るので俥どん(車夫)は居ないのかと行つて見ますと十四に成るお孃さんが教育品展覽會に出品の裰形を見て與れと仰言るんでせう、水使ばかり致すものですから手も足も松の木の樣に成つてガサ〳〵して居ますのに羽二重などがどうして持たれませう、怪しい事に綿ふくまして渡しますとそれで滿足なさるんです

これを中村順子と名を書いて出品なさるんですの、けれど私の縫つたものだつたらお氣に入るだけが私の德でせう。先生は御病身ですから休み續けです、それにャの字ですからねえ病家も餘りありませんのそして貧しい家だと大病人が有りましても、見舞つてやる事をなさいませんから不評判ですた〳〵行きなさると坐らないで病人の枕もとに中腰に成つて居られますの、臺所も隨分苦しいんですよ、自用車の一臺も置いて有ますが其のカヂ棒は三月程前から折れたまゝ今になるまで其通



りです或る死人の有ました家の人から面あてに『家の病人は中村先生の見そこないです』と三度も聞いた事が有りましたそれですから止むなく赤い樣な麥の御飯も頂かねば成りませんの、白い消毒服のまゝ前の小川で麥洗ふ時の情ない事！通る人が氣のせいか皆バケツの中を覗いて通るんですもの、大家内ですからね麥でも七八合炊いても足らない位ですよ、すると私の知つた事の樣に若奥樣からお小言を出ますの若奥樣つて、實に氣の強い方あれでお子達が五人もお有りなさるんですからね

好いお家のお嬢樣のやうにも無い氣の汚い方ですよ嘘の樣な話ですが摘み食ひのお上手な事は……、つい藥局の方に手が引けますと奥樣に臺所に來て頂いてお漬物の一つも出して頂きませう白い優しいお手がお口の所にチヨイ〳〵行きます所の早い事、別にお漬物の加減まで見て頂かなくとも……。老人の奥樣がお氣をつけて下さるので辛い半分の辛棒も出來ますのお子達の便所通いの世話まで私の手一つですから目のまはる程いそがしいです、奥樣は炬燵の上で蚊の鳴く樣な聲で『吉田御殿』を讀んで居られます、それに私は三度の食事も落付いて頂いた事は有ません皆樣がお了い口に成ますと私が坐るんでせうしますと出して有るお煮物なぞ皆棚にお終いになりますお菜の漬けたのと差向ひ、お櫃の中は底が出て申譯だけ殘つて居るんですお醬油さへ棚の中に入つて居るんですもの、牛では有りますまいしモサ〳〵したお葉ばかり頂けるものですか、ついつい一口も頂かないでプイと立つて終ふ事は度々です氣の惡さうな顏して見て居られる方が有りますが一口でも殘れば幸ひだと思つて居られるんでせう、玄關の方で女の聲がしますから出て見ますと柳川橋の吳服屋の女中さんが全快祝のお禮を持つて來たらしいんですの口上を聞いて奥樣の前に置て使をかへして來て見ますと早開いて居られます水引かけた包の端から拾圓札が顏出して大きな箱が二重に積まれて中から水の滴る樣な菓子が急がしく奥樣の御用に立つて居るのですよ、先生はまだ御存じも無いのに何が到來いたしましても芳衞さん一つと云つて下すつた事は汚い話ですが一度も有りませんでした、お仕事をなさる針差の引出には鹽ゑんどうがガラ〳〵鳴つて白い前齒に小豆の皮がついて居ると云ふ有樣ですからお話になる事ぢやありませんよ、これがお醫者樣の若奥樣ですからねえ、又藥取りが參りますそれ〳〵渡して終つてランプの掃除をしまつて部屋〳〵に持つて參りまして直ぐ仕事にかゝります大抵は皆樣のお召物で私は前掛の綻も縫ふ事は出來ませんの吹き拂ひの寒い茶の間の暗い所で針を運ばすんですから出來さうな道理が有ません

わね、それを一時手を置きますと二番目の嬢様に琴を教へますのこの間が私の樂の時ですね、只今はみだれですお世帯は苦しくても音の洩れるを聞く人の心はねえ！知つて居るものは可笑しいですけれど、末子様貴女は、ますく\お手のお色が白くおなりなさるでせう私は赤く腫れて人參の樣に成つて終ひましたよ大き過ぎましたお琴の爪は今は帽子を着た樣に見苦しい指の頭にのつて居ます、私は一人の母さへ有りませんでしたら苦しい義理の繩に縛られて居ないでも樂器をかついで日頃念じて居ます諸國を廻つて參りますのにねえ此の頃は好きな女學世界覗く間も有りません三四日程後にねえ又一人代診の方が見えました、私は何だかお氣の毒の樣な氣が致しますの何も知らないで言葉にだまされて居らしやるんですがねえ此の方は大阪府立病院に居られます〇〇醫學博士樣のお仕込みで昨年の文部省開業試驗にお出來なすつたのださうですが都合に依つて



今暫く代診で暮すと仰言つてますよ、まだ〳〵お若い方で二十四五でせう色がお白過ぎて變ですが、中々先生はお側にも寄れないらしいんですの藥局で一寸醫術のお話が出ましたのに先生はお返事ばかり私は側でハラ〳〵致しました好い先生にはつきたいものです、お名前は若月さんと申ますの、來しつた二日目に奥様が何だか恐しい事を申されましたとやらで驚いて居られましたが又長らくは居らつしやる事はむつかしいでせうよ、貴嬢もお希望は矢張軍人樣かお醫者樣ですの、丁度お姿からお腕から好一對、何で御座いましたらお話致しますよホヽヽヽ、どうしてでせう代診樣と申ますと皆綺麗なお方ばかりですね、女でも私は加賀の千代の樣だと母など申ますのに半分でも分けて頂いたら……昔は白粉つけた事もありましたのに只今はお釜の墨もついたまゝ拭へませんよそして一日眞黒く成つて居ます、もう若月さんとはお心安う成つて終いまして奥樣の居眠の間には藥局で白鳥さんや風葉さん八千代さんの話なんか聞かして頂いてますの、俳句なんかお上手ですよ小波さんと子規さんがお好きですつて、此の間だけ私達の世界ですが見つかつたら大變です切れかかつた綱の上に寢て居る樣ですわ何故男と話をすると人は妙な目で見るんでせう、自分の心の汚れを人に知らすと悲ことですわねえ、けれど男つてものはシッカリしたものですねえ若月さんも財産家の令息ださうですが毛程もその振りは見えませんよ禮儀の正しい男らしい方ですから私大好き、妙に取つて下すつては困りますよ昨日もお頭りのフケ取つて差上ましたらお禮だと云つて細打ちの羽織のクサリ紐を頂きましたの、貴金ですよ。

田のあせに蛙生るゝ月夜かな　子山生

これは若月さんのホワイトシャツのポケットから出ましたの若々しい肌の香ひがする樣ですねえ、今日と明日と明後日とお暇を頂きましてね心安い家に休みに參つて居ますの急に身體が大きく成つた樣な氣が致します藩園の外に手足を出してこれだけ大きく成つたのかと驚いたと云ふ話が有りますね、丁度その樣ですよ、

展覧會に出品して見る考へで先程から久々に繪の具を溶いて見ましたが糊粉の塗り方さへ忘れて了いました末子様、貴女は御幸福で御座いますよ人は上を見れば限りが有りませんお望みの學校も卒業遊ばしお好きなピアノの御練習にお忙がしいですもの私の身を考へて見て下さいましな底深く終いました鹽瀬の帯はいつ結ばれませう髪を上げる間も氣象ね致しますのでね床の上に坐つたまゝ太い指先でグイ／＼と押し込んで置きますの、何て女と申ますものは氣の小さい汚い根性の者で御座いませう人並に仕事でも出來れば何を申されましても致方は有りませんけれど袖口の四ツ縫も出來ないのに大きな言云はれますとつい鼻先で返事も出たく成りますよ、「中村の奥様は嫁入り當時は自分程賢いものは無い様な顔だつたが此の頃は頭が下がりますかへ」人はかう云ひますよ、此の間洗濯ものに雇はれて來て居た出入の婆やが、「何處でもおやつが出るのに此家ばかりは何も出ない」と云つて煞いて居ました下女下男、賤しい者程人の事を申たいものです、それを家の奥様は好い方だと云はれる様に成りますのはあれをせよ、これを仕て置けと火鉢の側から



顔で云ひつける樣な工合には參りませんよ、末子樣御存じでも御座いませうが人を使ひますのは綿で金を縊ますのよりもむづかしいもので御座いますつてねえ。貴女お琴何？　那須野すみまして？　お羨ましいわねえ私御覽なさいよ、もう一等好きな經政、よく貴女のお室で彈いて、むら竹の蔭からお菓子屋の小僧が覗きましたのでベッカコーしてやりましたのね忘れる事の出來ない曲ですのに歌の句さへ忘れて亂れた束髮の頭を左右に振つても考へが出ませんの、先生のお所も忘れて居る樣な私ですもの有りがちの事かも知れませんわ貴女の小櫻はまだ其の儘？　私の秀鄉は表の繪も消えて終いました、「男勝りの藝人の樣に琵琶持つて、義太夫の出來そくない見るやうな聲だして、去る程になんて頭痛がする」若奥樣のお聲ですよ田舍の人はねえ三味線や月琴程好い樂器は無いと思つて居られます方ばかりですから駄目ですわ、けれど末子樣私から思ひますの、田舍に外國人が來ますと後から二三十人もついて歩るく樣なものですもの無理も無いですわねえ此の頃私〇〇に出て居られます方に追分を敎へて頂いて居ます北海道の人でしてねえ、石狩の追分だつてそれは〳〵好い節で月の夜など身がしまつて淚が出る樣です浮世はなれた仙人のやうなお爺さんで胸まで埀れた白髯はキラ〳〵と銅の樣な頭を振つて子供の樣な口元から走る美しい聲、年は寄つても聲には年が寄らないものでせうか、若い女でも暗夜に蛙を潰した樣な聲を出す者もありますのに、ホヽ嫌な事ばかり申上ましてお氣お惡くなすつたでせう、私どらんなさいよ此の頃は(昨日からですが)若月さんの面白いお話が聞けないので物足らぬ氣がしますのまた一日ありますけれどもう歸らうかと思つて居ます、が盜人猫を追ふ樣な目でヂロ〳〵見られるのも辛いですし、心は二つ身は一つホヽヽヽ矢張歸りますよ私なせこの樣な氣に成りましたのでせう、矢張あの方の罪ですねえ末子樣でも吉村さんに對しては同じお心でせう、まあ─　失禮を……。

小言申しましても、まだ氣らくでせう、來年は二十になりますのホヽヽ。



女の美的要素

玉井紅葩

靈妙靈美なる自然が此の地上にチラリと影を止めたるものに花と女がある、花と女は確かに此の地上を飾る唯一の寶である、昔人類の始祖が住ひしたといふエデンの園、其樂園を飾るに若し此の花か無かりせば如何に彼の樂園は其美くしさを失つたであらう!! 若し此の世に花なき里があつたとしたならば、其里は如何に淋しい事であらう!! 豈獨り花のみならんや、若し今此の世から女を取り除いたと假定したならば如何に此世は味きなき、趣なき、樂しみなき、價なきものとなるであらう!!彼の優美なる形態と、艶麗なる色彩とに輝いて居るものは、花である然るにそれに熱烈なる血潮を注ぎ入れたものは女である、花は不解語の美態であるが、女は解語の美體である、與謝野晶子の歌に「やわ肌の熱き血潮になれもせでさびしからずや道を說く君」といふがある、之れは餘り男子を讃昇した歌であるが併し一面の眞理はある又誰かゞ「此の淋しい人の世に生くるには、美しい酒、美しい花美しい女でもなくては…

…と言つたが、之れは餘に所謂自然主義に近いが、併し一面本能の聲である、女はかく迄我々に美感を與へ、かく迄我々に愛せらるべきものとすれば、其美感を與ふべき要素がなければならぬ、又其愛せらるべき理由がなければならぬ、其要素其理由とは果して如何なるものであるか。

◎優美の本體

少くも彼女は我々をして、美くしと感ぜしめ又我々をして愛せしむる以上は、彼女自身は美であらねばならぬ、然らば彼女の美は如何なる種類の美に屬するか。

凡そ物の量と力とに於て(或は形と作用とに於て)其量(或は形)其力(或は作用)が大に過ぎるか小に失するかすれば、それは我々に不快の感を與へる、不快の感を與ふるものは醜きものと言はねばならぬ、然るに尋常ならざるものが、反つて尋常普通なるものよりも大なる美を現す事がある、之れ我々の有する美感の作用に依るものである。

偉大なるものは、先づ我々に恐怖の念を起させるが、これやがて壯美の感となる、又弱少なるものは、先づ我々に愛憐の念を起させるが、これやがて優美の感となる、彼女の我々に與ふる美感は即ち此の優美の感である。

抑も男子より女子を見れば、女子は一般に弱者と言はねばならぬ、弱者は即ち量に於て力に於て小なるものである、之れと同じ様に女子より男子を見れば一般に弱者と言はねばならぬ、强者は即ち量に於て力に於

て大なるものである、斯の如く考へて見たならば、醜き者にして我々に嫌はしき感を與ふべき程のものは唯に憐れむべきのみではなく、又同時に愛すべきものでなければならぬ、彼女は我々に憐れましむべく愛せしむべき要素を持つて居る、即ち形式の美と内容の美とそれである。

◎形式の美

彼女が形式の美に適合せんが爲めには、言ふまでもなく、彼女の肉體の美と、裝飾の美と、そして表情の美とを兼備せればならぬ、先づ彼女が肉體の美に就いて窺はんか、彼女の骨格は概して繊弱である、そして其からだは所謂「やわ肌」である、男子の骨格逞ましく筋肉緊張して居るに反して、彼女の筋肉は「ゆるん」で居る、軟らかである、之れやがて櫛風沐雨に堪えざる事を示すものである、羅綺にだも堪えざると言はしむるものである、そして其皮膚は、色甚だ白く、其キメ甚だ濃やかでそして其濃やかな表面は滑かで且つ其肉の太り加減は實に曲線の美を極めて居る、從つて斯の如く繊弱なる身體の運命は、比較的靜かならざるを得ない、しとやかならざるを得ない、これ強者たる男子をして大いに憧れしむる一の美點である。

裝飾は斯の如き美體を、一層味あり趣あらしむる爲めの脚色である、根本の筋書があつても、之れを脚色しなければ、眞の美は發揮しない、珠玉を雲霧に包んだのも趣きはあるが、併しこれは變則である、やはり珠玉は錦に包むのが當然である、是に於て、斯の如き美體を斯の如く脚色して、そして彼女に、萩の花か、あらず、百合の花か、あらず、色の如くにして色にあらず、響の如くして響にあらざる、天の聲えか地の私言かといふ様な、神秘的の表情を表はさしめよ、然らば是に於て彼女の形式美は活躍するだらう!! 一顰して人を殺し、一笑して國を亡ぼすもの美は、是に於て少し凄みを帶びて來る。

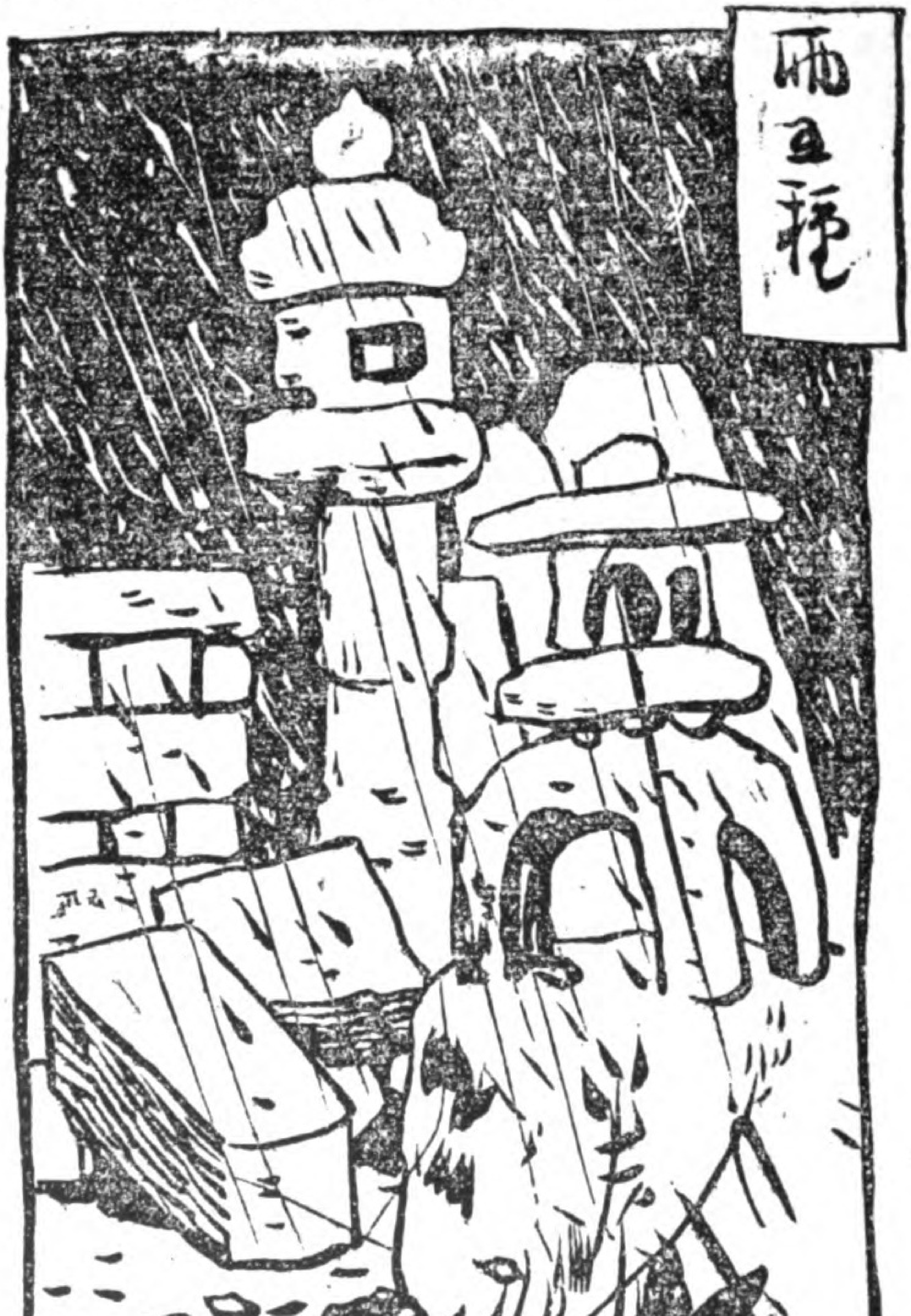
要するに彼女は一面に於て大なる美の波瀾である、けれども此の波瀾が、全體に於て整然たる統一を保たれればならぬ、其統一に缺くる處があれば、どこかに於て醜を感ぜしめる、昔は巴、板額の如き男を取つて食ふ様な女もあり、今日も猶ありや無しや、余の知る處ではないが、概して彼女は一般に自然に、此等の要件には適合して居る、どんな醜婦にでも必らず一つや二つの揚り所はある、即ち「一抱ひあれど柳は柳かな」である、併し蛾眉豐頰、長き黑髮、和かなる肌に至つては、何の異存も無いが、時代に依りては大いに其標準が易る、金屋の内に粧を閉ぢ、翠障の下に媚を深くして羅綺にだも堪えざると言つた様な、頗る濃艶なる藤原式もある、錦繡に包みたる名刀の如く、表面優美にして内、凛然たる鎌倉式もあり、風貌椿の花の如く、意氣竹を破つた様な江戸式もある、併しこれは形式の美にも關係して居るが、之れをして眞に値のあるものたらしむるは、彼女が内容の美に俟たればならぬ。

◎内容の美

彼女は其形式に於て、人に美感を再起せしめる程の要素を具備したと

するも、之れのみでは其形式の役者が活躍しない、即ち表情の美が活きない之れを活かすには、やはり内容の美が伴はればならぬ。

內容の美とは精神の美である、心の美である、心の美ならんが爲めには、柔順と愛情と純潔との三要素に富まればならぬ、柔順とは、喜んで強者、保護者の意志に自己の意志を服從するの性質である、愛情とは、光りである溫度である、純潔とは一言すれば、心の中の總べてが、清淨潔白なる事である、秘密が無い事である、勿論柔順と雖、愛情と雖、純潔と雖、外に對して普偏的に働くべきものと然らざるものとの區別はある、けれども其全部は、特に相許すべき一定の人がある、男子は即ち此の全部を獨占すべき目的あるを以て自己が強者たり保護者たるの位置よりして、彼女を愛する情が一層深きを加ふるものである、右向け左向けと何にでも自由になるは之れ眞の意味の柔順ではない、猫にも杓子にも秘密が無いといふのは、之れ眞の意味の純潔ではない、許すべからざる方面に對しては、凛乎たる威嚴を持たればならぬ、昔、鶴ケ岡八幡の前に、賤やしづしづのおだまき……を權勢を物の數ともせず歌つてのけしは即ち之れである又、儂ニ佳人一佳人擊。佳人擊太宇嘆。妾身任ニ君活一。妾身任ニ君殺一。妾有ニ阿郎在一。妾心不レ可レ寄春鬢在レ手亂如レ絲。木關舟中斬ニ蛾眉一。といふ吟の如く仙臺侯が永代橋畔に高尾を斬つたといふ話がある、遊女を手本とせよと言ふではないが、併し心は見上げたものである、斯の如くあらればならぬ。



眞の柔順は一面には貞操となり、勇氣となり、媚悦となり、整理とな

りて、遺憾なく現はるべきものであるが、一面に向つては、嚴として緊く閉ぢなければならぬ、其處に即ち彼女の懷かしさ、奧床かしき處があるのである、「何のその百萬石も笹の露」百萬兩でも連城の璧でも購ひ得られざる尊い處は此處に存するのである、されば若し此の一面に開いて一面に閉ぢらるべき所が、亂れて正しからざるものは如何に形式の美に適合しても眞の美と稱することを許さぬ。

◎愛の發現

又彼女にとりて最も重大なる同情心は愛より發現するものである、愛は蜜の如きものである、愛は春の光の如く心地よき温もりである、愛は選りぬきたる名香の如きものである、されば人の之れに接するに當りては、恍惚として其己れを忘れしめずんば止まざるものである、若し此の愛即ち同情が彼女に無かつたならば、彼女は冬の如き、氷の如き、又の如き冷やかなる寒きものとなるのではないか、其軟らかなる肌も、熱き心も皆値を失ふではないか、然るに彼の浩蕩たる春の精の如き愛情なればこそ彼女は人の子の母たる資格があるのである、六尺の大からだを其軟らかなる愛の腕一本に枕することが出來るのである、實に愛は彼女をして優さしからしめ、美はしからしむる第一の要素である。

心の美だにあらば、形式の美に少しは(餘りでは困る)缺くる所があつても優美たることを失はぬ、我が愛する處女諸君、女學生諸君須らく自ら其鏡面を磨き、其心田を耕して常に向上の工夫をなし、以て特に明治式の美を發揮すべきである。

▲腦が無い

夏の眞晝間心理學者が町を歩ひて居ると、一人の男が帽子を冠らず日に照りつけられて働いて居るので、「これ〳〵お前そんなに頭を日に干しちや大切な腦が惡くなるよ。」「へえ、旦那のやうな腦がありや 日にも干しましれえだ。」

▲劇場の帽子

西洋の芝居では婦人連が帽子を脫かないから客の邪魔になるので、世話人は大分よわつてゐる。そこでいろ〳〵と名案を考へた末 早速壁の所へこんなことをはりつけに。「以後 頭のはげた方は演劇中帽子を脫がるゝ必要無之候。」

▲檢事へ質問

或時女が法廷に引出された。罪狀は自分の子を虐待したと云ふのである。で證人としてその子供も矢張り其處へ來て居る。子供の手足は打たれたあとで大分紫色になつて居る。さて宣告を下す前に檢事がその女に何か申立てることは無いかときくと、「お構なくば 一つお尋がしたい」と云ふ。「何でも宜しいから申述べろ」と云ふと、女はぬからず、「では貴方様はこれ迄我儘者の手におへない子供を お持ちになりましたですか。」



わらはゝ良妻主義にて候

野菊女

不幸なる結婚と、不名譽なる老孃と、いづれを我は選ばんかといひをこせたる友へ、

田舍住の身さへにそゞろ心のうきたちて、花の便りに耳傾けらるゝ此頃、都はまして春の裝、天にも地にも、きらびやかにおはすらんを、例の吳竹茂れる文窓の下、かゝる想に伏しづみ給ふとや、御文幾度か卷返しては、繰返しては、御心の底の底まで、よみ盡したる心地して、一夜瞑想にふけり申候、

結婚に就ての不安、恐怖。そは誰も一度は必らず味ふべき人生の一徑路とや申すべき。

かつて運命つたなかりける友の上、不幸の結婚に囚はれたる人の事など、思ひ出でゝは、我身の上の行末遠く、霧深き心地の思ひ迷ひて、春の夜の夢も結びがたう、明くるを遲しと悶えたる、おぼえある私、君が懷き給ふ其愁ひを、御無理とは申さねども、「寧ろ淸き老孃として一生を崇高なる事業に捧げてん」との御結論には、少々不服の苦言を呈したく候。世に幸福なる結婚といひ、不幸なる結婚といふ、それが第一私にはいぶかしう存ぜられ候、己れ自らの幸不幸は、己自らの覺悟によりて定まり候はん、眞珠、ダイヤの燦たる光輝に眼を奪はれ、流行の粹を飾れる其衣粧を、羨望する人は多からむも、よく其皮膚一重裏に秘めたる淚の影を、透察するの明ある人は少なかるべく候、必竟第三者がいふ所の、幸不幸とは唯其皮想の觀のみ、我等は不幸なる境遇に處して、倘幸福の活路を、希望の光によりて認めざるべからずと存候、徒に世をうらみ、身をなげくを以て足れりとすべきか、我等は何が爲に學びたるぞ。家庭に嵐吹すさまば、わらは身を以て楯となりてん。良人放蕩家ならば我身を挺して之

を諫止せん、人生の究極、唯一の死あるのみと思はゞ、何をか歎き何をか悲しまむの慨こそほしうは候らへ、かしこき教育勅語の御主旨をもて、常住坐臥の心とするか、學校教師の妻なる、わらはが感想は、時代の新人とも申すべき方々をもて訴さしめば、時世に迂なる、所謂道德に囚はれたる人とや申され候はんなれど、私は矢張、賢母良妻主義に謳歌するものに候。但私の良妻賢母主義は、某々女子教育家の唱へらるゝ樣の教育論にては之なく、只婦女として、處世の大綱とする所、至て平凡なる、つまり女の身の我等は、(三の例外を除きて)必らず一度は家庭の女王として、分相應の務をはたすべき義務あるものとの覺悟に候、

かゝる頑固なる、祖先傳來の習慣を脫しがたき私等は、自らも又、あはれ小さき女よと、憐みの想に堪えがたき折も候へども、先以て不平ももらさず、甘んじて此價値なき(新人の口吻をかりて)家庭の、犧牲となるによろしき、覺悟を有し候だけ、心安う氣樂に候へど、現代の新らしき教育をうけて、多くを學びたる娘たちは、我に此才學あり、何ぞ片々たる婚を許して、あたら一生を單調の家庭に、束縛せらるゝに忍びんやと樣の、想を抱き給ふにはあらざるか、さりとては自惚も又極まれりと申べく候、

家庭の人となるべきの準備と、獨身者として、立つべきの用意と、抑々幾何の相違ありとに候ぞ。あすか川のふち瀨、定めがたき世に處するには、いづく如何ならん境遇にも、自若として立ち得るだけの用意は、誰にも最大要件には候はずや、美事老孃として、立ちうるだけの、それだけの覺悟と、頭腦とを有し候ものは、よし、不幸なる結婚をなしたりとも、必らず幸福なる家庭を生じ得べしと存候。

學の窓の玻璃を透して觀たる如く、しかく單純なる浮世ならば、些の煩悶もなく不平もなく、常世の春は、いつも長閑に候はんが、それこそはげに無聊に苦しみ候べし、けふこそは、あすは雲とぞ散りぬべし、わかいゝと思ふうちには、いつしかよする顏のさゞ波、あはれ老孃の歎聲、太息と共にもるゝには候はずや、

門地が高うて金満家で、人格正しく、男らしくて優しいといふ、小説的の殿方でもあらば、良人と侍づくには誠に申分なく、結構此上なき事ながら、さうお誂へ通りにまゐらぬが世の定法、我慢が出來る程度ならば、よい汐時に見切をつけるが得策、駈引もすぎては店晒しとなる懼あらん、と申さば、『賣物ではござんせぬ』と怒りもし給ふべけれど、全く以く猜疑嫉妬の焔を、自重尊大の皮に包めるやうな、老嬢學者とならんよりは、幾倍かしこき決心ならんと思はれ申候、幸にして赤縄の糸、よく結ばれて、我意を得たる光



榮の住家を見出たる人は、庇髪三寸、輕車豐かに儕輩を瞰下せむも止めよ羨望するを、嫉視するを、胸にむらたつ敵愾心をすてよ、虛榮心を去れ、とかくは自惚をはなれて、眞面目に適所を見出すが肝要に候、

　いかに負けぬ氣の肩肘張つても、女は女の、所詮は七分の弱味ある身と生れたが我等の不祥、純潔なる老嬢で候と自重しても、兎角は人の口に戸は閉されず、思はぬうき名をたてらるれば、三度に一度は信じらる道理なり、そんな事そんなことに、心を痛め肝煎る思をなさんよりは、寧ろ九尺二間のお内儀さんと呼

ばれても、後指さゝれぬ境に、身を置きて、徐ろに處世の策を講ずるが、智ある仕業と思ふは、わたくしの僻見にや、御再考あらまほしう候。

もし又どうあつても、家庭の人となりて、無爲の呼吸を數へんつらさに堪へずとならば、潔く黑髮ふつと切りすてゝ、黑染の袖すがすがしき身となつて活動したまへ、老孃の華美なる裝して、薄化粧などしたらんは、あまりに未練らしう口惜しう淺ましう候らへ、それともに、まだ青春の血熱う、面ほてりして、何となう戀てふものゝ戀しくば、よろしく鹽原山の奥あたり、道行といふものにても試みたまへ、但再び立歸りて、世人の批評とりどり、眞向にうけ能ふほど、それ程の勇氣なくては、時代が生みたる新婦人とは、申しがたう候とよ、

あなゆゝし、あまりに筆が極端にはしり申候、ゆるさせ給へ。時は今我世の春闌にして、陽炎もゆる野邊の若草、いづれをいづれ競ひがほに萠えいで候、君がかたみに、摘みいれ給はむはすみれか土筆か、雲雀の聲も長閑にきこえ候を、たれこめて物を思ふに適せずと、大悟遊ばされたう候　かしこ

今、禿筆を擱き候折柄、ふと新紙は傳へて、某子爵家の姬君、人格を慕ふて一小學校長が妻とならんと申候、虛榮にみてる今の世に、これは又お物ずきな、異例の結婚！、淸貧に安んじて、高潔なる理想のホームを、形成し給ふを得ば、眞に欽仰すべき御方と存じ候、されども芳紀正に廿有六ときゝては、あはれこゝにも移りゆく年波せきとめむよしもなく、焦慮の痕、見ゆる心地のせられて……。

▲座席の轉倒

竹坊は學校へ上つたけれどもまだよく學校の樣子がわからない。或時近所の小父さんが來て、「竹ちやんはえらいネ、お前一番になつたらう、」と云ふと、竹ちやんは得意相にうなづいた。「道理でお父さんが此間學校へ行つたら一番後に坐つて居たもの」。これを聞いた父親はびつくりして、「竹坊、それは本當かえ、お前はいつもびりつこだつた筈だが」。

竹坊「だつて此の間先生がお坐をさかさにしたもの。」



女學生の學校日記

花散里

▲大氣焔

遂ひ此の春の新學年から私達仲好し同志が三四人、書物包の風呂敷を手製のスカラーバッグに替へて登校しはじめたらば、それが頗る人氣に叶つて現今では全校六百人の九分通りまでは我々を眞似て、意氣な甲斐絹の格子縞や草花模様の西洋更紗などで作つたそれを抱へるくらゐになつた。

スカート仕立の袴はくことも佛蘭西レースのペテコート着けることなど矢つ張り最初はダンスする時格好のよい様にとての私思ひ付きから、目下大流行のサンマーもいつでしたつけ……おゝさう〳〵たしかさつきのはじめ頃だつた、私がテニスして髮を目茶苦茶にこはしちやつた時面倒くさゝに運動場の中央でしかも鏡さへ見ずに、ちよいと丸めといたら其の出鱈目卷が非常に新式でハイカッテルとかでまあほんとに珍しい格好だわ、あしたから皆もお揃ひに左樣いふのに結はうぢやありませんかなんて大勢のクラスメートがサンマー、一名夕美子卷(私の名をとつて)とやら御大層もない名を附けてしまつたのがそも〳〵の起因、何しろ最上級の高梨さんといへば教師の中でも頭のあがらない方がある程ですもの、ほんとに私ぐらゐ地盤が固けりや乙組の松本さんなどがいくら嫉妬やいたところで憚りながらピクともしないわ。

▲始業前

昨日の午後トモヱヤから出來て來た赤革の半靴をはいて登校する思ひ切つて踵のたかい、此のまあきやし

やな格好は……またこれからは青葉さゆらぐ校庭にトモエヤ式の赤靴が勢力を占めることであらう。

光琳式の破芭蕉を墨繪に染めた白地モスリンの單衣サラリと教室に入ればまづプーンと强い香りが鼻を打つて、次に眼を引くのは教壇上の花いけに誰の手ぶりか投げざしの白百合一輪。おゝなつかしの花よ、香りよ。始業には未だ間があるので七八人しか姿が見えない。雜誌の口繪を見て居た浪子さんがきれながの美しい眼をあげてお早うといふとボールドにいたづら書して居た伊藤さんや幾何の教科書と首つ引最中の諸岡さんまで振り返つて會釋なさる。

ほんとに暑くなつたのね皆さん裏山の方でも歩いて見なくて？」ときくと

「あゝあすこの藤棚の下が涼しくて好いわね、でも今日は大變よ風船玉（英語教師英國婦人某の綽名）のディクテーションが三時間目ですもの」と金ぶち眼鏡の吉田さん。

「あ、左樣でしたつけ、私すつかり復習ふのを忘れてましたわ、何ページからでしたの？」とローヤルの四をとり出してさらひ始める、室隅の方では呑氣者の糸子さんが黄色いこゑを張りあげて、降ると見て笠とるひまもなかりけりとか何とかお得意の琵琶歌川中島を景氣よく……。

それも諸岡さんが願ひ下げにして暫く皆復習に餘念なく靜まつてると、長い階段に足音みだれていきをしい〳〵森山さん續いて入來つた大小路さんも席に着くなり笑ひくづれる。

「まあどうなすつたの？皆大車輪で勉强中なのに……何がそんなにをかしいの？」と櫻井さんが眉をひそめて、

「今ねえ、丁度私達が校門を入らうとしたら彼方からゐらしつた○○先生がドーッと吹いて來た風にあの半鼠色の御秘藏帽子をとられちやつて、そしてコロ〳〵ころがるのを一生懸命追ひかけてゐらつしやる其の御樣子つたら……アハ……實に珍無類、私バッタの記者にみられたらとほんとに冷や〳〵してしまつた……皆

さんにも御目にかけたかつたわ」聞いてる者も一緒になつてわらひこけると理窟屋の深井さんが例の通りのスタイルで。

「風が吹いて帽子がとぶのは當然ぢやありませんか、五年生にもなりながらまだその譯がわからないの？一體この甲組は……」だん／＼鋭くなりかけたところで始業の鐘がジヤン／＼／＼。

▲國語の時間

教室へ入つてからが二十分、まだ林田先生の影も見えない、六月下旬の朝の日光を、白いカーテンに遮つた窓の下、絹綿つきのしほりをはさんだ湖月抄を前にふせて。



「一體どう遊ばしたのでせう、もう今日はお見えにならないのかしら、折角今日から明石の巻に移るつて樂しみにしてたのに……つまらないわ」と惠美子さんがいふ。

「何かの都合でおくれるんでせうきつと……いつかの様に補缺として代數をやりますなんかつて〇〇先生にとび込まれるより斯うして下讀みでもしてた方が餘つ程好いわ全く數學はたまらない……」

こゝらあたりはまだしほらしいけれどピンクやオレンヂ、いろさま／＼の、リボンを胡蝶とひらめかしてかなたへ一團、こなたへ一團、人の噂や品さだめに

鬼の居ぬ間の洗濯をきめ込んでる連中がある。

「ちよつと林田先生ね、此の頃の暑いのにお被布めしてゐらつしやるでせう？あれ解つて？」

「そんな事なら先刻御承知で御座いますよッへン先月の文學會の時からチヤーント氣がついてましたからね」

「流石にお眼がお高う御座いますわね、八度の眼鏡なんぞかけてゐらつしやらないから……それは兎に角、何しろ非常に先生は元氣がないことよ」

「その故ばかりぢやありやしないわ、ふだんからでもあゝ云ふお靜かな方なんですわ」

「矢つ張りオハナばちがつてますはね、何から何まで辯護してあげるから先生の方でも滿點をつけなきやならなくなる……」

三人寄つても姦しいと云はれる女の、しかも口も八丁、手も八丁とやらの豪傑(？)が一級擧げて四十何人めい／＼勝手なことをしやべつたりつぶやいたり、イヤハヤ實に騷々しいことだ、かりにも一級を牛耳る私が、これをだまつてすまされやうか、

「今は隣室で授業中ですから少し靜かにしたらどうでせう」と一言いふと皆俄かに押し默つて漢文の讀本などひねくりはじめる人もある。

「アーッ」と諸岡さんの大あくびに亦も一同ふきだす途端、入口のドーアが靜かに開いて噂の種の先生が昨日に變らぬお被布すがた。

ドタバタと讀みさしの小說らしい本を机の中へしまひ込むやら英語の本をさかさに立てゝ勉强家らしく見せかけてるなどはまだいゝとして自席を離れてとび步いてたのがあはてた餘り隣室の空席へ腰をおろして、すまし切つてるそゝつかしやが有る。

「大層おくれましてすみませんでした、サア始めませう」と鶴の一こゑ、さんざめいてた連中も流石に神妙らしう机に向つて、今のさはぎは空ふく風と半兵衞きめこむ二十分間。

▲食堂の內亂

「まあ呆れつちやつた、一寸皆さんへ御披露いたしまアす、驚く勿れ大小路菊子姫は大きな御辨當を二つ御持參で御座いまアす、報告終りッ」

「そんなに羨しきや進上しますわ舌切雀のお婆さんみたいに重たい方がお好きでせう」

大小路さんのさし出すのを二つとも手に取つて中まであらためた森山さん、忽ち、い、い、いなこゑをあげて。



「あゝよめた〳〵前のお休み時間にお姿が運動場に現はれないと思つてたら……人しれぬ間に此處で〳〵パク、ア、コリヤコリヤ」

「たんと何とでもおつしやるが好いわ、昨日忘れて歸つたんぢやありませんか」何て騒々しい……これでも女の食事時かしら、まして騒ぎの張本人は從三位勳何等貴族院議員伯爵などゝ私なんかには覺えきれぬ程、かりそめならぬ長つたらしい肩書ある方

の御令妹と、音に名だゝる大學敎授法學博士の御愛孃とだ。振りの袂に紅こぼれて移す蓮歩のしづ〳〵とめつたに口もきくまじくすましきつてるそのよそ行き姿とはまあ何といふちがひであらう、おゝそれよ世の中のこと大抵は裏へまはればこんなものかと何かの眞理でも發見した樣に思はれて……。

▲食後の三十分間

一日の中で一番たのしい待遠しい晝食後の休み時間が來た、それを報ずるベルのなるより早くラケット振り〳〵ドヤ〳〵とグラウンドへ突進する女傑連。ピアノ練習室へ入る人々、それらを除いた他のクラスメートは大抵皆こゝ藤棚の下に集つて勝手なことを話し合ふのが此頃我が組のおきまりになつてしまつた。新しい靴の爪先そろへて先づ私が芝生の上にゴロッと坐ると皆もグルッと輪形にかこんで話の火蓋を眞つ先に切つたのが浪子さん。

「かうして一緒に遊ぶのももうあと一年とはないのだわね來年のこのごろはどうなつてるでせう」

あの美しい涼やかな眼を伏せてつゝましやかに小ごゑでいふ。

「いやに心細いことを云ひだしたものね、私なんぞはまだ〳〵二三度は五年級をさせられるから……」

「桑原々々そんなつまらない事云ひッこなしよ、それよりもねえ私玉突でもはじめ樣かと思つてるのよ皆さんの中でもなさる方があるでせう」

「あゝ櫻井さんの玉突きは好いわハイカラにはハイカラなことでなくつちやア似合はないから……」

「謠曲も隨分好いものね、私少しならうかしら」

「あゝ大小路さんはお嫂樣が御上手だから譯はないおやありませんか、セッセと習つて支店でも出したら……」

「オホヽヽ支店とはほんとに振るつてるわ沙汰〳〵」

折角今日は靜かに話さうと思つてたのにこれでは又直ぐコリヤ〳〵なんかゞ出さうだから次を私が引取つて、

「ことしの夏は皆さんどうなさるの？もうおきまりになつてゝ？」
「私海よりも山にしたいと思つてるのよ輕井澤がいゝかしら」
「私は矢つ張り中禪寺ですわ輕井澤と中禪寺とどつちがいゝとお思ひになつて？」
「そりや各々の好き〳〵だわねどつちにしたつて私なんぞ東京であくせく暮すのですもの何だつてかまはないのよ」
「大小路さんは箱根？」ときく〳〵と白麻布のハンカチーフで襟に風を通しながら。
「エ、あの大磯の別莊にゆきたいと思つてるのよ、でも兄樣達の都合があるから矢つ張りまた塔の澤でせうよ」
「皆さん山がお好きの樣ね私どうしてもあの海のけしきがいゝと思ひますわ、わけても波浪のあらい磯に立つてムク〳〵とした夕方の入道雲をながめるのが……」
「ちやア夕美子さんことしも逗子へ？」いきなり浪子さんが手をとつていふ。
流石に浪さんはちがつたものね、海といへば直ぐ逗子だつて……」
「まあひどいわ」
とあかくなつて笑ふ。
折から松の梢をざわ〳〵とわたる風が樂しいまどゐを訪づれて二十幾つの長い袂は一樣にその涼しい贈り物で充つる、おゝなつかしき夏の木蔭……。

△奧樣の仰天

猫好の奧樣が猫を伴れて宿屋に泊つた處。隣室の紳士に猫をいじめられたので口惜しくてたまらず、ぶつ〳〵こぼして居ると、ヒヨクリ件の紳士の子供が出て來た。奧樣はどぎまぎしたが、急に優しくなり、「坊ちやんは好いお子ねお父樣は？」。「お父さん居るけど今いけないでせう。」「何故？」、おばさん是非今お目にかゝる用がありますの」。子供はそれではと眞面目な顏して「ぢやあ、いゝでせう、二階にお上んなさい、お父さんお湯に入つて居ますよ、僕戸を開けて上げませう」。



各地風俗の變遷

太古風俗岩手の里

清子

岩手縣と申せばいはでもしるき六十餘州中の未開地もし汝ゆきて治めよといふ宣告でもあつたとするといくら五串の花の下に金色堂を建てゝおまち申した所で二つ返事にオイとは誰方様も仰せらるまじき僻陬の風俗なんどをあからさまに御紹介するはまことにをこがましいのですけどしかしつゞれもなければ錦の光はひきたゝぬものと一言二言をこゝに

一體此縣の文化の度がかうもコンマ以下に居るといふのは抑地勢氣候等が相まつて然らしめた樣に思はれるので御座います、とでも負け惜しみを申しておきませうか、だがこの聖代の光はいかで山里だとて見逃しませう、鐵道も通ずる汽船も這入る、電信柱もたつといふのでおそろしく進化したわけで御座います。

敎育機關につきましては前申た樣の土地で御座いますから、其筋のかたは非常に御苦心下さいまして、敎育會なんかも或は總會、部會、評議員會が頻繁に開かれまして、種々有益な事業を起されつゝあります、學校も高等農林は別ですが師範、中學、女學校はいはずもがな、郡部で設立してゐる水產、養蠶、其他の實業學校も續々出來てまゐりますのは、ひとり此縣のためばかりでなく、國家といふ上からまことによろこばしい事と存じことに何れも星菫派の養成所でなく、實業實業といふことを金科玉條として居るのですから、みな將來をたのしみつゝあるのです、宗敎はマア佛敎が一番盛で寺の總數が五百六十九、わけても曹洞宗が最

廣く行れて三百十一ヶ寺御座いますが、一般から申ますと眞の宗教心は乏しい様に思はれます、キリスト教は盛岡其他二三の都會にはよほど行れて居りますが、村落に這入つてアーメンなどゝ唱へ様ものなら疫病神でも舞ひこんだかの様ヤツ〳〵と一も二もなく排斥を喰ふといつた風、そして年寄間にはかくし念佛なるものが信じられて居りまして、これはまた何でもかでも南無阿彌陀〳〵で、朝から晩まで西方極樂淨土を夢みつゝあるといふ向きです、又みなよく馬を愛重することは甚だしいもので、もし倒れでもしますとお寺へいつて回向してもらつて塔婆までたてゝ拜む、粗末にすると何代とか祟るとの事で馬頭觀音などは田甫でよし、道ばたでよし祭られて居ます、すべてまだ〳〵御幣は大變鄭重にかついで居りますから一寸工事にとりつくといつても、高山に昇るといつても、まづ一週間も前からお精進しなければ決して仲間入を許されないのです、それから人が亡くなりますと口よせといふことをします、それは盲をよんで一種のうらなひをしてもらうのですが、つまり其盲は死亡者の代言をしてくれるので妙な哀つぽい節をつけて特有の代名詞をつかふのです、例へば子どもをわかば、夫婦を相の枕、坊さんを長袖、結婚式を花の座敷とか、でよくいかにも殘念であつたとか、かなしいとか其人として全くいひ相なことをいつてくれますから聞く者はみな袖をぬらさぬものはありません、其時もし何ぞ希望でもされますと、何やめてもそれに着手します、そりや亡くなつた人の言葉と堅く信じてるのですから。

お祭といへば直神樂がもち出される、笛やら太こやら打金やらの雜拍子でやぐらも落ちよと許に舞ひ給ふお姫樣は扇もつ御手が骨太々と、さながら種生姜よろしく、やさしいお面の下から圖太い聲でなのり給ふさまは、實に滑稽とも何とも申されません。

生活の程度はもとより他と比べになるのぢやないのですが、それでも追々高くなりつゝあるので、だん〳〵江戸風になると婆さん達はこぼしますもの、大都會と比べ樣ものなら、それは〳〵おやすいもの、もし學校の

先生といふ樣な向の方が、山里へ御赴任になりますとまづ一番お宿にふさはしいのがない、食物なんかゝむづかしいといふので、下宿さしてくれないかといふ處が間がありますからしかたなしオイトコ節ぢやないが手鍋をさげるといふ事にして、そんなら座敷丈とたのみましたら、二間も、三間もたゞで貸してくれます許りか、ナーニ先生樣一人であがる位知れたもんでがすものといふわけで、野菜や卵などの類は畑ごと鳥ごとあたへ、其外栗ができた、柿をとつたといふては運ばれる八方美人主義といふのをうまく振りまきでもしましたら、ずゐぶんふところを肥やすヿができませう、少し町場に出ました所で、菜園足らずで二人住位の家なら借りられます、そして朝青菜おきアえんか、卵よがすかと可愛いほうかぶりがふれて歩くのを呼びとめて、銅貨の一つ二つやらうものなら何でも露の滴る所をどつさり買ふヿが出來ます、おさかなも新しいのは東海岸からどし／＼來ますし鹽物は北海道からまゐります。鳥類は獵師がおき／＼まだほとぼりのさめぬ處をさげてきます、新炭いづれも其とほり春さきから夏の初にかけて木の芽、芹、わらび折れなか／＼おもしらう御座います、たゞし牛肉となると一寸した町場にはありませんし四足は云々など申して家の中で煮燒するさへ忌みます御飯は毎日羽織、袴や洋服の入用な向はぬきにして其他はみな麥を頂きます、それが却て自慢な位、中には粟稗もつと進んでは大根さへ糧にして居ます、そしては奈良朝あたりからでも保存したかと思しき炊けばパサ／＼して狐色になる、お米を出して誇つてゐます、お節句だとか其外月に二三回の休日は勿論ヤレ從兄が泊りにきた、叔母樣が御入來だとかいつては餅をつきます、おみやげにも大きなのを持してかへす餅ほどよい御馳走はないのです、でも此頃では少し開けた處には西洋御料理などゝいさゝか振つたつもりの筆太の文字も見えてそんなのに案内するなどゝいふ人もありますけど。

衣服は皆木綿もの、しかもじみな紺縞がおほく三四年このかたこそいろ／＼派手な裙や、袖口も見えますが

前は必ず黒つぽいもの許りでした、女は中以下ではつねに羽織を着ませんで黒の半襟の絆纏、一歩引きさがると、ムジリと申三角袖を着て雪ばかま(サペル)といふ鰌の口をさかさまにした様な袴をつけて栗の木で前はひろく後すぼりに歯をあつく斜にくつた下駄をつゝかけますからたまりません、歩む姿はくゝり猿、冬になるとそれにスッポリと赤毛布を被つて首と腰とを無造作に結びつけると、これは足のある生きた達磨様、お薩のふかしがけを湯氣ゆたかにふき〳〵召しあがり遊ばすなんかは、都大路ではとても見られぬ圖で御座いませう。

家屋は風雪に犯されること屢々で御座いますので、大した高いものは御座いません、かや葺、柾葺の屋根が普通でちと進歩したのは瓦の三階位ですが、中には杉皮や俵の皮ぶきと雅に出てるのも御座いますお盆とお彼岸との祖先の祭はかたいものでいかなほつたて小屋でも盆棚はかざるものとしお彼岸のだんごは供へるものと致して其の墓参りが女の簞笥の底を見せびらかす時で、他は親類の吉凶事のほかまづ稼はお休みです、で少しふわ〳〵したものや色の派手なものを着て歩かうものならみな表へ出て見送りますからわかい人達だつてめつたに出歩かぬ様です、そこらがまた田舎乙女の可愛さで御座いませうか。

名物と申しましたら左様で御座いますね南部、鐵瓶、紬、林檎、豆銀杏、葡萄飴などは、山出し物としておみやげになりませう、それから中尊寺の氷餅は御子様方やお年寄がたによろしう御座います。

名勝としては此頃だいぶ方々の紳士がたも或は個人で或は團體で、御たづね下さいます、中尊寺をはじめ嚴美の溪、石割の櫻、達谷窟など、少し名の通つたものも御座います中で中尊寺は御存じのとほり藤氏三代の夢のあとで、平泉ステーションから五六丁古杉森々と生ひ繁つて、何となく神々しい空氣の滿ちた坂道をお上りになると、金色堂が御座います、もし御見物遊ばす時はステーション前で遊覽券をお買ひになるとよろしう御座います、でないと山にまゐりましてからたく

さんの寶物やお堂やの鍵をあける毎に一々とられますそして金色堂のわきの金色院と申す庵に御出でになつて其旨お傳へになりますと直案内してくれます、それから金色院の上に寶藏がございまして、歴史や文學、美術参考品がズラリと陳列せられて居ります、アノたしか峰岸先生の歴史の本の義經の畫像はこの藏にあつた辨慶と義經とが互にかいた肖像畫の大きな軸物の寫しの樣に存じましたが、其外辨慶堂判官館など見ておくべき所で御座いませう、達谷窟は田村麿の古蹟で窟にたてたお堂が實に奇なものです全體で此地方には義家や田村麿の古蹟は踏みつくされないほど御座います。

人情は質樸淳良と申せば結構ですが進取の氣象に乏しく舊慣は何もかも墨守する流儀入りがないから出すのはいやといつた風で江戸ッ子式の肌のいゝい處はまづ藥にしたくも見當りません。

言葉は二部に別れて一は仙臺系、一は南部系、兩系いづれもイの段とハ行との音がいちやるしく拙く、鼻音濁音、方言、訛言はおびたゞしいもので御座います、まづ一寸しても明治四十二年五月十五日とかうで御座います、海岸に出ますと其上にシといふことはいけませんで醬油一升五合と申ますから初めてのかたにはずゐぶん御こまりでせうそれから名詞にこをやたらにつけるたとへば隣の猫コがお盆コの上にあつた皿をなめてゐつたといひます、こんな事も學校には入つた人々にはよほどなくなりましたけど、天保ハイカラの中にはしつかりして保存されて居ります、とにかく此地の人は全く無愛嬌では御座いますが、そこをたゝいて見ますと上皮の針の樣でなく甘味をもつて居る樣です、それから一寸おとしましたが陰暦四月初午に中尊寺にお出でになれば能樂をごらんになる事ができます。



文學博士 姉崎嘲風君著

花つみ日記

全一冊 洋装四六判上製 美本紙數五百五十頁

正價壹圓參拾錢 郵稅十錢

南イタリアの美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞でし日記一篇その中には湖畔の佛誕會に異國の友を會して佛教を語り、ロマの寺院に聖教會の生命活動を視察し、南歐に北歐にあらゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ。天然、美術の記錄、宗教、文明の評論として江湖の一讀を薦む

大和田建樹君新著

散文韻文

野菊

全一冊洋装菊半截
紙數四百九十頁
正價金四十五錢
郵稅六錢

大和田先生の近作出づ。漫筆の清楚輕快なる、記行の高趣詩味多き、歌篇の嚠喨燦爛たる、特色集めて小冊子にあり。壺中の天地、眞に作文の模範たるべし、徒然の清友たるべし。

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

女(その二)

數學世界　第三卷第八號　增刊

作圖題詳解

洋裝菊判紙數百廿八頁　**正價金五拾錢**　郵税（本號限り）四錢

▼七月一日發行▲

我數學世界は、七月一日を以て臨時增刊を發行し、愛讀者諸子の机邊に提供す。題して『**作圖題詳解**』と云ふ。抑も幾何學に於る作圖たるや、他の證明問題よりは遙に至難の事に屬す。故に學生諸君の苦しむ處又た從つて大なり、本增刊は之が手引たらんとするに他ならず、誠に諸子の希望を滿さんが爲めなるなり。作圖問題を充分に會得したらんには、證明問題は從つて易々たるものとならん。何れにしても研究すべきは作圖問題なり、本增刊はその燈明臺たり、希くは發行の曉を待つて、本增刊の眞價を檢せよ。

▼第一號より再版取揃あり▲

東京日本橋本町三丁目　**博文館**　振替口座東京二四〇番

（その四）

◉毎月一回一日發行◉四六二倍大判上等紙七十二頁印刷美麗
毎號寫眞版數十面入正價一冊金十錢郵稅一冊金壹錢











?

立身出世の道を求めんとする實業界の少年は早く

實業少年

に依り給へ「實業少年」は立身出世の道を教へ幸福を與ふる繪入好評の雜誌なり

最近七月號の目次畧

◉藥劑師になる一種の方法
◉通信傳習生志願手續
◉成功せしパン賣の新法
◉貧兒ノ大成功
◉製靴法大パノラマ
◉小波 北陸土產噺
◉讀者の身の上相談に應ず
◉手紙用紙一定の大便利

◉萬國農事協會古在博士
◉保証しませんといふ和田て賣る英國商人總長
◉露國の勳章かけて鈴木る乞食中佐
◉自宅獨習英語、習字、簿記、算術等
◉懸賞電報文他數件活氣躍々

《口繪最珍》

◉機械靴製造實況
◉ハワイ島大產業
◉成功した露シャパン屋
◉英國最近鐵道客車內

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替貯金東京四〇番

（その五）

◎毛髪を美しくする最新劑

如何なくせ毛、白毛、赤毛も必ず一劑で美人となる

如何程お化粧が美しく出來ても髪の毛が悪るくては遂にお化粧の目的は達し得られませんのです

茲に於て當研究所は多年の實地と經驗とを重ね調製したものが『高砂白毛染』で…

此液は白毛、赤毛を染むるのは勿論ドンナくせ毛も一劑で必ず美くしくなりお化粧本來の目的と叶つて居ります處で發賣日尚ほ淺きにも不拘化粧品界の重要品として頗る高評を博して居ります

尚又該液は在來品の如く御使用後手拭なぞを冠ぶる不便はなく極めて輕便簡單にして衛生に關しては特に警視廳の無害證明を有します

ちゞれ毛直し 白毛赤毛染 **高砂** 大壜金四十錢 小壜金二十錢 ―送料大小共一個四錢

東京化學化粧品研究所（電話浪花千百五十二番）

東京神田橋本町三丁目四番地

流行割貝御櫛笄





◎當時頭飾品に專ら流行を極めし物は割貝細工應用の品に御座候此割貝と申は夜光貝等の美くしき光澤ある貝を撰び圖の如く細かく割り漆に塗り研出したる物に候へば其美くしき事は申迄もなく損ずる憂更に無之候弊店こゝに之を用ひ新圖案により櫛笄束髪用櫛簪等種々調製取揃へ置候間何卒御用仰付られ度願上候

壹組之價

甲張製 二圓三圓四圓五圓六圓七圓迄

黒甲製 五圓六圓半七圓半九圓拾圓以上……拾五圓

◎市内は御一報次第店員參上仕候

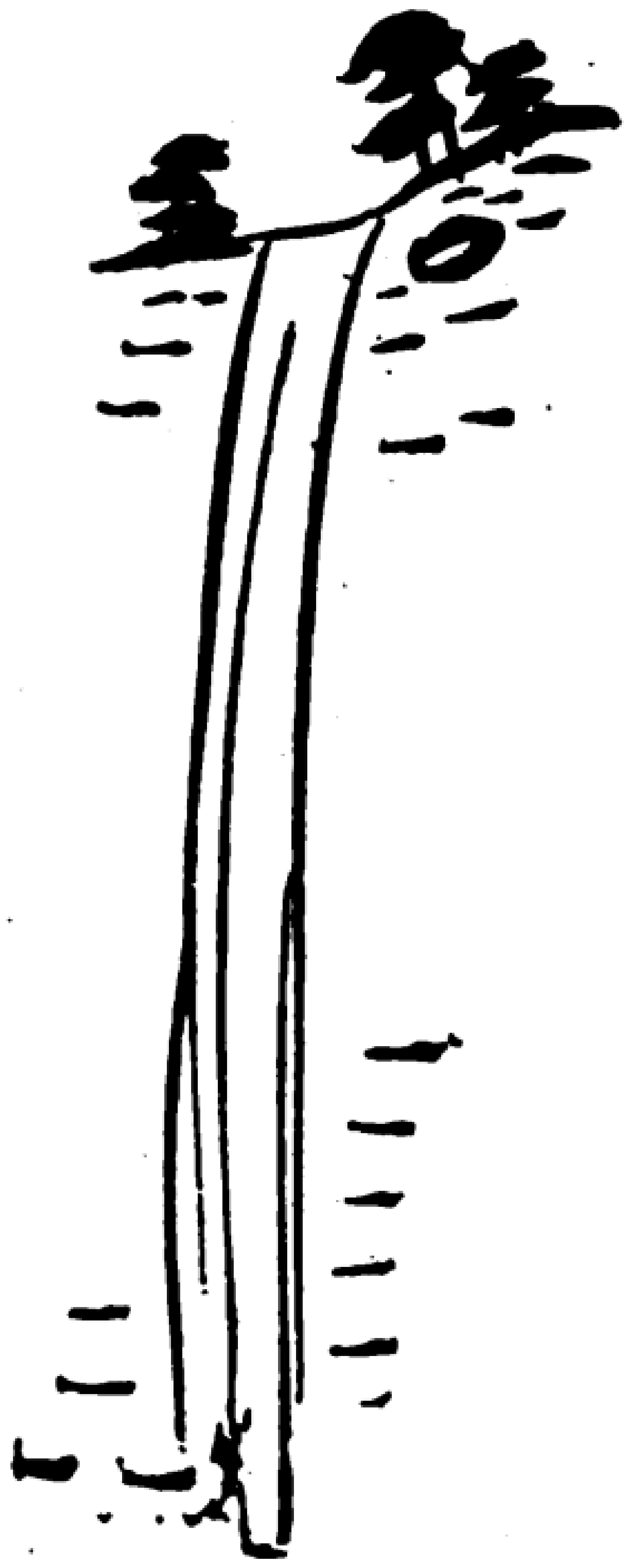
營業目錄…送費四錢

東京市神田區鍋治町

白牡丹中西

電話本局二〇四〇番振替口座一五二一四番

今川橋 松屋呉服店前



我が東北の山間生活

若葉

東京から二百里、杉田の城下から十五里、蕪雜な山野に圍まれて、町とは名のみこゝ奧羽の一寒村、これほどまでの田舍と知つたら、初めからくるのぢやなかつたなど〻、時には愚痴も云ひたくなる。

もと〳〵自分は四國海濱の某市に生れて、東京で學校通ひして、都會といへば東京田舍といへば四國の某市を聯想して居たので、此地へくる時も、四國より淋しい處だらう位の事しか考へて居なかつたのだから、鷹の巣の停車場に下りて、四里の山道を生れてはじめて見た橇といふものに乘せられて、此の町へ連れてこられた以來、生活狀態の著しき相違と、周圍の風俗のあまりにも質朴粗野なのにあきれる事が多い。

四月といふ聲をきいて、寒さはやゝ薄らいだが、四國の姉樣からはもう四五日も前に花の便りを聞いたのに此の町の四圍の山々はまだまつしろで梅の香もしない。それでも、昨日人夫に庭の雪をとりのけさせたので、今朝は久しぶりに青い草木が見えて氣もちがいゝ

良人の出勤を送つて、居間の炬燵の側で裁縫して居ると下女のおあいは、次の間の炭火のさかんな爐の前につくねんとすわつて、眼を糸の樣にしてあたつて居る。

自在鍵に湯釜かけた半間四角の爐の前で、紺のモツペイはいて、のんびり氣樂さうな顏してあたつて居る處は、そつくり十八世紀、否、紀元前だ。これでも、此の女、自分の前に東京から來て居る病院長の奧さんに六年使はれたといふので、此の町第一流のハイカラオムレツやフライの味も知つて居れば、其の奧さんのお伴して東京見物した事もあるといふ。

同じく一樣に田舍ものといつても、四國あたりの女

は、すれて居てづるい代り、氣がきいて居て、はしつこくて、一ッ用を終れば、次へ次へと何致しませうと用を尋ねにくる。質のいゝのは暇があれば字の一字も習はうとつとめ、なまけものでも奥さんの手前、茫然と爐中火鉢にあたつて居る樣な振は見せない。

おあいなど柔順な氣立てのいゝ女だけれど、そこへくると呑氣なもの、三度の食事の準備と來客の取り次ぎ位すれば、あとはこちらから用を云ひつけるまで、三時間でも、四時間でも、爐の前へすわつて、天下泰平をきめこんで居る。時間が惜いの、勞働を敏活にするのといふ考は薬にしたくもない。

一體此の地方は冬の內田も畑も雪に埋もれて、耕作が出來ない。四國あたりの樣に、稻を刈つたあとをおきすきかへして麥をまき、大根ひいたあとをうちなほして蠶豆を作るやうな忙がしさなく、秋の刈入れ濟ませばあとは其のまゝにして、冬の間、人も休めば、田も休む。從て、百姓は、貧乏で、無智で、祖先傳來の方法通りの耕作して、年に一度（此米をとる丈で春麥の收穫といふものなき）の土地の廣さの割合に少量な收穫を得て、低い生活に甘んじ、爐の側で悠然と男も女も、濁酒吸んで年また年を重ねて行くのを普通として居るらしい。

お晝過ぎに病院の看護婦がきた。妾がこの土地で、東京言葉を交換する事の出來る唯一のお友達だ。お天氣がよくてひまだから散歩にお伴しやうといふ。一緒に外へ出ると、表通りの雪はもう消えて、吹風も柔いできた。道で看護婦の秋田市の女學校友達だといふ女教師に逢ふ。自分の學校を見てくれといふて案內した町家を離れた高臺にある粗雜な建築で、障子や戸には隨分すきが多い。「お寒いでせう」といふと、「まわりに建物もなにもなくて、風をまともに受けますから、風の強い日は、建物がゆら〳〵して、雪が吹きこんで、隨分ひどうございます。それでも、教室へは、寒中火は入れません」といふ。室咲の花の樣にして育てられる東京の坊ちやん孃さんなら、一日幾人といふ感冒患者が出來る事だらう。「それでよく凌げますね」といふ

と「建物がお粗末なら、人間もお粗末、感じが鈍いのか風ひくものもありません」と笑つて居る。

平氣で嚴寒に堪ゆる其の兒童のなかゝら、如何なる將來の偉人が出るか？　育英の事業はお樂しみだといふ樣なお愛想云ひながら、二階へ上つて、教室の窓によると、半ば青く半は白く、眼下に擴がる野のかなたにまだ白い連山、遠く連なつて校舍のすぐ下を流れてゆく阿仁川は眼の及ぶかぎり遙かに細き一線をひいて居る。



海に遠く、汽車の便惡きこの山間に、名ばかりも町と名づけたる人家の集合數十軒の商店、公立病院、警察、小林區署などの諸機關を作つた文明の淵源はこの川で、上は阿仁の礦山に達し、下は能代の港に通じて、貨物の運搬、人々の交通を便にするの船は常にこの川を往來して居る。

漣波碧き西海の郷里を離れ白砂青松の美に渇望する自分は荒蕪な山野のなかに一道の光明を與ふるこの川を、せめてもの慰藉として、朝は殘月を追ふて舟漕ぎ下し、夕べは釣する人影の薄墨の靄にかくるゝこの川の

眺望を愛する。

良人の退出より少し早く歸つて、夕御飯の仕度にとりかゝつた。今日もおさかなはないといふ。玉子燒やオムレツもあまりつゞくから、鑵づめの肉でライスカレーでもして見やうと思つて野菜を見にやつたが、大根と馬鈴薯の外はなんにもないといふ。山へきてお魚の不自由は覺悟して居たが、野菜にかう不自由しやうとは思はなかつたものを。

仕方がないから、鮭のかす漬を燒いて、百合根の甘煮して濟ましておく、おとし玉子に揉海苔かけやうと思つて、淺草海苔買ひにやつたら、一帖二十錢しかも保存法の惡い爲めか、濕つぽくなつて、香はとうに失せて居る。

郷に入つては郷に從へ。かう云ふ土地へきては、この土地の人と同じもの食べて、同じ生活して行く事に馴れないと、土地で出來るものは非常に安く、東京からくる物は馬鹿に高いから、つまらない不經濟する。

夕御飯をしまつて、手紙かいて居たら、おあいがきて、佐藤さんのお母堂さんがおじやつたといふ。佐藤さんはこの町第一の金滿家で、當主は町長、縣會議員、公立病院管理者など、澤山の肩書をもつて居る、それでも町のものは、先代が小さな町人であつたといつて、細君をあねさん、主人をおとさんと呼び、其のうちの奉公人に至るまで旦那樣、奧樣、の稱號は用ゐない。

座敷へ通させておいて出て見ると、十七八の體のづぬけて大きい青年がならんで座をしめて居る。

青年は當主の弟、母堂には最愛の季子であるさうな大館の中學へ入れておいたのが、不平黨のストライキに加はつたとやらで、退學させられて歸つて來た。其のうち東京へ出すつもりだが、それまでの間、毎日よこすから、東京で入學試驗に困らぬ樣、英語と數學を見てやつてくれといふ。數學きらいの妾にとんだ事をたのみにきたものだ。

昨日はお寺の和尚が、愛國婦人會の連中に、お花やお茶を敎へてくれといふて頼みにきた。東京の學校を出たものとさへいへば、あらゆる百般の學藝に通じて

居る樣に思はれて、少々閉口する。無下にも斷れないから、英語丈ならお相手して見ませうといふておいた。「どうかはあ」と大きな體を母親の後に屈めて、お辭儀してゆく不恰好さ、あの柄で、ストライキも片腹いたい。大かたたちの惡い學生の人形に遣はれて、退學處分の御配與受けたのであらう。可愍さうに。

あれで生馬の目を拔くといふ東京へ出て、どんな結果が得られるだらう。昨日おあいにこの町から中學校や女學校へ出て居る人があるかと聞いたら、そんな處へ行く人はみんな失敗て歸つてくる。小學校卒業したらうちへおいて、商賣か百姓させるのが一番だつてさも分別あるらしく云ふて居た。なるほどゝ合點がゆく。

自分も毎日かうやつて、あと二三年間この山の中で辛抱して居たら、進歩の向上のと面倒くさい野心もなくなつて、五年でも、十年でも變らぬ居間からかはらぬ窓外をながめ、鮭の鹽もの食べて、炬燵にあたつて悠然と安心立命して居る樣になるだらう。心貧しきものは幸なり。今に天國へ行ける。



琉球の風俗

龍の宮

◎首里の舊城

首里區の東の山上に數百年の昔の姿其まゝに、いかめしく見えるのは縣立高等女學校と徒弟工業學校、即尙侯爵の舊城であります、只今は二校の假校舍と成つて居ります、朝まだき小草の露ふみ分けて數百歩の坂を上り此の城を見上げた時は思はず敬意の念が起ります。

◎士族と平民の區別

士族と平民とは一目見ればすぐわかります、士族はいかに老年でも縞の荒い着物を着て、髮は一ぱいに根にぐるぐると一種奇態な卷き方をして、銀のかんざしで止めて居ます。

平民は十七八の娘盛りも六十路の老母も、極く小さい縞の着物を着てかんざしは普通私等の用ゐて居る箸と同じ木で作つたものをさして居ます、氣候の爲でもありませう婦人は皆丈より長い誠にきれいな黑髮を持つて居ます。

士族の婦人はめつたに外出しません、誠に婦人らしき女が多い樣です從つて士族の勢力は大變なものです。

◎氣候の相違

隨分暑さが烈しうございます、私は正月から七月まで居りましたが一二月といつてもさほど寒さを感じません、それで雪は無論、霜も霰も大昔から降つた事がないと申ます、ですから二月の中旬から單物を着ます。

四月の下旬から沖繩特有の氣候と成りますから、日中は燒死さうですしかし夕方は風が出て涼しく成ります、それで一年中蚊帳を用ゐます。

◎道路の粗惡

那覇區の道は先づ無難ですが、首里の市中と來たらお話になりません俗に「こゝは石原小石原」といふ歌がありますが、其通りで至る處石原道で其上非常に坂に成つて居りますから上等の下駄でもはいて、一時間も歩かうものならそれこそ一度でさん〴〵にします土人は皆草履(平民は素足)又男はたまに下駄をはいて居るのも見受ます。

◎髭のある車夫

那覇の港から上陸して驚くのは內地で見た事もない、美髭を生して居る車夫と車賃の安價なのです、で紳士も及ばぬきれいな髭です。

車賃は普通那覇から首里まで一里以上の處を八錢か十錢で參ります、そして四五丁もある坂の後押が僅一錢です。

◎言語と風俗

メアーリー(母父)アンマー(母)イキガ(男子)イナグ(女子)ヷアブ(子供)オンウター(あなた)ヷツメアー(私)アマンカイ(あちら)コマンカイ(こちら)ヤマトンチユウ(大和の人)チナースガナー(どうしようか)チナービメン(まゐりました)

沖繩人はどちらかと申ますと、田舍の人は從順で那覇あたりで商業をして居る者は多少　商賣氣があつて油斷がなりません、內地人の下に行くのが誇り日本の世話に成らないで獨立して、沖繩天下にしたいといふ風がある樣です、淸國人の氣質を大分受けて居るやうです、一體氣の小いといふものか大盜棒はありません、一寸支那側の下駄を取るとか干して居る小ぎれを取る位のものです。

◎感心すべき習慣

しかしなか〳〵私等內地人の及ばぬ感ずべき習慣があります、女子は操を非常に重んじて例へば幼少の時兩親が定めて吳れた許嫁でもあれば結婚前に夫となるべき人が死れば一生獨身で暮すとか又は、一度嫁入すれば夫が死んでも決して實家には歸らないで、例へ年はどんなに若くても再嫁せず夫の父母を養つて一生を獨身でくらします、それで內地人

が再嫁しますと非常に笑ひます、私の宅に出入して居ました女の野菜賣は今年が二十四五歳で十八の時夫に死に別れて子供が一人ありますがやはり孤獨で姑と子供とを養つて居ます、この點は實に感心だと思ひます、或上流の令孃が夫をすてゝ內地人の妾に成つて實家に出入を禁じられてる人もあります。

◎敎育

敎育は割合發達してるかと思ひます、第一首里に師範(男子)講習科(男女)中學校、高等女學校、工業學校、女子徒弟工業學校、織物學校、尋常高等、師範附屬小學校、那覇にも商業學校、醫學校、產婆學校、其他三ツ四ツあります皆縣立と申ますが實は國庫の支辨ださうです。

◎土地の名產



御承知の通り琉球つむぎ、かすり、芭蕉布、芭蕉の實、琉球芋等澤山あります、芭蕉布は芭蕉の莖から製造した絹糸の樣なきれいな糸で織つて、夏の衣類としては誠に結構でございます、臺灣芭蕉の實は少し臭みがありますが、沖繩のは大變味もよく、滋養に成るさうです、普通の人の常食は芋ですから、種類も四十八通もあると申ます、米は水田ではなく皆畑に植ゑるので唐米の味がします、私が參りましたのが一月の四日でしたが、正月にさや豆や、ゑんどうなどの花が咲いて居ました。

◎野菜と魚類

鹿兒島で櫻島の大根の大きいのに驚いた私は、沖繩で又更らに大根の巨大なのにあいた口もふさがりませんでした、瓜も、茄子も正月頃からあり

ます、魚類は皆大きなものですが一種の臭氣があつてあまり上等ではありません。

◎婚姻

結婚の事については主として親々の相談ばかりで、本人は知らぬといふ風です、儀式の事は委しく存じませんが士族の中流以上になりますとブタの二三匹も殺して男女の客を招きます。一體早婚で中學女學校に在學中に結婚するものが多くありますが、其時は同じ級の人は大方招待致します。

◎葬式

誠に奇態な事だと思ひました、ツアー〳〵と泣く人がありますこれは金をやつて泣き方を依賴すると申事で士族のいゝ處になりますと、二三十人も雇ひます其泣く人は他の人にたすけられて泣いて行きます、付添の人は茶か水かを持つて、泣く人の聲の枯れた時に飲ませるのださうです、そして會葬の歸途泣いた人達は笑ひ興じて歸ります。いかに金錢のためとはいへあまりに輕薄ではありませんか。

◎墓地

一見倉庫かと思ひました、なか〳〵綺麗なもので上等のものは二三千圓もかゝるさうで、財產よりも大切にするさうです。石造の倉見た樣な造方で、内は隨分廣いもので、其中に死體を一二年入れて置いて、それが朽ちて骨に成たのを洗ひ淨めて、棚に並べて置くのださうでいよ〳〵破產すれば墓を賣却するのださうです。

△岩手の里(甲)△山間生活(甲)△琉球の風俗(乙)

△コップと口の間違

或時大分大きな宴會があつた。お客樣の主な人は有名な大僧正である。さて其家の主人と云ふのは獨身者で却て手が廻らないから、近所から小僧を一人雇つて來た。所がこの小僧さんはちとにぶい方で、事が容易に捗らない。一つ事を何度も何度もきく。常から氣の短かい主人はもう我慢ができなくなつて、「これ、もう一度話してやる、今度忘れちや承知しないぞ、ようく耳を開けて聞くんだ。何でも僧正がお出になつたらお椅子の後に靜に立つて居るのだ、それから僧正がコップをテーブルの上にお置きになつたら、そうッと行つて此のナフキンで其口を拭くふんだ、いゝか、わかつたか」。「へえ、今度はようくわかりました。」その内に僧正が來た。小僧は主人の命令にどうか間違ふまいと思つて恐る〳〵立つてゐる。そしてやがて僧正がコップをテーブルの上に置くと、小僧はびく〳〵しながら進んで行つて、大きなナフキンを擴げ、それでコップならぬ鬚だらけの僧正の口を拭いた。

長汀曲浦





女樂師

玲瓏女史

天から與へられた職業？　に賤しい貴いが有ませうか、敏子樣、貴孃の親友として姉妹も啻ならぬ樣に御交際下さいました戶田花香は世間から尤も擯斥され尤も賤しい者と冷笑されて居る輕業の音樂部に入りましたのですよ、琵琶の師匠の許に入ると申まして御相談いたしました時、泣いて止めて下すつた貴孃ですもの此の樣な事を申上ましたら定めしお驚き遊ばすでせうけれど、敏子樣、成る程輕業そのものは賤しいにちがひ有ませんが私は音樂は貴いそして美術だと確信して音樂師になりましたの、絕交！　と叫ばれますのは覺悟の前で御座います私はそれを聞ますのが一等情ないと思ひますが、さりとて何も御存じない貴孃に何時までお知らせ申上ないで濟ませうか、私は高鳴る胸の早鐘をジツと押へて此一書を敏子孃に捧げます、名門のお孃樣や他の方々に賤しい私からお手紙なんか差上ます事の如何に失禮なるかはよく存じて居ますが、前の親友として藝人の有樣もお笑ひ草にと……、私は藝人で御座いますよ貴孃は令孃、僅か三四時の間に運命の神は、いたづらを致しますのねえ、それも私が音樂熱に浮かされたからなのでせう、先生々々と澤山の小國民に取りまかれてお伽噺の催促も、もう二度と聞く事は出來ませんのです、でも私は藝人で滿足して居ますの親もなし兄弟もなし、親類は有ましても御存じの有樣で見向いて與れる者も有ません。他人の方が餘程親切で御座いますよ、よし見向いて與れる人が有りましても私はあの樣な汚い根性の叔父や叔母の世話に成るなんて事は大嫌ですが、身內を人に問はれました時「叔父

は内務省の高等官、今一人の伯父は〇〇郵便局長をして居ますし從兄は岸本と云つて〇〇女子音樂院長して居ますの……」肩身だけでも廣いのがとりえで御座いますわねえ。

私はお琴とヴァイオリンの方にまはりましたのヴァイオリンを樂隊に入れますのは初めてなので、あの騒がしい音に消されて立ちませんが危い藝を致します時に高く細い調子で、「ラストローズ、オブ、サンマー」なんか彈きますとね實に恍惚と致しますつて、これは他の人の話ですよ、私は輕業に入る爲めに習つたお琴では有ませんでしたけれど、成り行きで



すわね、空中運動の時に低い三味線を合奏して六段や千鳥の曲を彈きますの、その時に見物の中の娘さんや奥さんなんか耳立てゝ居る樣子を赤い水引幕の間から、覗いて居る時の心の中、一人で手が動きますよ、私の入りましたのは大一座でしてね、太夫ばかりが三十七人で音樂部が十人、人夫や炊事係が皆で六十二三人の大家内ですが、規律の正しい義理の堅い事は私驚きますの利己主義の人なんて半分だつて有ませんし、主任の網笠と云ふ人が好人物ですから……丁度學校の篠原先生の樣な人ですよデップリ太つて色の白い袷にね

る月耕さんの大黒樣のやうで實によく出來た人です、其人が功七級なんですもの。どう手續をして其樣な所に入つたのかと敏子樣お思ひ遊ばすでせう、それは長い事情が有るんですの。お客樣の自分にはねえ首の苦しいのも忘れて顏一面の口開きながら空中運動に腦の下から冷汗を流したものですが、只今は大運動が有ませんと便りない樣に氣が變りましたし、此の頃は高見の見物で蟹の吹く泡程つまつた見物場の人を見下ろして、春の曲なんか彈じて居ますよ、さ毎日の業のお話いたしませう、聞いて下さいな、これは私の町より三里北に成ります○岡町と云ふ所で興行いたしました時の有樣で御座います、長らく打つ積でしたから宿には着かず、素人の家を一軒と部屋を一つ借りまして、同勢六十幾人が玩具箱をかへした程其處につめ込まれました、男子も女子も一所ですが……女子つてねえ主任の女將さんと囃方の三味線彈く人と會計係の私と同じ位な女學生風の人と炊事の方に小母さんが二人私と、それから太夫の中に小さいのが二人都合八人ですの藝人に似合はぬ規律が正しいので私など參りましてから四五十日にも成ますのに毎日顏合はしても挨拶の外口を聞ない方が澤山ありますの、それ位ですから他は推して知るべしですわ、ついぞ女の噂なんか一度も聞いた事は有ませんでしたがまあ御飯頂きます時の有樣!お母上樣とお二人暮しの貴孃では失禮ながら、とても御想像の出來ます樣な事では御座いませんの合戰です膳を寫しながら上目使ひにその樣を見て居ますと、活動寫眞のポンチ繪の樣ですよ、三度四度に頂いて終いますと、夕方からの幕ですから、それまで皆それ〴〵用事を致します、一室に十二三人も寄つて碁を圍んで居る人、小說を讀んで居る人の前は二重にも輪を造つて聞き人、大抵講談です、けれど私の兄分に成つて居る人は東京に居ました時某大家に一年半ばかり師事して居たと申ます。某大家つて敏子樣、貴孃の一番お好きな小說家、學校の欄に寄つて文章のお話致しました時あの樣な美しい小說を書く方はない」つてお話なさいました事が有りませうその方ですよ、分りまして?

それで兄だけは（私は此の人の妹分になつて入座いたしました）小説が分るものですから花袋さんのや青果さんばかり歌は晶子さんと薫園さんが好きなんです、今日譜本を開きますと兄の腰折れが有りましたから見るべきものは有りませんが、どうぞ御評をお願ひ致します。

ほの紅く薄き靄して蓮姫が化粧にあくる初夏の風、白百合に山の風來て吻けし嬉日なり君を戀たる、驕樂の滿て溢るゝ曾保舟や中に泣ます十六の姫、うつし身のせめては礒の藻の花に飾に足ぬ榮ならはとも、



小太夫は指角力を取る、暗い簞笥の影で情ない聲に日本外史を習つて居るのは梅ちやんと云ふ一等可愛子です、三味線の女の人に汐汲を教はつて居る者、積んだ夜具にもたれて私のヴァキオリンを潰された蛙の樣な音さして盗む樣に彈いて居る人、頭のオデキから血が出

て泣くもの笑ふ者、それは〱のぼせます、主任の方では此の次に廻る所の相談やら月岡さん(會計係の女)を前に置いて金の勘定、敏子様、月岡さんと申ます人はねえ大阪の簿記學校を卒業してそしてこの様な座の會計係して居るんですよ、着物の工合がハイカラですが少し下品です字は慥かなものですよ岡田流で水のたる様です、ほんとに面白いんですよ靜かなのも別世界、賑かなのも別世界、私は氣樂に繁ちやん(小太夫)に琴を敎へて居ます初めからですから六ケ敷かつたのですが手が動く様に成ますと男の子の様にも無いよく覺えて呉ます、え初め鶴の聲で只今は黒髮、それも明日で上がります、お琴が濟ましたら音樂部の中西さん(これは播州龍野の本屋の息子)にヴァヰイオリンを敎へます、此の人も下地は有り好ですからよく覺えます只今は越後獅子の合の手で御座いますよ、骨太い手に弓を持つて大きな鼻の穴を動かす時は浪六の小説にある書生の様ですわ、ヴァヰオリンを敎へる人が四人も有りまして昨日、樂器が十二圓のを五ッ買ひましたの藝に寄つてヴァヰオリンばかり四部合奏なんかする積りと見えますよ、夕方までかゝつて終る位で實にたより無いお師匠様です、私なんか心覺えのみで人に敎へるなんて事は出來るのでは有りませんけれど、主任の方からは私を先生ですつて……ホヽ、何の先生でせう、隅つ小屋の方で打込みの太鼓が鳴りますと又騷です、この方では一等の太夫ばかり三人一所に寄つて藝の相談して居ますの、市村さん(私の兄分)今晩は大運動が無いんですね、けれど八間三尺だけ演たらどうですこれは三番目の太夫で座中でも一等のハイカラです髮なんか長いものですが帽子の中に押し込んで有ます赤ネキタイのねえ貴公子風が有るんです大阪附近の酒家の財産家の息子ですつて「え、演つたら好ゝねけれども終りに芝居が有るんだつて云ふから三回位で結構だらう」兄は二十六で一等の太夫です、相談が纒りますと近くの市中だけ音樂部の人だけ廻らねば成ませんのですが私はそればかりは如何にしても出來ませんので先生と云ふ顏で止めて終ひました、その間に書きかけ

て有つた大幕の墨繪の雲龍がまだ其儘に目を入れて無いので金泥をさしたり柱かくしの綻びを縫ひましたり忙がしいんですが、それが私には又なく嬉いんですの習つて置けば何でも用に立ちますよ幕なんかは表の飾りを變へまするにつきまして三張も四張も書かねばなりませんが見付の大幕と水引の二張は私が書きましたの座に入りましてからこれで六つ目です雨の日が長らく續きましたものですから

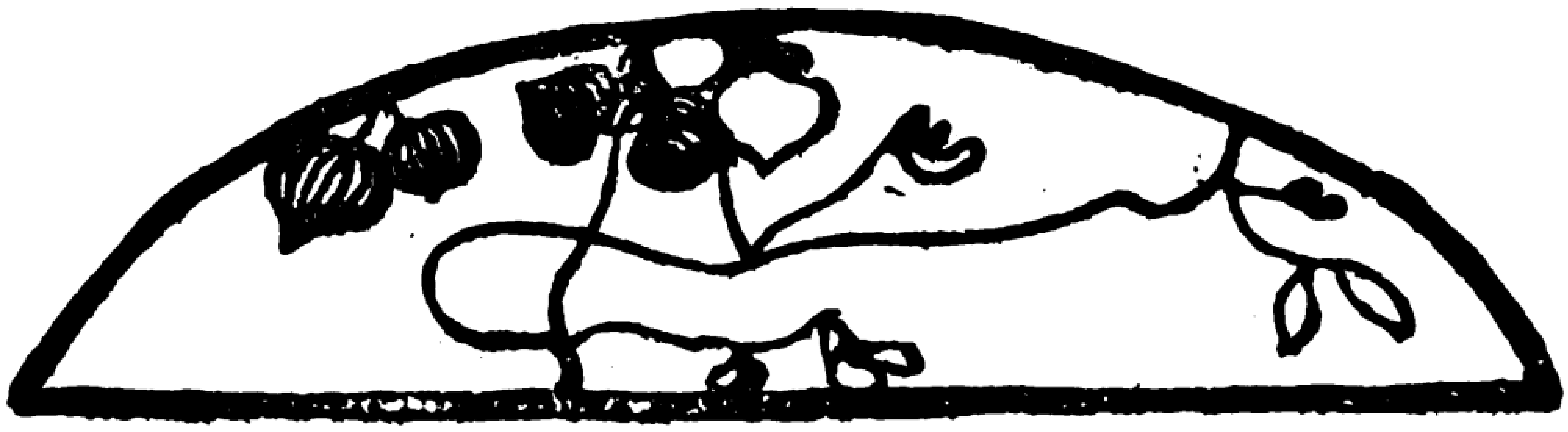


其の間にねえ、今晩は琵琶を三回入れて呉よと主任の方から申渡が有りましたので腕を見せるは此の時と、久しく出しませんでした樂器の塵を拂ひますとプンと鼻を打つ樟腦の香り袋を開いて絲を變へて置きました表の繪は東京の大家故富岡永洗先生にお願いたしまして都落の忠度を極彩色に書いて頂きまして、それは目がさめる樣ですよ、ランプのつきます時分から始まります私が入座致しましてか

ら、此ビタが新しく成つて、女流音樂家○○○○子の筑前琵琶劍舞入りにて御覽に入れ申候、いよ〳〵私は藝人に成つて終ひましたのねでもその爲めに私の大好きな衛府色の袴を着ける事が出來ますので嬉しいのですよ、袴を着ける柄では無いのですけれど紫繻子の帶でも御座いませんわねえ、それが私の大嫌な河中島や城山、本能寺、ばかりですから困りますの俊寛や湖水渡りが無いのですもの、その中に劍舞入りで一つ好きなのは赤垣源藏です忠臣藏に緣の有る○岡町ですから聞く人もホロリとして居ます今晩は私の方から賴んで高田の馬場と追分、終りが義家と定まりましたの危んで居る樣なもの〻扨て舞臺に出まして達(私の琵琶の銘)を抱きました時の心地!　崩れのあたりは水を打つた樣に靜まりますと驚く樣な聲が一人で走り出でますわ人は自慢が交らないと出來るものでは御座いませんよ、琵琶に入れます劍舞は少し勝手がちがひましてねえ演じにくいさうで御座います、少しつ〻文句と節を直しまして彈きますが……この樣な事が筑風先生に知れますと大變ですわ、爪も立たない程人が入つて小屋は破れさうです大奥から「もう一つやつとくんなはれ」なんて云はれますときの嬉しさは……そして淸國人が二人居ますがどちらも氣輕な人で淸國の話なんか變な日本の片言で話しますが面白いですわ、顏の丸いのが珍さんで目の大きいのが北京さんですの隨分面白う御座いませう今晩は月岡さんと那須野を合奏しますそれは餘興の芝居の前に入れますの月岡さんと云ふ方も琴は上手ですよすきさへあれば、病人の枕下でゝも千鳥ばかり彈いて居ますの、どの世界が地獄なのでせう、これでも一度は釣瓶繩の術をしごいて泣いた事も有りましたのねえ今は私極樂だと思つてます、今夜は六百圓上がつたが純益は三百圓だと主任の聲がします次々に白粉塗つたま〻芝居した人がシャッ一ッで宿に歸つて來ます、お茶が出てお菓子が出て炊事係の小母さんは卷袖の下から、ソッと大きなお餅を握らして呉ます兄と顏見合はして、フッと吹き出しますの小母さんは何故か私を可愛がつて呉れまして○田さんは私の娘

のやうに思はれて成まへん」可愛大阪言葉でいつも申ます、お琴の爪が取れて彈けない樣に成つた時、削つて上げますと云つて削つて呉れて居ます時に御飯がこげましてねえ苦い樣な御飯を食べされました事も御座まいすよ、「私わかりまへんけどあんた琴は上手だんな私にも敎へておくんなはれ」、五十にも成つてゝも音樂の心が有るかと思ひますと私もすきですわ、時々氣を付けて、小さいゴム櫛でも買つて來てやりますと手を取つて喜びます折れ櫛をさして居てもその櫛は紙に卷いて居て使ひませんの丁度、貴孃の所に居ましたお民婆さんの樣で御座いますよ、それでも敏子樣、私雜誌だけは手をはなす事が出來ませんのですよ、氣樂さうにと思はれる事も有りませうが兄は品位を保つ爲めや婦人の道を守るには……と御なじみの女學世界と婦人畫報、婦人世界と文章世界は兄が買つて呉れまして鞄をはなれませぬ、そして此の秋にはピアノが買へるのですが大きいから持ち運びに不便をかんじますからつて私が賴みまして琴の好いのとマンドリンを二つと音樂部の琵琶を二つ買つて貰ひます事に致しましたの、藝人なぞと申ますものは無敎育なものばかりかと思つて居ましたのに私立では有りますが〇西大學の卒業生も二人音樂部に居ますよ、これから福知山に參りまして、舞鶴まで參りますのは分つて居ますがそれから先は分りませんが北國の方に參りますのださうで御座いますよ御手紙差上ますのもこれを限りかも知れませぬ私は賤い藝人で御座いますが心までは藝人では居ませんの、貴孃から御手紙頂く事は出來ませんが、どうぞ心だけ昔の花香として、御手紙差上ましたら讀んで下さいねえ、長らくつまらぬ事ばかり申上ましてすみませぬ、世は春と云つて櫻に月に浮かれて居る人も御座いますのね、來春は又故鄕の人に成りますの、秀子樣春枝樣、千代子樣へは別してよろしく、ですけれど私の身の上は決してお話し下さいますな、暫くは……御幸福でお榮え遊ばせや。


森
勝手口
夏の夕



花嫁日記

紅涙女史

一日、實にや小春日和の麗かさ、空は一面清くすみ渡りて、蒼穹さながら拭ふが如く、さらに一點の雲だになく、風和らかに鬢の後れ毛を弄らるゝ心地よさ、遠ち近ちの山又山には、薄すき靄をこめ、織り出す錦何とやら、見渡す限り木々の梢は紅葉して、其風情云はん方なく、累々たる柿の實赤く照り榮えて時を得顔なり、田には滿目穣々として、黄金の雲を湛え、十二分の豐作とて往き交ふ農夫の足並もイト忙がしげなり、昨日濯ひおきし古るき二三枚の袷を張り上げんと、此風光に恍惚しつゝ仕事にイソシミつゝありし折柄、不圖來客ありとおぼしく、奥の八疊にては兄様やら母様のお聲など、風のまに〳〵、手に取るやうなり。

此間から、度々妾しの婚姻の話が出る、何だか氣恥しく思ひ居たりしに、夕餉の膳を了へ跡片付けにかゝりしに、嫂さんよりお母様のお呼びよと傳へらるゝまゝ、室に到れば母様兄様御揃にて被居る、何御用にやと、伺ひしに母様莞爾「マーおよりよ」と傍近く坐らせられ扨て仰るには、先日より井上様が月下氷人役として、度々御來訪ありしは、お前を是非にと懇望せらるゝなり、今日は否やの返答聞きたしと、ソレハ〳〵鄭重なる御相談、先方の事は能く存じ居ることゆゑ、又とあるまじき良縁と思ふものから、直ぐにも返事し

たかりしなれども、婚禮は女として一生の大禮なれば、念に念を押しての事と、ソコハよきやうに此母がお話をしておいたやうの譯、兎も角も本人が第一であれば、おまへの胸をよく聞て置かねばなりませぬ、これはお婿さんの寫眞とて井上樣から預かつておいた、次にお前のをと望まれたから、此間三光軒で撮つたのをあげておいた、兼ねてお頼みしておいた、叔母樣が先方の事を取調べてお出た故詳しい事は兄さんよりと、お母樣のお言葉の終るも待たで、兄樣がイト重もき口調もて、諄々とお話あり、俯し目がちに承はりしに、先方の家と言ふは某市にて藩祖豐氏公以來の門閥家にて、藩政の頃は番頭格とて、食祿千五百石、今の舅樣は文武兩道に秀で、二代の君公に仕へ、功勞殊に多かりしも、維新革命と共に世を果敢なみ、爾來優游自適、文雅風流をもて、閑日月を送られ今は頽齡古稀を過ぐるも、尙ほ矍鑠として意氣尙ほ壯者を凌ぎ、夙とに、隱居せられて餘世を樂しみつゝあり、姑も似たもの夫婦とやらで、中々達者にて優しき氣立てのお方、召使ふはしため抔にても、一度も叱りを受けたことはなしとやら、そして武士氣質の、家庭とて苟めにも浮薄な風はなく、其の内に人となりし子息殿こそお前の良人にて、當年取りて二十有八、七年以來ある會社に勤められ、今は樞要の地位にあり、敎育は十分にあり、容貌から、風采から、社中の呼び物とぞ聞えし。そして操行端正、君子風の人にして人格の高きこと、今の若い者には儔ひ稀なる人物、而かも、兩親に仕へて孝心深きこと、市内に於ては誰れしらぬものなき程なり、孝は百行の基にして、萬善の本とやら唯々此一事にても十分なり、それさへあるに、家には若干の不動產さへありて、之より生ずる收入の全部は年々の貯蓄となりて、富の基礎を築づき上げつゝありて何不足なき暮し向き、古き敎筆にも、嫁を貰らふなら、身分の卑くき所より娶れ、娘を嫁するには我家より身分の高い所を選べと言ふてある、斯る手がたき家風の所へゆけば、いつまでも謙讓の德を失はいで、お前の爲めには此上もなきこと、殊に婿たる人の、人格は前にも云つたと

ほり、眞實に、お前は仕合せものだ、婿どのには、お前より此兄が惚れた、どうぢや異議はあるまいの、と仰有たお母樣は、お前の運が向いて來た能く姑樣に事へねばならぬよと、注意して下さる、妾しは恥しさが一杯にて、自分ながら不思議な程、意氣地がなく、兼ての嗜みもあらばこそ、輕く頷くまゝ、お答も只口の中、『よきよう』にと申上げしが、精一杯、そこらには穴はなきものかと思ふ程、きまりが惡しく、辷べるように、其座を外づし、ホツト一と息茶の間にて、何に御用なのと嫂



さんより、クスグラレて亦も度を失ひ、妾の室に逃げ歸りぬ、其晩は臥床に入りましたが、過ぎ越し行く末の事など、偲ばれて眠られませんの、はては種々樣々の感想が浮び出て、小さき胸には包み得べくもあらず、夜一夜まんぢりと夢も結ばで、怎麼な人？第一に思ひましたが、妾し風情にて、何うして良人の機嫌を取り得るであらうか　お舅姑樣には、何して事ゆれば宜いだらう？家風は違ふし、まごつくような不體裁なことはせざる乎、はては妾の不束から、延ひて母樣兄樣の名譽に關

するやうな事になりはせぬか、と是れが第一の苦勞でありました、何に案じるよりは產むが易いとやら、誰れにでも出來て行くものを、妾とて聊かの敎育はあるものを、見事に仕遂げてお目にかけようやつぱり、取り越苦勞ではあるまい乎と思へば、何となく勇氣も出て來る寫眞の主はと見れば、其風采が見上るやうで、此の御方と夫婦に成るのかと思ふと、身がすくむ樣で、學校で敎はつた料理法や、家政學を實現する、時期が來たかと思ふと、愉快にもあり嫁たる責任は盡し得ても母たる責任は何んなであらう？　家庭敎育ホヽヽマサカ未だ母親でもない妾が……然し斯樣な考へはいくらも出て參りますから不思議ですわ。

其後、話の步もずん〳〵と進行し來る十日が、此上もない黃道吉日とかで、其日に式を擧ぐる事になつた、先方よりは結納として結構なる數々の賜あり、後にて拜見し小さき胸にも喜の波を深はせ、不時の鼓動を覺えぬ、さあ、それからと言ふものは妾の心が浮々して、少しもおちつきが出來ませんもの、自分ながら不思議な程で、何だか嬉しくも悲しくもありて、何事も手に付かず、或時は茶碗をこはし、母樣に叱られ、或る時はボンヤリ庭の落ち葉を數ぞへ杯して、無意識に緣側に佇むなど、人目にかゝらば嘸ぞ可笑しき事ならん、と思はるゝ事ばかし、ナレドモ日一日と暮し、準備や支度に惱殺せらるゝにつけ、いつしか其事もなくなり、母樣にはあゝも仕度し、かうも仕度しと、宛で火の如くなりてのお騷はぎ、明日が、愈々其當日とはなりぬ。

△結婚日

十日、家内の者は未明より起床して何に彼と、妾の嫁入道具を手傳ふのです、母樣はあの羽織も、その紋附もと、自分から立ち働いて心配されるのです、間もなく髮結が來て、丸髷を結て貰ひました、勝手の方では早や料理人が來て、トン〳〵と、爼の音をさせて居る、來る人も、來る人も御目出度と、先づ挨拶をする、家は喜と笑ひに滿ちて春のやうなり、髮が出來上つた

ので、母様が往來して見あげ見下ろし、何とかう恰好が能く出來たのやらと、満足の笑を湛えられて、最早夕刻に間もあらじ、お化粧が終りなば、奥の座敷に御出よと言ひつゝ出て行かれました。

奥座敷にては、母様兄様を始め、向ふ側には叔母様なり、近隣の方々、孰れも禮服にて御着坐、途出のお祝とて、お銚子に、塗り盃、種々のお料理は配置さるゝ、お膳に向けば、今日は別けて妾の嗜好なものを主に献立てゝあり、難有き親心も讀めて、ホロリと零す感謝の一雫、されどこれが處女としての生活の終りかと思へは、坐ろに胸も一杯になり、箸取る手だもイト物うく、皆様の祝ひ言も、左右なくば耳に入らず、只永年、住み馴れし、此家を離るゝかと、名殘も惜まれて、波立つ胸を、おさへつゝ、やつと其座を濟まし室でホツト一息ぼんやりと机に凭りつゝありしに、奥座敷にては歡語の聲も、溢るゝ許り、何時果つべくも見えざりし。しばし休憩ふ程もなく、今は早途出の刻限に、間もあらじと思へる刹那、兄様には母様と共にお出あり、イトモ嚴粛なる態度もて細々との訓誨を下だし玉ひたり、其概略を述ぶれば、妹としてお前に對する此兄が



言葉も最早是れ限りなり、必ず粗略にな思ひたまひぞ、昔より嫁に行くを儒敎では、「歸と言ふそは、今までの生れた此家は假の家で、其實は、先方に歸つたのだから向ふの舅姑こそお前の爲には、生みの親なれ必ず孝養を第一に心がけよ、次に夫婦は一身同體と古くより敎へ草もあり、苟にも夫の機嫌の取れぬようなものは己の妹ではないぞ、總て如何なる逆境に立つとも、一旦嫁した以上は再度び此閾を跨ぐような、不心得でゐては此兄が許さんぞ、男子に献身的の覺悟があると同樣に女子もまた家に對し夫に對して献身的の覺悟を備へて居らねばならぬ、少し古風なやうだが、女大學流に其身を檢束して女子の美德たり、將た生命とも言ふべき從順てふとを忘るゝな、今日の、男女同權や、自然主義だの、個人主義だのと言ふことは、得て誤解し易きもので、我儘を獨立と間違へたり、辛抱を卑屈と思つたりするのは、何事にも、自己本位を、好いと信ずるから起たものであつて之が爲めに、其身を誤るもの幾許ぞ、どうしても、此兄は絕對的に家族主義を主張する、必ずともに、婦道を全うし父母の名を辱むる樣な事があつてはならぬぞと仰有る、謹で承りましたと潔くお答したら安心したぞよとお母樣のお添言、見交はす顏には保ち兼ねたる涙の露、今更ながら、恩寵の厚きに泣かずには居られなんだ、かくて其夜イト莊重なる、合衾の式を擧げ、新生涯の人となり了りました。

△新家庭

十一日、午前六時に起床し、旦那樣、お手水の手傳抔して、傍ら自身も口漱ぎ顏洗ひ、身仕度を濟まし、早々朝餉を了へ旦那樣と共に、御先祖のお墓に參り、閼迦の水を手向け、菊と千日紅とを具へ、恭しく拜跪して成婚を奉告す、午後よりは當家の姻戚、近親の方方御披露として招待、旦那樣には、何に呉れと、お客の接待に配慮なさる、妾しは、曾て學び得た遠州流もてお床の間を飾る、斯くて間もなく、門前俄かに賑々しく、數多の來客あり、一々御挨拶を濟ませ、主客歡

喜の裡、杯盤の間、に周旋し、午後十一時頃、ヤット宴を撤し、それより加勢人等を犒ひ一時過ぎ臥床に入る。

十二日、朝より西風いと烈しく、重ね着しても少し寒きを覚ゆ、本日も亦旦那様の知己及び近所の心易き方々午後より引き續き御入來、新婚の喜びを申述らる昨日と異ならず、中々の盛宴にて、賑々しさ言はん方なく、寢に就くこと午前二時過ぎなりき。



十三日、晴、早朝より身仕度にかゝり、午前九時頃旦那様に伴はれ、車にて親戚知己の方々、廻禮に參り歡待をうく、旦那様には御機嫌よく、妾の分まで、如才なく御挨拶をし下され、中々に嬉しかりき、方々に、參りなば、如何に御挨拶申上んかと、其れのみ腦を病まし居たりしに、そは一つの杞憂にて了りぬ、最後に、里方へ參りしに、母様や、兄様の御喜び、中々拙き筆もて、悉しく書き得べくもあらず、其晩は、泊り、翌日夕刻歸宅す。

十五日、未明より、細雨霏々たり、一週間の御暇も昨日迄にて充ちたれば、旦那様には、八時頃御出勤、其後にて、奥の離に參り、何に彼と、御用を足しつゝ、姑様より、藩政時代の風俗、及び世の有樣などのお話、耳新らしく覺えたり、お舅様は當年七十有六、御老年には似もやらず、心胖ろく、體豊かなりで、福々しき御肉附、雪を欺くやうな顎髯は、毿々として膝に垂る

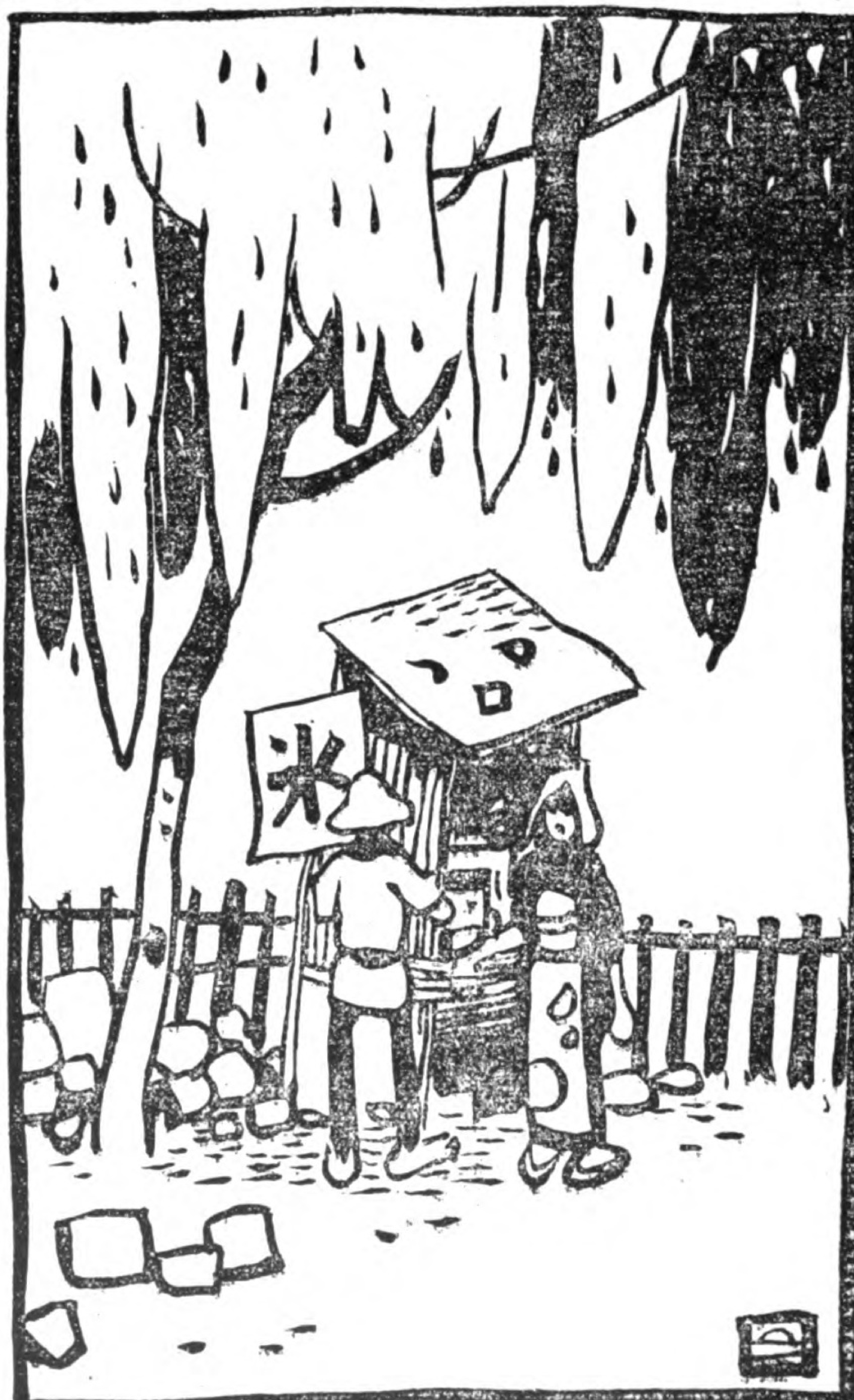
る程なり、生れてからまだ藥の味を知らぬとの玉うやうなお達者さ、寔に多藝多能で、文武の道は言ふも更なり、詩歌誹諧茶の湯生花抔、皆一流の奥を極めらるるとか、圍棊も亦嗜好の主なる者ときく、其外園藝は大の御得意だし、前栽の植木鉢やら、後園の花壇抔、目も醒むる許り、四季折々の花は、妍を爭ひ、美を鬪はし、皆其御丹精で、彌や榮えに榮えつゝあり、左れば、老後の今日、閑日月を樂しまるゝとは言へ、お體は中々忙しげなり、骨董は、年來の御好とやらにて、珍什名器數多あり、藏書の如き、當市に於ても、他になき程のよし、茶人棋客など出入も亦中々に多く、母屋より、隱居屋の方、却て賑な位、此日御姑樣より、御家事の切り盛をせよと命せらる不束な、妾にはと、辭退致せしに、遠慮は用なき事ぞと仰有る、イト、氣立の優しき、お方にも似ず、立居振舞は、中々ハキ／＼として、被居る、而してお慈深き事、生みの母にも增して、何に彼と、勞はり給ふ難有さ。

△日々の行事

家風の異なりし、新世帶の事なり、主婦として何から手を付くべきやら、思ひ煩ひしも、兎に角、秩序と言事を、第一に立てゝ、勤を經とし、儉を緯とし、何事も、約やかに、質素を旨とし、行かねばなるまい、旦那樣のお話には、一家の生計は、專ら自分の俸給にて立て、不動產より生ずる收入は、年々積み立るの方針なりとぞ、左れば入る事を量りて出す事を爲すは、家事經濟の要旨なり、勉めて濫費を節すれば、俸給の内よりも、一割以上を剩し置くは、いと易き事なるべし、疾病其他不時の支出に、事缺かざるようせねばならず、而して奉養の資は、如何に嵩むとも、惜なとは、旦那樣の仰せ御尤にこそ。

毎朝第一にお松をして、隱居屋の手水鉢を洗ひ水を替へ、緣側の拭き掃除をさせ、火鉢に火を入れ、湯をさし、茶器一切を、差上置き、御機嫌を伺ふは妾自身の勤とし、便所の掃除穢れ物の洗濯は、毎土曜日に極

め、日曜日は、旦那様兼ての御心勞を、慰すべき、一日なれば、料理向には殊更念を入れ、飽く迄、家庭の慰藉につとめ、一家團欒の歡を盡くす事になすべく、食事起臥の時間は一定しおき、家の周圍は、清潔を専らとし、衛生を専一に心掛くべく、何事にも、理想に背かざるようにと致します、



或る日の事なりき、茶會とて、二三の來客あり、豫じめ、お茶室の掃除をなし、庭をも、掃ばやと、覗きしに、昨日、旦那様の御仕事にやあらん、掃痕尙ほ地に印し、纖塵を止めず、頃しも數株の楓の、見事に色付きしを眺め、不斗千利久の故る事など、思ひ出しまゝ、枝を搖りて、態ざと落葉を散ら

し置きしに、いつ、お男様の知らせ玉ひけん、清少納言を、今見る心地すとて、家庭の好笑柄となりしも可笑し。

△良人の性行

容姿端正威ありて猛からず、温良にして、親しみ易けれども、亦狎れ易からず言訥にして行敏とやら、何を爲さるにも、身を以て先だち、之を率ゆると言ふ遣り方、一家能く齊ひ、上下各其所を得、而して『ちやん』と、秩序が、立て居て一絲亂れず如何なる多忙の時にも、悠揚・逼まらず、之ぞと目立つ程の、嗜好とてはなきようなれども、常に客を愛し、友に交るの深き、以て人の出入も少なからず、殊に御兩親を大切に、膝下の歡を盡され如何なる辛勞も厭はさられず、實に晴にも優る程なり、自發にかまはず親を大切にして呉れとは、結婚當夜、開口第一の、仰せ言なりし。

此處に來てより、一ケ月計り立ちますと、或日の事、妾の身に取つて、一大打擊が、起りました、旦那樣の不在に妙な人が入來した、そして、奥さんにでも宜いから、お目にかゝりたいと、申ましたが、今迄、人の噂に、鬼の如く、聞て居た、高利貸です、是非、今月の末までに、三百圓の、金子を、返濟しろ、出來なければ、訴ると嚴重の談判です、私は、良人が、歸つたら、お返事をしよう、と追返しました、けれども、其時の、心持つたら、今に忘れません、旦那樣は物堅き君子肌の人なれども、矢つぱり以前は放蕩でもなされて忌はしき、お金を借りて、おいでのか爾う思へば、机の抽出に藝者の寫眞が一枚藏てあつたが、あれがお馴染と、云ふものか知らん、なんぞと、餘計な嫉妬心まで、起して、其時程、心の悲しく淺ましく、思つたことはありません、家庭の幸福も、何も彼も、忽ち消え了つたやうな、氣がして、心の中で、泣て居りました、それが全く、妾の邪推で、否な只、驚きの餘り、極端迄、邪推を逞ましくしたのです、さういふ時に、善い方向へ、考へる事は、決して、ありません、惡い方へ計り考へて、猶悲しくなりました、晩になつて、

旦那様が、おかへりなさつたので、其御話をしますと、あれは、同僚の某が、借金に、判を捺したが、連帶責任になつて居るから、此方へ來たのだ。本人は、遠方へ往て居て、迚も返金の見込はなし、自分が、何處までも、責任を負はねはならぬ、金には、驚かないが、倘し此事が、兩親の耳に入り、苟めにても、御心勞をかけては、濟まんと、頻に思案をなさるから、妾は其時、勿體ない事ですが、マダ旦那様を疑ひました、お友達のお金なら、貴郎が被る譯もありますまい、貴郎も少しは、關係なさつたのでせう、と、申ましたら、決て爾でないと仰有る、それならば



机の中にある、藝者の寫眞は何うしたのですかと、痛くない腹まで探りますと、其友達が、あの藝者に溺れて、墮落したから、非常に苦諫して、手を切らせて、遠方へ友達を遣たのだ、その時、友達の手から取り上た寫眞だ、斯う申されます、それでもまだ妾は充分に信ずる事が出來ません、平生嘘を吐かない、旦那様だけれども、此事許は、怪しいと、疑つて居りました、人の妻となつて、良人を疑ぐる位、物悲しく、情ない、事はありません、良人の言葉を、信用する事が、出來ない位なら、天下に何を、信ずる事が出來るでせう、實に淺ま

しいものだと、あの時位、不愉快に思た事はありません、彌しますと、旦那様が翌日高利貸の家へ、出向いて、談判した末、三百圓を、月賦で返す事に極めて參りました、それからと申すものは、毎月の收入を殆ど半分近く、高利貸の方へ取られる始末、何に彼と物足りなくなつて、妾は始めて辛いと言ふ感が起りました、餘り口惜しくなりましたから、三百圓位のお金なら妾の里に話して出して貰ひませうと申ましたら、中々承知致されません、自分は女房の實家へ金を借りる程の意氣地無しでもない、自分の責任は自分で果すと言つて一年餘り苦しんでをりました、其内に漸く事の眞相が妾にも分りました、そして全く墮落した一人のお友達を助ける爲に、其人の借金まで背負て獨りで苦しみになつたと、疑の心は悉皆晴れましたが、さあ爾うなると、妾共の苦むのが馬鹿々々しくつて堪りません、他人の爲めに斯んな苦しい思ひ迄して、借金を返して遣るなんて、何といふ損な事だらう、旨く掛け合て返さないでも濟みさうなものだのに、旦那様があんまり正直過ぎると妾の淺果な心から窃かに不平を起た位です

それから三月程すぎて、其本人のお友達が突然、臺灣から、歸つて來て、實に君の恩は忘れない、君の損害は此通り辨償する、金錢の損害は償うても、君の迷惑は辨償し盡せない、其恩は末ながく報ずると言て、それから後は、旦那様を兄とも親とも思つて、何事にも親切にして呉れます、それがつい世間の噂になつて、旦那様の物がたい評判が段々高まりました、其時妾しは生涯忘られない程愉快を感じた事があります、妾が實家の兄に叱られましたので、其叱られたのが何よりの愉快です、以前借金返に苦しんで居る時分には、妾も折々實家へ參りて、母様に愚痴を申た事もあります、それを兄が能く知つて居りまして、或時妾に申ますには、お前程不心得な者はない、隆也さんが人の借金を背負つて、苦しんで居る時に、なぜ家へ來て愚痴を零ぼした、愚痴を零すべき事でない、本來なら隆也さんの難有い事を感じて、其身の幸福を悟らねばならない、若しも隆也さんが、自分の責任を遁るやうな工

夫をするとか、或はお前を頼んで家へ金を借りに來る樣な意氣地のない人であつたら、それこそお前が不平を起しても仕方がない、が隆也さんの仕方は實に男らしい自分の責任は自分で果す、と言ふ立派な覺悟のある人物だ、友達に對してすら其通りであるから、妻に對しては、尙其以上の覺悟を持て居るだらう、乃ち人の良人となつては、飽くまでも、良人たるべき責任を盡す人だ、して見ると、お前の身に取つて、是程難有い幸福なことは

顔と足



ないではないか。世の中に何にが役に立たんと言つて、何事にも自分の責任を遁れたがる人位、腑甲斐ないものはない、外へ對して、責任を遁れたがる人は、我家庭に對しても主人たり良人たるべき責任を盡さない人だ、世間には、男子の癖にさう云ふ意氣地なしが多いけれども、隆也さんは實に珍らしい、其隆也さんの眞價を悟らないで却て不平を言ふとは重々お前の不埓だ、以來何事があつても隆也さんの、言ふ事に、背いてはなりませ

んと、妾は散々叱られましたが、其時の嬉しうございました事、もつと〳〵叱られても宜いと思ひました、それから妾も始めて我身の幸福な事を感じましたが、一つよくなれば外の事も段々と、好くなるもので、其事の信用から旦那様の地位も次第に進みますし、色々の幸福が諸方から舞ひ込で參ります、倘しも以前借金で責められたとき妾しの思た通りに、責任を遁れる工夫したり、實家の兄に金を借りたりするやうな旦那様でしたなら、妾も決して斯んな幸福は得られないです、つまり私をして一時苦しい思ひに逢はせて與れた樣な良人ですから、妾の幸福になつたのですが、娘時代の理想にそんな事は決して考へられません、勿論世間の娘には、妾よりも、ずつと見識の高い人があつて爾う言ふ場合に、よくこそ他人の借金を引受けて與れるよくこそ物足りない世帶から半分の收入を借金の方へ、廻はして與れる、實に有難い人だと、感じる事が、あるかも知れませんが、先づ〳〵寡ない方でせう、所謂娘心の淺果な理想から、申ましたら、妾と同樣に、或は良人を疑つたり、或は馬鹿らしいと思つたりするやうな事がないとも限りますまい、して見れば娘時代の理想なんぞ、あんまり當てになるものではありませんと、沁々感じました、それから、ずつと一家も能く齊ひ、何の不足を感ずる事もなく、上下相親しみ、琴瑟相和すてふ順境のみに立ちて、今日に至りました、神の大なる御惠を感謝すると共に、倘ほ行く末の幸多からん事を心に祈りつゝ筆を擱くになん。


お茶の水



予が實見したる
米國成金婦人の生活

田村松魚

單に一家の主婦と云つても之れには種々の階級がある。米國は自由平等を標榜した國柄であるから、日本のやうな貴族平民と云つたやうな人爵的階級はない。八百屋の亭主が大統領を友達かなんぞのやうに思ひ、大統領もまた此等の人々と親しく握手してゐる。だから階級に上下の區別は無くして四民平等であるべき筈だが、併し貧富の懸隔が甚だしいから自づから生活の程度から割り出された所の階級が日本などでは見えられない程甚だしいものがある。黄金崇拜の米國のことだから金錢の勢力が形造つた階級の下に人間は屈從しなければならぬ。其所で單に一家の主婦と云つても種種此階級の種類があるので、一寸と其の標準の捉へ所がない。どれ位の程度の家庭を標準とした一家の主婦を此の記事の主題にするといふことは六ケ敷いのである。

例へばミリオニアの主婦はそれ丈けの大身代を背負つて切り廻してゐるし、裏店の九尺二間を城廓とした主婦さんはまたそれ丈けの家政にしかたづさわらぬ。同じ紐育市の中でも幾何丈け其の階級があるかわからぬ。

獨り貧富の懸隔丈ではない、其の一家の主人の職業によつて自づから家風がある。家風によつて主婦の立場が自づから違ふ、此等は歐米でも日本でも同じことである。

それから婦人の教育の程度や、婦人の出身の場所や或は其の年齡や、及び其婦人各自の性格――假令ば極

く內氣の質であるとか、派手好きであるとか——其等の相違から單に一家の主婦と云つても十人十色であつて、いろ〳〵な家庭が此の女王の面目から現出してゐるので、一概に斯うと獨斷的に云ひ切るわけには行かぬ。

殊に都會の家庭と地方の家庭とは非常な相違がある東部の紐育市と西部の桑港市とは同じ大都會であるが中央と、地方とで生活の相違は甚だしい。また其土地土地によつての風俗習慣が自づから家庭の朝夕の事々物々に見はれて來るので、一家の主婦の取るべき態度も隨つて違ふ。

だから桑港の一家庭を觀察した眼で、直ちに米國の家庭が斯うで、米國の一家の主婦は斯うだと速斷するわけには行かぬ。ペンシルヴニアあたりの田舍の家庭にゐて華盛頓や紐育の市中の家庭へ這入つて見ると、同じ富を持つてゐる家庭でも非常な相違がある。それから南部へ行けば南部の風俗があり、北部へ出ると北部の風俗がある。

米國合衆國は五十餘州の大ステートから成り立つた合衆國だから、其ステート〳〵によつても著しく異つてゐる。此等は東京と大阪との家庭がそれ〳〵違つてゐるといふことゝ同じやうなもので、別に不思議はない。唯要は米國にも種々な家庭があつて萬人一樣でないといふことを承知して貰へば好いのである。

其所で自分は自分の直接觀察した家庭の樣を五ツ六ツ實例として擧げて見やうと思ふ。讀者は自づから一家の主婦としての米國婦人の俤を此の間に想像することが出來るだらうと思ふ。

紐育のブロクリン側で、プロスペクト公園の近邊に赤煉瓦製造の立派な家庭がある。主人はミスター、Kといふ人で、或る小商人であつたが、或る年紐育一體が非常な不景氣、金融必迫で貧乏人は立つ瀨がない其の機を見て取つてK氏は十仙店の勸工場を出して貧乏人の家庭に向きさうな臺所道具やら、其他の日用品を頗る安價で賣り出したのが大當り、それが抑の食ひ附きでめき〳〵身代を殖やし、今は大ホテルのマヂソ

ャもしてゐる、立派な呉服屋も持つてゐる瀬戸物屋も持つてゐる、地所もある。プロクリンでは若手の紳商で、K氏と云へば誰でも知つてゐる位の一代身上では屈指の手腕家である。

此の人の妻君は女優の上りである。女優と云ひ條、大舞臺を背負つて立つてゐたのではない。紐育やプロクリンの安劇場のコーラスガールをしてゐたのである此のコーラスガールといふものは俗にピンクタイトと云つてピンク色のタイトを穿いて大衆で舞臺へ出てクーデングウーマンの支配の下に合唱をやりつゝ舞踏をする踊子なので、一ト役を引き受けて芝居をする役者ではない。

だから「ピンクタイト」と云ふと一種卑しむべき意味が含まれてゐる。併し此のコーラスガールの中から名女優が出ぬとも限らぬので、今の妻君のメリーマナリングなどは元と此のピンクタイトであつたのを確かヘンリーミラーであつたか、能くは覺えてゐないが男優の立者が其中から引き抜いたのであるといふ。だがコーラスガールの中から名女優は中々出ないさうで、大槪はピンクタイトで墮落してしまふ。だからピンクタイトは墮落を意味してゐる位である。

話が橫へそれたが、此のK氏の妻君も矢張り此の仲間であつた。藝と云つても云ふ程のこともなし、容色と云つても目立つ程でもなかつたが、何處かに人をチャームする丈けの處はあつた、その大きなヴアキオレット色の眼が若い男の心を惹き附ける色を持つてゐたので、二十人三十人と一種の衣裳をつけて舞臺を躍つて歩いてゐる中で、最も人氣があつたから、ミス、リングと云ふと一寸と名が賣れてゐたさうで、旅から旅と稼いでは紐育に歸ると、プロクリンのスター座で一とシーズンを打つことになつてゐた。

丁度其の頃、K氏が安物の勸工場で大當てをした時代なので、以前からの馴染であつたミス、リングの足を洗はせて內儀に直したのださうである。

前身が斯うであつて、今は屈指のミリオニアの奧樣である。此の奧樣は如何いふ風に一家の主婦として家

政を切り盛つてゐるであらう。

自分が此の妻君を見た時は、丁度三十二、三であつた。身長は尋常よりは少し高い方で、何方かと云ふと瘠ぎすの方、チエストナッツ色の髪の毛がたつぷりあつて、顔は面長の下ぶくれの方、眼は成程好い目であるが、それより目立つて自分の注目を惹いたのはその鼻の先の赤いことで——コーラスガールの時代には、斯うではなかつたであらう——此の婦人が飲酒家であるといふことが直ぐに分つた。一體に華やかな質で一ト目で素人ではないといふことが分る。



米國は時間を正確に守る所だと誰しも思つてゐるが實際は左樣でないことが何程もある。米國の汽車の時間表の標準にならぬのは別として、米國の家庭へ遣入つて見ると、随分驚く程時間を不正確に

してゐる所がある、此の妻君などは最も其著しいものであつた。

或る時は六時頃に襯衣の儘で飛び起きて、パラーの掃除の濟まぬ所へまで出掛けて來て、ピアノを叩いたりなぞすることがある。さうかと思ふと十時十一時頃までも起きて來ない。病氣かと思つてレデーメードに聞いて見ると、左樣でも無いので、昨日カルタで夜を更かして酒が大分過ぎたやうだといふことである。

大概は先づ八時から九時までの中に起きることゝなつてゐるが、主人は七時の食事を濟まして、直ぐ事務所へ自働車で出掛けるのだから、殆んど主人と朝食を一緒にしたことはない。主人の出勤する時はまだ妻君は夢を見てゐる。けれども今もいふ通り、間々思ひ出したやうに早起きをすることもある。そして、さういふ時は何時も早く起きたことを自慢して、そして眠むい〳〵と云つてゐる。主人は笑つて聞いてゐる。

一體に米國は朝寢の國であるが、此の妻君などは朝寢の女王であらう。朝はいつも襯衣の上へ「キモノ」を羽織つて食堂へ出て來る。「キモノ」は日本の友染模樣で一枚は紅入りの六歌仙の模樣、一枚は墨繪の龍であつたが、朝は能く墨繪の方のを着てゐた、其の他にもう一枚龍田模樣のがあつたが、それは大事にして平生餘り着なかつた。

驚くのは此の妻君で朝から三鞭をのむ。時によるとスカッチハイボールなどをあほることがあるが、大概はシャンペンだ。飲物は三鞭に限るといふのが此の妻君の自慢にしてゐる所で、ジンヂャエールを飲んだりレモネードをのむなどは野暮の骨頂だ、と自分に説明してゐたことがあつたが、朝から三鞭と組み打ちをするのも餘り賞められたことではあるまいとをかしく思つたことがある。

それに此の妻君程食物に不規則な婦人は無かつた。何處の家庭でも、朝餐、晝餐等それ〴〵料理が定まつてゐる。例へば朝ならグレープフルーツにビスケットにトースト、極く好く珈琲を自分が出して皆に其手前を誇る、朝は凡て輕くて凝つた食物を僅かばかり取る

といふのが米國の上流家庭の誇とする處で、レデーは此處の調子合ひによつて家庭に於ける其價値が決まると云つた位のものだ。

それを此の妻君と來ては朝早くからプラスターのサラダを注文する。ラムチヤツプの血の出さうなのを命令ける。カヒーは拔きで、三鞭をおほりつけて、朝から晩餐にでも招ばれてゐる氣で食卓に坐り込む。それも前日からそれ〲と料理番に注文を取つて置けば、料理番は其心得で色々用意をして置くのだが思ひ出したものを、フイと突然に注文をして來る。外の料理商賣の所でも斯う不意では少々面食はざるを得ないのに新参の料理人などは呆れて手が出ない



それでまご〱してゐると直ぐに小言が降つて來る。氣の短いものは無法な注文を怒つて一日で出て行つて了ふ。だから料理番が少しも居つかぬ。けれども中には此の呼吸を呑み込むと、チヤンと注文の來さうなものを大略用意して置く、其所で注文が來る、得たり賢しで其を調進へて出す。隨分朝から大々しいサラダボールに眞紅に鎧つたラブスターの花々しいサラダがテーブルに乘るなどは珍だと料理番は自分のこしらへたものながら驚い

てゐる。妻君は非常な御機嫌で、ほく〳〵ものでフォークを附ける。

そして此の料理番を褒めちぎつて直に五弗の札は料理番のポケットに這入る。月給が上る。そして金で料理番の足を引き留めて、妻君は勝手な注文をして贅澤がして見たいのである。

妻君の平生からの言葉に、此の家は何程入費が掛つても好いから、どし〳〵肉屋なり八百屋なりから最上等の品を買ひ入れろと、云ふのである、斯ういふ命令があるから料理番は助かる。其かはりに不意の注文に弱る、何んでも天は二物を與へずだ、といつも料理番はこぼしてゐる。

妻君は勝手に食事をすますと、それからお化粧に取り掛る、家事向き一切のことは少しも關係せぬ。雇ふである老婢に萬事を切り盛らせて、十二時頃に漸つとお化粧が出來る。

一時頃の晝飯の時にも主人は留守だから、自分一人勝手なものを召し上る、三鞭が矢張りテーブルに乘る

五歳になる男の子がある。それは子守が一人附いてゐて凡て其の手に任して少しも干渉をしないで自分の生んだ子でないやうな顔をしてゐる。

午後は能く晝寢をしてゐる、折々婦人の來客があると骨牌を弄して遊んでゐる。ピアノを彈いてダンスなどもやつたりしてキャッ〳〵云つてる處は十五六の娘のやうである。玉突を折々やる。讀書は殆んどしたことはない。其癖新版の諸雜誌、小說類は悉く買ひ入れる。圖書室には手のつかぬ新版物がヅラリと幷んでゐる。折々ブランコに腰を掛けて、靴の先で、テーリー(玩弄犬)の頭を輕るく蹴ながら、極く趣味の低くさうな赤本を拾ひ讀みにしてゐる。折々喉が乾くと、ハイボールを命ずる。

午後から自働車で婦人倶樂部や、芝居や、或は友人訪問に出掛けることがある。伴女を乘せることもあるが、大概は一人で、極く派手な自働車服で、一人で乘つて大道の風を切つて出掛ける。さすが元がそれ者なので斯ういふ事になるとキビ〳〵してゐる。

行き先から五六人の男女の友達を自動車に乘せて伴れて來る。そして晩餐を大仕掛けに始める。此の時には料理番や給仕は眼を廻すのである。それを少しでも旨く切り廻すと妻君の御機嫌は好い給料の外の收入が少なからず傭人の手に渡るといふことである。

此の妻君の道樂と云つては別にない。強いて云ふと食い道樂で、思ひ出した時に直ぐと立派なものを食つて見たい、と云ふのである。別に食物に趣味を持つてゐるといふ



のでもない。

衣裳は主人が呉服屋を持つてゐるから、注文は仕度い放題であるが、何故か餘り衣裳には張り込まず、中位な目立つやうなものを、引きかへ〳〵着てゐる。

主人に對しては別に此れといふ愛情もないやうで、晩餐の時にテーブルに差し向つて、二ッ三ッ言葉を合せる位のもの、主人は無口の男で、フムフムと云つてゐる、妻君が酷くはしやいでゐる時などは默つて笑つてゐる妻君は別に良人を喜ばさ

うといふ考もないらしい。だから家庭を愛するといふ愛情もないやうである。少しも一家の事には關係せずに諸拂日となると切手でポン〳〵拂ひをして知らぬ顔である。生計の苦勞などゝいふことは、少しも知らない。

此の妻君の機嫌を取る法は斯うだ、と云つて料理番や給仕などが能く話してゐるのを自分は聞いた。彼等の曰く、此所の妻君は唯マダム〳〵と云つて頭を下げてさへゐればどんな事でも小言を云はぬ、頭を下げてゐれば舌を出してゐても好い。併し口答へをすると非常に怒つて食つて掛る。其の時此方は棄て鉢になつて逆に食つて掛つて行くと直ぐ閉口して二階へ逃げて上る。で、酷く恐れ入つて見せるか、酷く強がつて見せるかの兩端さへ行けば、此所の主婦は御し易いと云つてゐる。そして皆が此の手を心得てゐて、支配人、子守、料理人、給仕人、洗濯婆の末に至るまで此の手で妻君を投げてゐる。考へて見ると氣の毒な所もある

此の妻君は滅多に臺所へは降りて來ぬ。偶にどうかすると氣まぐれに臺所へ來て、思ひ出したやうに世話女房を氣取つて注文帳に假名釘流のなすり書などをすることがあるが、獻立は滅茶苦茶である。そして傭人から空世辭を使はれて、嬉しさうにして臺所を出て行く時に、何時も決定つたやうにストーブに沿ふて立つてゐる銅製の大きなボイラーを見て、此をぴか〳〵するやうに磨いて置いてくれといふ。此れは料理人の爲すべき領分であるので、日頃から給仕人と諜し合せて若し主婦が下へ降りて來さうな樣子だつたら、直ぐに電話機で知らして呉れろといふことになつてゐる。

給仕人は大概二階の主婦の居室の近所で仕事してゐるから、直ぐに樣子を見て取つて通知をする、すると料理人は直ぐに一二合の酢の中へ食鹽を叩き込んで、それを雜巾に浸してボイラーを磨く。元來銅製だから此れで磨けば直ぐにぴか〳〵光るのである。其所へ妻君降りて來る。ぴか〳〵光つてゐるから上機嫌で、お前は大層綺麗好きで好い、とほく〳〵物で喜んでゐる妻君が空世辭を喜んで二階へ上ると二三時間して銅

製のボイラーは元の如き錆が生て光は消えてしまふ。

急な場合に銅製の器具を磨くのは此に限るので、何んでもぴか〳〵したものを好む米國人に向つて、一々ボイラーのやうな大きなものを磨いてゐた日には堪えられた話でない。それで斯んな早業をやる仕事が馴れると斯ういふ惡戯をするのだが、妻君一向御存じなしでゐる。斯ういふ工合で、拔けてゐる所にも目の屆かぬことは極めて多い。

要するに此の妻君には何等の家庭に對する理想もなければ、主婦としての主義も



主張もない。唯自分の小さな智慧の廻る範圍内で自分の我儘を通して氣樂に毎日を送らうといふ他に何者もないので芝居を見たり、友達を伴れて來て騒いで遊んだりして、年を老るのである。

良人に對して及び、子に對しては極めて冷淡なものである。家庭に對する心情が何處まで暖かといふことも分るであらう。けれども此の妻君は故更に冷やかなのといふのではない、冷熱二つながら無いのである。

主人も餘程此の婦人には持て餘してゐるやうである。けれども離縁といふことになれば、それこそ一ト騒動である



離緣といふことが米國では男子の心膽を寒からしむる唯一物だ。婦人の方に取つては非常な金城湯池で、これによつて立て籠つて我儘を働くといふのが米國ではよくある例である。

此は極めて平凡な惡例で、斯ういふのは米國に澤山ある。日本などにも有りさうな例である。



食卓日記

あさ子

△木曜日

昨日の雨でか大變暖くなつた樣だ
良人は朝の牛乳を呑んでから、此間の日曜に山で取ていらしつた藤が大變綺麗に咲いたというて喜んで御出勤なさつた。お床の花を活けかへて居ると、魚やが來たあまりおもはしい品もないから、鰺といかとを取て置く。お正午前八百屋が來たので竹の子と蕨と木のめを買ふ。今日の獻立は

(1)鰺の煮付、付合せ蕨　(2)鰺のオムレツ
(3)いか木のめ、和へ竹の子と　(4)蕨の甘酢

(1)は先づ醬油と味淋にて汁を作り、煮立ちたる時鰺の切身を入れて煮上るなり。蕨を用ふ前に根本を切り去り桶に入れ其上に灰をかけ上より沸湯を注ぎかけうき上らぬ樣、小さなふたをなしおきしばらくしてから引あげ水にさらしてあくをぬき用ふなり
さて蕨を一寸程の長さに切り鰺を炊きたる汁にて炊き、鰺のふちに付け合すなり

(2)は先づ鰺を三枚におろし湯煮て細にむしりおき玉子を三ッばかり黃身へ鹽を少し入れ、よくかき混ぜて別に白身を雪の樣に泡立て丶泡のきえぬ樣に黃身をまぜむしり置きたる、魚の身を入れ鍋の中に油を引き其中へ流し込み、箸のさきか匙にて上面を擴げて兩はしをたゝみ込み打返して燒なり。

(3)先づいかを生のまゝ細く一寸程のたけに切り、味淋に醬油少しをさして味をつけ置き、竹の子を短册に切り一度湯煮て、いかを煮た汁に少し砂糖を入れて、味をつけ置き、白味噌に木のめ砂糖少しを入れてよく擂り。それより前のいかと竹の子を入れて和ろなり

(4)先づ蕨のあく出したものを一寸湯煮、先の方計りを好き程に切り甘酢にて食るなり

△金曜日

何んだかいやに曇つた日だ事、どうか降り出さなければよいがと思つてゐる矢先に、大つぶの雨がばら〱と降てきた、良人は今日出しなに「今日は支店へ轉任する人を見送に行くから歸りは少しおくれると仰在

て車で御出勤。いつの間にか雨は晴れて、お庭の青葉に雨の水玉がきらきら光てゐる。魚やはきたけど昨夜のシケで何も無いから針魚を少しばかり取て置く。八百屋からジヤガ芋とほうれん草と蜜柑を買ふ

さて今日の献立は

(1)コロッケイ　(2)ほうれん草の玉子かけ

(3)吸物、結び針魚にうど　(4)蜜柑のフライ

(1)は先づ湯煮た肉を肉挽器械で砕し、(爼板の上にて叩きてもよし)ジヤガ芋の裏漉になしたる物と等分に交ぜ、生玉子一ツに鹽胡椒を入れ細長く固めて、メリケン粉へ轉がし、玉子の黄身へ轉がし今度はパン粉へ轉がしてフライ鍋にて燒なり。

(2)はほうれん草を細かく叩き、フライ鍋へバターを溶して其中へ入れて鹽胡椒にて味を付けよく炒り付け皿に盛り、別に玉子を沸湯せる中へ割落し二分間程して、半熟となりたる處をほうれん草の上に載せて出す

(3)は針魚を三枚におろし結びて湯煮て置く。汁は昆布に前の頭骨などを入れて作る。別にうどの皮を去り一寸程の長さに切り極うすく立に切り、水に漬けあくをぬきて水に上げ水を切ておく

椀に盛る時、針魚の身二ツ程入れてわきにうどを好き程入れて其上に汁を入る。吸口として木のめを用ふ

(4)はみかんを厚く輪切りとし皮を去り。鷄と砂糖とメリケン粉とを玉子にてこく溶きたる衣を付けて揚る

夕方おとなりの、秋ちやんが遊びにきた、そして小父様はときくので「まだよ何かお話してあげませうか」といふと、「私小父さんまだか見てきますわ」と云てすぐ、外へ走って出るとすぐ玄關へ靴の音がする良人は御機嫌よくお歸りなすつた、洋服を召しかへて、すぐ御飯をさし上る。今日はお魚がなかつたものですから此コロツケイは一昨日の殘り肉でこしらへましたのよ」といふと、良人は却々經濟でおいしい料理ができる樣になつたといふてほめられた。お夕飯がすむでからおとなりの秋ちやんや美いちやんと、ピンポンをして遊ぶ。良人は下手な物だからおとしてばかり居らつしやる。

△土曜日

風もなくおだやかなよいお天氣、朝の御用をすませてからお湯をわかさせて髮を洗て終た時、八百屋がきたので今日の献立を定める。先づ

(1)鰆の蠟燒　(2)竹の子の甘煮

(3)鰆、もみ瓜　(4)吸物、掻き玉

(1)は先づ鰆の切身を醤油味淋にて附け燒きとなし、其上に玉子のときたるをぬり焦ぬ樣文火にて燒くなり。

(2)は先づ竹の子の皮を去り、立に二ツに切りて湯煮し、厚さ四分位に切り、昆布を五分四角位に切り、竹の子と共に鍋に入れ、水を程る

位にまし醤油少しまして煮るなり。

(3)は先づ胡瓜をきざみて塩にてもみ、よく洗ひて塩気を去り、かたくしぼりおき、鯖の皮を去り、細かく作りて、胡瓜と共に酢醤油にて和へる。

(4)は先づ鰹魚と昆布にて汁を作り、煮立せて雑莨を引き、玉子のよく攪き混したのを片口からそろ〳〵流し込みながら、攪き廻すと掻き玉が出きます

椀に盛る時山葵の卸したのを上に置く。

正午から清と一しよに張り物をする。夕方良人が歸られてから晩餐の支度をして樂しくすませてから、良人はお好きの釣竿片手にどをまるかごさげておでまし。どんな獲物があるだらうか。

△日曜日

良人は昨夜お歸りがおそかつた物だから、今朝は大變ごゆつくりお眠つて居らした。おめざめに成つてからいつもの通り、牛乳と、牡丹玉子をまし上る。

牡丹玉子は、フライパンにバターを少し火にかけて焼きたるところへ「新らしき玉子を割り落し、其まゝ白身の大抵に固まりたる頃ナイフにて皿にうつし、鹽胡椒を注けて出す。」

……と魚やがきたので何を取ておきませうかと、伺ふと鯛を取つて置けと仰在るので一番大きなのを一枚買ふ。少し多いけど味噌漬けにしておけばよいだらうと思ふた。そして今日は一日鯛のお料理で色々こしらへてまし上ることに仕た。先づお正午の献立を

(1)鯛のころ作り　(2)鯛のフライ

(3)鯛の味噌汁　(4)うどの煮付

(1)は先づ鯛を二枚に卸し腹の身の深き所を取り骨をぬき、四分位の四角に皮のまゝぶつ〳〵ときり、山葵と醤油にてくる〳〵とかきまぜ皿に盛り上にめ紫蘇をふりかける

(2)は先づ切身へ薄鹽をふりおき、三十分程おきて布巾にて水氣をふき取り、メリケン粉を付け玉子の黄身へくるみ、今度はパン粉へ轉がして、フライ鍋にバターをしきて焼く

(3)白味噌をよく摺り酒を少し入れてのべ、又水をさして好き程の淡さにとき煮かへして水嚢にて漉すなり魚は一度焼きて用ふ

(4)は先づうどの皮を去り一寸程に切りて湯煮し鰹魚と醤油と砂糖少し入れて薄味に煮上るなり。

午後から碁のお好きな平岡様がいらした、夢中で勝負をしていらつしやる、お八ツにと思てこしらへて置いた喰ずしを持て行くと、平岡様は「や來た」と大きなこゑで仰在てお頭をおさへて居らつしやる。良人がビールをと、仰在るので、コツプと一しよに持つて行く。平岡様は「奥さん今日はすつかりやり込められましたよ、もう津田君にはかなひません」と仰在て、色々なお話しをなすつて四時すぎお歸りなすつた。

箱すしの作り方は
先づ鯛の中骨を拔き半日程鹽をあておき、一旦酢にて洗ひ薄くへぎおき、御飯に酢と鹽と砂糖少々加へなみのおすしより鹽と酢とをかたしおくなり、押箱の中へ酢をふりおき、其中へ御飯をよくつめ、其上に鯛の身をならべ、生姜の切つたのをパラリとおきてつよくおしおくなり。食する時庖丁へ酢をつけて好き加減に切る。

晩餐の獻立を左の如く作る

(1)鯛の鹽燒き　附合せ 蕗の伽羅　(2)吸物、鯛の潮
(3)胡瓜　(4)甘煮 鯛と うど
(5)豆腐ぐつ炊き

(1)は先づ切身の兩面に酢をぬり(形の崩れぬため)串にさし、燒鹽をふりて肉の方より燒くなり。蕗の伽羅は先づふきの皮を去らず、其のまゝ水にてよく洗ひ一日程日に干して一寸位の長さに切り、鍋に入れ醬油を浸る程さして文火にて炊きつめるり。
(2)鯛のあらを好き程に切り、鹽をあておきたる物をよく洗ひおき、昆布にて汁を作り煮立ちたる時鯛のあらを入れ、鹽と醬油とにて味を付ける、吸口に木のめを用ふ
(3)は先づ胡瓜を湯煮て、別に昆布と鰹節と醬油にてよき煮汁を作り、湯で置きたる胡瓜を入れ柔になるまで煮て薄くずを引く
(4)鯛の身を六分四角位にぶつ切りとなし味淋を醬油にて炊き、うどは先づ皮を去り一寸程に切り一度湯でゝから鯛の煮汁にて炊き、前の魚と共に小鉢に盛る
(5)先づ鍋に昆布をしき、せいごの素燒きとなしたるを入れ炊き出してから醬油を加へ豆腐を入れて煮るなり

六時晩餐をする、のこりの鯛を味噌漬となす。
白味噌を味淋と酒にてのばし、鯛をよき程に切り身となし鹽氣をふき取り紙に包みて味噌の中に漬け上に紙をあておくなり。

△衣服の仕末

そろ〳〵冬物の仕末時になりますがよく氣を注けませんと蟲がついたり汚點が出來たりしていけないものです、先づ衣服をしまいます前に一度すつかり風に通さなければなりませんが着物を干すに適當な日は日光のあまり照りつけない、風の穩かな日がよろしうございます、そして最も注意を要する事は午後の三時にはもう取り込んで仕舞ふ事です、と申ますのは丁度この頃からして日の暮時分迄種々の昆蟲が巣を離れ廻りますので外に着物など出て居りますとついそれに泊つて仕舞ひます、それを知らずに行李などへ入れて置きますと自然卵を生みつけるやうな事になります、又毛布や下衣類は必ず一遍よく洗濯して干し切つてから仕末しなければなりません、其外石鹼や水で洗へないものは叮嚀に刷毛かけるか其他の方法によつて芥などの殘らない樣にする事が肝要です。



社會百生活（四）

株式熱の裏面

日糖株の暴落と家庭の轟沈

覆面女史

▲來　客▼

櫻と待つて居たが最早庭のも散つて若葉に成つた、楓の芽ざしが紅を指した樣にまゐ奇麗だ事、自體楓樹の多い庭だから秋がいゝのだが私は新綠の頃が一番好きで、殊に雨後の眺めといつたら何とも云へない、浴後の美人とでも云はうか。

あの風がそよ〳〵と柔かい葉に、何やら春の秘密語つてゐる樣、朝日が匂やかに映して實にいゝと暫し恍惚する。

「郵便」と投げ込むだ、雜誌の樣な音と飛で出ると案の定、「女學世界」と相場付が五六枚に經濟新報自分に用の無いものはそこへ來た仲に奥へ上げさせる立ながら封を切つて口畫を二三枚見て部屋へ行うと廊下迄來ると、玄關に車が止まつて來客の樣、取次に出た糸に訊くと、井上さんだつてといふ、また株のお話か此頃のお客樣は皆儲かつたとか損をしたとかいふ、お話斗り、趣味の無い事共だしい、以前は書畫骨董流行で山陽の七絕がいゝとか、竹田の赤壁山水は奈うの何某の持てゐる、向獅子の香爐は珍物だとか那麼お話で折折お展觀するとか、書畫會が有るとか分らずながら伺つて面白かつた、夫は骨董道樂もお金が費りたのしみは良人斗り、株だとお金が儲かつて、好きな本を買つたり、旅行するとか、衣服新調へるとかいゝけれど、何だか餘り大金の遣り取りで心配でならない、夫に相場で儲けたといふと、人間もよく無い樣で、私は氣が咎めてならない。

まだ十時、縫かけの袷を縫はう。

▲株　式▼

戰後の經濟界は好調子で、諸株トン〳〵と、上る一方、投機とか相場とか云つて堅氣な人は見返らなかつた、兜町や北濱へ、此頃手を出さない人は無い位、成金黨の旗頭鈴久を學んで我も〳〵第二の鈴久に成らう鐘紡の呉錦堂何のその寄るとさわると株式の噂斗り、當家なぞこゝ廿年前先代の頃はかぶと云つたら畑の物と思つた位で有つたらう、公債より割が能いといふので勸められ、郵船株を買つたのが抑〻甫り、其頃は賣買等思ひも寄らず、配當をあてにして居たのが、流行の株熱にうかされ、主もとう〳〵渦中に卷き込まれ、今では北濱から活版刷りの上書の相場付が何枚も來る樣に成つた、類は友この頃お出になる方は同好の方ばかり。

お座敷ではお話が興に入て良人の高聲が、手に取る樣に聞える。

「如何でせう、もう一押したら買でせうか」と仰やると井上さんの太い錆聲で、

「さあ、左樣思ひ升なあ、京阪も隨分見込は有る樣ですが存外上りませんなあ、君は此間甘い事をしましたなあ」と仰ると、良人は得意さうなお聲で「實にあの時は愉快でした、前場で當所株を卅枚三百二十圓で買つたのが、翌日パツト七十圓まで行つた處を大引で仕舞ひました、僅た一日に千五百圓、家内等心配してよせよせつて云ひ升が斯樣いふ事が有ると止められませんなあ」と仰る。糸が電報を持つて來た御座敷に上げさせる、暗號を御取り寄せになる、井上さん氣つかはしさうな聲で「奈うですな」、「えゝ氣配をいつて來ました、當所が四百五十圓、鐘紡が二百圓、電燈が百八十圓、まだ高い樣ですな、奈うでしよう電燈四五十枚行きましようか押すだらうつて云つてる内にずん〳〵行さうで之れあ押目が無いかも知れませんなあ」、「左樣いゝですな、何といつても獨占事業だから見込は有升よ三四十圓上る餘地は確定に有升な」、井上さんは又勸めて被入るわお手が鳴つた大方電報だらう小僧を呼

ぶ自轉車が郵便局へ飛ぶ。

田鶴子つてお呼になる、何ぞ果物を奥樣に持て來る樣にと仰せで御座い升と糸が來た、ビールの用意をさせ此儘ではと鳥渡着替へる。

髪が三日目で少し亂れてゐるがなで付たら結立より反つて顏映りがいゝ、東京屋のお辰さんとこの髷形で前髪を押潰した樣に前へ出してたぼを思ひきり下にかく、麻の葉の縫つぶしの手がらに翡翠の中差し田舍としては粹氣過よう大島の替り飛白の着物に、荒い縞染の羽織、藍紫地に西洋花の刺繡模樣の半襟、隨分派手だけれど子供はなし、良人が派手好きだから構はないとして置く。

林檎とバナヽを西洋皿へ入れビールに添へてお座敷へ上げ、私も續いて御挨拶に出る。

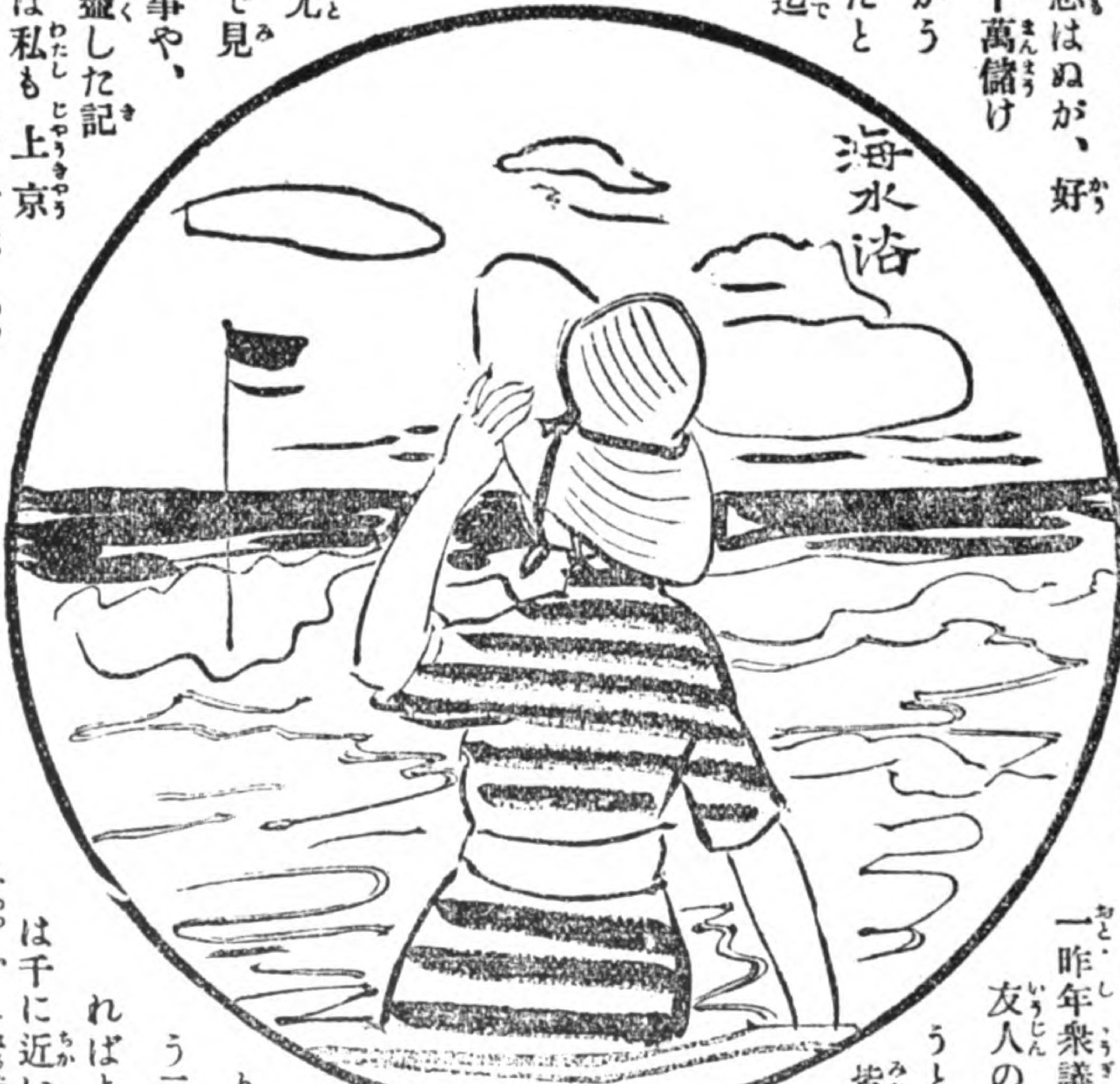
床には直入の双鶴の幅を掛け、高麗の花瓶には今朝活けた牡丹の大輪我世の春と咲き慢つてゐる、井上さんは直ぐ「奥さん如何です何ぞ慇懃なさい田村君は大層儲かつたさうでは有ませんか」と仰る、餘り剥き出しな、井上さんは不作法で厭だ、株屋なんて什麼してこんなに品性が低いだらう。

▲榮華の夢▼

鐘紡百株差直より二圓高に賣れたから、お前に遣らうと仰つて、三越へ連れてつて頂いた時の嬉しさ、些ない樣でも二百圓、江戸褄模樣の小紋一重モーア織の丸帯に別染の長襦袢仕立を急がせて嵐山へお花見、此次儲つたらダイヤ入りの金鎖を買つて遣らうと仰る、始めは投機等眞面目な人のする事で有ませんと、隨分お止め申たが、此頃の樣に斯うトン〳〵拍子に行と止めた私まで引込まれつい乘り氣になる。

親重代の得米の上りで優に八千圓、下女下男の四五人絹物づくめで暮しても五六千圓は殘る身代、株式の樣な危險な事しない方が能いと思ふ事も度々だが、良人は自分の樣な者が社會へ出るには金力に限る、常時有名な實業家も今こそ勤儉力行とか云ふが一代に何十萬といふ金が何で節儉なぞで出來るものか、皆元々投

機で仕上げたものだ、僕とていつまで株式に引かゝつて居様とは思はぬが、好機逸す不可此處で二三十萬儲けて其時こそ斷然手を引かう高が年に五六千圓殘つたとて、十年で五萬、いつ迄田舍住居に滿足して居やうぞ、何れは衆議院にも打て出やうと思ふ夫に子供も出來て修業させる頃と成つたら却却こんな事では成らんと仰る、伺へば夫も御尤もで東京の新聞や雜誌で見る交際社會の華やかな事や、貴夫人の裝飾の善美を盡した記事を見る度に、何時かは私も上京してさういふ社會に出られる事と未來を夢



みつゝ一二年を過した。

一昨年衆議院の總選擧が有つた時、友人の方々に推されて候補に立うとなされたが、親戚の誰彼皆不賛成で田舍者の議員騷ぎの跡は定まつて身代限りだ之斗りの身代で議員運動は止めろ〱と寄つてたかつて反對され、良人も不本意ながらお止めと成つたが其時から一層金力といふ事に重きを置く樣にお成りなされ元々十枚は宜からう二十枚位下つたら實株を取ればよいと、仰つたのが、今では千に近い玉數に成つた忘れもせぬ十二月五日、春高を見越し蛸配當とも知ら

の一割五分の配當に惚れ込むで買〆めた日糖千株、一獲千金は此時ぞと、良人も力を入れ私も毎日の氣配の電報に胸を轟かしたが此頃どうやら内部に紛擾が出來て、夫が日一日と甚だしくゝ、重役の拘引は市場の景氣をとみに惡しくして、暴落又暴落電報は一日に四五度其度毎に良人の顔色は段々惡く成る斗り、奈うしたので御座い升と訊つても腕拱いて算盤を前に深く思ひ沈んで被入る、一寸行て來ようと夕方から御上阪、什麼なる事やら心もとなく、夕飯も咽喉へ通らず、つくゞ考へると、此程から追證據金に銀行小切手も大分お書きに成つた樣、竊と原簿を出して銀行座を計算して見たら一萬八千圓餘の加振り渡先は北濱の仲買店。

嗚呼之では御心配も大抵では有まい、女の身で何とも仕方は無し、あゝ什麼したものだらう。生家へ行て相談しようにも江州まで鳥渡行事も出來ず、苦しい時の神頼み、何卒一晩に日糖株が暴騰して百圓に成升樣にと祈る豈夫神樣も道麼勝手な御願ひ聞届けては下さるまいと思ふが外に思案も浮ばない。

あゝ日が暮れかゝつた、もう北濱へ御着きに成つたらう、何卒今日の大引が高ければいゝが、獨り考へて居ると氣が滅入て死にさうだ、少し運動して見樣と庭木戸から田甫の方へ行く。

遠山は黄昏の帷帳の内に隱れ、空の色は今の境遇に似たにごり色の失意の色だ、工場の汽笛が鳴つて工女の一隊が堤の上に黒く見える、明日あたり刈り入れるのであらう、實のりのいゝ黄ばんだ麥の穗が夕風に弄られてゐる、ふと見上げると直ぐ上に十四日の眞圓な月が出た、もう家へ還入らう糸が捜してゐるだらう、あゝ厭だ梟が鳴てゐる、ホーゝと、淋しい聲で。

▲四苦八苦▼

戰後三年經濟界の不振も久しいものだ、もう景氣も直る時分と人も云へば自分も思ふが、不景氣々々の聲はまだ却々靜まらない。東京の便りにも日本橋通りに明家の多い事、雜作賣の斜の札が目まぐろしい位、信託會社も處分に困るといふ話、景品福引に景氣を付た

呉服屋の店先は賑はしいが、さて買物してゐる人は少ない。

日本銀行利子引下げでけふは高いと北濱から電報が來たが後の祭りもう間に合ないとう〳〵持ちきれないで安底で仕舞つた北濱の不足金、銀行約手の期限、家の抵當期限、百難一時に集まつた延引ならぬきのふけふ、生家の兩親も此程から種々心配して下さるが、良人は好意は辱けないが人に迷惑掛るのは不本意だとてお斷りに成つて、愈々近日家財道具を賣拂ひ債權者に渡す事に定めた。



今日は親戚の重なる誰彼骨董屋の松江堂も來て下直を入るとて道具藏から文晁、探幽、華山、蕪村、對山半江等日頃良人愛玩の幅を取出された、御秘藏の文晁雪中騎馬山水あれも到々お手離に成のかと思ふと情無くなつて竊と襖の合間から覗いたら良人も今更殘り惜しげに松江堂の擴げてゐる幅の上へ目を落して被居る

時代蒔繪の料紙硯箱同じ梨地の手箱、銀鷄雌雄の置物や、青磁の香爐會席膳、本膳、蒔繪の重箱其他煎茶器や抹茶道具飯銅

火鉢や紫檀の机の類、家に傳はつた家財重寶は、廊下から座敷一ぱいひろげられた。

あゝ日頃手馴れた祖先傳來の此道具も程無く他人の物と成かと思ふと口惜し涙が胸に迫つて其處に居たゝまれず部屋へ馳け込で獨り心の儘に泣く。

▲昔をいま▼

競賣の萬端を支配人と松江堂にまかせ良人は一番で須磨の別莊へ行かれる、自分もそれ〳〵配置や番號を見て人の來ぬ内に出かける、梅田の停車場で佐藤さん御夫婦に御目に懸つた、お子様も大勢被入るのに、八重子様のお若い事、金砂お召にクリーム色の若羽織の夏帶、錆納戸の絽縮緬のお羽織にプラチナトゴールドの細いお紐が燦めく、青磁色繻甸織の洋傘は本年の新形らしい寶石入りの握り、羨ましい事は無いが口惜しい、我家も佐藤さんの様に不動產の上りであまんじて居たら折々の流行位雜作もなく出來、今日の様な情無い思ひは仕なかつたらう、あゝ慾の間違ひ孫子の代迄も嚴禁すべきは投機事業。

此線の汽車に乘るのも今日を限りか、一昨年の今頃は良人とこゝを往復して一二年の後は隣地も買入れ西洋館も建て、溫室もこしらへ、お前の好きな西洋花も作らうと、仰つた、夫も儚ない泡沫夢幻と消えて仕舞つた、順境にすら〳〵と生ひ立つた身は苦勞といふ事を知らず何事も愉快でいつも樂しさうな、樂天的だと云はれた。私は汽車の乘客觀が好きでいつも種々な觀察をして良人に笑はれたが、けふはなか〳〵夫どころか若し此内に觀察する人が有つたら恐らく屈託顏をした陰氣な婦人と私を云ふで有う。

▲新らしき門出▼

昨日の跡片付も殘りなく濟み美しく掃き淸められた良人の書齋床には某伯の歸去來の賦を掛け、焚きしめられた香の薫り自から淸素の氣が身にせまる、此程來の胸の鬱屈もさらりと洗ひ流されて心地も淸々しく、良人は株式賣買の原簿と各商店から遣して在つた電報

暗號を庭先の燈籠の下に積み重ね心靜かにマッチを摩られる。風は納まっていかにも靜かな夕ぐれだ。鬱蒼とした新樹の深みどり、立昇る白い煙が霧の樣に梢を渡る縁に腰を下ろして熟と詠めると何とは知らず涙がこぼれる。

嗚呼一度記入された浮雲の如き萬金の黄金貴とき人の運命を弄んだ帳簿は一塊の灰と成つた恰も一代榮えし人の骸の樣に。

良人はウイスキーの杯を上げ、之迄は全く方針を誤まつた一攫千金なんて、常人のなすべき事でない、實業に限る、小人閑居爲不善大に



働くべし、之からは眞面目に働かう、然し近來今日程心持のよい事は無い實に晴々した、之から新しい生涯に入る門出を祝はうでは無いかと仰る。私も最早斯樣なればく〳〵考へて等居ない、只腕一つでも世の中に立つた人は少なくない、未だ少しの田地は有る土地に居れば旦那樣とか奥樣とか什麼しても舊習を脱する事が出來ないが、東京へ行けば奈麼事でも出來る夫婦心を一つにして此失敗を挽回し古郷へ錦を飾らねばと勵まし勵まされて愈々上京する事に定めた

明日は御不沙汰をした八重子樣をお尋ね申種々御相談も願はう、あの方は東京のお生れで、東地の樣手も能く御存じ、私は見物に行た事は有るが、住居するには其々田舍とは違ふ事も多いから、伺つて、指圖萬端願はう。

被成、下駄を引かけて車迄お送りする「左樣なら」「御機嫌宜う車の音が遠く成て白い肩掛が畔の屈曲で見えなく成つた、夕の空は彩色の變化を盡して涯も無い野に擴がつた、植付の澄んだ沼田に時得顏の蛙の聲がする、何方ともなく麥笛が聞え穩かな夕風に薔薇の芳薫りがする。

あゝ浮世の戰に敗れたる田村氏の夫人田靜子樣百年の苦樂他人に寄るといふ私も同じ女の身此頃の平凡な朝夕に飽きて華の都に活動なさる方々を羨ましく思ふ事も有つたが、あゝ勿體ない、平和なるかな、平和此夕べつく〳〵我身の幸を思ひ偏に君の成功を祈る。

▲親しき友▼

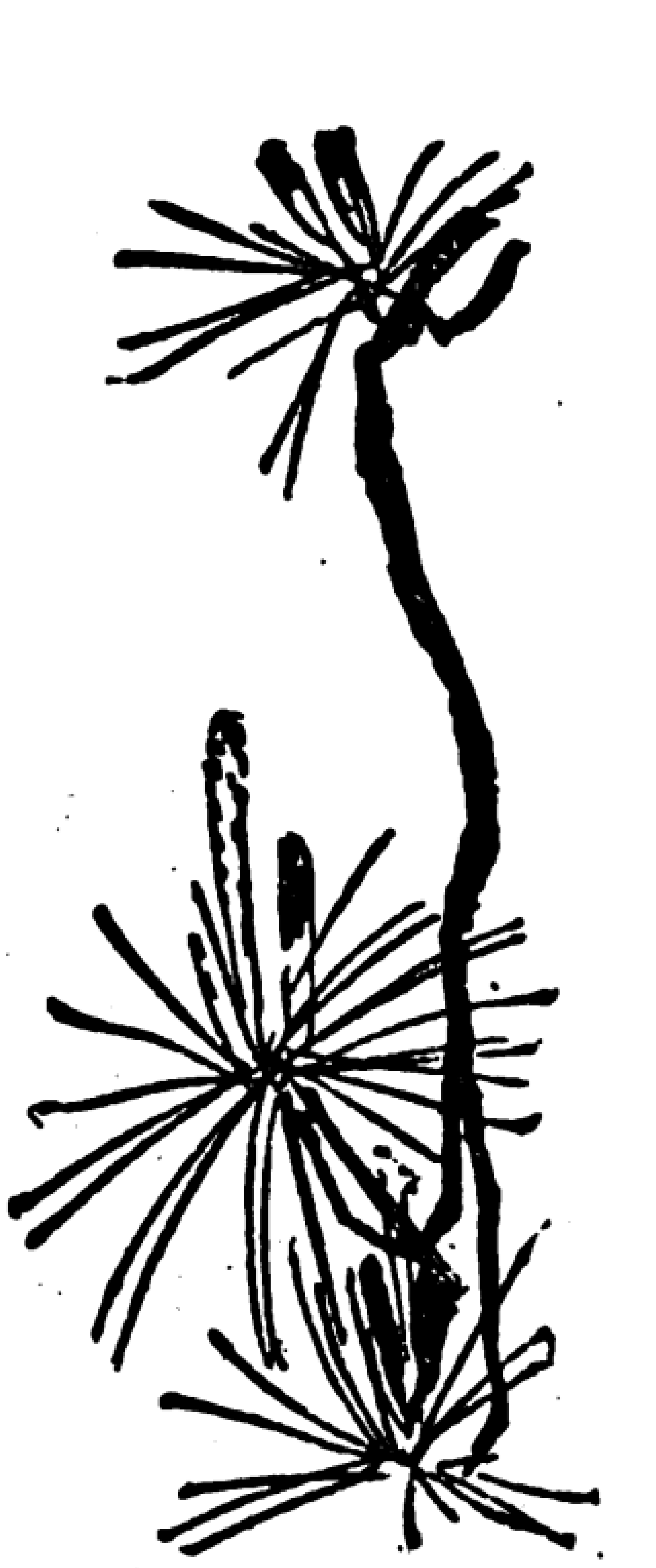
夕陽は斜に遁入、槇の梢に落ち、街道を通る牛車や荷車の往來が忙しさうに聞える、下男が掃除を仕舞て今打水をしてゐる玄關先、利久鼠の無地お召の夏コートを召して白地に百合の浮織のオペラバックを手に千代田草履を履いて立つて被居る田靜子樣思ひ爲かお顏も少し焦悴の樣、夫が又無くお美しい半日お話續けたのに未だ殘り惜いので又立話「お出立迄に必度伺ひ升わ」、「何卒被入て頂戴よお孃樣も坊樣もお連れに成て一日御緩りね當分お目に懸れないのですもの」、「那麽事は無わ私東京へ行たら宿めて頂いてよ」、「だけれどお宿め申樣な家だか什麽でせう」と淋しい笑ひ顏を



宮殿下の御來濟と前代未聞の日章旗

在天津　楊柳女

いにし五月一日、故清國皇帝陛下の御葬儀に、御參列遊ばされたる伏見大宮殿下には、同じ六日の午後二時に、天津へ御來着遊ばさるべき筈にて、居留民一同の光榮は、言葉につくしがたい、官民一致奉迎の準備に心をつくして宮をまち奉つたのである。丁度北清の天地は、暑からず、寒からぬ、初夏の景色靑々としたる、白河の楊柳に送られてくる、朝風も殊に心地よい、六日の朝、家家にひるがへる日章旗、見るからに心嬉しい、それに自國の大祝日にさへ、國旗などいふ觀念に乏しい支那人の家も、我領事館の注意によりて各戸日の丸の國旗を出したるは未曾有の事、尤もこれは、我居留地內に在住する支那人ばかりである。所で、其國旗の趣向が却々面白い、まづ、白の金巾に赤の金巾を圓く切つて、ぬいつけてあるのが一番上等で、それもなかには、不細工な御手製の日の丸で、四角、五角、六角にもなつてゐる、赤い紙を、はりつけてあるのもある、それから、向ふの方に、長方形の日の丸があると思つて、近寄つてみたら、西洋手拭を代用してあつた又メリケン粉の袋を洗つて、旗の代用としてあつたのは思はず一人でふき出してしまつた、もう一ツをかしいのは、旗竿がまがりくねつた細い竹なのに、卷煙草の包紙にせる鉛紙をかためて、國旗の玉のかはりとしてあつたが風の爲にゆら〳〵動いて、まるで、田中の案山子然と見え、これにも又一笑してしまつた。むしろを、旗とせし、昔ばなしはいざ知らず、タヲルや、メリケン粉の袋の、日章旗とは、さても〳〵、我國ではみられぬ圖で、前代未聞と云つても大袈裟ではあるまい、尤もこの振つた趣向の旗を、かゝげたるは、居留地でも裏町であるから、畏れ多い事だが、宮樣にも御覽遊ばされず、天津在留の人さへ知らぬ者が多いであらう、自分は、あまりをかしく感じられたので、つい、一筆かくはしるして置いたのである。



浦鹽よりの手紙

あ　ふ　ひ

△其一　春子樣へ

海上無事二十五日に上陸しました、新橋でお別れの折は、袷でも暑いやうに思つたのが、浦鹽では綿入に羽織着ても手袋無しの指は凍りさうでしたもの、尤も雨上りの朝だつたからでせう、波止場から辻馬車に乘つたの、赤いチャン〳〵の樣なものを着て、大きなお尻を車臺に据ゑてるロスケの馭者が、一鞭あてると馬車は、でこぼこの道をお構ひなしに走るのでせう、乘つて居る私は氣取つてなんぞ居られないの、うつかりして居ると、街頭へ投げ出されて了ひさう、もう一生懸命松山の外套につかまつて「死なば諸共」だなんて私笑つたの。奇麗な人や汚い人、支那人や朝鮮人などが、入まざつて往來して居る街を見たら、恰度おもちや箱を引くり返した時の樣な心持がしてよ。停車場に近いパウロスカヤ街と云ふ處の、赤レンガの二階が私の家。ナーグルウオイ（虎の意味）砲臺を後に、前は港から街の全景が一目なの、右に靜かなアームル灣が鏡のやうに見えますの、淋しい時なぞ窓から顔出して、馬車に乘つて行く令孃や、買物に出掛ける奧樣等の、氣取つたスタイル、美しい帽子、粹氣な着物なんぞ許して居る許でも退屈は逃れます、夏は非常に涼しいつて話よ。

四五日前露國の皇族が學事視察使とやらで來たの、其日は朝早くから軍樂隊が通るのでせう、賑かだと思ひながら起きて、お茶を飲んで居ると、上村さんつて人が「並んだ〳〵」つて、大急ぎで外套を着るから私も露臺へ飛び出して見たの、成程並んだわ〳〵、停

車場から一町許は鮮かな白服の海軍の水兵、次からは茶色服の陸軍の兵隊が、何處迄も〳〵續いて居るの新聞には午前八時着とあるのが、おくれて九時を打つ、氣の早い上村さんは、汽笛の鳴る毎に街へ出るので、何十度階段を昇降したかしれないのよ、特別列車が着くと同時に、家の後の砲臺と、碇泊中の軍艦アスコルドを始め各水雷驅逐艦、それに港口の砲臺と、四方八方から廿一發の禮砲を打つの、それが一時に重なつて、ガラスが響く、戸が慄ふ、恰度戰爭でも始まつた樣で、一寸面白かつてよ、停車場内の海軍々樂が終ると、號令が掛つて陸軍々樂の番に成る大きなラッパを肩に掛けた、傳令使のコサック騎兵が、威勢よく馬を走らせてゆく、間も無く、赤裏の外套に、勳章が胸一ぱいのハバロスクの軍務知事が左に、右は其華かな同乘者の割合には極目立たぬ服裝のコンスタンチン太公、微笑の中に送迎する群衆の敬禮を受けさせつゝ、馬車は靜かに通過する、並んだ兵隊



▲診室又は病室に於て男子と面接すべからず

は捧銃と同時に一齊にウラーと叫ぶの、是は目新しい様でしたが、ステーシヨンから歸る將官や文官の馬や馬車と、見物人の散るのとが、一時に込合つた處は矢張何處も變りはないものと思つたわ。

まあこんな事よりも、私は是非あなたに話す事があるの。一昨日松山の懇意の海軍少將の家を訪問したの、言葉の通じない私は、先方の奥様に會つて、實に困つて了つたわ、「御機嫌よう」と「左様なら」位は覺えたのですが、鸚鵡の様に其ればかり繰返されもせず、手持無沙汰で歸り度なつて了ふと、それと察してか、今好い人を見せて上げるといつて、奥様がベルを鳴らすと出て來た人は確かに日本の婦人、入口迄來て私共の顏を見ると驚いた風でしたが、ニッコリ笑つて、一寸首を下げ、奥様から呼かれるのを聽くと直に引込んで了つたのでした。眞黒な髪をマガレットに結んで、焦茶の服に白い前掛かけた、それは美しい〳〵人。やつぱり日本の方に逢ふのが厭だつて云ひます、奥様は笑ひ乍ら、去年觀光の際或人の世話で雇入たが、浦鹽へ來てからは、怎したものか日本人に逢ふのが大嫌で、成るべく外出しない様な工夫ばかりして居る、優しい性質なので私も主人も氣に入つて、娘の様に思つて居る、今ぢや露語も大分話すし、私に暇を貰つては、自分の給料の半分を佛語の教師に拂つて勉強する、私はその熱心なのに感心して、ピアノを教へ始めたが（此奥様は音樂學校出身ださうです）素養があつたとみえて、此頃は大分達者に成つて來た、名は京子といつたのを、如何にも可愛いから「櫻子」と呼んで居る、此話聞いて直思ひ出したのは、貴女の非常な仲善だと仰有つた、お部屋の圓窓の柱に、貴女と並んで寫つて居るお寫眞の方、お名は京子さんでしたね、法學士の〇〇様と許嫁で、お母様の遺産の全部を、其人の外國留學の費に送られたのに、歸朝後△△様と云ふ實業家のお嬢さんの養子も同様なお聟様に成つて了つたとかで、卒業式も眼の前に近よつたのに、仲善の貴女にさへ斷りなく、不意に歸國して了つたつてお話ね、あの時「せめて葉書でもよこせばいゝのに」つて貴女泣いてから

つしやつたでせう。まさかと思つても氣のせいか、あの黒眼勝の涼しい處や、ふつくりした頰の邊似てゐらつしやるやうよ。私は貴女を連れて行き不意に逢はせてみたいわ、好奇心にかられる樣ですが、貴女の京子さんの其後の御消息是非とも調らべて敎へて頂戴、おねがひよ。

浦鹽は稅關がやかましく、新聞も雜誌類も檢閱しなければ、それも一ケ月位經つて後手に入るのもあるし、屆かないのもあると云ふ話で頗る不安心なわけよ、私せめて「女學世界」だけも早く見たいと思つて居るの手紙は大丈夫だから度々頂戴ね。左樣なら。

（六月二日）



△叔母樣と露樣へ

先便は船の出帆に間に合ふやう大いそぎにて認め、嘸々お讀みにくゝなどと申たら、いつだつて同じ亂暴がき、斷るだけ野暮だと仰せ遊ばす事と存候。

叔母樣露樣にお別れして、兎角泣き虫の私も大分おちつき露語を始め申候、露さんのお得意なるフレンチの

流暢なのと違ひ、何だかぶつかつたり、突つかゝつたり、しかも頗る長つたらしき言葉に御座候。日は至て永く、朝は三時頃より白み初め、まだ夜中と思ひ居る内に、ガラス窓が明く相成流石のねばうの主人も早起いたし候。夕は八時位に日暮れ申候。此二三日は別して温かく、山々も青葉の色美しく相成、晝は袷一枚にて丁度よろしく候へ共、朝夕は殊にお寒を覺え、散歩などに出掛け候には、矢張羽織やコートを引かけ申候。

昨日は當地にその三越とも申べきクンスト、アルベス、へ參り、平常着と帽子（ツバのせまいパナマ風の小形に、水色の薄衣を結び下げた淡泊したもの）等買ひ求め候。それを一寸あみだに被つた處御覽にならば、叔母樣も露さんも氣取つて居るなんてお笑ひの事と思ひ申候。私は御存じの通り大の日本式ゆゑ、洋服なんか着て大股に歩くなぞ誠に困難に候へど、當地にては日本婦人とさへ見れば賤業婦の樣に思はるゝが何よりつらく、輪のふつくりした銀杏返しにでも結ひ度い處を、露さんから御傳授の何卷とかいふ首つ玉にかぢり付いた樣な髪にいたし、空氣草履も踵の高い靴にはき代へ候次第お察し下されたく候。

けふは霧深くまるで小雨でも降るやうにて、眺よき港も、船も街も眞白のとばりに包まれて了ひ、一寸先きも見え申さず雲の上にでも漂ふ心地いたし候、常には星と輝く電燈さへ篝火の樣に幽かなのを見候へば、戰爭當時浦鹽艦隊の奈古の浦、金州を始め佐渡常陸を沈め、日本艦隊の鋭き眼をぬけて、無事に逃げ歸りしも成程此霧の爲と點首かれ申候。

風をひいて熱があつても、お風呂を欠した事のなき私が、當地へ參りては五日も一週間も辛棒いたすと申たなら「あの女がどうして我慢が出來やう」とお思ひかも知れず候へど、實際私も餘儀なく我慢いたし居候、第一水が不充分にて、毎日買求め候わけゆゑ（北水も濁つたもの）風呂屋へ參り思ふまゝザブ／＼遣つた方が心地よろしく、言葉の分らぬ悲しさには松山に勸めて賴んで一緒に行つて貰ふ始末御推察願上候、風呂は土耳古式の蒸風呂にて三部屋御座候。先第一の入

口の部屋には、姿見、テーブル、長椅子など並べ、床は寄木の市松形なんぞなか〳〵振つたものにて、それへ着物ぬいで、次の重い扉戸を開けば大理石の湯槽と洗面器など御座候、其次の部屋は蒸風呂にて、七ッ六ッ段があつて上の方へ上る程熱く相成候、叔母樣などは早速逆せてお了ひなるべく、此處で蒸されて次の部屋に戻り、洗らひ流し候わけにて行屆き居候へど、是にて入湯錢は金貳圓五拾錢に御座候、さればと申して格別美しく成



▲責任ある保護者なくして旅行すべからす

るわけでもなく、たゞ髪の癖直しには非常の効能御座候、まだいろ〳〵申上たく、近ければまだるつこいこんな手紙書かずに、叔母樣これ〳〵と六疊の茶の間に、火鉢圍んで御話も出來る事と思ひ、遂先きの日まで露さんと人形いぢりして叱られ候事など、戀しく懷かしく、いつも港を眺めては、煙はいて小さく成り行く船を見送り、只涙の限りなく流るゝのみに御座候、御文頂きたく待ち上候。（六月六日）



廣島だより

日向欽子

私二三日前に此廣島に來ました、良人は今私の向つてゐる机の前の襖の彼方の座敷で來客と談話中なんですの、このひまに一寸一筆。

あなた廣島へいらつしやつた事あつて？　却々賑かな處ですよ、私の泊つてゐるのは大手町の長沼旅館、前に來た時は純粹の日本風で門も白木でしたけれど、戰爭の爲に大變よくなつたとかで、今は石階に圓柱と云ふ西洋式になつて終ひましたの、その上り口の左側にちゞれた黒い毛を長く曳ずつた大きい犬が番をして居ます、目も見えない樣な毛なんですよ、家の人がかまはないと見えて泥だらけで辻車のけこみの敷物の樣になつてゐますけれど手を入れたら立派になるでせう、私其犬の子を一疋貰ふ約束をしましたのよ、旅宿を出て一町ばかりゆくと一番賑かな町へ出ますの、呉服屋、帽子屋、時計屋、傘屋、本屋、下駄屋、紙屋、半襟屋、唐物屋などが軒を並べて、夜は燈火がまばゆく樣にキラ〳〵する道の幅がせまいのでね。丁度、さうですね、東京の何處位でせうね、神田神保町の裏通り位でせう、外ともつかず内ともつかずぬけ裏の樣な勸工場が幾軒もあるのですよ、けれど買ふ物は何もないのです、賣子の男女が長閑らしく店先で浮世話しをしながら、ちらほら通る客を小聲で批評したりしてゐるのですよ、其通りを眞直に行つて左の方へ一寸入つた處に淺草の奥山とでも云ふ樣な小屋掛した見世物が二三軒ばかりありますの、其横手へ夜は切花を賣る店が出ます、是が一寸面白いのですよ、東京の緣日の植木屋の樣に、さびた盆景や、面白い盆栽などはなくつ

て、たゞ花瓶に其儘さす樣な、はでな花を大束にして高い棚からしだれる樣に飾つて客を呼ぶのです、白い小手まりの花のなよ〳〵した枝がふさ〳〵とさがつて來て通る人の肩や顏に觸れなどすると、最早買はずには居られなくなるのですよ、私活動寫眞へ入つて見ました、木戸は僅に三錢ですけれど寫眞はそんなに勞れてゐる物ばかりでもありませんの、幕あいの長い事說明の拙い事まるで喜劇の小學教師が生徒に修身の御話しする樣ですわ、それで折々用もない商品の廣告めいた事を云ふのですよ、彼の口上云ひは却々役德がありさうだつて笑ひましたの、隣の「身振り」の小屋から、坊主だの奴だの姫君などが御忍びで舞臺の隅の方へそつと寫眞を見に來てゐるのかジャラン〳〵〳〵と云ふ鈴の音が聞えると、あはてゝ馳け出して踊つて行くのが私の居る處からよく見えたのですよ「身振り」と云ふのは身ぶりをしながら歌ふのだと云ふ事です、

「私見ませんでしたの。此方の人の買ひ物の仕方と、それに對する商人の賣り樣がをかしいのですよ、まるで双方問答をしてみて客が敗けると買ふと云ふ樣に見えますの、假にそれが襟屋ならば「是は如何でせう廿四五の婦人には」「それはお誂へ向きのお襟で御座います」「然しちと紅が入り過ぎるではないか」「そんな事はありません此頃は一般にはでになつて居ます上御存じでもありませうが京ではさういふのが大流行で御座います」「是は二番縮緬ではありますまいね」「如何致しまして店では決して左樣な物はねがひません、萬一二番物でしたら何時でも御引取申ます、其糸の艶を御覽下さい」「價はひけませんか」「價は最早ぎり〳〵けつちやくの處です店では御愛嬌は御座いませぬかはり品は上等で御座います」「貰つて置きませうかしら」「それに御きめなさいまし御襟うつりの、よい事は御受合致します」「では貰つて行きませう」と云ふ工合ですからね、一ツの物を買ふのにも却々時間がかゝるのですよ、然し商人の熱心な事と忍耐の強い事は驚く程です、くらべてみると東京の商人などはまるで我儘むすこです、見たばかりで出て來ても此地の人は決して惡い顏など

しませんの、四錢五厘の買物で拾圓紙幣を喜んでくづして呉れる處なんですよ。

此廣島には自然の山を利用した眺望の佳い公園や人にみせる美しい庭などがありますが、此度は未だ一度も行きませんの、私昨晩人に招待されて町外れの羽田の寮とか云ふ處へ行つて見ましたよ、新緑滴る様な木木の下蔭をくゞつて飛び石傳ひに行くと、彼方に一つ、此方に二つ離れ座敷があつて、丘上の茶亭、中島の釣殿、おもひ〳〵の趣を見せてゐ

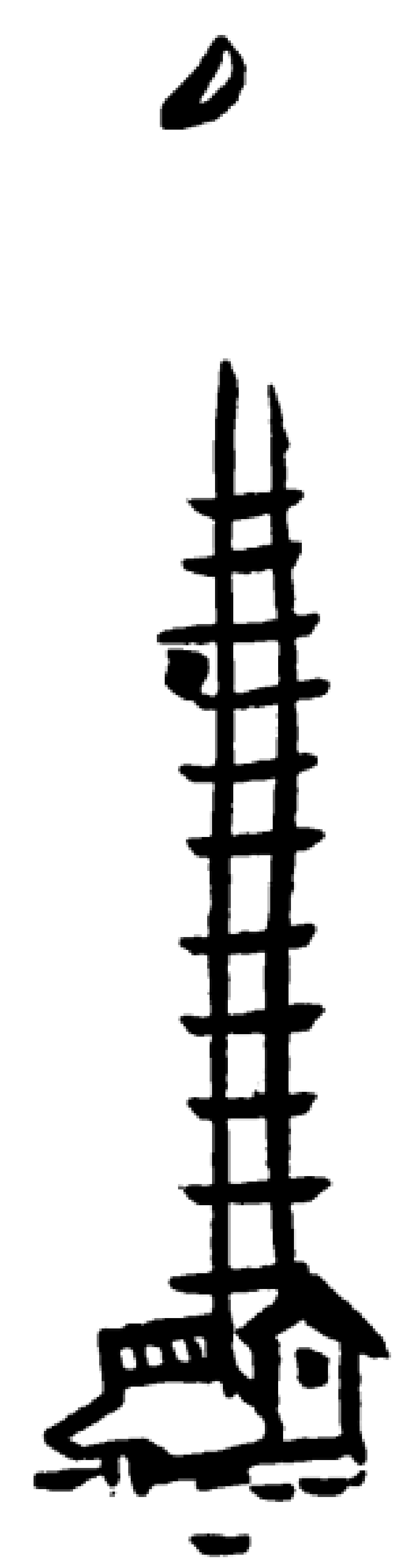


るのです、水晶の様な水が汀の古杭にやさしい歌をひびかせてゐるのです、涌き出る與清水かと思つたのは水道が引いてあるので、池はたゞきでこしらへたのだと聞いて私驚きましたの。白つぽい底や體裁の惡るいへりなどは上手にかくしてあるので全く古い自然の池としかみえませんの、鴛鴦が二つがひ浮いてゐるのですよ、羽を頼りに氣にしてゐる二羽の雌鳥から、餘程離れて雄鳥が二羽向き合ふてゐるのは樂しみは夕顔棚の下涼みなど丶悟つて、婦鳥問題で

も大に研究してゐるのでせう、鴛鴦にして猶如斯なんて例の人情観は如何?

此家には塔があるんですよ、上りきつた處の露臺に立つと山も海も丘も川も畵の樣に見えますの、塔の中には虛無黨員が密議でも凝らしさうな、重々しいオリーヴ色の一室がありますの、又廊下の行當りの戸を開らくと善美を盡した寢室があるのです、其處にも美くしく飾られた寢臺の外に、大きい姿見、手洗場などよい處にそなへつけられて、香水、香油其他さまぐ\の化粧品がとりあつめられてあるのですよ、それから枕上には室内電話の黄金色のラッパがあるのまで、萬事行とゞいてゐるのです、私此處へ宿とればよかつたと思ひましたの、宿屋へ歸つてから女中に其室の話しをして借りられるかしらと訊くと「あなた到底駄目で御座います彼處は別嬪さんでなくてはとめません」と云ふのです、ひどい侮辱ですわね、私是程大膽に口をきく女中は初めてと内心大に驚いてゐましたの、後で何かの話しから別嬪さんとは藝妓の異名だとわかりましたの、大笑ひしましたわ、今日は是で失禮、此手紙があなたの處へ着く頃は私の居處は又變るでせう、其先からまた。





夏の東京

秋雨

△蚊

ある程のもの質に置いても、麻の萌黄の蚊帳一はりは手放すなといふ位ゐ、これは本所の名物。

その様子といつたら實に怖くなる位です。夕日がまだ栗の木の枝に殘つてゐる時分から何ともしれぬ音樂がヤーンーンと耳になります。するとあちらからもこちらからも、軒の釣しのぶをゆるがして蚊やりの烟りの激烈なのが町を這ひます。しかしそれ位の事で逃げ出すやうな蚊なら普通平凡なので、大抵は不作法にも押入、戸棚、納戸、地袋、處きらはず、もぐりこみ、人が漸々寢る時分になるとまた候、飛び出して、多い盛りの頃には、晝間も蚊帳を釣つて居たい位なのです。

無理もありません、一體本所深川なんぞは沼の中に島があるやうなもので、至るところ少し凹んだ所は皆水溜りになり、それが腐つてボーフラの巣となつてゐるのですもの、後から〱増える一方で、所によつては、五月の中頃から十月の末迄も、蚊帳を放せないのです。から、いかにひれくれた七賢人も、まさにこゝでは夜明しも出來ますまい。僅かに蕪村の句の「蚊帳のうちに螢とばしてあゝ樂や」といふ位が關の山でせう。



△洪水

これも本所深川の特産物で、何しろ、大川を前に控えて居るのですから、五月雨頃は濁流滔々といふわけ、見てゐてあまり心細がらずには居られません。さうでなくとも「水」といつたらこゝら一面湖と變するので、何年目に一度は、家も、財寶も流失するといふ。つい先年も悲慘な事がありました。名は美くしい「柳しま、小梅、さては業平、吾妻ばし」のと並んで居りますが百聞一見に如かず、どこにその面影があるかと失望する斗りか、實に騒々しい不潔な町なのですよ。今こそ噂の火の手があがりませんが、四五年前はペストの巣窟となつた有名な所です。

△橋

これは別に橋そのものが名物ではないのですけれど、間接に名物になつてゐるのです。一番きこえて居るのは兩國橋でせう。これは昔から花火で有名な所。千兩を只一晩で烟にする鍵屋、玉屋の廣告場、實に江戸名物の一であつたのですが、今は昔程の風流な所が薄くなつて殺風景な修羅場を演する位が落

ちです。水はあつても景氣は乾燥き切つて居ますもの、話は横にそれますが、此大川に架る五大橋の通行人にそれ〴〵特色があるから面白いんです。尤も朝と夕の觀察にすぎませんが。吾妻橋は重に工場通ひ、お厩永代の兩橋は荷積の車、盲目縞を着た人が多く、兩國橋は雜多な、或は股引、或は前垂掛け、或は廂髮、或は島田銀杏返し櫛卷、あらゆる階級の人を惜しげもなく見られるのです。一番興味深く感ぜられるのは實にこの兩國橋です。

△關取り

これも兩國橋と古から深い緣で、今度愈々もとの青天井が玻璃天井に變りましたが、意氣も張りも廢れた世に、關取升りは見て氣持ちのいゝ、交際ふて可愛らしいもので御座います。濡羽の鬢に、キツト結んだ大總、黑縮緬の着流し羽織、皮緒の五枚雪駄、取つて食べたいやうな豐頰を墨田川原の夕風になぶらせ乍ら、ゆらり〳〵と兩國橋を渡つてゆく所などは、まるで畫にでも書いた樣ですわ。これが一度着物を剝れれば、六尺褌の龍となり虎となるのかと思へば、獨り土地の名物でなく、國の名物否世界の名物と申して差支ありますまい。

△さくら



京は嵐山の朝櫻、都は墨田の夕霞、何といつても春は都中の人を墨堤にさそひます、よしや想ふ人があらうがなからうが、花よりも、都鳥よりも、言問の團子なといふ人が多い世の中ですもの、何で來て見ずに居りませう。家路わすれてきのふも今日も遊んだ揚句が、竹屋渡頭のわたり舟から堤の櫻しぐれに無情な感じて柾下りを撫でる風流人が每年の春どれ丈けあるかわかりません。

實際こゝのお團子は白、青、小豆一寸お萩餅の性質でまことに淡白としたいやみのないお團子で御座いますよ。

その外、牛の御前、白髯、三圍り、巡る名所は澤山御座いますけれど、名物あさりには、こゝらに立寄ると日が暮れますから。

△淺草の觀音

金無垢一寸八分の佛體を、方、何間の伽藍の奥に鎭座まし〳〵て、一年三百六十五日、風の吹かぬ日はあつてもお堂の前の敷石に鳩がついばむ豆の撒かれぬ日はないといふ繁昌で、老若男女貴賤都鄙、色めく春の花衣、落葉の秋の紺法被、野暮も粋も、信心も不信心も、ひとしく磁石のやうに吸ひ寄せられます。不思議ですわ、無理もありません、此頃の不景氣ぢや。苦しい時の神だのみ、鰯の頭も信心からといふやり口ですから。處で私共無信心ものには、此邊の有難さは一向に分りません。

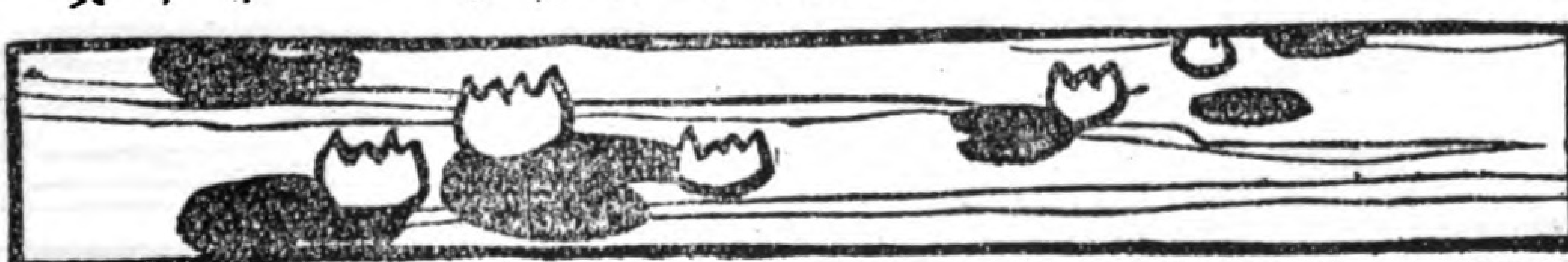
まづ目につくのは此境内の光景で御座います。一體私は虚榮坊で、五圓やるといはれても此樣な處を歩くのは嫌いですが、江戸に居て江戸の話しが出來ぬと同じく、東京の「淺草どこだんべいし」ときかれたときに、「上野よりはまだ遠い處ですよ」ぢや誰れも承知しませんから、どうせ行くなら一と思にと、天晴れ田舍者になり終せて彼方此方を彷徨て見ました。

宛然一篇の風俗史を覽るやうなもの、これでは觀音さまが名物なのか、周圍の有象無象の方が名物なのか判りやしません。

昔狒々で名高かつた花屋敷、今はこれでなけりや夜も日もないといつたやうな活動寫眞、キネオラマ、パノラマ、十九世紀の見世物小屋、其他雜多の興行物が、あちらからもこちらからも、金切聲をふりしぼるやら、廣告のよりも下手な音樂を吹え出させるやら、只一時で耳の鼓膜に皺がよりさうですの。此やうなのが池の周圍をとり卷いて居るかと思へば、お壽し、おしろ粉、くず餅、氷店、つぼ燒、牛肉、お蕎麥、天麩羅等の曖昧着板のぼり旗が盛にお腹の蟲を挑發させて居ります。

處がこれ等の經糸を織つて行く人の狀態がまた面白い。

十八九の島田が今はすつかり廢れた紋御召の一寸振つた着付けに友禪しぼりか何かの帶を小意氣にしめた所迄はよかつたのですが、其の脊の高い黑塗りの履物を見たときは忽ちお里が知れて興がさめてしまひました。



さうかと思へば、此頃流行出した靜江卷の粋な束髮に、何とか御召のぞろつとした容姿をして、帶は白絽縮緬の墨繪模樣をキユーツと締めた二十前後の目のさめるやうな美形、それが子供でせう、瀟洒な洋服を着た女の子を蝦色塗り腰高の乳母車に乘せて下女に押させ、自分は其の良人とも見える極ハイの紳士と澄し込でゾロ〳〵と練る鹽梅、牛値と見ても何爵のおしのびと見て居るうちに「母ちやん、かあちやあん」と後から子供が呼び立てるのですけれど、當人一向平氣の平左で先の方にゆくので、下女もこれには馴れて居ると見えて、今迄口を開けて見世物の薔看板を見て居たのが、この聲に驚いて、とある露店のゴム風船をあてがひ乍ら、「孃ちやんはまた泣蟲にとつかれたね」と恐ろしい見幕で往つてしまふ。わたしは只呆氣にとられて妙な溜息をつかずには居られませんでした。

そのうちに餘り塵埃を吸ふた所爲か、胸が惡くなつたので、何處かに休憩しようと考がへて居りますと、「あんだれ、そげに見るべラボーにつん高へ烟突は？」と耳に這入る聲があるので、ふと振りかへると、田舍のおぢいさんとおばあさんそれと赤い半襟をかけた十四五の娘とが、都に遊學の子息でゞもあらうと見える二十四五の角帽に伴はれて通る所なのでした。烟突と聞いたのは十二階の事なので、人ごと乍ら私も苦笑せずに居られませんでしたが、その青年は返事もせずにズン

ずん札賣場の方に行きまして、やがて皆を登らせました。私も此青年が其の兩親や妹にどういふ態度をするかと内々思ひ設け乍らあとについて參りました。二階三階と昇るにつけ、老人は漸く息切れがするといふ鹽梅でしたが、其の息子とも見えるのは、知らあん顏して、「苦しけりやよせば好い」といつた顏付をして自分の健脚にまかせてどん／＼先きに昇つて行きます。あとにその小倅は「あれ一寸々々、こけへ來て見んさい、あげな美くしい女が居ますだよ」と既にいく年來かけられてある土地の名妓の寫眞を珍らしげに老父母に紹介してゐるのでした。只これ丈けの事實では其の青年の氣もとより輕卒に罵ることは出來ませんけれど、ともすれば今の世は、親が多年粒々辛苦に報するに「何んだ非文明な」の數言を以てする人が少くないときいて居りましたので、此の青年も或はそんなことをする人にならなければよいがと祈つて其まゝ私は下りて外に出てしまひましたが、つくづく「都會の風」は冷いものだと感ぜずには居られませんでした。一寸、五分十分の間にこんな出來事が拵つくりかへされるか分りません位ゐ、何れよそ目から見るので穿つては居りますまいが。其の外、つい先年迄見られた居合抜、寫眞早取り、阿呆駄羅經、軍談師、など、今も面影丈は殘つて居りますが、何といつても、皆活動寫眞にお客を寄せられてしまひましたもの。

此樣風で別に名物らしい名物も御紹介が出來ませんが、云ひ殘した入り口の三疊敷程の大提灯、これは眞に名物といつてもよろしいでせう。これを見て始めて名物の觀音樣らしい氣がいたします。



△物見高い癖

これは江戸の昔も東京の今も變りなし、一寸上野公園などのぞいて見てもすぐわかります。

葉櫻の木陰に何を殺風景な人だかりかと立寄つて見れば、共同便所が知れなくて田舍の人がつい新刑法に觸れて三十錢の強制をうけて居る所なのです。と今度は動物園近くでまた人群り何かと思へば、朦朧車夫の鑑札調べ。さうかと思ふと池の端を下りようとするつい石段の際にまた人のかたまり。これは救世軍の布敎演說でした。と御隱殿の坂をぞろり／＼人が追從てゆきます怪我人かと見れば何の、六つぐらゐな女の迷子。

凡てが斯ういふ具合ですの。何も江戸斗りが物見高いといふ譯でもないでせうが、何しろ人數が多い東京ですからねえ、其の昔、秋色が、井の端の櫻あぶなしと書いたときなどは此調子ぢや却て酒の醉ひより危なかつたでせう。

△解語の花

吟風弄月、花一時の比喩を他にして、春も秋も夏も冬も爛漫と咲きほこる解語の花、これも名物のうちにいれてと思ひますが、蛇の道は蛇、粋樣の領分に入るでもあるまいと只一句。眞に啖火の切れるのは柳橋ぢや御座んすまいか。とのみ。

お孃樣の買物ぶり

小間使　梅野

▲呉服屋

御不斷妥の絣絣を御求めになるとて、夏物大賣出し見切反物いろ〳〵と景氣よく看板の出てゐる、小さな呉服屋にお這入りになる。

店棚に陳列してある久留米絣を、あれかこれかと御覧になつて被居しつたが、どれもこれも有觸れたものばかり、御氣に召す樣子もない。

「大丸か、高島屋へでも被入しつては」と私が御勧めすると、それをチラリと聞いた店員。

店員「今年仕入ました新柄が澤山御座いますから、何卒此方へ」と案内する。

奥の棚から[illegible]が擔ぎ出される、これでお孃樣の足元も、漸つと落付いて椅子にお腰を据ゑられた。五反十反出るものどれも珍柄。

令孃「まあ、この絣の好いこと、けれどこちらの方が高尚だわ。」

番頭「皆さんが珍柄々々と被仰いますので、織方でも毎年色々と工風を變へまして……。」

令孃「褪色ないでせうか。」

番頭「幾度お洗になりましても、大丈夫お受合いたします。」

令孃「けれど、紺の褪色ないのには、獨逸から輸入する人造インヂゴで染めたものは、確かに五六年は持つけれど、どうも植物色素のものは、餘程上等でないと三年は着られませんわ。生中久留米の安物よりも新規に出來るものに、存外紺の良いのがあるわ。」

番頭「本場では、それが八釜敷なりまして、近頃は組合で一々鑑定證を反物に貼付することになりました、これがその證明で御座います。」

と番頭はいろ〳〵と反物に貼つてあるレッテルの説明をする。

令孃「絣と云へば、昔から千篇一律で、頓と異つたものが出來ないわ。他のもの〻樣に範圍が廣くないから、此上意匠の凝りやうもあるまいが。又あまりに突飛なものを拵へても、下品に見えるから、織元も定めし苦心だらうね。」

番頭「一寸と面白い絣の御座いますのは、奈何しても琉球物で御座います。お値段は張りますが丈夫で、洗濯するたびに、何となく良くなる樣な心地がいたします……お大家のお孃樣方は大概薩摩の方を、御用になります。」

令孃「左樣ですか、ヂヤ私もその方にしやう。成るだけ絣の明瞭したのを見せて下さい、……紺絣の方ですよ。」

奥の棚から小僧が持出した反物を番頭が受取り、鳥渡と値段の附紙を見て、

番頭「二三日前に荷開きいたしましたもので、これなどは却々珍らしい絣で御座います。」

令孃「まあ、包紙から異いますね。」

番頭「地が全然で此の通り異ひます。」

と久留米と琉球との地質を透して見せる。

令孃「久留米の方には、絣の氣に入つたのがありますが、薩摩絣を見ますと、久留米はいやになるし思案にくれますよ。」

令孃「梅や。」

と私をお呼びになるので、おそばに參ると。

令孃「あまり澤山あるので、どれに爲やうか迷つて居るの、お前どれか見立てゝ極めてお呉れな。」

お孃樣の前に積上げられた反物は、三四十反もあるだらう。「大家のお孃樣は」と云はれて、今更氣に入つた久留米絣を買ふのは、恥辱の樣に考へてゐらるゝ。薄暗い店内で、あまり永く見詰めて被居しつたせいか腦神經を刺戟して、眩暈でも起しさうな顏付。お孃樣は平常から、お前は田舍者だから、縞柄の見立てが下手だとお笑ひになるに。今日は田舍者の私に見立てよと仰有る。けれど私が好きな絣は、お孃樣の御氣に入るまい、何か私の氣に入らん樣なものをと思ふて、搜してゐると、見てさへ好かん麤手古な絣が出たので、「お孃樣、これが珍らしくて、上品にもあり、好く御似合遊ばします絣もよろしう御座いますからこれになさいましては。」とおすゝめする。

思案の後。

令孃「久留米絣の方だね。」とさも不滿に侮蔑したやうに被仰る、暫らく

令孃「ナナ、番頭さん、今日はこれにして置きます。澤山見せて貰らひまして氣の毒でしたね。」

僅か一反のお買物に、山の樣に積上げませて、それで不足らしい顏も見せぬ番頭、流石に商賣柄である。風呂敷包を脇に抱へお供して町に出るとお孃樣はホツと一呼吸される。

吳服屋では、お孃樣がお買物なすつたのではなく。私が見立てゝ、私が買物を爲たのだ。



花妻日誌

花妻女史

ヽヽヽヽ日

今日一日我は待ちたりき、さなり、はかり難きは人心なるも、彼の人にのみ限りて斯かる事はあるまじと思ひてなり。終日待ち暮す、馬鹿げたる哉。つひ來ず、夜寐れんとするも咳出でゝ眠れず、我には病あり、しかもそは肺病なりき。

ヽヽヽヽ日

我には今年二十六になる兄上と、其の下の姉上二人ありて我は末娘なりければ誰にも愛せられて、思ひのまゝに人の世の愛の泉に浴せしものなり。さればにや姉上の折々我擧動のあまり我儘に過ぎたると、母上の優しすぎるを云いて眉ひそめ給ふこともあれど、我は女の嫉妬なりと思ひて過ぎぬ。かく迄に我の心は傲りしなり。家人は我を呼びて小さき女皇と云ふ、誠に然るべし、家にありても學校にても我はかゝる行ななせしなり。僅かなる才に誇るは女の常なりとはいへ、人の影口にもある嬢様はお伶俐と云ふに、彌々己が才を頼みさほど迄に麗はしからぬ顔にも最早や一角の美人振りて、化粧にまへいろ／＼と思ひをこらすやうになりき。



今年になりて其心は一入深くなりて、着る物も帶も一々事難かしく云ふを母上も姉上も何故か哀れがり給ひて我が思ふまゝにしたまふは、昨年ふとせし假り初めの病より醫師に肺なりとの耳打ち受けたまひてよりの事なるを、愚なる我は何事も得知らで、たゞ我可愛ゆきまゝにかくせらるゝならんと思ひしぞうたてき。

ヽヽヽヽ日

母に伴はれて、一月ばかりの間、逗子に行きし事あり、知人の別莊を借りて女中一人使ひて靜かなる海に向ひゐし事ありき。あまり高からぬ官に在せし父上の娘として、不相應とみるべき迄に我は奢りぬ。一週置きに母上と姉上とは交られつ、其折々には、牛鑵、りボンと我意にかなふべき品持ちて來たりては、淋しき我こゝろをば慰め給ひつ。我はヴイオリンを少し奏るを、天晴れの音樂家氣取りになりて、月清き夜そゞろに奏づるなど人が見れば心憎きまでの態度多かりき。されど誰とてとがむる人なければ何日も思ふまゝにふるまひける。

ヽヽヽヽ日

我には病あり。併かもそは肺病なりき。一度びかゝれば何人ものぞみを失ふべき病なり。されど之を聞きたる我はあまり失望もせざりき。何故に？と人は問ふべきも、我は女の年

老ゆるを恐ろしき事に思ひしなり。凡そ世に、女と生れて人に老いたりと云はれ、自らも老いたりと思ひし時は、如何ばかり情無きものなるかを思ひて、むしろ其の苦痛さけたく思へり、さるを肺病ときゝて、人の嫌ふより、已が苦しみよりも、更に苦くして死すべし、併かも此の病は人を美しくすべく、我の小さき哀れなる虚榮心を滿足せしめしなり。されどそは唯我が一つ負惜みに過ざりき。今となればなか〱に嫌ふべき病なりしを。

、、、、日

逗子の我が假の住居より少しはなれて同じ別莊に住みし一人の青年ありき。年二十二三ならんか、中丈の瘦せ形にて度の強き眼鏡かけたり。彼の人もヴイオリンに巧なりとか某の高等學校の生徒なるも、神經衰弱にてしばし休學せると云ふ我が友なる人の知人にて一日紹介せられぬ。今は方の數少なき身の、話對手とはなき身なれば亮一樣（靑年の名）の音樂、美術・文學の話如何ばかり已が知識をひろめたらんように思ひて深く感ぜしなり。友の話とは事變りて一々學ある人の話なれば却々に高尙なりと最早聞かぬ先から半ば醉ひてかかりしなり。折々は我宿にも來給ふに、母は初じめのほどは難しき顔したるも、終には唯注意深く我の身を監督し給ふ而已。亮一樣の事につきては絕えて一言も洩らし給はざりし。



、、、、日

日頃より我には一の自信ありき。餘りにおごれると聞く人は笑はんも、我は眞面目にかく思ひしなり。凡そ世に、我を美しと見ざる人やある。男にして我が心に從はざる人はなかるべしとは常に我が心にて思ひし事なり。されば兄上の許に來る數多き友の内にて我の心に適へる人は一人も無きも、一度び我云へば皆從ふと思ひゐたり。女にとりて如何ばかり其美貌は劍なるかを我はよく知れり。年老いたる人は我が高慢なるを憎しとも思ふべけれど、若き人には去る感じはなかる可し、女のおごれるも憎らしきかは知られど、男の傲れるも女より見れば憎らしき限りなり。亮一樣はどちらかと云へば傲慢なる方なりき、我もおごれり、いかで亮一樣を伏せずば置くべきと思ひし事しば〱なりき。

今日其處い等を散步せばやと誘ひ給ひしかば母上と三人して家を出づ、濱の方も早や飽きたれば唯當もなく淋しき道を步く。小さき道に出づれば亮一樣立ち止りて、

「淸子さん御覽んなさい。」と微笑みて立佇ひ給ふ。足元には紫の菫、二輪狂ひ咲きしたり。

「まア可愛いゝ、取りませっか、斯うやって置きませうか。」

と我も笑ひて首傾しげたり。

「サア奈何でも、斯うやつて置いたつて誰も取る人はないで

せう。今頃咲いてゐるんだから。」

「然うれ、ぢやア取りませう。」と我は故意と澁き方を殘して置けば瓦一樣も笑ひ乍ら取り給ひて、

「上げませう。」と意味も無く笑ひ給ひしならん。

「え〻。」と我は手を出して交ゆるとも無く澁きは瓦一樣の手に渡りぬ。母上は何事も。唯微笑み給ひつ。

夜に入りても何か心に樂しみのあるやうにて、我一人燥ぎて母上に話し掛くれば、

「奈何したのか今日は大變に機嫌が佳いれ、氣分でも佳いのかい？」

「え〻。」と唯頷きたれど何故となく我が心に咎ふかく覺えつ。

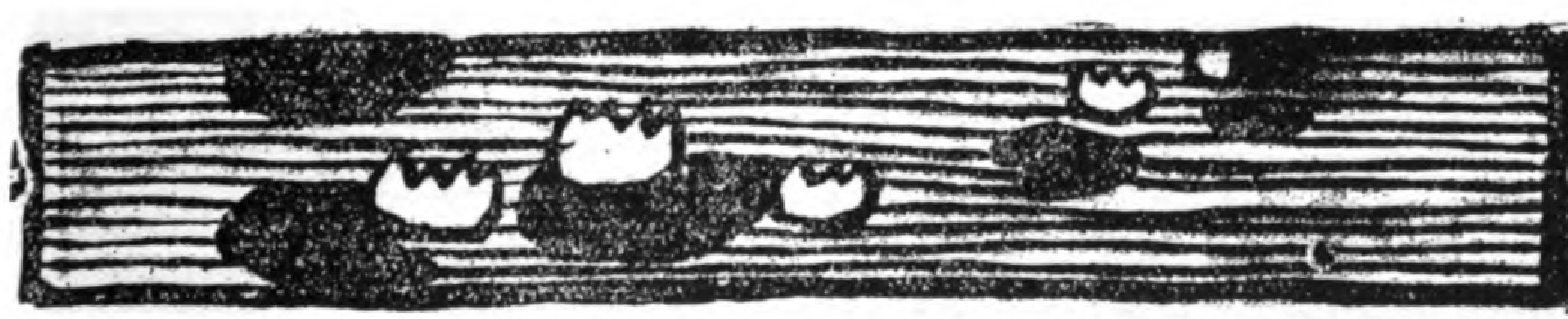
瓦一樣より借り受けし詩集の間に今日摘みたる菫を押し花にと挿み置きたり。

ヽヽヽヽヽ日

一週間程前に押したる菫を出して、別に書く事も無きに、取りとめぬ感想など認めては出しつ。程遠からぬポスト迄重れ草履おもく引摺りて、我一人行き、歸れば姉上來たまへり。我を見て、

「何處へ行つてましたの。」と輕く問ひ給ふ。

「鳥渡其處まで。」何事もなげに答へしもの〻、我顔は紅くなりたるべし、姉上の優しき目に遇いても我は顏をそむくるやうにするは、我ながら恥かしく思ひたり。



「然う。」と唯姉上の我顔見てありしが、我は胸の内迄見抓さる〻かと心苦しさ限なく、

「眞實よ、門の處まで行つたんですわ。」と云ふ。

「誰も嘘とは云やしないのに、可笑しい事。」

「だつて……。」と我は間の惡さに思はず俯向きぬ。何故か此の日は姉上わが性質が變りたるやうに覺えしと幾度も云ひたまふ。何となく落付かぬやうになりて、何日もの人もなげる騷動失せて、女らしくなりたりとて、そが姉上何とおもひ給ひてか、只管哀がり給ふ我もつい釣り込まれて、淋しくなりしかば、

「奈何變つたでせう。」と伺へど唯、

「變りましたわ、眞實に、だが優しくなりましたわれ、でも私には舊のま〻の清さんで、矢張りあの通り、我儘の有りたけ云つた、やんちやの清さんの方が好いですわ。」と云ひ給ひて優しき姉上は早や目に涙を宿し給ふ。何故にや醫者より聞けば我が病は此頃になりて餘程快き方なりと云ふに。

「變りましたわ、而して少しお瘦せのやうれ。」と云ひ給ひしのみ、それよりは一言も云はれず、變つたわネ、と云ふ言葉に、我は、もしや、瓦一樣との事を可怪しく思し召してにや、と、思へば、變つたとの一言に、胸の奥の奥迄知られ盡したら

んやうにて唯不安の念の高るのみ。夕方姉上と、直ぐなる姉上と我と三人にて濱邊をそゞろ歩きす。春雁の鳴く聲遙かに聞えて、三人とも多く無言なりし。

……日

稍や暖たかになりたれば明日は歸京する事に定りぬ、我に還け島あれば例の如く厭やとも云へず、唯々として、我が手には出來る限り、身の廻りの物を片付けにかゝりぬ、されども折々に呼吸苦しくなりて、突伏す事しば〳〵なり。姉上は我が背を輕く撫で給ひて、姉妹の情、我れ此の頃になりて染みじみ嬉しく感じぬ、姉上笑ひ乍ら。

「何處かへお暇乞に行く處はないの。」

「え？」と問ひ返す時、胸は怪しく亂れて後は續かず、獨り動悸のみ高く打ちて、顔は熱かりき。

「何處へも行かなくつて佳いのかい？」

「えゝ。」

「然う。」と氣輕に云ひ給ひて姉上二人は女中と共に外出し給ふ。入り違ひに眞一樣よりの文來つ、菫の事を此の上もなく褒め給ひて、よくも我れと取り交したる菫を今迄持ち給ひし、と悦びたる如き暖たかき言葉多く連れたる文なりき。讀み終りたる時は、其の人の面影を目に浮べて我は醉ひたるものの如き心地したり。それにしても明日歸るとは、餘りに短かき事ならずや。



……日

今迄の事は唯果敢なき春の宵の、一睡の夢の夢の夢なりきと知らば、あゝ醒めざりしものを。

……日

花咲きて世は春となりしも、我こゝろのみは秋とかはりて淋しさの度や增すのみ。やまひは別にさしたる事なけれど學校は今年一月限りにて退學しつ、あと二月にて卒業なれば惜しき限りなりと友の誰彼はひたぶる同情を寄せてくれしなり。昨日友の家にて卒業式の寫眞見せられて、口惜しかりき、餘り厭やでも無き此の病氣のつく〴〵厭に思はれて、此の病さへ無ければ學校も卒業されしものをとそゞろに身の憂さが恨めしかりき。眞一樣も東京に來給ひて其の日を送らるゝと云ふ。されども我は肺病なり、戀するには肺は到底不可なるべきか……、不圖せし事の行きちがひより甚だしき誤解生じて、其上に我には病あれば眞一樣との文ははたと絕えぬ。我は幾度びと無く出せど返りごとの無きを如何せん。

驚く手紙を見て

△△女

先づ新聞廣告で平塚さんのがあるのを知りました其時、商賣上手と微笑致しました。

然り誰でも第一に見るのはこれでせう、私も眞先きに拜見致して日本にも此樣な女があるのを外國人に話してやりたいと思ひました。思へばお茶の水の袴時代一つ下のクラスに菫の花ともたとふべき君の御姿、たゞゆかしきをとめとばかり見まゐらせましたのに……拜見してしまつて私は亡なつた父を思ひ出しました、父は非常に丈夫な人で、平生深呼吸萬能論をとなへ、私などにも何でも深呼吸をして氣を丹田に落付て居よ、左樣すれば生理的に精神的に健全を保つ事が出來ると常に〲申し自身それを勉め、自分は百歳の壽を保つ事が出來ると大ゐばりでした、しかも四十幾つで突然死んでしまひました、失禮ですけれどそれを思ひ出して笑はずには居られませんでした、まあ〲自我の發揮も結構ですが、たつた二人の姉妹もちたまへる御兩親樣のお世話をやさしくつとめておあげ遊ばせ。

△入水せし女の遺書　長谷川しぐれ女史式空想文と拜見致しました。

△賤業婦の手紙、私のお友達にもあります。私はこの手紙の主と御交際したいと思ひました。

△憧がるゝ少女の手紙、いやな小娘です、ちと御母樣が堅固に遊ばして氣品の高い性質を養はれたいと願ひました、人に可愛がられたり人をあやなしたりする許りなら猫と大した違ひはありません、春日の局、乳人淺岡の類を御讀みなさつて、下らぬ手紙を書くいとまに品性修養して下さいまし。

△平凡なる田舍の友より、御同情にたへません、せめては讀んだり書いたり遊ばして御暮しなさつては如何。

△都なる友の許に、みどりの君とはさては同窓の御方かと御懐かしう、いやみなき美しきお筆つゝしんで拜見致しました。

△人の缺點をあげた手紙、困つたものだと御同感致しました。

△尊き師父の教訓に、よいお姉樣お持ちになつたおとき樣の御幸福は羨ましう存じました。

△人の内情を寫したお手紙二種、さう云ふ家庭ばかりとも限りますまい。

△虚榮に憧がれし三年の昔、ありふれた話です。

△人情學に及第せし姉より、御察し申上ます。

△遠き國なる大姉の許へ、「手紙文は廣義のものたるべくたゞ美文として價あるのみならずこれによりて婦人の人生觀を云々」の募集の意にかなつて居りません。

△雁のつばさに籠めし海山千里の消息、と云ふ題が大變ですよむにも大變です。

△痛切なる友の警告、こんなお友達が欲しうございます。

△女塾の内狀を報ずる文、目に見えるやうです。

△病床に母を慕へる手紙、そんなに優しいお母樣があつて御懐しい御主人樣親切なる下女可愛いゝ坊樣、あゝ御羨しいと私實際涙が出ました、もしも私がそんな身の上ならこんな。にくまれ評をかく迄に心がねぢけは致しますまいに嘆々。

△模範的良妻の手紙、敬愛する夫君の爲めに身心を勞する……御申稱に存じ上ます。

△貧生徒よりの希望、私と同じ樣な境遇のます子樣の御手紙を、我身につまされて拜見致しました。

惡口ばかり……何故私はかう御遠慮なしににくらしい氣をもつのでせう矢張り心に不平があつて世にそむいて居る爲めでせう。

皆樣さう御怒り遊ばさずあはれな奴と思召して頂戴

△東洋高等女學校の開堂式

文學博士村上專精氏の經營になる小石川區丸山町の同校にては此度教誠堂と名くる一の講堂を新築し、平素學校教育に使用する外に、毎日曜日には社會教育の方面にも利用する事となしたり去月十三日午前九時より其の開堂式を擧行したるが、建築の工事報告、校長の式辭、岡田文部大臣の祝文朗讀、牧野男爵及び三上博士の演説等あり正午頃式を了へ、又午後一時よりは餘興の催もありて頗る盛會なりき。越えて同月廿日、右講堂にて第一回の催として村上專精氏の二十年前を憶ふ、高島平三郎氏の食物の心理、高木男爵の教育と宗教との關係等の講演ありたり。

△京都蠶業講習會

農商務省京都蠶業講習所女子部は、昨年十月の開設に係り、現在二十五名の在學生を有し、學科は數學、理化學等の普通學の外、蠶學汎論、養蠶法、製絲法、桑樹栽培法、蠶種論、蠶體生理論、蠶體解剖論、蠶體病理論等にして、實習科目として春夏秋冬の蠶飼育、蠶種製造、顯微鏡使用、蠶桑苗生林審査、絲屑物整理、栽桑剪定等ある由なるが、生徒は就中實習に趣味を有ち熱心に研究しつゝありと云ふ、同所は今回第二回講習生を募集しつゝあるが、十六歲以上の女子にして七月十日迄に地方廳を經由して出願すれば試驗の上入學を許す由、修業年限は二ヶ年なり、委細は六月十日より三日間の官報に就て見るべし

△音樂夏季講習會

神田區錦町三丁目十一番地日本音樂協會にては八月一日より同二十一日迄男女を問はず音樂科教員志望者並に東京音樂學校入學志望者其他一般音樂研究志望者の爲めに夏季講習會を開く、科目は唱歌、ピアノ、オルガン、ヴアイオリン、和聲學等にして、講習料は一科目金壹圓五拾錢、二科目兼修は一科目を增す每に金壹圓を加ふ、志望者は來る七月二十九日迄に申込むべしと云ふ。



金子薫園選

一等

○ 四谷　松原俊子

初夏の夜の夢や斂むる白玉のからみ流れて溶くる如きかな

評、「白玉のからみ流れて溶くる如き」ものまた此歌の姿なり、調べなり。清楚たぐひなき作。

二等

○ 青森　赤津梅子

雨あがり山をはなるゝ白雲の如くに君を忘れむとしぬ

評　情緒のほのかなるを喜ぶ、瀟洒なる作者の面影をしのばしむるものあり。

三等

○ 芝　井上たき子

とつぎゆく君がはえの日わがこゝろ紅よりうつる紫の色

評、紅より紫にうつるといふ觀方によく作者の感じが表はしえたり

秀逸

○ 駿河　藤田しづ

空耳にわれよぶひとのこゑぞきく産室にいぬる六月の晝

○ 磐城　みどり

ほとゝぎす聽けばむかしの戀しさの夢の心ともひゞき來るかな

○ 本郷　まさ子

萌ゆる葉の青きを見れば喜ばし何故となき安さ覺えぬ

○ 千葉　吉原安藝子

川ぞひの白き砂原梵文をかくがごとくに夕立はしる

○ 武蔵　鈴木ゆき子

荒れ狂ふ浪をし見れば逞ましき男の腕おもほゆるかな

○ 若狹　津田汐汀女

暮日は夢につゝまむ一と年の終りの日をば悲しうみせぬ

○　岩代　城田いち子

夢に見しその面影の幾世へて相會ふ人か忘られぬかな

○　讃岐　小野定子

ほととぎす聽けばわか葉の中にして泣き居るわれのまぼろしに見ゆ

○　豊後　吉良靜子

とかくしてみどりの陰にたゝずめば待ちえしごとく啼きいでし鳥

○　伊勢　稲葉さいゐ

悠々と大わだ中を黒船の一つ行くなり夕立のあと

○　錦町　よしこ

明日といふよきかあしきか知らねどもまだ見ぬ日ありかくて人生く

佳作

○　伊勢國　多田小あき

暮ふこと事よりことを生み出でゝ果ては涙の種を蒔れきぬ

○　下総　小澤よみし

琥珀色の花あまた咲く初夏の野のいづこにか夢をおかまし

○　日向　難波美代

栗の花しづかにゆらぐ野に立てば限りなく頬みながるなり

○　豊後　加納豊子

その暗き闇室のなかにものありて遮はるゝごとき気なつゞけし

○　上總　太田春江

桐の花窓にちる曉の燈かげうすくしめりてありぬ

○　長野　小林[illegible]子

花さけば美しといふ執着の心きざしぬ山居する身も

○　尾張　小百合子

いかづちなわが昔の聲とほゝゑみてみるいなづまの青きもよろし

○　美濃　酒井とみ子

たそかれや白きかよわの薔の花をかざつゝ君にゆく思かな

○　伊勢　佐々木らく子

笑みましぬ二つ流せしなでしこのもつれて斜にながれ行きし時

○　岐阜　梅子

さみだれや誇りてありし處女の名なにならねども涙ながるゝ

○　長岡　小堀すま

朝風にそよろあるきの心よき右も左もむぎ畑ばかり

○　福井　大橋きよ子

涼風は戻り舟ありてかきつゝく岸の池より起りみす揺る

○　神田　門叶富美子

我が里は朝風によし家ごとに燈明りして花よりあけぬ

○　伊賀　林しか子

聞きわれ誰につゞりぬ打ちつけに戀しと云へば足るものなるを

○　牛込　平塚白百合

まぶたにか君は住むらし眼とづれどくらきが中にほゝゑみおはす

○　釜山　朱雀屋子

わがこゝろ君が心にふれてよりさわだつことを覺えそめてき

○　下總　岩瀬不二野

わが胸の色さながらの紅いちご君にふくませよしと見るかな

○　伯耆　安田梅野

宿かへて馴れぬ二夜は窓の灯に照らしてぞ見る紫陽花の色

○　宮城　齋藤なよ子

我が胸の燃ゆるが如くなりし時黒き雲來て夕立の降る

○　武藏　晶子

五月雨や隣屋の前なるせんだんのこゝにのみふる紫のあめ

○　大阪　栗野光子

鉢植の三色すみれにとまりたる胡蝶もろとも君に送らばや

○　千葉　月沖さゆり子

柑子すへば熱病み母がおん床にわびれせし日の切にうかび來

○　神戸　松下眞久子

君と行く午後の日あつき楓路淡き若葉の香にまかれつゝ

○　宇治　福村千代子

悲哀てふ字も知らざりしをさなどき母に別れし夜をふとおもふ

○　大阪　白梅

きぬ傘を手寄にとられて初夏の日をいとひつゝ畷の道ゆく

○　大阪　木村花子

何ものか胸の扉叩くふと醒めてしきりにうづく心のいたみ

○　茨城　荒登代子

煙突の煙りのひまにいとあはき月のかげあり何かおもふや

○　大阪　沖ふく子

あぢさゐの花むらさきの傍に五尺にあまる蛇のぬけがら

○　福岡　田中とよ子

新月と柑子の花の二片をまだらひに見ぬ初夏の宵

○　靜岡　熊谷靜子

そよ〳〵と若葉を渡る朝風の音をきく如し君がみことば

○　伯耆　齋尾はれの

灯は暗し流罪の人を送る船の白帆に近く鳴くほとゝぎす

○　駿河　藤波[illegible]

ただ青き皐月の空と野をよぎる一列白き鷺のながれよ

○　神戸　堀川宗子

人皆はよきこと言へど何となく淡き悲哀に涙さへしぬ

○　下野　片岡武子

無花果に夕月うすき板扉君を待ちにし夜もありしかな

○　下谷　岡本くら

角笛はをさなきころの音に鳴りて顔よき君のおもかげに見ゆ

○　山形　さい子

またの音は河内あたりにそのかみのあはれをなかん山ほとゝぎす

○　尾張　小百合子

小雨の日かざして行けば梯葉の花も散るなり君への路に

○　府下　安藤つゆ子

ほのしろく暮にきざめる御名よみて幸なき宋の朝に入る心地

○　上總　岩瀬陽子

ゆた〳〵と夢の黄の禮のそのなかにみづうみ青き蔭の國かな

○　　姫路　富岡綾子

飢してそゞろゑまれぬ處女なりし心地に衣更へするこの日

○　　伊勢　山口たけ子

ゆく春はゆふべ小窓のおもひでにさびしなつかし雨さへもふる

○　　下野　片岡濱子

初夏の山越えて來りし戀人の白き額吹く青嵐かな

○　　神戸　柏原みつゑ

天地のひろきこゝろにいかなればふれざるあはれ悲しき二人

○　　伊勢　たけ子

我頬に涙まろびぬ夕暮の行き交ふ空の雲を見しとき

○　　大阪　白菊

かきてよと手にせがまれてちりにそみし繪筆とるなり五月雨のひる

○　　岩代　樋口凱子

天城山五百重の雲に襞ぬらし君に摘むなり石楠の花

○　　山梨　一倉はまじ子

少女には君を思ふと敢ていふ勢もなしゆゑに悲しき

○　　日向　静子

きこり等がうたげする夜を河鹿鳴きて青葉がくれに月もいでにけり

○　　大垣　秋田露

草深き城址なつの夜はふけて亂聲(らんじやう)になくほとゝぎすかな

○　　熊本　角田ます子

死にてゆくさまとも小雨ふる夜の古驛の家並わびしき夕

○　　名古屋　稲井はる子

夢の禮に晴鈴とまれる淡夏野を君がさし行く傘に日の照る

○　　山形　さい子

みどりこき木蔭のしづくしたゝりてすゞしき野べのありあけ月よ

○　　伊勢國　岡田つや子

白百合の花にも似たり師の君の琴の上はしるやさしき御手よ

○　　足尾町　栗林瀞子

春の汽車美しき人のせ今出でぬ鐵路のはての故郷思ふ

○　　伊賀　稲林きぬ子

君を見る心をもちて一輪の氣高きばらを見てある夕

○　　摂津　大濱池夏子

ぬれ色の若葉のかげに蛙鳴きしめやかなりし夕ぐれなりき

○　　牛込　山塚今　諏訪湖

ひともとの花を愛でしはわれ戀に飢ゑける時の心なりしか

○　　茨城　大田季子

夏やせのみめよき女窓によりぬかすかに百合の風かをるなり

○　　長崎　天野春子

ありし世のなつかしくはたかなしきの涙して見る木がくれの星

○　　神戸　芳蝶女

大木の若葉のかげにやすらひて汐あむ人を見てある眞晝

○　　豊後　加納登代子

白砂をまきたる庭のかたすみの雨のあがりのほゝづきの色

○　　伊勢　よし子

われ思ふ君のせし船君思ふ我を殘して小なくなりぬ

○　　日本橋　植松誠子

ひたぶるに天かけりゆく飄零の如くに行きぬ君への心

○　　岩代　城田和子

思はじと思ふ面影ふと浮べをのゝくはかりむつかれぬ

○　三河　高橋むつ子

山また山思はぬかなた松かげに御堂の屋根のおごそかに見ゆ

○　千葉　土屋喜美子

煙突はみなけむりしぬ街の家も吐息するなり暮ひくき日を

○　茨城　櫻子

行く春の小窓にもたれ半生の夢かへして物思ひにけり

○　神戸　水野輝代

このなげきまこと處女の悲しみと十八歳のいまにして知る

○　岩代　岸野常子

一人の妹は逝きぬ萬物の甦るべき春の日にして

○　神戸　石川まき

妹こそはまたれど膝に近からぬゆふべの君が夏姿かな

○　岩手　齋藤蝶子

戀はれます御身に何の苦かおはすしるき御やつれ不審の一つ

○　愛知　世貴子

空の色ひたして湖の水青きすべての青の中ゆく杜鵑

○　東京　呉ゑん

忘れんとして忘れえぬこの心朽ちよとおもふ五月雨のこそ

○　山田　宮川光子

過去にきゝし冷たき言の葉をかゝる身にいままことと知りぬ

○　岐阜　柳本あやめ

よろこびの日は薄らぎてかなしみの雲ひろごりぬわが胸の空

○　北多摩　小峯花子

霖雨のしと／＼降りて昔のことも青柳けぶる多摩の河原

○　美作　佐金知嘉子

ちぎらねに君來まさんと待ちし夜の如き心地す雨の夕暮

○　岩代　木村しのぶ

池の底にも笛の響すと玉手にわけし浮草の花

○　山口　星村たま子

深山路の驛新しきとまり宿にねぐるしき夜をほとゝぎすなく

○　伊豫　宮松扇子

春を送る風めさやきのゆるやかにしろきむらさきあやめ花さく

○　福岡　藤枝女

別るるとわかれしほどの君ならば戀しき戀のあともあらむを

○　越後　小林あき子

花と共に我世の幸を持ちゆきし春の女神よふたゝび來ませ

○　岡山　下野靜江

夢さめぬひえし蒼なる我胸のあへぐを覺ゆ初夏の朝

○　大阪　田宮露菊

難波橋涼しき風に吹かれつゝ君と語りし夜をば忘れず

○　河内　中島鹿子

杣人がたきすてゆきし火の如き岩間に咲ける紅つゝじ花

○　伊勢　大崎欣子

灰濁る空を眺めて戀しさをせちに覺ゆるこの頃の胸

○　新潟　丸山さわ子

湯上りやそゞろよりたるおばしまに雲の流れを涼しく見つる

○　大分　二階堂光

五月の日わか葉のにほひ野に溢れそゞろや人の戀しかりける

○　岡山　熊澤亭子

桐にまひし胡蝶倦んじて葉がくれに美食せること藤の花さく

○　麹町　和田豊子

君の為め薬草わするる森かげや涙をさそふ山ほとゝぎす

○　能登　豆田きよせ子

人達はぬ鎮守の森の夕づく日落ちし椿をてらしてありぬ

○　府下　紅き花

われ十八華やぐ春を深窓にたれこめてのみ終日を泣く

○　足利　豊久喜子

おもひつゝひとりわび居の扉によりてさびしうきゝぬ藤の葉の雨

○　岩代　岸野清子

おん膝にたゞひた泣きぬみ情にこたへむ詞われは知らなく

○　下総　小出保花子

藤の花の涼しくゆらぐ大利根の夜あけに見たるつくば紫

○　芝　大野愛子

しめやかに小雨そぼふる夕まぐれかなし故里さしてかりゆく

○　牛込　百合子

雲雀雨のやどりはわれやせん来ませ二尺のわが袖のした

○　神戸　中村かれ

信濃より訪ひこし人と月踏むで松原づたひちぬの海見る

○　千葉　綿貫つる子

青光る葉の上に白き石まきたる如き月の夜のさま

○　名古屋　星重郎子

一すぢのながれにさけるかきつばた野中を行きてふと見いでつる

○　木幡　山川桐葉

ともし火の光しめりてきえぬべきひとり夜の雨の心ぼそかり

○　岡山　鶴澤辛子

野のはてよき国ありの夢心地薔薇色なる夕雲迎ふる

○　門司　気葉馨

暮つる日の夕の雲の紅にさびしき扉今日もあづけむ

○　伊勢　岩田信子

幼君はいと若やかの眸あげ胡蝶にものを教へてありぬ

○　大阪　花子

酔臭をとつどへる人の群ぬけて君と語りぬ朧月の宵

○　和歌山　大野美子

涼風に四つの袂をはらはせてほたる狩するふたりのこの夜

○　埼玉　さゆり子

月いでずやみのほどなる小川べを螢とぶなりいとさやかにも

○　栃木　露子

露かりて相行く野路の夕月夜君が片頬のほのに白かり

○　仙台　南もり子

湖の宿の朝戸をくれば前山は霧立ちこめて鳴くほとゝぎす

○　中河内　西村千代子

思ふこと語りも得せでいたづらに月てる夕君と別れぬ

○　横浜　鈴木まつ子

あつき日にめげず咲くなるわが門の百日紅の花はうつくし

○　紀伊　松島千枝

時鳥さみだれ晴れの夕庭に君と語りてきゝし日のごと

○　埼玉　春子

はしゐして涼む袂に夏の月水の如くもてらしゐるかな

○　香川　衣絵すゑ

老ゆるてふことを思ひて沈む日の弱き光を見れば泣かるゝ
○　伊勢　細野ふみ子

あゝかゝる夜なりし泣きつなぐさめつ松よき磯を君とあゆみぬ
○　小石川　美登風

吹く風の青くなるよとみるまゝに野山もなべてあさみどりせり
○　名古屋　森井せき子

土牢の讀經の御聲きくばかりしづけき夜なりほとゝぎすなく
○　備後　江見愛子

なにとなき戀しきゆふべ草笛の青きひゞきのたゞよひきたる
○　四谷　中山榮子

夕さればせどの流れに二人三人すゞむ人あり夏となりけり
○　熊本　矢野やをか子

川むかひ老松の樹にまつはれる藤の花さく初夏の日よ
○　淡路　道子

立ちこめし霧よりはねて赤き日の出でし如くにはえある君よ
○　出雲　長崎春子

沖の島にふとあらはれしおもしろき雲のかたちに繪筆とるかな
○　小草子

軒近くはし居の我に白ふぢはゆれてこぼれぬ君まつ夕べ
○　長崎　天野春子

夕月の照すさゝれに姉妹の小石ひろひてゑみかはすかな
○　大阪　今西春江子

人見れば人皆戀ひし見ざる日は離れ小島に居る心地する
○　東京　櫻木やよひ

云ひも得ず唯いたづらにいと弱き戀心もて君を慕ひぬ
○　大久保　天野文子

ほとゝぎすなが啼く山は知られども五月となれば人のこひしき
○　鹿兒島　別役とし子

峯の上たえずゆきかふ白雲のほとりをゆけるほとゝぎすかな
○　讃岐　小野定子

たちばなやこはいつやらむ夜の夢に匂ひし花のかたみとも咲く
○　横濱　吉川香都子

見かへれば後姿のほそ〴〵と中かくれぬ穗すゝきの道
○　伊勢　服部うめ子

さつき雨汽車路に立ちて故郷思ひ遠き鐘きくさびしさに居り
○　佐渡　臼杵さだみ

眼閉づればくらき灯影に青白き淋しき硯のあざ笑ひ見ゆ
○　西坂島　渡邊梅子

よきうたの一つをえなば我胸のこの悲しひもあるはまぎれむ
○　大阪　三橋美のる

大那須の篠原分けて飛ぶほたるたまと亂るゝさまをし見ばや
○　埼玉　船津千代子

送られし京の土産なる紅袖は明日人妻のわれにふさはぬ
○　東京　大久保りう子

つゝじ咲く晴れたる山の初夏の日に燃ゆる姿を水に浸せり
○　東京　中宮よしみ

深山百合うつし植うれば來ん年もさかむ眞白きその花の色
○　豊後　江口かなり子

青葉くろううつる野川に賤の男の泥馬洗ふ夕月夜かな
○　羽前　田中千代榮

月の夜や一人書よむおはしまに蚊のうなりして夏めきにけり

○　大阪　梅村愛子

ゆく雲を見るともなしに仰ぎつゝ何を思ふやうら若きつま

○　北海道　宮増好子

なき妹がめでしなでしこはな咲きぬ涙のつゆは風にちりゆく

○　栃木　鈴木いつ

小さなる胸にしあればみ心の深きも知らで彼の日恨みし

○　須磨　有村紫芳

高どのや松原ごしに浪みえてくだけてはよる月のかげかな

○　伊賀　亀山かず

いくとせを見しこともなき君を見てうれしなつかし心泣きぬる

○　大阪　中西たつ

なやみなく降るさみだれにたれこめて書よむ窓もくれにけるかな

○　大阪　波奈子

妹と涼しき欄に身をよせてしかけ花火の品さだめする

○　山梨　一倉はまじ子

夏の月大杉もれて大寺の瓦にてりぬ時鳥なく

○　香川　豊田とみ子

戀し君夕べ縁くと夢に見て秘めし片貝抱きて泣きぬ

○　豊後　菅原尾花子

ほのぐらうあたりはすべて猛獣のひそむかたちに夏の日暮れぬ

○　大阪　梅村董花

ゆめがたり笑ひ興ずるそが中に一人語らぬ靜なる君よ

○　京都　いく

五月雨に友は来らずわれとはずつれ〴〵草をよむにふさへり

○　武州　佐藤菊子

人目さへ枯れはてにける古池に尾花が多く咲きてゐるかな

○　大阪　河村英子

絣着て郷にかへりし夢さめぬ月光青く窓にさしける

○　大和　西田恵登子

さみだれのふるやの軒のあやめその草なきあはれわが身にぞ似る

○　茨城　越ヶ谷くに

すゞしさに月待つ宿の垣間よりましろに見ゆる夕顔の花

○　麻布　なでしこ

琴をのみ隣のうつゝに聞きなれておもかげ知らぬほとゝぎすかな

○　小樽　大屋貞子

御名呼べど叫べど泣けどわが君は默して立てり冷き石よ

○　京都　大石芳子

嫁ぎきて思ふこと多き夕まぐれとぼそによれば花散りみだる

○　京都　佐藤芳子

しと〳〵と春雨ふれり花にゐる胡蝶の夢路やぶらぬほどに

○　山形　物河鈴子

夜もすがらふみよむ窓のすきまより淡き光の月ぞもれくる

○　本所　櫻田靜子

鐘の音は闇なくゞりて物すごくなりぬかりれの淋しき夜な

○　府下　紅きた

星一つ青まつ花にそと降りて天の秘ごともらしてゆきぬ

○　伊賀　多津子

梅雨はれてとみの日ざしのつよかるにすこし萎れてさく菖蒲かな

○　京都　いく

一入のあやとはなりぬ紅のつゝじに白き蝶のとまりて

○ 北見 信太英子

東雲の空うす紅み朝となり牧笛おこるさ霧の中に

○ 青森 木村麗子

ほのぼのとくらやみの幕開らかれて光かゞやく朝ぼらけかな

○ 大和 岡田喜登子

月すみぬ螢とびきぬしかはあれど君まさぬ夜は何か悲しき

○ 伊勢 藤村千代子

我が好む書をきみがこのまざるゆゑにわれまた忌むとしかいふ

○ 長崎 岡崎武子

青草の波たつ牧のをち方を白帆のまゝに羊むれゆく

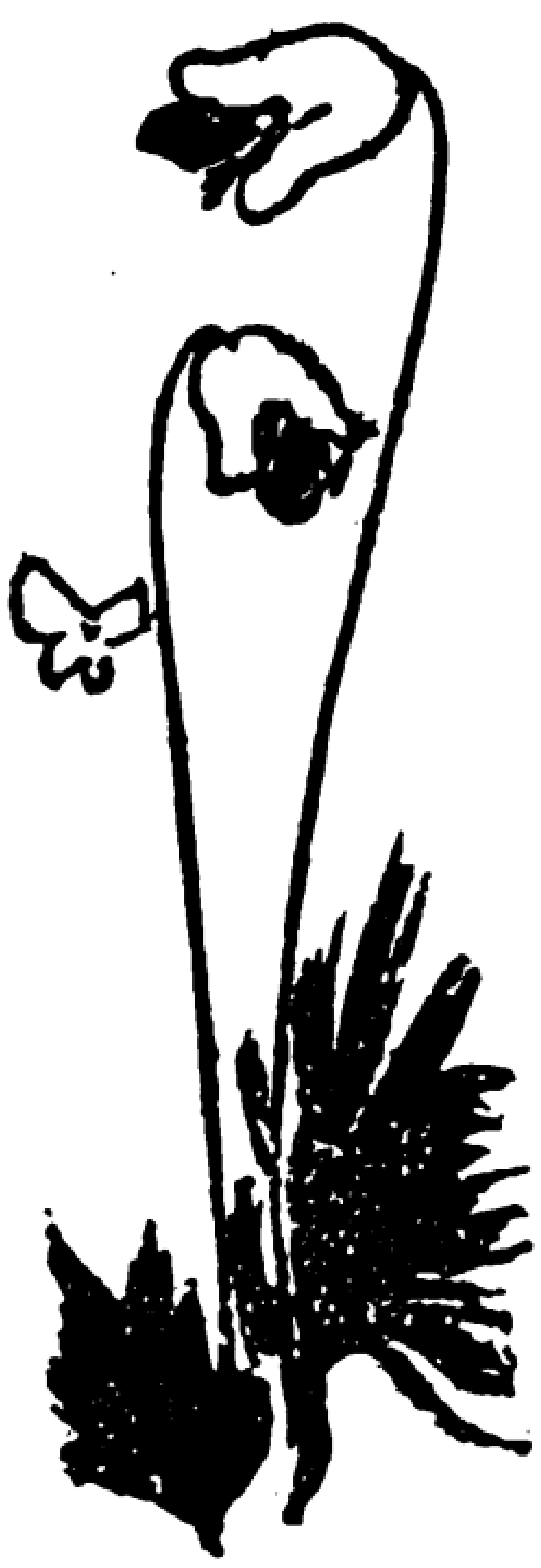
○ 神奈川 野呂香子

春すぎて夏は來ぬらし木の間よりにほひこぼして青嵐ふく

○ 京城 原野みゆき

秋の露まろぶやうなる朝野路のふむにはほしき草の上かな

○ 伊勢 岡田うめ子



軒低う蚊遣火いぶる初夏の家軒端に翁の酒飲みて居り

○ 伯耆 村上靜代

病む背子に藥すゝめて佇めば梅の實落ちぬ五月雨の窓

○ 羽前 野口菊子

目をとぢてしばし想ひにふける時苦み忘れ胸はおどりぬ

○ 下總 岩瀬不二好

山清水卯の花たれしひと枝にあやふくふるゝ君が袖かな

○ 長野 淺輪久子

ひとゞきの嵐に散りし花の香をしたひてなくや鶯の聲

○ 山形 さい子

ほとゝぎすこの有明の月にとて日頃をしみし初音とぞきく

○ 名古屋 高田孝子

たゝずみて聞かむとすればなきやみてすぐればまたもなく蛙かな

○ 佐賀 鶴田じき子

ゆく春のうらみばかりを青柳のいとながくこそつなぎとめしか



（甲）

若き妻の愛

播磨　みどり

結婚後丸三年の此頃まで、一度も不滿に思ふた事もなく至極平和に暮して居ながら、只一つ物足りないのはまだ一人も愛らしい者を授からないといふ事、いつも樂しい中にかすかに胸にひゞくは「子供がほしい」といふのである、一緒に散歩などする時に、若い婦人が小さいのを抱いてさも嬉しさうに頬ずりしたりキッスしたりしてかわいくてたまらないやうな樣子が見ると、自分は物足りなくて仕方がない、といふて夫に何故自分には子供がないでせうと尋ねるのも何となく恥しい、其くせ此疑問は常に胸から去つた事もないのに、今朝新聞を見て居ると「唇と人の運勢」といふのに目が付いて、「男、半月を上に掛けたやうになつて形よく上下の厚い唇でキリッと締つてゐる人は才智もあり精神も確な立派な人で金運もありますが、此人には子はありません」とあつたので、そつと夫の顔をのぞいて見ると、どうやら似てゐらつしやるので、最後の言葉が氣になつてホット吐息をつくと、夫は不思議さうに自分を御覽なさるので、思はず火のやうにほてる顔を兩手でおさへた。

（乙）

我が身の上

四谷　櫻子

天にも地にもたつた二人の姉妹、しかも大の仲よし、着物も帶も人形もお揃ひでなくば承知しなかつたものだとか、自分は一向おぼえてゐないけれど、時々自分ひとり母につれられて他所に行くと、下さる御菓子など姉樣とわけると云つて決して一人では食べなかつたと、今も折々母が話される、此の大好な姉樣は自分が五つの春、僅か九つでむなしく逝かれたのである、そして自分は、此の家の只一人の子となつてしまつた、あゝ一人ッ子、いかにも嫌だ、父母と下女のほかには話し相手もない淋しい家庭にはもうあき〳〵してしまつた、兄弟姉妹手をとりかはして花に月にうかれゐ友をみるにつけ、五月雨わびしき夜など獨りねざめして靜かに便りない身の行末を思ひ、只亡き姉樣まさばと、涙はしらず〳〵頬を傳ふ。

（丙）

花町の夕暮

豊多摩　矢野目貞子

本所花町と云へば、東京も場末で、恐ろしい不潔な處、店の多くは安宿か、さなくば飯屋、古着屋など、勞働者相手のものゝみ。

夕陽が沈んで、薄鼠色のもやがこの憐らしい巷の上を流れ初めると、勞働者の群團が、三々、伍々、四より、東より、潮のごとく押寄せて歸る、そして何者にか追駈けられでもして居るやうに、周章たゞしくその宿へと割込むで行く、その混雑が鎮まると、例の一泊八錢より別間有の燈籠が宿の戸毎に掛けられる、百鬼夜行の幕は是より開かれるのである。

待つ身

相摸　蘆澤つる子

待たる身になるとも待つ身には何とやら、古めかしいが本統に待つほど苦しい物はない、私なんか人に待たれる事はないけれど、待つものは澤山ある、もう待つまいと思つても、どうしても胸を躍らせずには居られぬ、嬉しいやうな、こわいやうな、樂しいやうな氣持で待つてゐる、まづ投書の安否、雜誌の發行日、友のお手紙、それからあの兄様、ぢやない方さまが首尾よく大學卒業なさるのを、それももうこの七月なのです――あら厭だ、私、兄様が早く丸髷に結はせたがつてるつて、サツよ兄様はマガレツトがお好きだわ。（秀逸）

折にふれて

播磨　小寺いさを

須磨寺の若木の櫻が咲きそろふたのであらう、外は憐らしい程の人通り夫は昨夜の發熱でお勞れになつたと見えて今朝はスヤ〱とれてゐらつしやる、此間によごれ物を洗つて置かうと物音を立てないやうに靜手口で洗ひ初める、どうか今日は大した事がないやうにと心の内に祈りながら、やがて人のけはいにふり向くと、見るからにあはれな二人の老婆が物を乞ふのである。自分は云ひ知らぬ感に打たれて、昨夜心配の餘り何も頂かなかつたのを取り出して與へると、一人はふところかられづみ色したハンケチ、一人は四隅の崩れた小さな行李を出して、同じやうに分けて、嬉しくてか涙をこぼしながら自分を見上て、「アーラ勿體ない」をくり返して靜に立ち去つた、自分は何となく非常によい事をしたかのやうにむうれしく、暫らく其あとを見送つて居ると、二人は松原の中にきえたやうに見えなくなつた、のどかな春風は浜で地曳きする漁士のエンヤーエンヤーといふ聲をかすかに傳へる。（秀逸）

敗殘者

豐橋　北川とし子

あまりに照り付けるので庭の草木は死んだやうに、黯綠の色を放つて居る。

暑い！、とても我慢し切れない、急に表でガヤ〱騒ぐ、あまり喧しいので、何事かと出て見ると、恰度そこへ一人の汚穢ない老人が無幹した姿で、情然と警察官に縛られて行くのが見えた、何とはなしに胸とゞろかして、呆と見送た、彌次馬連は口々に罵り合つて、後からゾロ〱尾いて行く、隣家の古物商の内儀さんは氣狂のやうに叫んで居る「太い奴だうちのが留守で妾し一人が店を番してるとあの畜生奴が、鍋の湯沸を浚つて逃やがつて……」、哀れ敗殘者が、逆境に堪え得ぬ、最後の行爲よ。（秀逸）

眞晝

鹿兒島　別役とし子

六月眞晝の太陽が洪水後の河原にくわつと照りつけてゐる、河原は泥土

に掩はれ、見渡す限り灰白く、所々に硝子や瀬戸物の砕片が光つてゐる。鐵板の儀器や水膨れの獣も泥に塗れて横はつてゐる、根こぎにされて堤に棒杭に支へられた柳が、泥の枝を水に浸してゐる、水際には子供が集つて猫の死骸に小石を投げてゐる、橋の上を痩馬が荷車を挽いて喘ぎながら通る、車に積んだ石材はやがて墓石になるのらしい、續いて古い紋付の羽織をきた男が胡弓を持つてくる、妻らしい女が月琴を背負つて後についてゆく、かうして二人が何處と的もなく、胡弓をひき、月琴を彈いて村から村へ漂泊するのだらう、背後からきた郵便脚夫は男女を追ひこしてスタ／＼と行つた、川の土手に紺屋の旗がきて、染めた反物を干した、青や赤の染物が眞綵となく、芝生の上に光つた、太陽は其上に益々強くてりつける、と遠くで汽笛が鳴る、風はそよともしない、乾燥に上つた家鴨が懶げに羽搏きした。（秀逸）

悲喜こも／＼

臺北　阿部きみ子

もう五日たつと妻と云ふ身に變る番、まだ御寫眞で一寸見受けたばかりで少しも知らぬ人の所へ行くのだけれど、それでもうれしいやうな氣持がする、かうなつたにつけても亡くなられた母上が今にお丈夫だつたら、まあどんなに／＼よろこびなさるだらう、と思ふと母がこひしくて／＼仕方がない、今の母はちつともかまふてはくれない、さつき呉服屋呼んで仕度つくる時でも「お母さんどれがよいでせう」と問へば「お前が着るのだから自分で見立てたがよいよ」とおつしやつて、此度御自分が着るのをばかり撰つてゐらつしやる、情けなくなつて涙がこぼれた然し悲しい思ひするのももう五日きりで、あとはと思ふと何んとなくうれしい。（秀逸）

月さす磯の宵

府下　紅き花

眼の届く限り黒く青ずんだ海原乍ら、只初島と大島の間ばかりは、月の光りに金波銀波の揺ぎを見せて居る、私は両袖を重ねて靜に岩に腰を下ろした、其瞬間遙か彼方を眞黒な帆かけ船が只一艘、西をさして夢の様に消え去つた、後は一つの漁火さへも眼にうつらない、唯ひとり凝乎と足下に寄せて來る波を見詰めて居ると、まるで波は水銀の布をたぐりたぐつて來る樣、いつか自分の魂も其中にまき込まれて溶けて仕舞ふように思はれた、フト何者かに頬をなぜられる樣な氣がして我にかへると、睡む相な山の下の畦で、螢を追つてゐる妹は「彼れあつちにホラ／＼」と言うてゐる、續いて母様のお聲もした、私は無意識に衿をかい合せ乍ら一寸見て一寸耳をかしたばかり、再び私の心と眼は波上に注がれた、吁私は何時迄も／＼こゝを去りたくない、夜が更けても……丁度泣いて泣いてお別れしたのも這麼晩であつた。（秀逸）

妹の寫眞

麹町　石垣きぬ

私の机の直ぐ前に掛けてある本を持つた寫眞は、只一人都へ來て勉强して居る私の淋しい心を慰め、冷へきつた胸を暖めて吳れる天にも地にも唯一人の妹である、夜など淋しい洋燈の下で、難しい英語や幾何の問題に苦しむ時、ふと千枝ちやんを見上げると、其れは／＼實に優しい凉しい黒目勝の目で私を見て居ります、其中には「姉さん最一度して御覧なさい直きに出來てよ」と云ふ樣な意が含まれて居るやうな氣がするので又一心にして見ますと、それは不思議によい考が浮んで來て、直きに出

來ます、私は又も見上げると、眉のあたりは笑ひにかゝる影もなく、其處は紅薔牡丹の開きかけた様な口で「さー姉さん最う宜う御座います」と云ふ様です、實に千枝さんの寫眞は私の唯一の字引です。(芳邉)

養蠶

[illegible] 渡邊松子

ほんの手遊に飼つた蠶が上出來で、一貫目計り見事な繭が取れた、飼ふ時は道具が有るではなし、隨分困つたが、繭になつて見ると樂しみな事樂しみな事、並べて見たり積んで見たり無心に繭を弄んで樂んで居る、耳人は早く製糸に頼んで好きなお召でも織つて貰へと云はるゝけれども、私はこの美しい可愛い白玉を生糸に變化するのは、何となく、只何となく惜しい様な氣がしてならぬ。(芳邉)

田圃

[illegible] 栗林清子

麥が二すばかりも延びて、麗な日の光に、葉が萎へて居る、其葉を靡く靡かせて暖かな風が頰を吹くと、畑の香がムツと鼻をつく。向ふの畦道を頰かむりした十四五の女の子が三人、籠を背負つて通る、各自に樵を一枝づゝ籠の上にさして居る。遠い薄紫色の空に白い手拭、赤い襷、青い麥畑、枯木の上の花などが好く調和して、まるで畫を見る様な氣持がする。(芳邉)

絹子姉様

水戸 中根雅子

あれ程よく來られた絹子姉様が、近頃はつたりいらつしやらない、快活な兄様は何故か、淋しい物思の人となつた。月の清い夜、庭にぼんやり立つてゐらつしやる兄様に「姉様はどう遊ばしたのでせうね」つて何つたら「香月の絹さんはもはやお前の姉様ぢやないんだぞ」つていつにない怖い顏しておつしやつたが、やがて御姉様が一番愛して居られた、鉢植の白ばらの花をむしつて惜氣もなくなげすてられた。(芳邉)

我が影

芝 山崎壽美子

三年を旅にさすらひて、今宵しも故郷に歸りしが、故郷と云ふも名のみなりや、もとより家もあらぬ身の、睦じかりし友垣訪へば、出で來し友は言葉も無くて、つくづくと我顏を打ち守るのみ、思はざりき人心の變り變りを月光に地に散く我影、さても、痩せたりなー

五月雨の頃近き友に

[illegible] 小百合子

五月雨ふりつゞき候て、心も何となう結ばれ勝ちなる今日此頃、如何居らせられ候や、例の圖案の下に御愛讀の詩集ひもとき給へろか、さらずばお妹様の琴に御許様のヴアイオリンお得意の荒月など合奏し給へるならんか、などいろく想像いたし居候。晴間もあらば一度入らせられずや、格別御馳走は御座なく候へ共、幸ひ京都なる從姉も参り居候故、三曲の合奏又はカルタ、スゴロクの遊びも折柄の頭(?)しのぎにはよろしかるべくとぞんじ候。

母ごゝろ

臺灣　芭蕉

此間生れたばかしのやうに思ふてた政男は、もう三ツになる、ほんとうに子供の成長するのは早いものだ、此頃はやんちやで〳〵困たので、いつそ病氣でもして少しれたらおとなしくていゝだらうとも思ふた、其のためか政男は風邪で二三日前から床についた、さあ病氣になられたら心配で心配でたまらぬ、あんな事思ふた罰だらうか、どうしてあんな情けない事思ふたらう、もう〳〵あんな事思ふまい、どんなきかなくてもよいから丈夫なのが一番よい、決して心配はないあまつてはなほるとお醫者がおつしやつたが、ほんとうに悪くならずに早くなほりますやうによ心の中に神様にお願ひ申した。

朝の聲

埼玉　さゆり

東の空が少し白みかゝる頃はたゞ小川の囁きのみであるが、空が漸く紅色となる時はもう汽車の響き衣き低き山寺の音などが加はる、朝日がうらうらと東の森をはなれると、鶏は叫び、鳥は鳴き、鐘は鳴る、そして戸をあける音、米をとぐ音、喜ばしげな小牛のなく聲、まては赤子の泣く聲などいよ〳〵賑くなつてくる、それに工場の汽笛、車のきしむ音、新聞配達の鈴の音、小學生徒の唱歌の聲などが加はつて、遂に活動の世界が現はれる。

迷想

名古屋　千石梅子

マガレツトに五インチのリボン、お召の單衣に紫の袴、ゴールドリングの光る白魚のやうな手には新式クリーム色のこうもり傘を重たさうに、後にはお供が二人ついて廣い町中をこれ見よがしとぞろり〳〵……と、あゝ私も同じ人間だ、世が世であつたらこんな辛い奉公をしなくともよホロリとした、けれどあの令嬢の顔の色は凄い程青白いが私はこんなに赤黒い、まあどちがいゝだらう、やつぱり私の身が幸福なのかしら……。

親き友へ

長野　清水あや子

都路の夏はいかに、蝉しげる夕の窓に歌思ひ給ふお得意のお顔が見ゆる様に候、信濃路は春行きて新緑したゝる木の下の蔭なつかしう候、思ひ出で給はずや、大峯山の朝ぼらけ、くだ〳〵しく風景などのぶるもかひなく候、只此の二三日は殊に紫の色深く立ちまさりて、そが間々た紅の色よくあしらひたるは、今を盛りの岩つゝじなどにて候はんか、さながら友禪の模様めきて云ひしらず美しとのみ、餘は御想像にまかせ候。木や空なる大森原の風光にのみなれ給ひしお身、又かゝる繪のやうなる山の姿も御目先かはりて面白うおはしまさんと存じ候間、二日ばかりの御暇つくりてこゝなる庵へ逃らせ給はずや、うるはしき物うたの料など澤山に候はめと切にまち参せ候、かしこ

兄上様へ

岐阜　堀峰子

兄さん御手紙嬉しう〳〵拝しました、相變らず御熱心に御勉强の御様子もうほんとに嬉しくて、今日も母様と末の事共語りあひ一日も早く兄さんが御成功なすつて共に父上の墓前で語り合ふ日を樂しんで居ます。

兄さんどうか峰の御願ひですから義姉さんを兄さん、義姉さんはあれつきり宅へは來られぬのですが、御手紙でいつもそれはく悲しい事ばかり言つて參ります、今日の義姉さんは去年のやうな義姉さんではありません、彼れは乾度病氣か寬者の仕業でしたらうと私は固く信じます。先達の義姉からの御手紙に「せめて峯ちやんだけなりとも妹になつて………」と書いてありましたが、私は泣きました、どうか私が義姉さんにかはつて御わびをいたしますどうか兄さん免してあげて下さい、そして去年のやうに三人で旅行の出來るやうに御願ひ致します。

多摩川

四谷　道子

サラくと音たてゝ流れる水に、熱つた足を入れる、妙子も後から随いて入る、川の中央は濃い瑠璃を溶したやう、日光を受けて、上面だけキラキラ光る、底には寸餘の石がおのづから工合よく並べられてある、スーツと水が骨まで浸み込む様、日に燒けた河原を踏むと、石に足跡がつくが、ウヽと直ぐ消える、砂利を取る人夫の鼻唄は、川風にのせられて、向ひの岸から斜に流れて耳に響いた。

淋しき夜

越後　中野なず子

「それぢや行つて來ますよ」と小母様の出ていらつしたあとは私一人、時時犬の遠吠の聞えるのみ、あたりはしんとして居る、しばらく燈火の下で淋しくお仕事して居たけれど、ふと思ひ付いて遠山先生の許へ手紙を出さうと思つて、いろく氣取つた文句を考へて書き出した、けれど日頃筆を持つたことのない私ゆゑ思ふやうに書けず、書き直ほしくしていつか中紙五六枚書いてしまつた、あゝこんな事なら始から書くんぢやなかつたに、中紙をくしやくに圓めてポンと投り出すと、運わるく寢て居た小貓にあたつた、驚くまい事か、小貓は起きるより早くにげ出してしまつた、あゝもう十時になるのに小母様はまだお歸りがない。

朝

福井　山田深子

違棚の置時計がチンくと五つなつた、井戸端でつるべの音がきこえる、もう女中は起きたのかしら、母屋の方はまだ靜かだ、おめざめでないらしい、音をさせまいと注意しながら雨戸だけあけて外を見る、まだうす暗い、起きるには早いが、今から寢たらそれこそ大變、いゝわお庭でも掃けばと思ひながら鏡臺の前へ行つて見たら、島田がゆがんで居る、結つてからまだ三日目だのに、昨夜いつまでも泣いたものだから、眼がはれていやな顔、ゆふべは何だつてあんなに悲しかつたらう、親の命日に泣いたりなんかして……、峰お持ちなすつた母様のお姿がチラと……あゝまた………。

稚な馴染

丹波　郁代

なまぬるい風がそよくと吹く宵でありました、雨衣でつゝんだ様な月はぼんやりと櫻の枝にかゝつて居て、時々思ひ出したやうにハラくと花片が散る、ホロロくと早や水田には蛙の聲さへきこゆる、と見ると一人の若き母の子を背負つたが何ともいはれぬ物寒い、この月光をあびながら一人トボくと停車場の方へ行く、フトふり向くとたん、おぼろながらも月あかりにそれときとれた、幼な友達の文さんーさうだ、文子

まんなのだ、あのお姿のいじらしさ、今頃から兵庫へおかへりなさるのだらうか、あゝお氣の毒な方、と見送る心にとこしなへに文子樣の御身に幸多かれと禱つたのでありました。

大掃除

兵庫 かをる

私共は大掃除に取り掛つた、皆々手拭冠つて庭に物を持ち出す、大切な鉢植の一ツ二ツに手拭かぶせたるもをかし、鳥籠をしきりに氣にするは弟、私と兄樣とは書籍をあらたむる役、長い間見なかつた思出の記が出て來たので、一寸二三ペーヂ開けて見る、兄さんはと見るとシャツ一枚で手拭冠つたまゝで、何んかしきりに見てゐらつしやる、絹さん早くしまはないかつていひながら矢張り眼ははなれて居ない、兄さんもと言つて笑ふ、妹は人形を出してよろこんで居る、大姉樣は度々鏡の前に立つた。

過去の夢

播磨 水香女

鍬を置いてホット一息、見れば此春は未だ大阪界隈に名を知られ、金縁目鏡金鎖、しかも大玉珊瑚の緒〆入りたる煙草入のお腰離れじ事はなく、期米に熱せし我夫の、變ればかうも變るものか、黒木綿の股引に半纏粋、牝牛の尻を打ち田を働かるゝ背姿ー、思はずフッと吹出しさうになりしが、氣の毒でたまらぬ、私とて紺の手甲穿つなどゝは夢にも思はざりしを、かくなり果つるも容易の業ではなかつた、こゝ未だ十年以前は長者鏡にも載せられて、第一番の米穀家なりしに、一朝期米に興を持たれし夫は、失敗亦失敗、神戸、大阪、長崎に家内迄の大引越し、然かも其都度家財は符印付とせられ、道引ならぬ夜の旅行……、五十餘萬の家財もかうなつては實に覚ひでのないものよ、神は自分等を捨て給はず、虚榮の夢を醒まして、西播の片ほとり、二間間口の茅屋に、付け立ての恐れもなく、心うら安き働きの業を授け給ひ、眞の幸福を味ふ事となつた。

さみだれ

四谷 松原俊子

朝からの五月雨が漸くやむだ、靜な夜である。閉めて置くとむすから窓を細目にあけておく、折々吹く風が若葉の香りを運んで、ランプの灯影が其度に、ゆら〳〵とゆれる、復習も濟んだので好きな詩集を披げると、御手紙ですと細い聲、米子樣から來たのである、例の桃色の封袋で……、常夏の花を秘めて……、その燃ゆる樣な眞紅の花片には不言の情がこもつて居る、いつか亦降り出した、靜かな夜はます〳〵更けて行く。

お茶摘

靜子

久しぶりでなつかしい御伯母樣のところに伺つたら、お茶摘みの手傳をいひつけられました、思つたよりは骨がをれる、歌さんは美しい聲で靜かに何か歌ひ出した、お天氣がよいのでなか〳〵暑い、御伯母樣と歌さんと私とは姉樣被り、下女のお咲は面倒だつて頰被り、此間お嫁に入らした花子さんは頭に戴いたばかり、折々心地よい風が吹いて來て手拭のはしをヒラ〳〵動かす、あとで摘んだ茶をはかつてみたら私のが一番すくなかつた。

夏の月

飛騨　埋木

今し十三夜の月は山の頂きよりニロ〳〵と下界を照しはじめた、浮雲一つだにない好い夜で、誰もうかれ出したのか、ギナク〳〵とふし面白く歌ひ出しました、私は庭下駄引かけて裏の畑道へ出た、いく町となく背青と茂りし桑莱のすき間よりみえつかくれつする月かげは、却々趣がある。

寝汗

牛込　平塚白百合

ふと夜中に目をさまして見ると、寝汗がシトヾに出てゐる、もしやとの疑念が小さいハートの隅に一塊出來ると、もうそれが尾やひれをつけて増長してくる、母様が肺で、續いて兄様も同じ病で墓の主、父様はピンピンしてゐられるけれど、妹も肋膜でブラ〳〵してゐる、遺傳！、遺傳ではないかしら、寝汗！、私は實におそはれたやう物音もない眞夜中に夜具に埋めた顔をあげて、ジッと二分心ランプをよつた、灰色の壁にうつる私の影は、何となく淋い、あゝ涙がホロ〳〵とこぼれ出した、私はもう夢中で夜具をかぶつた。

長座客

三河　久仁子

後の襖のすき間から次郎が何度も〳〵首を出しては「お母さん御出掛は……」と催促する、私も實はもう腹の中では困り切つてる、お客様はいさいかまはず例のゆう〳〵とくだらぬ事許り話し込んで居られる、キセルをしまつて歸りかけては、又出して煙草を吸ひ、しまつては出して居る、私はお返事はしてるもの丶氣が氣ではない、かう云ふ時にお姑さんでも居らしたらと思ふ、然し私の顔色を見ても分りさうな物、お察しのない、お勝手の方で次郎が待ちあぐんでとう〳〵泣き出した。

なみだ

湘南　すみれ

暗い晩、私は部屋の机にもたれて泣いた、茶の間の方からはお兄さんの笑聲と時々お母様のお聲とが混つてひゞく、あゝ私もお母様がいらつしたならば此んな憂目はないだらうにと思ふと、涙が止め度もなく流れる先程も兄さんが泣きながらお母様へなにか云つて居る聲が聞える、耳をすませば姉さんがリボンを取つたと切れ〳〵に聞えるので、我を忘れて馳け出して、お母様、私は決してその様な事は致しません、存じませんと云へばお顔を顰つて、イエ丶お前のしない事を何んで兼子が云ふものですか、火のない處へは煙の上らぬものですよと言はれた、實に口惜しい。

別るゝ前夜

東京　咲子

泉水にうつる圓かな月が、緋鯉のなどる毎に數知れぬ玉と砕ける、私は卯の花の眞白に咲く邊に佇んで沁み込む瓏夜の香を浴びた。そと、髮の毛に觸さはる氣はひがしたので、ふり返つて見ると、繡縮め重みにゆつたりとしてゐる振袖の姉様が、其所へ立つてらしつた、淡紅色の白粉でお化粧した面わが、月の光に照てほんのりとしてゐる。

笑 話

○家庭教育

下野 片岡潤子

ハイカラの若奥さん旦那に向ひ、「あなた家庭教育なんて口やかましくおつしやいますけれど、やつぱり子供は内の躾が何よりで御座いますれ」（丙賞）

○困つた代診

兵庫 河中あさ子

使の者「急病人が出來ましたから先生に診察をお願ひ申します」、代診「今先生は不在だし、私は手がはなされんが、又アノお婆さんかネ」、使の者「イーエお孃さんです」、代診「アーさうですか夫れぢや今直ぐ行きます」（丙賞）

○あとさき

山梨 矢崎生

二人の婦人が互に火鉢に向ひしきりに話して居る内に、突然一人が他の一人に向つて「あなたのお羽織は大層おきれいですが、どちらでお求めになりました」、「あの三越で」、「矢張りお仕立も？」、「イヽヱ仕立は宅で致しました」、「まあおしい事に、ではお餘りの布がお有りになりますか」「ハイ少しばかり殘してあります」、「ではまあよろしう御座いますが、お袖に火が附て居りますよ」（秀逸）

○間違ふ事がある

山形 小松山さい子

母「お前の主人の氣質の皆いには感心したが背の低いのは玉に瑕だれ」「母アラおつかさん、私は背が高くて月給が低いのよりは背は低くつても月給の高い方が好きですわ」（秀逸）

○吸取紙の名案

下野 茂木梅子

甲女學生「妾は仕樣がないれ……インクを藥と間違へて飲むでしまつて」乙女學生「あらぢやあ早く吸取紙をお飲みなさいな」

○新歸朝者

麻布 百合子

洋行歸りの夫婦汽車より降りんとして妻君手をさし延べ「モシ貴郎」、夫「此處は何處だと思つてるれ日本ぢや――ないか」

○美人と嫁さん

磐城 北郷照子

姉妹二人が、男は人格さへ立派なら顏などはどうでもよいとはなして居るのを、ふと來の弟がきゝつけて、弟「女は美人でさへありや顏などはどんなでもいゝや」、姉「オホヽ何を云つてるのぢや美人てどんなもの？」、弟「御嫁さんの事さ」

○三年の後

東京 夕ほし

母親「かう始終身體が弱くては、電車にも乗れないし、汽車も駄目、どつこへも行かれなくつてほんとうにつまらないれ」、醫科大學生「お母さん、そんなに失望をなさるものではありません、まゝ、待つてゐらつしやい、もう三年たてば僕が診察して見て、必ずなほして上げますから」

○一寸使ひに

東京 安達つゆ子

父「まあ、どうぞゆつくりなさいまし、今に妻も歸りますから」客「また今度ゆつくり參りませう」父「さうですか、一寸妻が使に出ました處でつい失禮致しまして誠に……」政子「あらお父さん、お母さんはもう歸らないつて泣いて行きましたわ」

○猫

京都 藤澤淑子

奥樣「お鍋や、大事の猫が、井戸へ落ちたが、どうかして取れないだらうか」、おさん「奥樣御心配あそばしますな只今鑵を持て參ります」

讀者倶樂部

○

本誌の愛讀諸姉よ、下記の十九名は、當北米モンテシノ市に住し、諸姉と等しく日夕學びの道にいそしみ、共に本誌を喜ひ、又日本の皆樣方には十分敬意を捧ぐるものですが、何卒今後諸姉と美しい日本の繪葉書、又は英文の手紙を交換致したいと思ひます、若し御送り下さるならば、皆同じ所番で屆きますから、最後に記した所番を記し、誰れか一人に宛てゝ御出し下さいまし、斯くして少しにても兩國の友情を固めらるれば仕合せで御座います。

Miss. Frances Bower	Miss. Mande Melville
Miss. Gertrude Crass	Miss. Maggie Greesen
Miss. Lillian Best	Miss. Edith Crane
Miss. Louise Irwine	Miss. Muriel Abel
Miss. Ruby Canahan	Miss. Daisy Uptegrove
Miss. Amy Hallawne	Miss. Nellis Olson
Miss. Ona Story	Miss. Leona Grible
Mr. Maiion Caldee	Mr. George Enorawer
Mr. Edgar Meyer	Mr. Andrew Pelrson
Mr. Willard Look	

（同　寄）

Montesano, Wash.,

U. S. A.

○

私は初め讀者倶樂部と云ふのはどんなものかしらと思ひましたが、だん〳〵皆樣の御投書を拜見いたしまして、やつとわかつて參りました、ほんとに私うれしいのよ、就ては諸孃に御願ひ申します、貴女樣方の最も御好みのものや、平常如何なる持物を御愛讀なすつて居らつしやいますか、どうぞ御敎へ下さいまし、國々により御好や何かも趣を異にして居られることゝ思ひますし、又それを伺つたら大に益を得ませうから、どうぞ御賴み申します。（群馬かれ子）

○

日に增し暑くなりまして特に洋傘の必要な時節となりました。私は女性のパラソル美に就て考へて見度いと存じます。

傘の色彩が其人の顏や衣服と調和した時、女は一層其美を增すもので御座いますから、私等は其色に就て衣服や其他の裝飾品と同樣な、注意を拂はればなりません。

傘の色に就て考ふ可きは、其が二つの物となつて、人の目に映ずる事で御座います。即ち一は其反射光線で、所謂傘の色と申しますもの、之は衣服の色と調和を要します。他は其地質を通過して來る透射光線で、之は顏との關係が御座います。例へば紅系統の透射光線は、色の白い方には櫻色を與へて大層美しく見えるものですが、色の黑い方には赤と黑とが合して一種陰慘な感じを起さしめるもので御座います。要するに二つ共色彩配合の規則に從へば宜敷う御座います。

其れから衣服の色が四季につれて其好みも變ると同樣に、一般から申すと傘にも其季節々々に適合したものが御座います。私自身で好きなのは、春は淡紅色、夏は白の基盤縞かクリーム色秋は鼠、冬はお納戸です。（京都むらさき）

○

小石川の高木樣、牛込の雅子樣、私は同じ心の御友達を得てこんな嬉しい事はありません。きん子樣あなたも御庭めぐりを遊ばすんですつて!?、私もいたしますのよ、日々何度同じ花を見に出るか分りませんわ、皆をかしいつて笑ふんでございますよ。

で、もうこの頃では顏も手も足もまつ黑ー、インド人そこのけですわ、たゞ今ザイアンサスこれは舶來の種子です、スヰトピーペンジー、矢車ロベリヤ、フロツクス、其他紅紫白黃とりどり美はしく咲いて居ります。

種子御交換いたしませうか、私の方にはざつと百種ほどございますの、末筆で失禮ですが、記米樣も御入用ならばさし上げます、但秋になら

ないとたゞ今はありません。(大阪桐子)

○

女學世界の記者様、私は韓國人で御座いますが去年のくれより女學世界愛讀者の一人となりましたが、誌上の皆様と御交際いたしたう御座いますが故、御手數様ですが何卒誌上にて皆様に御紹介して下さいまし。(韓國全南光川觀察府内申淸子)

○

いよ〱待わびた暑中休みも近くなりました、私は父が避暑にいつたつてあついから同じだつて申しますから、一ッ今年は大奮發で家にゐてはたらかうと思ひ立ちました、はりものもするつもりです、洗濯、裁縫、水打、草むしり、勿論やるはづです、父様がれ、お前の三日坊主も久しいものだなんてわる口おつしやるのよ、皆様は何遊ばしますの?、伺ひたいものです。(四谷楓子)

○

何時もながら皆さまの御歌の御上手で被在いますこと、本統に御羨ましい！六月號の平塚白百合様の御作私大に好きですの、かう餘韻があつて……あゝ何と申していゝか……私毎日々々未だ線り淺い欄の菓蔭を逍遥ひながら口誦んでおります、白百合子！何て嬉しいんでせう、什麼お方で被在るか御目にかゝり度う御座いますわせめて御筆蹟なりと……。親愛なる皆さま私記者様に新體詩を募集して戴きたいんですの、皆様は如何……私なんかとても作れやしませんけど皆さまの御作を拜見して一生懸命勉強致しますわ、御賛成の方はどうぞ記者様に御願ひ遊ばして頂戴。(北見信太英子)

○

櫻井君子様、此頃何處に御勉強あそばしますか妾は先月迄韓國の荒野に滯在致して居りましたが、只今は郷里に暮して居りますから、御安意下さい、昨年御約束して以來文通が絶えましたが、私あやまりますから御赦し下さいよ、御たよりを待て居ます、近刊の女學世界には姉様の御作も見えませんが、御近狀如何ですか。(周防藤井君子)

△この花會の富士登山

登山は七月下旬より八月廿六日までの間に天候の適當なる期日を見計ひて決行するよし加入者は滿十二歳以上品行方正なる父兄保護者の承諾ありて且つ登山に堪ゆる體格あるものに限る會費は一切で八圓會員一組の一行は約十人と定む事務所は芝公園第十四號二、女子の花會、委細は事務所へ尋ねらるべし

△水彩畫の講習

八月二日より二週間鎌倉建長寺内にて講師は大下藤次郎大橋正堯其他諸氏會費一圓講料貳圓申込は七月二十日まで委細は小石川關口駒井町三春鳥會へ申込まるべし

△裁縫器具掛不二工業舍製造

これは發明品展覽會で褒狀を得た新發明の裁縫器具掛ですこの器具掛は机や卓子にも取りつけられ、又坐つて使ふやうにもしてあります發明品としての特色を針、物尺、鋏、糸卷其他一切の裁縫諸道具を整然と一ヶ所に收容する事が出來る樣になつて居りますから家庭では勿論學校や仕立物に通ふ學生諸君の爲めには極めて便利調寶の道具であります、殊にこの品の特色は前記一切の道具を一々分解して秩序正しく收め其儘携帶さる樣にしてありますから極めて便利です、猶同工業舍では裁縫用印絲器(すじつけ)の新發明品を製出してあります定價壹圓(すじつけ)は十五錢、小石川餌差町十八

△正誤

前號揭載の口繪寫眞版中「岡部子爵令孃榮子」とありし分は人名の相違に付取消す

新刊紹介

△新式小説辭典　澤賀豐哲著

明治の文壇始まつて以來今日に至るまで凡そ二十年間に出でたる名篇傑作三百餘種の中より巧妙なる辭句、輕快なる會話等を拔萃してこれを△容姿、△扮裝、△動作、△會話、△叙情、△叙景、△叙事、△滑稽、△怪異の十門に分類し更に原作の梗概をも附記したれば、各名家の文體を知り、文情を味はうと同時に併せて作の構造をも知る事を得べく、苟しくも小説に志ある人は必らず一本を座右にして名家の作風と其の規模を窺ひ知り給ふべし。定價一圓二十錢博文館。

△魚鳥家畜の飼養　鹿野化骨著

本書は家庭百科全書第十六篇として出づ、其の特色とすべきは、家庭の實際飼養に適する家禽、小鳥、魚類、兎、羊、豚等の小家畜に就て詳述して牛、馬等の大家畜を簡單に記したるが如き、或は學理を參酌して記せるも而も實地を主として易めて家庭の飼養上必要なる部分のみを叙せるが如き、乃至は如何なる子女にも了解し易からしめんが爲に極めて平易なる說明法を採りたるが如き、總ての家庭に適する樣に十分功めたる點にあり、農家は固より、一般家庭に備へ置きて有益の書なり、定價金四拾五錢、博文館發行。

△花の趣味　三宅花圃著

植物學者の說ける花は科學的にて趣味に乏しき憾あれど、これは小說家として歌人としての女史が趣味眼に映じたる花なれば詩情極めて深きものあり殊に旅行好にして足跡普ねき女史が山野を跋涉して得たる花に注げる涙のあともほの見えていとゆかしき物語をなせるは流石に妙筆といふべし、定價九十錢、日本橋區通正町服部書店。

△佐保姫　與謝野晶子著

著者の近什を集めたる二百五六十頁の書にして、裝幀、挿畫なども頗るハイカラなり、左に其の中の二三種を揭げて其の內容の一斑を示さん、——この五日うつし心もなきわれは狐の壇を踏みてこしかも、——狐に似しもの胸に來てかきたゝきかきみだすこそくるしかりけれ、——彼の人は七面鳥を調じたるあつものをのみほめてかへりぬ、定價金壹圓、神田區表神保町十番地日吉丸書房發行。

△世界お伽文庫第十二編海の花　巖谷小波編

シユレツク氏の翻譯に係る「芬蘭土お伽噺」より取りたる話にて、原題は「海から上つた娘」と云ふものゝ由、日本の國情に適せしむる爲に少々筋も違へてあるよしなるが、そこは却つて子供達の爲に仕合せならん、定價金拾參錢、博文館發行。

△女子の教養　棚橋絢子著

家庭百科全書第十八篇として出づ、胎教に始まりて結婚期に至り、其の說く所五十餘章、終りに尙ほ家庭童話二十題を添ふ、去れば家庭に於ける子女の躾方に就ての教訓は求めて得られざる事なし、而して其の說く所は著者が多年の經驗に基くものなれば、一々肯綮に當りて家庭教育に資する所最も多し、定價金四拾五錢、博文館發行。

△いたづら小僧日記　佐々木邦譯

定價金四拾錢、府下巢鴨町內外出版協會發行

△家庭夜話樂しきまとゐ　福田琴月著

お伽噺或はお伽芝居の脚本十數篇を集めたるものにして、少年少女諸君の趣味を廣くし、之を高尙に導くに適當の書なり、定價金六拾錢、神田區小川町忠文舍發行。

沈衰せる社會の好慰藉として 滑稽文（諷刺諧謔）募集 八月十日切

貴婦人に無學多く、令嬢に醜貌多し、虚栄は羽のごとく、ダイヤモンドは涙に似たり、猫が走れば蛙も飛ぶ、人間社會は滑稽の共進會なり。元來が理窟でゆかず、人情でゆかず、酢でも蒟蒻でも喰へぬ世の中に、一味の滑稽あればこそ馬鹿なカスラも立身すれば悧巧なお猿も木から落ちる、そこで煩悶家も息を吐けば、ヒステリーも一寸笑顔を見せるなり、有難いは滑稽趣味ならずや。

滑稽といつても落語家の駄洒落のやうなものではない、深く人事人情の奥秘を穿ち世態の眞相を究め、巧みに其の不調子なところを諷刺して得意の人に反省の餘地を與へ、失意の人に慰藉の温味を與ふるものでなくてはならぬ、故にその筆者は眞のユーモリスト、サタイアリストの見識がなくてはならない。

◎文は日記文體。小説文體。手紙文體。又隨筆文體いづれも隨意の事

賞金

一等 金參拾圓
二等 金貳拾圓
三等 金拾圓
四等 金五圓

一、二、三等各一名四等十名

▲紙數は十枚以上を程度とす
▲當選の文は九月十五日增刊號に收む
▲賞金は發表の當日爲換劵にて發送の事
▲原稿は「滑稽文」と表記して女學世界宛の事

讀者文藝　懸賞募集（〆切七月十五日）

▲婦人盛裝の寫眞（結婚前後）

▲大家族の集合寫眞

▲婦人會婦人團體集合寫眞

▲才媛筆蹟（書翰文體の一節）

▲食卓日記

▲各地風俗の變遷

▲笑話▲短文▲和歌▲狂句

▲讀者倶樂部（投稿隨意）

投稿規則◎笑話、和歌狂句、短文、讀者倶樂部、百事便は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず◎筆蹟は書簡文の一節を示す事◎名宛は博文館内「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

▲賞品

△寫眞は甲參圓、乙貳圓、丙壹圓

△筆蹟は甲貳圓、乙壹圓、

△和歌、狂句、短文、笑話、百事便、讀者倶樂部甲壹圓、乙七拾錢、丙五拾錢、秀逸參拾錢

△風俗の記事特賞拾圓甲賞五圓乙賞參圓

每月一日發行

定價表	
一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ケ月分）	前金七十五錢
八册（半ケ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ケ年分）	前金二圓八十錢
内（定刊數十二册／増刊四回…一、五、九、十一月價格同一）	
郵稅	一册二錢

廣告料	廿四字詰一行	四半頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る

●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十二年七月一日發行第九卷第九號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話番　本局　三千百三十八番　二千六百二十番　三千二百廿九番

見よ数百萬の難病者を全治せしめたる

電氣帶發明者 サンデン博士之像



奇効可驚



登錄商標

主治効能 眼、耳、鼻、咽喉、船暈頭痛ニ奇効を奏す（説明書無代進呈）

アクチナ

サンデン電氣帶

主治効能

神經衰弱諸症—腦神經衰弱—不眠症—胃擴張—胃腸病—常習便秘—消化不良—生殖器衰弱及無氣力—遺精—夢精—早漏—遺尿—腎臟炎—糖尿病—其他一般內臟の衰弱 諸神經痛—坐骨神經痛—頭痛—顏面神經痛—腕部及腰部神經痛—リユーマチス—腰痛—脚氣 婦人諸病—ヒステリー—貧血症—月經不順—子宮病—憂鬱症—脊髓—中氣—產後及病後一般の衰弱症

●本具に依り慢性不治の難疾を根治したる實證實に數百萬

（説明書無代進呈）

定價

	品名		價格
舶來品	三號帶	附屬共	金八圓
	四號帶	同	金拾五圓
	五號帶	同	金貳拾圓
	六號帶	同	金貳拾五圓
	七號帶	同	金參拾圓
和製品	戊號帶	附屬共	金五圓
	丁號帶	同	金七圓
	丙號帶	同	金九圓
	乙號帶	同	金拾壹圓
	甲號帶	同	金拾參圓

探見電燈



定價

大小四圓
形共參圓半
參圓
丙大形壹圓半
丙小形壹圓
送料十二錢

懷中電燈



定價

最上四圓
上等參圓半
並參圓
B形貳圓
替電池八十錢
送料十二錢

デンキークーリーム

本クリームは米國タウン化粧品會社の最近發明に係り顏面皮膚を艶美にしキメを滑ならしめ且つ白粉代用として最好適品たること天下無比なり

定價（見本送料共八錢 大五拾錢 小參拾錢 送料八錢

營業品目（電話、電鈴、表示器、電球電池其他電氣器具一式卸小賣）

〇一丸式ハイローランプ▲凡て代金引換は前金貳割御送附を乞ふ

●本店（東京市京橋區尾張町二丁目 銀座通東側 電話新橋四一二二 振替口座東京一八四七三）

●支店（大阪市東區心齋橋筋博勞町南入西側 橫濱市相生町四ノ六三 電話一九三一）

サンデン電氣商會

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

和裝頗美本　◉紙數各三百頁　◉石版彩色口繪一葉　挿畫十數箇

▲定價一冊金四拾五錢　郵税八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尚に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に稗益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

全部五十冊　毎月一回發行

第一編　**新家庭訓**　三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子女史著

第二編　**四季料理**　宮中臣民兩流料理師範　大日本割烹學會々長　石井泰次郎君著

第三編　**裁縫指南**　女子高等師範學校教授　喜多見佐喜子女史著

第四編　**和洋菓子製法**　東京治庖會講師　龜井まき子女史著

第五編　**茶道と香道**　水原翠香女史著

第六編　**諸流生花指南**　琴松園文雅君　松幸齋理常君　共著

第七編　**育兒の務**　醫學士　田村貞策君　朝夷孤舟君　共著

第八編　**簡易治療法**　新潟縣高田高等女學校教諭　藤井靜子女史著

第九編　**禮式と作法**　女子高等師範學校教授　佐方鎭子女史著

第十編　**惣菜料理**　赤堀吉松君　赤堀峰吉君　赤堀菊子女史　共著

東京日本橋區　發兌元　◀販賣用電話　本局二六二〇▶

婦女必讀の大全書

第十二編 **編物指南**
女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十三編 **教育お伽噺**
少年世界記者 木村小舟君著

第十七編 **家屋と庭園**
內山正如君著

第十一編 **婦人の生理と衞生**
青山學院教授 牧野倩子女史著

第十四編 **女德の養成**
前田長太君著

第十六編 **魚鳥家畜の飼養**
農業世界記者 鹿野化骨君著

第七編 **女子作文法**
遠藤ふみ子女史
松崎ふく子女史 共著

第六編 **子女の教養**
私立高等女學校長 棚橋絢子女史著

●胎教●哺育●泣く子の取扱ひ法●溺愛●二種の母●子女の質問と秩序を守る性習●子女の懲罰●子女の理想●玩具の選擇●子女と虛言●命令と服從●親の不行儀●夏期休暇●間食の利害●子女に教訓としての話說●物のあはれ●學問攻の害●子女と遊戲●臆病なる子女●成田喜起の母●繼母としての子女の敎養●魏芒慈母●子女と名譽心●家事と少女●慈善的保護を受けたる少女●小學校時代の家庭敎育●母親の偏愛●從順の美德●熱誠なる習慣●子女に時間を貴重がらせよ●禮節の修養●傲慢心を募らす親●淸水太郎左衛門が母●子女と讀書●子女と卑怯●活發の眞義●子女に錢を與へる親●告げ口●留守宅の母親●眞心の養成●子女の交際●名和が約束の松●少女と奢侈●嫉妬と僕婢●趣味ある子女●子女と貯蓄心●子女と宗敎心●自他の區別を明白にせよ●子女の病氣と親の心得●物言はぬ動物の取り扱ひ●小學校卒業後の敎育●安詳恭敬●家庭寓話二十題

第十九編 **家庭の趣味**
文學士 大森兜山君著

◎第一章　緒論●婦人の特色●婦人の天職●良妻賢母●婦人と趣味●家庭問題の由來●昔の家庭と今の家庭●家庭問題の內容●姑と嫁との衝突●今の姑と嫁との長短所●現今の敎育を受けたる婦人の爲に辯ず●現代の婦人も概して健全なり●現代婦人の覺悟を望む●婦人と趣味の修養◎第二章……趣味に就きて●趣味とは何ぞや●趣味の存在●趣味の異同●趣味と人格●趣味の標準●趣味の選擇●趣味の定義●趣味の起源●趣味の進化●趣味の進化と敎育との關係●趣味の進化と趣味の變化●趣味の修養と讀書●趣味の修養と觀察●趣味の修養と聯想、想像●趣味の方向●人生に於ける趣味の價値●趣味と人格の力●趣味の極致◎第三章……家庭に就きて●家庭とは何ぞや●家庭の物質的要素●家庭の精神的要素●家風と家格●家庭の位置●家庭は人の終生の搖籃なり●家庭は婦人の舞臺なり●圓滿なる家庭●圓滿なる家庭の物質的要素（資財）●圓滿なる家庭の精神的要素（家庭道德）●家庭に就きて◎第四章……家庭の趣味●家庭に關する感想●住家の選定●住家の整頓及び衞生●室內裝飾●食事●談話●讀書●音樂●繪畫●園藝●遊戲●散步●接合●年中行事◎第五章……模範の家庭實例●家庭改良の動機●家庭改良の要目●家庭敎育の長所●兒童敎育上の家庭の職能●學校と家庭との連絡●家庭と居間●衣服と食物●家庭の娛樂●經濟の方針◎第六章……家庭に關する歌句●家鄕●親子●夫婦●兄弟●嫁姑●年中行事に關するもの◎第七章……家庭に關する格言と諺●家族に關するもの●婦人一般に關するもの●結婚に關するもの●經濟に關するもの

本町三丁目 博文館 振替貯金口座東京二四〇番

（後付の三）

毎卷醫學專門大家講述

家庭衛生講話

毎卷洋裝菊判美本——紙數各約百六十頁

口繪寫眞版數多挿入　正價毎編參拾五錢　郵稅六錢宛

（第一編）醫學博士 三輪德寛君述

一般救急法

全一冊

（第二編）醫學博士 森林太郎君述

衛生學大意

全一冊

（第三編）醫學博士 林春雄君述

藥物の大要

全一冊

（第四編）醫學博士 緒方正淸君述

妊産婦之心得

全一冊

（第五編）醫學博士 筒井八百珠君述

花柳病講話

全一冊

（第六編）醫學士 賀古鶴所君述

耳の衛生

全一冊

醫學博士 井上善次郎君述

（第七編）

傳染病大意

正價三十五錢　郵稅六錢

●總論 ●腸窒扶斯●赤痢●亞細亞虎列剌●發疹窒扶斯●痲疹●猩紅熱●痘瘡●丹毒●流行性感冒●百日咳●實扶垤里亞●麻拉里亞●破傷風●急性關節僂麻質斯●癩病●「ペスト」●狂犬病

醫學博士 佐藤勤也君述

（第八編）

婦人病講話

正價三十五錢　郵稅六錢

本書は斯病に精通せらるゝ佐藤醫學博士が婦人一切の諸病を平易に講話せられたるものなり 惟ふに婦人の性質として斯病に罹るも之を口にするを耻ぢ 益々重態に陷るものあり實に痛歎に堪へざる所とす蓋し婦人の健否は甚だ重大なる問題たるを以て常に斯くの如き講話を熟讀し 病理に通じ病源を絶つは唯に婦人一身の幸福のみに止まらざるなり

醫學士 桂秀馬君述

（第九編）

外科講話

正價三十五錢　郵稅六錢

●身體の一部分の充血及貧血●血塞及栓塞●出血●出血の所置●炎症●么微生體 ●炎症の經過及轉歸●腫傷●消炎法●壞疽●身體の損傷●損傷の所置 ●創傷傳染法●動物毒病●切創又打創●刺創●挫傷及挫創●銃創●火傷凍傷並に腐蝕●電傷●骨折●關節の皮下損傷

★發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館★

治庵會本部主事　安西古滿子女史著

四季毎日 三食料理法

全四冊

菊判和裝美本
紙數各二七〇頁
石版口畫入
正價各金五十錢
郵稅八錢

(一)春の巻　(二)夏の巻
(三)秋の巻　(四)冬の巻

何れの家庭に於ても毎日三度の献立に就ては主婦が最も苦心する處ならん此の書は之が相談相手たらんがために安西先生が四星霜の間、苦心を以て衞生と經濟とに留意せられ一年三百六十五日毎日三度の豫定献立表をつくられ且つ其料理法は平易の文字を以て反覆叮嚀に記述せられたるものなれば親しく先生に就きて教を受くるに異ならず何人と雖も容易に會得することを得、實に各家庭にはもとより學校及び軍隊に於ても必要缺くべからざる珍書なり。

東京本町　博文館　振替口座東京二番

醫學博士井上通泰先生監修

全部完成

第一篇以下數版

家庭衛生叢書

全部十二冊洋裝菊判美本 ○ 正價一冊貳拾錢郵税六錢宛

第壹編

口繪 北里、長與、金杉、土肥の四博士(肖像)

▲傳染病の話……北里博士
▲胃の攝生法……長與博士
▲眼科衛生談(第一)……井上博士
▲血族結婚と聾啞との關係……金杉博士
▲癩疾と家庭……土肥博士
雜錄 患者を生じたる時の注意(第一)

第貳編

口繪 宮本學士、木下博士(肖像)

▲腸窒扶斯に就て……宮本學士
▲婦人の衛生一般……木下博士
▲婦人及小兒の眼の衛生……桐淵博士
▲眼科衛生談……井上博士
雜錄……七項

第參編

口繪 三輪、井上、緒方、富士川四博士(肖像)

▲室内空氣に就て……緒方博士
▲眼科衛生談……井上博士
▲小兒科一般……三輪博士
▲小兒の衛生に就て……弘田博士
▲遺尿症に就て……朝倉博士
雜錄……六項

第四編

口繪 朝倉博士、井上博士(肖像)

▲腸胃の話……井上博士
▲耳の攝生……岡田博士
▲乳兒の衛生に就て……緒方博士
▲狐憑とヒステリーとの關係……吳博士
▲眼鏡の話……井上博士
雜錄……六項

第五編

口繪 三輪博士、岡村博士(肖像)

▲創傷の話……三輪博士
▲神經の攝生に就て……吳博士
▲ヂフテリアの話……宮本學士
▲皮膚の衛生に就て……岡村博士
雜錄 肺結核豫防法……二件

第六編

口繪 大澤博士、三島博士(肖像)

▲ペストの話……宮本學士
●身心の養生……大澤博士
▲家庭に於て注意すべき二三の學校衛生……三島博士
▲産時の創傷傳染……木下博士
雜錄 肺結核雜話……十五件

第七編

口繪 遠山博士、筒井學士(肖像)

▲黴毒に關する家庭の注意……筒井學士
▲家庭と黴菌……遠山博士
▲姙娠中の攝生……緒方博士
▲便秘の話……井上博士
雜錄 花柳病の雜話……十八件

第八編

口繪 木村博士、緒方博士(肖像)

▲婦人姙孕力の話……伊庭博士
▲肝臓の話……木村博士
▲分娩時の攝生……緒方博士
▲色盲の話……井上博士
▲小兒の身體上の監視竝に感冒の話……瀬川博士
雜錄 人工滋養品の話

第九編

口繪 瀬川博士、伊庭博士(肖像)

▲肺癆の話……井上博士
▲婦人姙孕力の話(第二)……伊庭學士
▲小兒の蟲及瘡の話……瀬川博士
▲産後の攝生……緒方博士
雜錄……五項

第十編

口繪 林博士(肖像)

▲飲酒血族の退化……林博士
▲不姙症の話……伊庭博士
▲生殖の話……大澤博士
▲消毒法の大意……遠山博士
雜錄……三項

第十一編

口繪 吳博士、楠田謙藏先生(肖像)

▲瘋狂村の話(上)……吳博士
▲最適當なる日本婦人の結婚年齡……楠田先生
▲消毒法……遠山博士
▲葡萄酒の話……林博士
雜錄……八項

第十二編

口繪 陸軍々醫監賀古醫學士(肖像)

▲聾啞の話……賀古學士
▲瘋狂院村の話(下)……吳博士
▲慢性鉛中毒の話……林學士
▲口内衛生に就て二三の注意……石原學士
雜錄 食鹽の話
終刊の辭

(其の七)

東京 博文館 本町

實踐女學校々長
下田歌子女史著

家庭文庫

全部十二册

下田歌子女史學東西を究め一種超凡の新智識と新卓見とを以て現に子弟敎育の道に從事せらる本書各編皆な精實を極む故に他の空論と異り上下を通じて一般社會の家庭上に適用するは勿論なり全部十二册皆是れ著者が多年の實驗上より出でたる者如何に在來の家庭書類と其趣を異にせるかを驗せられよと云爾……………

全部書目

- 第一編 女子書翰文
- 第二編 女子普通禮式
- 第三編 詠歌の栞
- 第四編 料理手引草
- 第五編 婦女家庭訓
- 第六編 母親の心得
- 第七編 家事要訣
- 第八編 女子手藝要訣
- 第九編 女子普通文典
- 第十編 女子作文の栞
- 第十一編 女子遊戯の栞
- 第十二編 家庭敎育

毎編和裝上製美本
紙數各…三百餘頁
正價一册金參拾五錢
郵税一册金八錢宛

發兌元 東京本町 博文館

（後付の七）

女（後付の八）


"KENNOGWAN"
健脳丸
島村博士證明
▲萬巻の書を積と雖ども、脳病の人之を讀むは
難し、而も病症は時々刻々に進み行くなり
發賣本舗
大阪市心斎橋筋貳
東京日本橋箔屋町
丹平商會藥房
主効
脳充血◉脳貧血◉頭痛◉便秘◉眩暈◉中風◉健忘
脳膜炎◉神經痛◉耳鳴◉欝憂◉搐搦◉卒中◉癲癇
其他脳病神經病一切に驚くべき奇効あり
藥價
三日分二十錢、二週分八十五錢
七日分四十五錢、三週分壹円廿五錢

文學世界

第九卷第九號

（明治四十二年七月一日發行
每月一回一日發行）

（明治卅三年十二月廿五日
第三種郵便物認可）

夏の散歩

夕日陰待たで青葉の
美しき野邊の
遊に「レート」
あらば
夏の化粧は
美しう
肌膚艶やかに
日に蕉
汗母の憂なし

